

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第114集

辻 花 遺 跡

2023

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第114集

つじ はな 遺 跡
辻 花 遺 跡

2023

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、熊本郡田布施町下田布施に所在する辻花遺跡の発掘調査記録をまとめたものです。調査は、国営緊急農地再編整備事業（西田布施・友石地区）に伴い、中国四国農政局及び田布施町教育委員会より発掘調査業務の委託を受け、令和3年度に公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施しました。

調査では、縄文時代から中世までの集落跡が検出され、多数の遺構や遺物が発見されました。とりわけ、以下の2点が注目されます。

一つめは、縄文時代のドングリを蓄えた貯蔵穴群や晩期の土器や石器がまとまって発見されたことで、山口県の縄文時代の人々の暮らしを知る上で貴重な成果といえます。

二つめは、県内では希少な数重の杭列や矢板で土留めされた弥生時代の畦状遺構が確認されるとともに、側から水辺での祭祀に使われた多量の土器が出土したことで、県東部での弥生時代の低湿地利用法を知る手がかりが得られました。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただきたいと思います。

最後に、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、多くの御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

公益財団法人 山口県ひとつづくり財団
理 事 長 浅 原 司

例 言

- 1 本書は、令和3（2021）年度に実施した辻花遺跡（山口県熊毛郡田布施町下田布施地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が、農林水産省中国四国農政局南周防農地整備事業所〔令和3年度契約名：南周防農地整備事業 西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査（その4）委託業務、令和4年度契約名：南周防農地整備事業 西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査取りまとめ委託業務〕と、田布施町教育委員会〔令和3年度契約名：辻花遺跡発掘調査委託業務、令和4年度契約名：辻花遺跡発掘調査取りまとめ委託業務〕からの委託を受けて実施した。

- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	次 長	石井 能彦（令和3年度）	
	調査第一課長	谷口 哲一（令和4年度）	
	調査第二課長	谷口 哲一（令和3年度）	
	文化財専門員	井川 隆司（令和3年度） 井上 広之（令和3年度）	
	調 査 員	塚本 史晃（令和3・4年度） 岩崎 麻衣子（令和3年度）	
		山田 圭子（令和3年度）	

- 4 本書の第1・2図は、南周防農地整備事業所提供の地図を元に作成し、第3図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「柳井」を複製使用した。
- 5 本書に使用した方位は、国土地院標（世界測地系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 6 本書に使用した土色の色調表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図のそれと対応する。
- 8 出土遺物実測図のうち、断面黒塗は須恵器を示す。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝・溝状遺構 SK：土坑 SJ：土器埋設遺構 SP：柱穴
SX：性格不明遺構

- 10 石器・石製品の石材鑑定については、赤崎英里氏（山口県立山口博物館）に御教示いただいた。
- 11 資料の分析・鑑定に関して、土壌分析、樹種・種実同定、放射性炭素年代測定（AMS測定）を業者に委託し、その成果を第4章に掲載した。
- 10 本書の挿図・写真は、調査・整理担当者が分担して作成した。文章の執筆は以下のとおりである。

I：谷口 II：塚本 III-1：塚本 III-2：谷口 IV：委託業者報告を谷口が編集
V-1、3：塚本 V-2、4：谷口

本文目次

I 調査の経緯と概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と概要	1
II 遺跡の位置と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	9
1 1地区	9
(1) 概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 2面縄文時代の遺構と遺物	15
(4) 2面弥生時代の遺構と遺物	32
(5) 1面中世の遺構と遺物	37
(6) 遺構外遺物	49
2 2地区	63
(1) 概要	63
(2) 基本層序	63
(3) 縄文時代の遺構と遺物	69
(4) 弥生時代の遺構と遺物	75
(5) 遺構外遺物	106
IV 自然科学分析	113
V 総括	151
1 1地区	151
2 2地区	152
3 縄文時代の遺物について	154
4 まとめ	158

挿 図 目 次

第 1 図 西田布施・友石団地内の発掘調査遺跡の位置… 1	第 34 図 1 面 SP155・183 実測図…………… 49
第 2 図 発掘調査範囲図 …………… 2	第 35 図 1 面中世遺構及び遺構面出土遺物実測図… 50
第 3 図 遺跡の位置と周辺の遺跡 …………… 5	第 36 図 1 面中世遺構出土遺物実測図…………… 51
第 4 図 1 地区 1 面遺構配置図 …………… 10	第 37 図 遺構外遺物実測図 (1) …………… 53
第 5 図 1 地区 2 面遺構配置図 …………… 11	第 38 図 遺構外遺物実測図 (2) …………… 54
第 6 図 基本層序 (1) …………… 12	第 39 図 2 地区遺構配置図 …………… 64
第 7 図 基本層序 (2) …………… 13	第 40 図 2 地区土層図 (1) …………… 65
第 8 図 基本層序 (3) …………… 14	第 41 図 2 地区土層図 (2) …………… 66
第 9 図 2 面 縄文土器出土集中地点出土状況 …… 17	第 42 図 2 地区土層図 (3) …………… 67
第 10 図 2 面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図 (1) 18	第 43 図 2 地区 S K 位置図 …………… 68
第 11 図 2 面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図 (2) 19	第 44 図 2 地区 S K 実測図 (1) …………… 70
第 12 図 2 面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図 (3) 20	第 45 図 2 地区 S K 実測図 (2) …………… 71
第 13 図 2 面 SJ1 出土状況及び出土遺物実測図… 22	第 46 図 2 地区出土遺物実測図 (1) …………… 72
第 14 図 2 面 SK8・SX1 実測図…………… 24	第 47 図 2 地区出土遺物実測図 (2) …………… 72
第 15 図 2 面 縄文時代包含層下灰褐色粘質土層出土 遺物実測図…………… 25	第 48 図 2 地区出土遺物実測図 (3) …………… 74
第 16 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (1) 25	第 49 図 2 地区 S D 実測図 …………… 75
第 17 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (2) 26	第 50 図 2 地区出土遺物実測図 (4) …………… 76
第 18 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (3) 28	第 51 図 2 地区出土遺物実測図 (5) …………… 76
第 19 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (4) 29	第 52 図 2 地区杭列・畦状遺構及び遺物出土状況図 78
第 20 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (5) 30	第 53 図 土器出土位置図 …………… 79
第 21 図 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (6) 31	第 54 図 木器・木製品出土位置図 …………… 79
第 22 図 2 面 弥生時代 SK 6・7・9、SD 7 実測図 33	第 55 図 2 地区出土遺物実測図 (6) …………… 80
第 23 図 2 面 土器出土状況図 …………… 34	第 56 図 2 地区出土遺物実測図 (7) …………… 81
第 24 図 2 面 弥生時代遺構及び包含層出土遺物 実測図 (1)…………… 35	第 57 図 2 地区出土遺物実測図 (8) …………… 82
第 25 図 2 面 弥生時代遺構及び包含層出土遺物 実測図 (2)…………… 36	第 58 図 2 地区出土遺物実測図 (9) …………… 84
第 26 図 1 面 SB 1・2 実測図…………… 39	第 59 図 2 地区出土遺物実測図 (10) …………… 85
第 27 図 1 面 SB 3 実測図…………… 41	第 60 図 壺内粘土塊検出状況 …………… 85
第 28 図 1 面 SA 1～4 実測図…………… 41	第 61 図 2 地区出土遺物実測図 (11) …………… 85
第 29 図 1 面 SA 5～9 実測図…………… 42	第 62 図 2 地区出土遺物実測図 (12) …………… 86
第 30 図 1 面 SD 1・2・6・8・実測図 …… 43	第 63 図 2 地区出土遺物実測図 (13) …………… 87
第 31 図 1 面 SD 5 実測図…………… 45	第 64 図 2 地区出土遺物実測図 (14) …………… 88
第 32 図 1 面 SD 3・4、SK 1・4 実測図 …… 46	第 65 図 2 地区出土遺物実測図 (15) …………… 89
第 33 図 1 面 SK 2・3・5、SP110 実測図 …… 48	第 66 図 2 地区出土遺物実測図 (16) …………… 91
	第 67 図 2 地区出土遺物実測図 (17) …………… 92
	第 68 図 2 地区出土遺物実測図 (18) …………… 92
	第 69 図 2 地区出土遺物実測図 (19) …………… 93

第70図	2地区出土遺物実測図(20)	94	第86図	暦年較正結果(2)	139
第71図	2地区出土遺物実測図(21)	95	第87図	珪藻化石	142
第72図	2地区出土遺物実測図(22)	96	第88図	花粉化石	143
第73図	2地区出土遺物実測図(23)	97	第89図	植物珪酸体	144
第74図	2地区出土遺物実測図(24)	98	第90図	木材(1)	145
第75図	2地区出土遺物実測図(25)	99	第91図	木材(2)	146
第76図	2地区出土遺物実測図(26)	100	第92図	大型植物遺体(1)	147
第77図	2地区南トレ以南 木製品出土状況図	101	第93図	大型植物遺体(2)・昆虫	148
第78図	2地区出土遺物実測図(27)	102	第94図	木材(3)	149
第79図	2地区南端部木製品出土状況図	103	第95図	木材(4)	150
第80図	2地区出土遺物実測図(28)	104	第96図	辻花遺跡石器組成(一部)	154
第81図	2地区出土遺物実測図(29)	105	第97図	辻花遺跡出土縄文土器変遷	156
第82図	ブロック試料観察結果、試料採取位置	114	第98図	山口県内及び周辺西部瀬戸内の縄文時代 後期末から晩期の遺跡分布図	157
第83図	花粉化石群集	119			
第84図	植物珪酸体含量	120			
第85図	暦年較正結果(1)	138			

表 目 次

第1表	1地区出土土器観察一覽表(1)	55	第17表	珪藻分析結果	117
第2表	1地区出土土器観察一覽表(2)	56	第18表	花粉分析結果	118
第3表	1地区出土土器観察一覽表(3)	57	第19表	植物珪酸体含量	119
第4表	1地区出土土器観察一覽表(4)	58	第20表	樹種同定結果(1)	125
第5表	1地区出土土器観察一覽表(5)	59	第21表	樹種同定結果(2)	126
第6表	1地区出土土器観察一覽表(6)	60	第22表	種実等分析結果(1)	128
第7表	1地区出土石器・石製品観察一覽表(1)	61	第23表	種実等分析結果(2)	129
第8表	1地区出土石器・石製品観察一覽表(2)	62	第24表	種実等分析結果(3)	130
第9表	1地区出土鉄製品観察一覽表	62	第25表	種実等分析結果(4)	131
第10表	2地区出土土器・土製品観察一覽表(1)	107	第26表	種実等分析結果(5)	132
第11表	2地区出土土器・土製品観察一覽表(2)	108	第27表	種実等出土狀況(1)	133
第12表	2地区出土土器・土製品観察一覽表(3)	109	第28表	種実等出土狀況(2)	134
第13表	2地区出土土器・土製品観察一覽表(4)	110	第29表	放射性炭素年代測定結果(1)	138
第14表	2地区出土石器・石製品観察一覽表	111	第30表	放射性炭素年代測定結果(2)	139
第15表	2地区出土木器・木製品観察表(1)	111			
第16表	2地区出土木器・木製品観察表(2)	112			

図 版 目 次

- | | |
|--|---|
| <p>図版1 1 遺跡遠景(北から)
2 遺跡全景(真上から 上が北)</p> <p>図版2 1 1地区全景(真上から 上が北)
2 2地区全景(真上から 上が西)</p> <p>図版3 1 調査区北側(A-A')土層(南から)
2 調査区北側(A-A')土層(南から)
3 調査区西側(B-B')土層(東から)</p> <p>図版4 1 調査区南側(C-C')土層(北から)
2 調査区南側(D-D')土層(北から)</p> <p>図版5 1 縄文土器出土集中地点出土状況(西から)
2 縄文土器出土集中地点出土状況(南から)</p> <p>図版6 1 縄文土器出土集中地点出土状況(北から)
2 縄文土器出土集中地点出土状況(北から)
3 縄文土器出土集中地点出土状況(西から)
4 縄文土器出土集中地点出土状況(西から)
5 縄文土器出土集中地点出土状況(西から)</p> <p>図版7 2面縄文土器出土集中地点出土遺物(1)</p> <p>図版8 2面縄文土器出土集中地点出土遺物(2)</p> <p>図版9 2面縄文土器出土集中地点出土遺物(3)</p> <p>図版10 2面縄文土器出土集中地点出土遺物(4)</p> <p>図版11 2面縄文土器出土集中地点出土遺物(5)</p> <p>図版12 1 SJ1上層土器出土状況(南から)
2 SJ1上層土器出土状況(西から)</p> <p>図版13 1 SJ1下層土器出土状況(南から)
2 SJ1下層土器出土状況(西から)</p> <p>図版14 1 SJ1完掘状況(南から)
2 SJ1出土遺物</p> <p>図版15 1 SK8完掘状況(西から)
2 SX1自然木出土状況(北から)
3 黒色シルト層遺物出土状況(北から)
4 黒色シルト層遺物出土状況(北から)
5 黒色シルト層遺物出土状況(北から)</p> <p>図版16 2面縄文時代包含層出土遺物(1)</p> <p>図版17 2面縄文時代包含層出土遺物(2)</p> <p>図版18 2面縄文時代包含層出土遺物(3)</p> <p>図版19 2面縄文時代包含層出土遺物(4)</p> <p>図版20 2面縄文時代包含層出土遺物(5)</p> <p>図版21 2面縄文時代包含層出土遺物(6)</p> <p>図版22 2面縄文時代包含層出土遺物(7)</p> <p>図版23 1 弥生土器出土状況(北から)
2 SK6完掘(北から)</p> | <p>3 SK7完掘状況(西から)
4 SD7完掘状況(西から)</p> <p>図版24 2面弥生時代遺構及び包含層出土遺物(1)</p> <p>図版25 2面弥生時代遺構及び包含層出土遺物(2)</p> <p>図版26 1 1地区1面全体(東から)
2 SB1全体検出状況(東から)</p> <p>図版27 1 SB2全体検出状況(東から)
2 SB3全体検出状況(南から)</p> <p>図版28 1 SD1・2・5・6完掘状況(北から)
2 SD3完掘状況(北から)
3 SD5完掘状況(東から)</p> <p>図版29 1 SK2完掘状況(東から)
2 SK3完掘状況(北から)
3 SK1・4完掘状況(北から)
4 SK5完掘状況(北から)
5 SP110播鉢出土状況(東から)
6 SP155土師器出土状況(北から)
7 SP161砥石出土状況(東から)
8 SP183詰石出土状況(東から)</p> <p>図版30 中世遺構出土遺物(1)</p> <p>図版31 中世遺構出土遺物(2)</p> <p>図版32 遺構外遺物(1)</p> <p>図版33 遺構外遺物(2)</p> <p>図版34 遺構外遺物(3)</p> <p>図版35 1 北トレ～南トレ間 集石層検出状況
(真上から 上が西)
2 集石層除去後のSK1～9、SD1・2
(真上から 上が西)</p> <p>図版36 1 SK1～9完掘状況(東から)
2 SK1～9完掘状況(北から)</p> <p>図版37 1 SK1・2(北から)
2 SK1検出状況(西から)
3 SK1完掘状況(北から)
4 SK2検出状況(東から)
5 SK2内木372検出状況(東から)</p> <p>図版38 1 SK2完掘状況(北から)
2 SK2ドングリ検出状況(北から)
3 SK3検出状況(北から)
4 SK3土層(北から)
5 SK4検出状況(北から)
6 SK4完掘状況(北から)</p> |
|--|---|

	7 SK 5 検出状況 (西から)	図版48	1 南トレ以南 杭列等出土状況 (集石層除去後 真上から 上が西)
	8 SK 5 完掘状況 (西から)		2 南端部 杭列等検出状況 (東から)
図版39	1 SK 6 検出状況 (北から)	図版49	1 南トレ以南 集石層検出状況 (北東から)
	2 SK 6 完掘状況 (北から)		2 南トレ以南 集石層検出状況 (東から)
	3 SK 7 検出状況 (北から)		3 集石層除去後状況 (東から)
	4 SK 7 完掘状況 (北から)		4 南端部杭列・木材出土状況 (南から)
	5 SK 8 土層 (南西から)		5 南端部杭列・木材出土状況 (東から)
	6 SK 8 完掘状況 (南西から)		6 南端部土器・木材等出土状況 (東から)
	7 SK 9 土層 (南から)		7 SX1 板材出土状況 (東から)
	8 SK 9 完掘状況 (北から)		8 南端部杭列出土状況 (東から)
図版40	1 北トレ以北 完掘状況 (真上から 上が西)	図版50	1 集石層内土器出土状況 (北西から)
	2 杭列、畦状遺構検出状況 (東から)		2 集石層内土器出土状況 (北から)
図版41	1 杭列、畦状遺構周辺土器出土状況 (東から)		3 集石層内土器出土状況 (東から)
	2 杭列、畦状遺構周辺土器出土状況 (南から)		4 集石層内石器出土状況 (北から)
図版42	1 杭列周辺土器出土状況 (西から)		5 2地区上段トレンチ掘削状況 (北から)
	2 杭列周辺土器出土状況 (部分 南から)		6 2地区上段トレンチ掘削状況 (北から)
図版43	1 南矢板列検出状況 (南から)	図版51	2 地区出土遺物 (1)
	2 北矢板列検出状況 (北から)	図版52	2 地区出土遺物 (2)
図版44	1 杭列周辺土器出土状況 (南から)	図版53	2 地区出土遺物 (3)
	2 南矢板列周辺土器出土状況 (南から)	図版54	2 地区出土遺物 (4)
	3 杭列周辺木材出土状況 (西から)	図版55	2 地区出土遺物 (5)
	4 南北杭列検出状況 (南西から)	図版56	2 地区出土遺物 (6)
	5 杭列周辺土器出土状況 (南東から)	図版57	2 地区出土遺物 (7)
	6 木器293出土状況 (北から)	図版58	2 地区出土遺物 (8)
	7 杭列周辺土器出土状況 (東半部 東から)	図版59	2 地区出土遺物 (9)
	8 杭列周辺土器出土状況 (西半部 東から)	図版60	2 地区出土遺物 (10)
図版45	1 杭列、畦状遺構周辺 土器取り上げ状況 (南から)	図版61	2 地区出土遺物 (11)
	2 杭列、畦状遺構除去後完掘状況 (東から)	図版62	2 地区出土遺物 (12)
	3 杭列、畦状遺構除去後完掘状況 (北から)	図版63	2 地区出土遺物 (13)
		図版64	2 地区出土遺物 (14)
図版46	1 杭列～畦状遺構西壁土層 (南半 東から)	図版65	2 地区出土遺物 (15)
	2 杭列～畦状遺構西壁土層 (北半 東から)	図版66	2 地区出土遺物 (16)
	3 杭列周辺当初検出状況 (東から)	図版67	2 地区出土遺物 (17)
	4 木器295出土状況 (東から)	図版68	2 地区出土遺物 (18)
図版47	1 北トレ以南 集石層検出状況 (北東から)		
	2 南トレ以南 集石層検出状況 (北西から)		

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

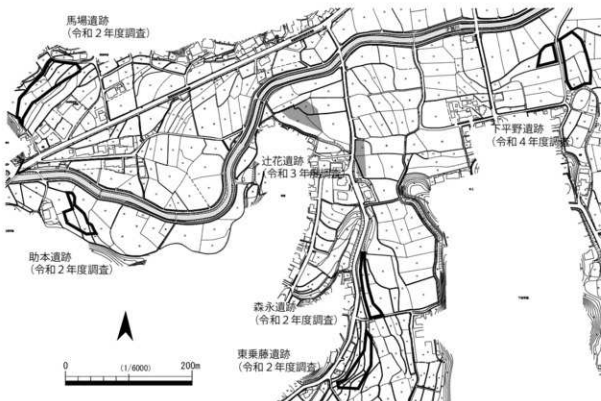
農林水産省中国四国農政局は、農村の活性化や農業の競争力強化を図るため、柳井市、熊毛郡田布施町及び光市の一部で、南周防農地整備事業を進めている。これらの事業は広域では場整備工事が行われるため、事業計画と埋蔵文化財保護との調整を図ることが必要であり、埋蔵文化財の状況を把握する目的で、県や町の文化財部局が試掘調査を行ってきた。

西田布施・友石団地においては平成31(令和元)年度に田布施町教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の有無やその範囲が確認されている。この結果を受けて山口県教育委員会と事業主体である南周防農地整備事業所は、団地内の遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事によって影響を受ける6遺跡の範囲(第1図)について、令和2年度からの3年間で発掘調査を実施することとなった。令和2年度の馬場遺跡、助本遺跡、森永遺跡は、中国四国農政局南周防農地整備事業所及び田布施町教育委員会の委託を受けた公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが調査を実施した。

辻花遺跡も同様な調査体制で、令和3年度に当センターが2,270㎡(南周防農地整備事業所委託分2,199㎡、田布施町教育委員会委託分71㎡)の範囲について、記録保存のための発掘調査を実施した。なお調査地は才賀川に面する丘陵先端部の低地(1地区)と、東側谷部(2地区)の2か所である(第2図)。

2 調査の経過と概要

調査開始のための諸準備や手続き、現地確認等を行い、令和3年6月7日に作業員駐車場の整備に伴う整地工事から現地調査を開始した。その後重機による1地区の表土除去作業等を7月5日から開始し、8月5日まで実施した。並行して7月19日には仮設事務所等を設置し、8月6日に発掘器材



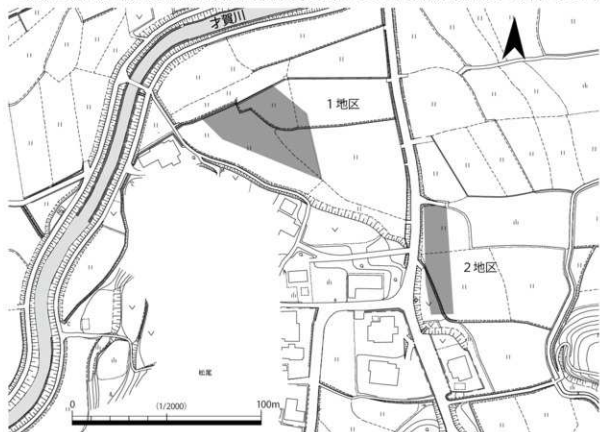
第1図 西田布施・友石団地内の発掘調査遺跡の位置

の搬入を行った。

その後長雨により作業が中断したが、8月25日から本格的に作業員を投入して1地区の遺構検出を開始した。1地区は約60cmの段差がある2枚の田からなり、上段部分で遺構が確認された灰白色砂質土を基に遺構検出を行い、中世の柱穴、土坑、溝状遺構が確認された。下段は上段の灰白色砂質土は認められず、下層の黒色シルト層に掘立柱建物群や土坑が確認された。遺構面の土質が上下段で異なること、シルト層からは縄文土器片が出土したことから、堆積層序の確認を目的にトレンチの掘り下げを行った。これにより調査地は才賀川による河川堆積及び丘陵谷部からの流入による砂礫層、低地形の湿地状堆積によるシルト層からなることが判明した。特に黒色シルト層は縄文土器包含層であり、縄文土器遺構の存在も予想されたことから、複数の遺構面を前提とした調査に変更することとなった。そこでまず中世遺構面（下段は黒色シルト層上面がこれに相当）の記録作成を行ったのち、11月12日から重機による2回目の掘削により、灰白色砂質土を除去し、下位のシルト層相当面まで掘り下げた。この面の東半は黄色シルト層の安定した土層であり、弥生時代の土坑、溝状遺構や洪水砂が確認された。西半は前述の湿地堆積とみられる黒色シルト層が堆積し、縄文時代の土器が集中して出土する範囲が確認された。また縄文土器深鉢による土器埋設遺構も発見された。

1地区の調査と並行して、稲刈り後の11月4日から2地区の調査を開始した。2地区は、高位の畑地の一部と下位の田に跨る。これら2枚の農地は高さ1.5mの石垣で区画されており、両者を一括して掘り下げると、高低差から対象地外の石垣や畑地に崩落などの影響があると判断し、高位はトレンチ状の調査区（2地区上段トレンチ）とし、石垣側は土羽を残すこととした。また重機の進入が困難となり、人力による掘削としたため、部分的な掘削で、堆積層序の確認を行った。

2地区の低位は重機による耕土を除去した後、人力によるトレンチを2か所（北トレンチ、南トレンチ）



第2図 発掘調査範囲図

設置し、地下状況の確認を行った。その後改めて重機による盤土以下の掘削を実施した。掘削は弥生時代の遺物包含層上までとし、それ以下は人力による掘り下げを行った。この際2本のトレンチの側壁は土層観察用の土手として調査終了まで残り、これを基に調査区を3つの区画に分け、遺物出土の平面位置を記録することとした。北側は「北トレンチ土手以北(北トレ以北)」、中央は「北トレンチ～南トレンチ間(北トレ～南トレ間)」、南側は「南トレンチ土手以南(南トレ以南)」である。

トレンチ及び土層観察から、谷地形により何度の氾濫や土砂流入等による砂礫層や湿地堆積が認められた。特に大型の礫を多く含む集石層は多量の弥生土器を包含することから、まずこの範囲を把握し、礫を除きながら遺物を取り上げた。集石層以外にも遺物を包含する砂礫層が幾層もあり、弥生時代に何度の土砂流入があったことが窺われた。これらの下層には比較的安定した砂礫層があり、これは北側(才賀川側)へと傾斜し、調査区北端で湿地堆積へと変わっていく。この境には大型の土器や杭などの木材が分布することから、慎重に掘り下げたところ、何列もの杭列や矢板によって土留めされた畦状の構造物が確認され、多量の弥生土器が出土した。中には祭祀用とみられる土器・土製品もあることから、この場で祭祀行為があったことが考えられる。

北トレ～南トレ間では、集石層下から縄文土器片が出土したため、縄文時代の遺構が予測された。精査により土坑が検出され、少量の縄文土器とドングリ類が出土したことから、ドングリ類の貯蔵用土坑であることが明らかになり、計9基の土坑を確認するに至った。この縄文時代遺構面を基に南側を遺構検出したところ、弥生時代の溝状遺構や杭列を確認することができた。南端部には杭列や落ち込みの中に加工された板材があり、木材の保管場所であった可能性が考えられる。このように多量の土器に加えて、杭・矢板などの脆弱遺物、木材や種実などの自然遺物があることから、遺物の取り扱いには時間を要し、慎重に取り上げ作業を行った。

調査によって検出された遺構遺物等は、随時、担当職員による実測図作成、写真撮影等を行った。これらの記録作成には、位置情報を入力するために、11月2日に基準となる国土座標杭を業務委託で設置した。また1、2地区で確認された湿地堆積の古環境を分析するために、土壌の自然科学分析を専門業者に委託した。

調査終盤には、2月17日、3月9日の2回にわたり、ヘリコプターによる空中写真撮影および写真測量を実施した。作業員による掘り込み終了後、調査成果に必要な記録作成をし、その後器材搬出、仮設事務所等の撤収を行い、3月18日に現地調査を終了した。

令和4年度は、前年度調査の報告書刊行を行うため、改めて事業者から委託契約を受けて報告書取りまとめ事業を実施した。発掘調査の出土品は、洗浄、接合、復元作業を行い、整理分類したうえで、報告書掲載に必要な資料について選別し、それを実測、写真撮影の記録作成を行った。このうち出土した木器・木製品は適正な保管を目的として、一部を専門業者による保存処理を行った。また出土品の中には、種実、木材等の自然遺物があることから、樹種・種実の同定分析、土壌資料内の種実分析、放射性炭素年代測定自然科学分析を専門業者に委託して実施し、その結果を踏まえて遺跡の内容及び性格の検討を行い、報告書に反映した。

出土品整理と併行して調査時に作成した遺構等の図面、写真の検討を行い、これらの割付をし、原稿を加えて本報告書を刊行した。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

辻花遺跡は、山口県熊毛郡田布施町下田布施に所在する。田布施町は山口県南東部、熊毛半島の西側に位置し、町域の北側と西側で光市と接し、東には平生町と柳井市が隣接する。北側に石城山（362 m）があり、西には呉籠山（293.8 m）と千坊山（298.7 m）が連なる。東側低地部には平生町と柳井市が広がり、南に目を向けると、平生湾及び瀬戸内海が広がっている。町域は山林と山々から派生する丘陵、そして点在する独立丘陵、さらにその間を埋めるように広がる谷底平野から成り立つ。町内の中央には田布施川が貫流し、いくつもの支流に分かれている。

辻花遺跡が所在する下田布施は、田布施町中部にあり、地区の多くは小起伏山地と、そこから派生する丘陵に囲まれた地域である。遺跡は丘陵から北に張り出した先端部と東西方向に流れる才賀川の間低地に位置する。

2 歴史的環境

近年、田布施町内では国営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われており、町内の歴史が次々に明らかにされてきている。

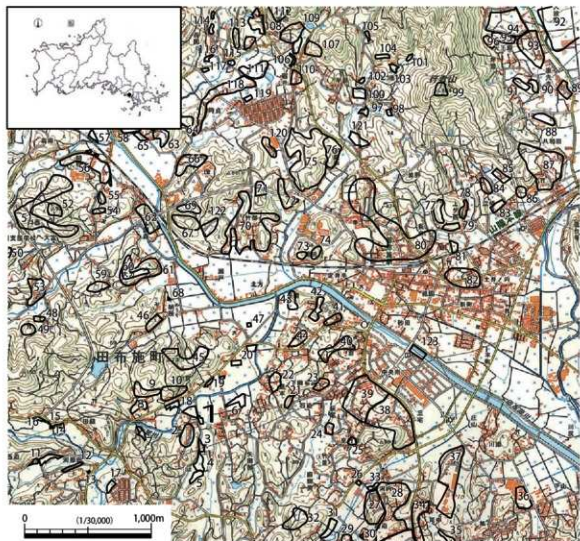
町内に人々の痕跡がみられるのは縄文時代からである。熊毛半島の縄文時代の遺跡に目を向けると、後期から晩期までの土器が多数出土し、西部瀬戸内地域の土器編年の基準となっている平生町の岩田遺跡、前期から晩期の土器が多数出土し、石材供給の中継地点と考えられる上関町の田ノ浦遺跡、後期から晩期の土器が出土している柳井市の黒島浜遺跡などが所在している。

一方で、町内所在の縄文時代の本格的な発掘調査はほとんど実施されておらず、町内ではこれまで麻郷地区の山崎原遺跡（37）で三次にわたる調査において出土した晩期の土器や見用遺跡（31）、下小田遺跡（108）の包含層より縄文土器片が数点みつまっている程度でその様相は不明であった。

近年では田布施町教育委員会が発掘調査を実施した、遺跡より約 1.2 km 西方の田縫遺跡（14）では縄文土器が出土した土坑がみつまっている。また、今回の本遺跡の発掘調査では 1 地区より、縄文晩期の包含層から土器や石器が出土しており、その包含層下の灰オリブ色粘質土層からは土器埋設遺構が確認されたほか、2 地区ではドングリ類の貯蔵用土坑が 9 基確認されるなど、県内及び町内の縄文時代晩期の様相の一端をうかがえる貴重な資料が得られ、徐々にその様相が明らかになりつつある。

弥生時代に入ると町内各所に集落が形成されていく。前期の集落跡はこれまで確認されていないが、近隣の馬場遺跡（8）では弥生時代前期後半に比定される胴部に羽状文を施した壺が出土しており、わずかであるが前期の人々の生活の痕跡がうかがえる。

中期に入ると、その前半の遺跡として、麻郷奥地区において樹枝状の丘陵に挟まれた沖積地に所在する見用遺跡が確認され、県内の焼失住居の最古の事例である円形竪穴建物も確認された。この住居からは須玖式土器など北部九州との交流を示す遺物が出土している。その後、石城山南麓では中溝遺跡（106）、行者山麓周辺では平井遺跡（103）、木地遺跡（104）、中屋 B 遺跡（100）などで小規模の集落が営まれた。



- 1 辻花遺跡 2 松尾遺跡 3 森永遺跡 4 東東藤遺跡 5 梨本遺跡 6 下平野遺跡 7 助本遺跡 8 馬場遺跡
 9 才賀B遺跡 10 才賀遺跡 11 小神田遺跡 12 法神田遺跡 13 中西尾崎遺跡 14 田磯遺跡 15 大迫B遺跡
 16 大迫A遺跡 17 平田遺跡 18 外光遺跡 19 岩光遺跡 20 松ノ内遺跡 21 藤本A遺跡 22 藤本B遺跡
 23 石迫遺跡 24 萩尾五郎部遺跡 25 竹重遺跡 26 松元遺跡 27 尾迫桶崎山遺跡 28 尾迫遺跡 29 伊幸田遺跡
 30 有古遺跡 31 見用遺跡 32 警固屋遺跡 33 八頭遺跡 34 尾中遺跡 35 月輪遺跡 36 藤尾遺跡 37 山崎原遺跡
 38 三宅遺跡 39 神邊原遺跡 40 名藏遺跡 41 長田C遺跡 42 長田A遺跡 43 長田B遺跡 44 長田遺跡
 45 才賀A遺跡 46 納所遺跡 47 上友石遺跡 48 長光古墳 49 大田金比羅社遺跡 50 大田A古墳群
 51 木ノ井山古墳群 52 木ノ井山遺跡 53 大田遺跡 54 蓮池寺遺跡 55 宮川遺跡 56 開明遺跡 57 天徳遺跡
 58 田熊A遺跡 59 大力遺跡 60 国森古墳群 61 国森遺跡 62 石走山遺跡 63 瓜迫B遺跡 64 瓜迫古墳群
 65 尾尻遺跡 66 瓜迫A遺跡 67 後井古墳群 68 松末遺跡 69 上後井遺跡 70 竹部遺跡 71 竹部古墳群
 72 御蔵戸B遺跡 73 深田古墳 74 深田遺跡 75 御蔵戸古墳群 76 御蔵戸遺跡 77 徳古古墳群 78 隣河内遺跡
 79 徳古遺跡 80 長合遺跡 81 上ヶ西遺跡 82 波野市遺跡 83 尾崎遺跡 84 上ヶ遺跡 85 久保遺跡
 86 波野天王山遺跡 87 八和田遺跡 88 敷合古墳群 89 東光寺古墳 90 妙見遺跡 91 天王山古墳群 92 明地遺跡
 93 天王原遺跡 94 惣津遺跡 95 納蔵原古墳群 96 納蔵原遺跡 97 妙法寺遺跡 98 水奥遺跡 99 行者山城跡
 100 中屋B遺跡 101 堀川遺跡 102 中屋A遺跡 103 平井遺跡 104 本地遺跡 105 三反地遺跡 106 中溝遺跡
 107 宝前原遺跡 108 下小田遺跡 109 別所遺跡 110 宿井B遺跡 111 宿井C遺跡 112 宮田古墳群 113 京城古墳群
 114 森国遺跡 115 東森国遺跡 116 友貞B遺跡 117 友貞遺跡 118 上時貞遺跡 119 中市遺跡 120 宿井A遺跡
 121 西河内遺跡 122 後井遺跡 123 田布施川河床遺跡

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

中期後半になると、県下有数の低地集落跡である明地遺跡（92）では県指定有形文化財となった、国内最大を誇る分銅形土製品が出土し、他にも船の描かれた絵画土器、土鍾、石鍾等、海とかかわる遺物がみられる。さらに吉備・伊予・山陰等の様々な地域の土器も出土しており、広範囲にわたる地域との関わりがうかがえる。ほぼ、同時期に集落を展開していた開明遺跡（56）でも同様な出土品が認められる。古柳井水道との関係を考えて、これらの集落は海の間近で他地域との交易や交流を活発に行っていたことがわかる。

一方で、海から離れ、周辺地域との交流がほとんど窺えない場所に営まれた集落もある。本遺跡周辺では平田遺跡（17）と三坪遺跡が当てはまる。他にも40mほどの奥まった谷頭に位置する奈良二ツ遺跡では、周防型壺が一括に出土した。中溝遺跡（106）では弥生時代中期～後期の竪穴建物や貯蔵穴等の遺構が多数確認された。また、平井遺跡（103）や上時貞遺跡（118）では、出土遺物がほぼ在来系土器のみであり、閉鎖的な環境が容易に想像できる。

馬場遺跡では弥生時代中期末から後期初頭と考えられる直径が11mにも及ぶ県内最大級の竪穴建物が確認されているほか、焼失竪穴建物や備後・山陰・伊予・九州系の影響を受けた土器がみつまっている。

弥生時代後期になると、地域をまとめる権力者の出現により、独立した高台に墳墓が築造されるようになった。石走山遺跡（62）では、方形台状墓群が形成される。

田布施町は県内有数の古墳密集地として知られる。規模の大小を問わず、ほとんどが田布施川下流域に集中しているが、この一帯は当時、古柳井水道の沿岸部と推定されていることから、交通や交易の要衝であったこの地を押さえることが、権力者にとっていかに重要であったかがわかる。数ある著名な古墳のうちの一つが、4世紀前半築造の国森古墳（60）である。この古墳は前方後円墳が定型化する以前に築かれた県内最古の古墳である。副葬品の大半は、鉄製武器や工具が占めており、出土品は昭和63（1988）年に県指定有形文化財に指定されている。続く後続する豪族系の墳墓は県内では珍しい粘土槨を主体とし、円筒埴輪をもつ5世紀中頃の木ノ井山古墳（52）である。このタイプの墳墓は畿内を中心に分布するため、大和政権と近い勢力との繋がりがうかがえる。6世紀に入って造営された納蔵原古墳（96）は小型の前方後円墳で円筒埴輪をもち、横穴式石室を採用している。この古墳の被葬者は周防国造系と考えられている。

これ以降、田布施町内の古墳は円墳が主体となり、小型化していく6世紀後半になると田布施川下流域の両岸に相次いで古墳が出現する。左岸域には稲荷山古墳、深田古墳（73）、御蔵戸古墳（75）が並列し、河川から少し離れた丘陵上にも宮田古墳群（112）、京城古墳群（113）、友兼古墳群など群集墳が営まれる。その対岸には相ヶ迫古墳があり、少し離れた河口付近右岸には、県内最大かつ中国地方有数の石室規模といわれる後井古墳（67）が所在する。特に1号墳出土の耳環・勾玉といった副葬品や、築造時期、石室規模等を見て、被葬者は納蔵原古墳のそれに続く、周防国造の系譜をひく最後の首長ともいわれる。近年新たに確認された古墳時代終末期の下小田古墳（108）は、同じく横穴式石室を持つ円墳で、刀装具・馬具・玉類等の良好な資料が出土しており、とりわけ刀装具は銀象嵌が施されるなど、県内初の貴重な出土品も含まれている。これ以降、古墳築造は衰退していった。

熊毛地域は古代においても重要拠点であったことが光市石城山神龍石からみてとれる。築造年代、

内部構造は不明な点が多いが、天智2（663）年の白村江の敗戦以後、畿内政権が唐軍の侵攻に備えて西日本の防衛強化を図る中で、構築された軍事施設の1つと考えられる。

石城山の軍事拠点の構築は莫大な労働力、資材確保が必要とみられ、周辺地域の在有力勢力を畿内政権の直接的な影響下に置いたことを示す遺跡である。

大化の改新後、屯倉が廃止されると、律令体制下で周防国が成立し、田布施町域は熊毛郡に属した。『和名類聚抄』によると、熊毛郡は7つの「郷」が置かれた。下田布施地域は「多仁郷」属していたとする説がある。

町内の奈良時代・平安時代の遺跡に目を向けると、町内南西部の千坊山付近に所在する東千坊山廃寺跡がある。調査では軒平瓦、軒丸瓦が多数出土し、奈良時代もしくは平安時代における寺が建立が想定されている。

8世紀以降、律令時代になると、公印制度が始まる。官衙など公的施設や有力者による公印、私印の使用が地方にも広がった。その歴史を裏付けるように、尾尻遺跡（65）では県内初出土の「三川私印」の印文がある銅製の私印が見つかった。他にも緑釉陶器や青磁白磁などの高級品が出土し、主柱穴、カマド等を持たない建物や谷奥部の安定しない地盤に孤立して立地する掘立柱建物など、一般集落とは異なる特殊な性格を持つ場所であるため、官衙関連遺跡と推定されている。

中世の田布施町は多仁荘、波野荘、美和荘に含まれ、大内氏の勢力下に置かれた。平野部には「波野殿」と呼ばれた大内弘直の居館跡とされる波野市遺跡（82）があった。水奥遺跡（98）では、一括廃棄土坑から、青磁、刀子等のほか、200点を超える膨大な土師器の皿や杯等が見つかっている。見用遺跡は平安末～鎌倉時代前半の遺跡であり、15棟の掘立柱建物が検出されている。平安末から鎌倉時代初頭と考えられる井戸からは、230個以上の土師器皿や杯・椀、青磁・白磁の破片等が出土している。さらに、助本遺跡（7）では、炭化材、炭化物とともに人骨、数珠が出土した火葬遺構と考えられる土坑がみつかり、その形態も楕円形の長軸に煙道を作る特殊な形態をもつ。県外では東国や畿内の遺跡に比較的多く散見される類型であり、外来の葬送習俗に基づいて造作された可能性があると考えられている。

大内氏滅亡後、毛利氏の支配下になる。天正14（1586）年には毛利輝元が下田布施瀬戸の東漸寺に対して田布施八幡宮（八尋石八幡宮）の神領田九反半、分米六石の知行を安堵している。

近世を迎えた田布施町は、慶安3（1650）年、上関宰判の管轄下に置かれ、享保5（1720）年の村分け以後上田布施村と下田布施村に分かれた。近世での田布施域の中心地は下田布施村であったように、全域に民家が散在していた。その民家の屋根はほとんどは茅葺であったが、瓦屋もみられたという。下田布施村は、田地の面積が麻郷村に次いで広く、天保期の米の生産高は麻郷村に次いで高かった。

萩藩は家臣団の支配方法として、地方知行を中心に行っており、元文3（1738）年時点において当地域は佐世氏、柳沢氏、桂氏の給料地となっていた。

明治22（1889）年の町村制施行により、辻花遺跡のある下田布施地区は、波野・大波野・上田布施の3村と合併し田布施村になった。その後、大正10（1921）年の町村制施行を経て、昭和30（1955）年に城南村・麻郷村・麻里府村と合併し、現在の田布施町が誕生した。

【引用・参考文献】

- 荒時周平 2021『田布施町内の発掘調査成果の視点から』『田布施郷土館 研究紀要』第 22 号 田布施町郷土館
- 『角川日本地名辞典』編さん委員会他編 1988『角川日本地名大辞典 35 山口県』角川書店
- 田布施町教育委員会 1988『国森古墳』
- 田布施町教育委員会 1996『納藏原古墳』
- 田布施町教育委員会 2015『中西地区遺跡調査現地説明会 資料』
- 田布施町教育委員会 2016『上時貞遺跡』
- 田布施町教育委員会 2018『広報たふせ』No.979・No.981・No.983
- 田布施町教育委員会 2021『広報たふせ』No.1013
- 田布施町教育委員会 2022『広報たふせ』No.1025
- 田布施町史編纂委員会 1990『田布施町史』
- 光市教育委員会 2011『史跡 石城山神籠石保存管理計画策定報告書』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1993『明地遺跡』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1994『明地遺跡Ⅱ』
- 山口県教育委員会 1993『石走山遺跡』
- 山口県教育委員会 1994『木ノ井山古墳』
- (財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2006『石走山遺跡Ⅱ』
- (公財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2013『開明遺跡・尾尻遺跡』
- (公財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2014『堀川遺跡・平川遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋 B 遺跡』
- (公財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2020『森国遺跡・下小田遺跡』
- (公財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2021『助本・森永遺跡』
- (公財) 山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2022『馬場遺跡』

Ⅲ 調査の成果

1 1 地区

(1) 1 地区概要 (第4～5図、図版1～2)

1 地区は、北に張り出した丘陵の先端部と才賀川との間の低地に位置する。遺構面は概ね標高 15m ～ 16m で、1 地区の調査では、縄文・弥生・中世の遺構・遺物が検出された。遺構面は 2 面あり、上面は中世、下面は縄文時代・弥生時代である。

まず、縄文時代は、調査区内西半部に堆積する黒色シルト層が縄文時代の包含層であり、この層から縄文時代晩期を主とした遺物が出土した。調査区中央部において縄文土器が集中して出土する地点が確認できた。さらに包含層下灰オリブ色粘質土層からは、土器埋設遺構 1 基、土坑 1 基を検出した。遺物の主たる時期は縄文晩期中葉である。

次に弥生時代の遺構は同じく 2 面調査区西半部に広がる縄文包含層上面と同一面であり、調査区南半部東側に遺構面が確認できた。調査では土坑 4 基 (うち、時期不明土坑 1 基)、溝 1 条、土器がまとまって出土した地点を検出した。また、東半部は近接する川の洪水の影響を受けている様相がみられた。こうした洪水による堆積層や西側、縄文時代包含層上層の弥生時代包含層から遺構に伴わない弥生土器が多数出土した。遺構の主たる時期は弥生時代中期から後期である。

なお、時期不明土坑が 1 基検出した。

中世では調査区全体より遺構が見つかり、遺構面は調査区南半部に残存する。北半部には後世に大きく削平を受けており、遺構の下部が残る程度である。検出した遺構は掘立柱建物 3 棟、柵列 9 条、溝 7 条、土坑 5 基、柱穴多数検出した。遺構内からの出土遺物は総じて少ない。

(2) 基本層序 (第6～8図、図版3～4)

基本層序は調査区北壁 (A-A)、西壁 (B-B'、E-E')、南壁 (C-C'、D-D')、中央土層観察ベルト (F-F') により順次説明する。

北壁 (A-A) は 1 層が表土、2 層、3 層が盤土で 4 層は旧耕土と考えられ、5～10 層は堆積土、縄文土器を含む 7 層や縄文時代の包含層と考えられる 8 層、9 層、縄文時代の遺構面の 10 層オリブ色粘質土が堆積し、最下層が砂礫層となる。

西壁は北側と南側で確認した。北側 (B-B') は北壁と同様、1 層表土、2 層は橙色粘質土のプロック土、4 層に盤土、5～8 層に堆積土があり、8 層は縄文時代の遺物包含層が堆積する。

南側 (E-E') は 1 層が表土、2 層が盤土、3～5 層が堆積層、6 層が縄文時代包含層、7 層上面が縄文時代遺構面である。

南壁は西側と東側の 2 カ所で土層を確認した。西側 (C-C') は 1～2 層にかけて盤土で、3 層～4 層に須恵器片や土師器片などを含む包含層が堆積する。中世の遺構面は 5 層である。この 5 層は調査区中央から南側まで確認でき、北側は後世の削平により遺構面上面は失われていた。6 層は洪水による堆積層、7～9、11、16、17、19、21、22 層は堆積層であり、10、12、15、18、20 層は洪水及び土石流などによる堆積層、13 層は縄文時代包含層黒色シルト層、14 層は SX1 の堆積層、22 層は土器埋設遺構が検出された遺構面の灰オリブ色粘質土層である。

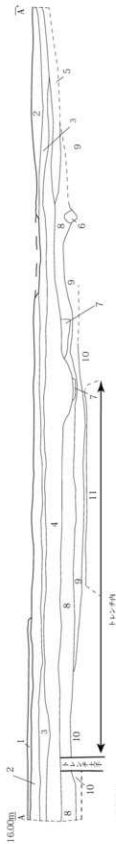


第4図 1地区1而遺構配置図



第5図 1地区2面遺構配置図

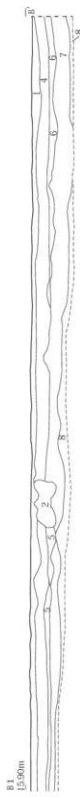
1地区 北壁



上層石炭

- 1 頂上
- 2 頂上 順成砂質頁岩 (7.5366/1) 中やしまりあり
- 3 頂上 北谷いんげん砂質頁岩 (10785/2) 中やしまりあり 1-2cm 程度の小石含む
- 4 頂上 順成砂質頁岩 (10786/1) 砂質上、しまりなし、炭質含む
- 5 頂上 順成砂質頁岩 (10783/1) 中やしまりあり、上部行状
- 6 砂質上 順成砂質頁岩 (10783/2) 中やしまりあり
- 7 頂上 順成砂質頁岩 (10784/2) しまりなし、1-2cm程度の小石含む、概々上部行状
- 8 褐色砂質 順成砂質頁岩 (10784/2) しまりあり、1cm-6cm程度の礫含む、上部行状
- 9 褐色砂質 順成砂質頁岩 (10786/2) しまりあり、1cm-2cm程度の小石含む、炭質含む
- 10 順成砂質 順成砂質頁岩 (7.5366/2) しまりあり、1cm-3cm程度の礫含む、炭、上部行状
- 11 砂質層

1地区 西壁



上層石炭

- 1 頂上
- 2 フロック
- 3 砂質上
- 4 頂上
- 5 頂上
- 6 頂上
- 7 順成砂質
- 8 順成砂質層 順成砂質頁岩 (10783/1) しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

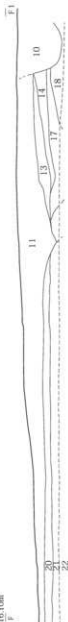
順成 (7.5366/6) 順成上、しまりあり、炭質含む

第6図 基本層序 (1)

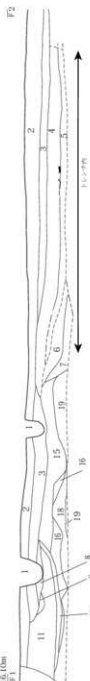


桐蔭区中央土層断面図

15.10m
F



16.10m
F1



16.10m
F2



16.10m
F3



- 土層内所
- 1 1 層中埋藏物
 - 2 黒色(2.3771) 5-6
 - 3 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 4 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 5 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 6 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 7 黒色(2.3771) 1-6cm
- 土層外所
- 8 埋物
 - 9 埋物
 - 10 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 11 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 12 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 13 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 14 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 15 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 16 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 17 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 18 黒色(2.3771) 1-6cm
 - 19 埋物
 - 20 埋物
 - 21 埋物
 - 22 埋物



第8図 基本層序(3)

南側は西側と東側で近接する才賀川の氾濫や丘陵上部の土石流などの流入を何度も受けている。南壁土層で見られた砂礫層は調査区北半部東側まで広がっている。

東側 (D - D') は西側同様 1 ~ 2 層が盤土、3 層 ~ 4 層が包含層、5 層が中世遺構面に相当する。6 層が弥生時代遺構面に相当する。7、9、10 層は洪水による堆積層と考える。8、11、12、13、14 層が堆積層であり、弥生土器を含む。東半部の土層は大型の礫を含む層はあまり見られず、砂質土などの堆積が目立つ。弥生時代遺構面下、9 層からは弥生後期の土器、下層からは複合口縁の壺片が出土しているため、東半部は土石流よりは洪水による堆積層による影響を主に受け、安定した土層堆積を成していないと思われる。

中央土層 (F - F') は 2 層が中世遺構面で南壁 5 層に相当する。3 ~ 7、11 層は堆積層、4 層は縄文時代包含層、5 層は縄文時代遺構面、8 ~ 19 層は洪水もしくは土石流に起因する堆積層である。これらの層には礫や粗砂などが堆積している。20 ~ 22 層は湿地堆積層である。20 層上面もしくは 11 層下層が弥生時代の遺構面である。

以上、おおまかにまとめると、北壁は表土 → 盤土 → 旧耕土もしくは堆積層 → 縄文時代包含層 → 縄文時代遺構面となり、西壁は表土 → 盤土 → 堆積土 → 縄文時代包含層 → 縄文時代遺構面となる。さらに南側は表土 → 盤土 → 包含層 → 中世遺構面 → 堆積層 → 洪水による堆積層 → 弥生時代遺構面 → 縄文時代包含層 → 洪水による堆積層、土石流に伴う礫層 → 縄文時代遺構面となる。

(3) 2 面縄文時代の遺構と遺物

縄文時代包含層の概要

既述のとおり、本遺跡は調査区西半部にかけて黒色シルト層が広がる。この層は湿地堆積層で、調査区西側にかけて堆積する、西壁においても堆積を確認しているため、調査区外へと続くと思われる。

トレンチ 3 において、縄文土器片が見つかったことを契機として、この層の様相を確認するためにのちに土器集中地点となる場所においてトレンチを、そしてトレンチ 4・5 を設定し、堆積状況や包含する遺物の確認を行った。その結果、この黒色シルト層は縄文時代晩期の遺物を多く含むことが明らかとなった。

また、この層の下層は灰オリブ色粘質土層が堆積しており、この層から晩期中葉と考えられる土器埋設遺構 1 基が検出された。さらに調査区北側トレンチ 4 において、黒色シルト層下の灰褐色粘質土層からは晩期前葉と考えられる浅鉢 (27・28) が出土している。

上記を踏まえ、調査では包含層を含む縄文土器の確認、包含層下の土器埋設遺構が検出された縄文時代遺構面の調査を行った。黒色シルト (包含層) の掘削を行う中で、包含層中より、縄文土器片、石器がまばらに出土し、西へ進むにつれて出土数が少ないことがわかった。さらに調査区中央部に縄文土器が集中して出土する地点が検出された。出土状況は縄文晩期の深鉢、浅鉢、石錘などが自然石とともに投棄されたような様相を示していた。この包含層は縄文時代晩期中葉を主とした土器を含み、数点後葉の土器も出土しているため、中葉から後葉の時期にかけて堆積していったと考える。

さらにこの層の下層灰オリブ色粘質土層より土坑 1 基確認できた。

縄文土器出土集中地点 (第 9 図 図版 5・6)

調査区中央に所在する。この地点は黒色シルト層が西半部へ向かって堆積し始める場所である。こ

の場所に東西約2mあまり、南北約4.3mの範囲にかけて黒色シルト層内より縄文土器が石器、自然石とともにまとまって出土した。出土状況から廃棄された様相を示しており、大型の礫、石錘、敲石とともに出土している。出土した土器はすべて完形品にはならないという点、土器の表面は摩滅が少ないことから人為的な投棄が伺える。

出土土器の時期は縄文時代晩期中葉に特徴づけられる「く」の字状口縁を持つ浅鉢、東九州地域岩鼻岩陰遺跡（大分県）、坂口遺跡（大分県）出土土器と近似すると考えられる深鉢口縁下に工具による凹線状の横沈線を施す晩期前葉の特徴を持つ深鉢などが出土している。この落ち込みから出土した土器群は縄文時代晩期中葉を主とした土器群と考える。

今回、土器、石器を含めて25点図化した。

縄文土器集中地点出土土器（第10・11・12図 図版7～11）

1～13は深鉢である。1は口縁部が外反し端部は丸く治める。外面は二枚貝による条痕、内面はナデ調整を施す。2は口縁部が緩やかに外傾し口縁部は丸くおさめる。外面は条痕、内面はナデ調整を施す。

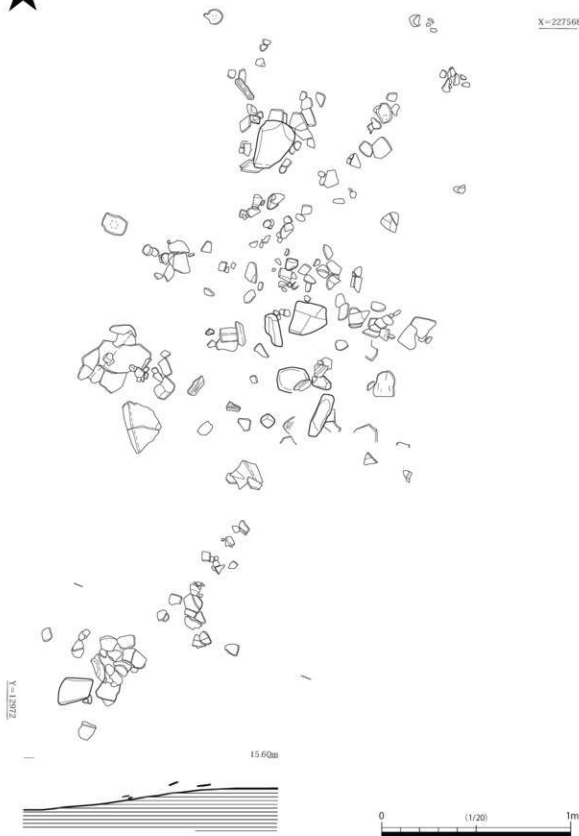
3は胴部が内湾気味に立ち上がる。外面は条痕、内面はミガキ後ナデ調整を施す。4は肩部で一旦内側へ入り、頸部は外反しながら立ち上がる。外面は条痕、内面はミガキ、ナデ調整を施す。5は口縁部が外反しながらラッパ状に開く。端部は丸く治まる。外面は摩滅のため不明。内面は摩滅のため不明であるが、口縁下はナデ調整を施す。6は口縁部が外反しながらラッパ状に開く。端部は面がみられる。外内面ともに調整不明。7は胴頸部の境がはっきりとし、肩部で屈曲したのち、一旦内側へ入り、頸部は外反しながら開く。端部は丸く治まる。外面はナデ、内面はミガキ、ナデ調整を施す。口縁部下に工具による凹線状の横沈線を施文する。施文は岩鼻岩陰遺跡、坂口遺跡出土資料と近似する。

8～13は上げ底の底部である。8は外面は条痕か、内面はナデ調整を施す。9は外面は二枚貝による条痕、外底面はナデ、内面はナデ調整を施す。10は外面は二枚貝条痕、外底面はナデか、内面は条痕後一部ミガキ調整を施す。11は外面はヨコナデ、外底面はナデ。内面はナデ調整を施す。12は二枚貝条痕、外底面はナデ、内面は摩滅のため調整不明。13は外面は粗い二枚貝条痕、側面は指オサエ、外底面はナデ、内面は摩滅のため調整不明である。

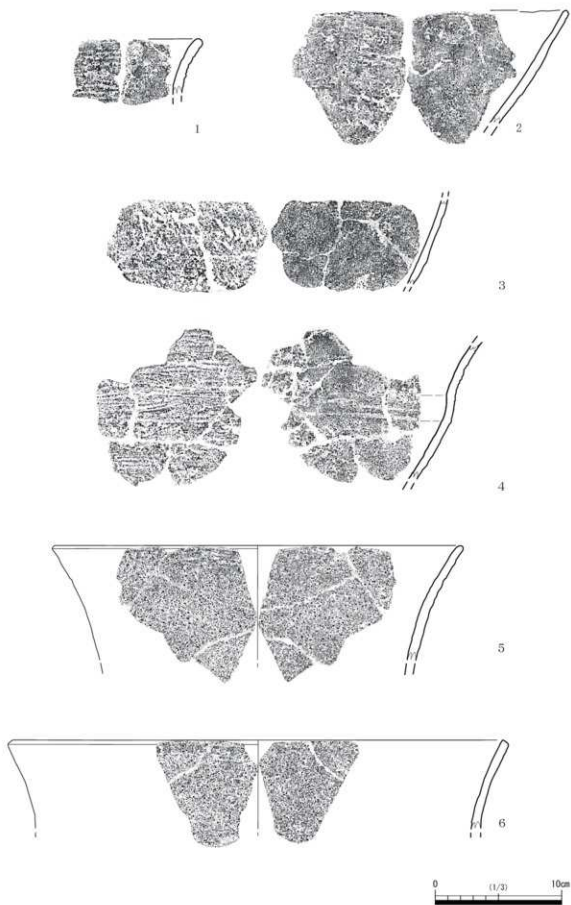
14～21は浅鉢である。14は胴部はまっすぐに立ち上がり、肩部で「く」の字状に屈曲し外反しながら伸びる。外面は摩滅のため調整不明、内面はミガキ調整を施す。15は胴部が張り、肩部で屈曲し頸部で「く」の字状に屈曲し、肩部でわずかに屈曲する。外面は摩滅しているが一部ミガキ、内面もミガキ調整を施す。16は胴部は一旦内側へ入り、頸部は外反気味に伸びる。外面はナデ、条痕、内面はミガキ、ナデ調整を施す。口縁部下には7同様、口縁部下に工具による凹線状の横沈線を施文する。端部は丸く治まる。17は胴部が張りがあり、肩部で屈曲した後、頸部は「く」の字状に長く伸びる。口縁部端部は丸く治まる。内外面ともにミガキ調整を施す。半円形状の突起がつく。18は胴部がまっすぐ立ち上がり肩部で「く」の字状に屈曲し外反しながら立ち上がる。外面はミガキ、条痕、ケズリ、内面はミガキ調整を施す。県内では中込田遺跡(山口市)出土資料に近似する。19は胴部がまっすぐ立ち上がり、肩部で「く」の字状に屈折し外反し開く。18に比べて口縁部は短い。内外面とも



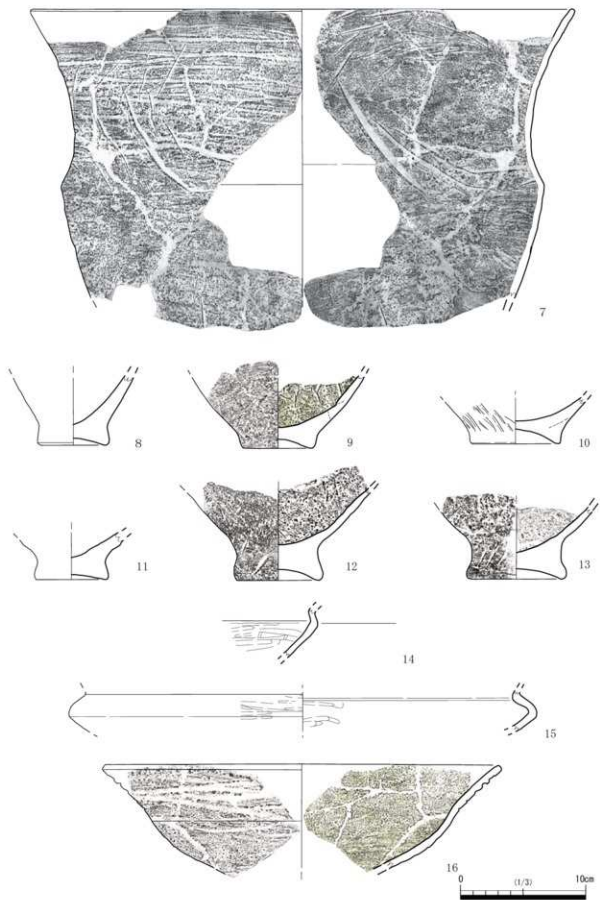
X-227568



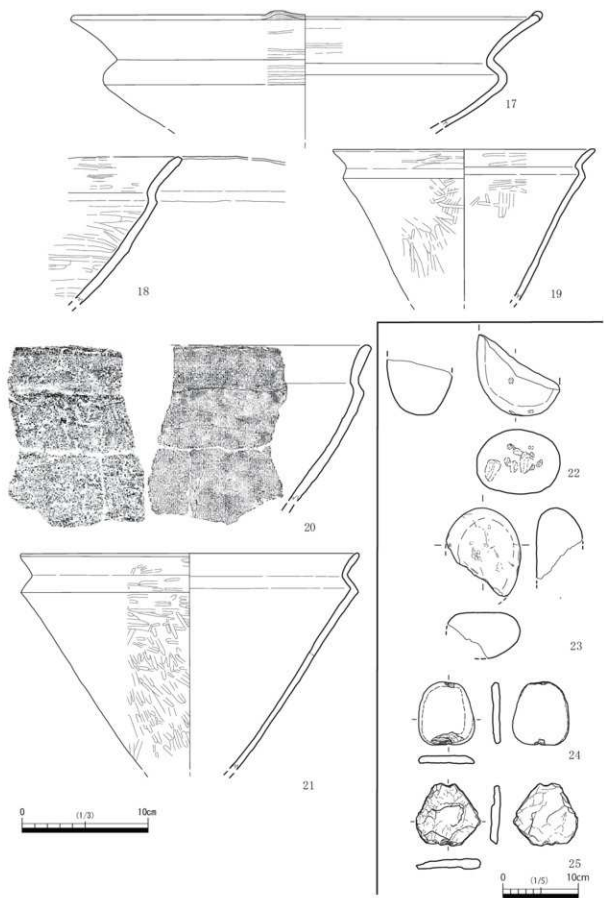
第9図 2面 縄文土器出土集中地点出土状況



第10図 2面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図(1)



第11图 2面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図(2)



第12圖 2面 縄文土器出土集中地点出土遺物実測図(3)

にナデ後ミガキ調整を施す。20は胴部が18同様、内湾気味に立ち上がり肩部で「く」の字状に屈曲し外反しながら立ち上がる。内外面ともにヨコナデを主とした調整を施す。県内では中込田遺跡(山口市)と近似する。21は胴部がまっすぐ立ち上がり、肩部でシャープに内傾屈折し、口頸部で「く」の字状に屈曲し外反し開く。外面は摩滅のため不明。ミガキか。内面はミガキ調整を施す。肩部の屈曲部がシャープである。

土器集中地点出土石製品(第12図、図版11)

22・23は敲石として併用する。22は使用面が2面で下端面に敲打痕跡が残る。花崗岩製。

23は敲石兼磨石である。器面は平坦を呈し、各部分に敲打痕、擦痕が残る。石英斑岩製。

24・25は石錘である。24は扁平な円礫の両端に敲打により剝離させている。泥質片岩製。

25は上下端に打欠による抉りを有する。石英斑岩製。

SJ1(第13図 図版12・13・14)

調査区南半部西側、灰オリブ色粘質土層の遺構面で検出した土器埋設遺構。規模は南北約40cmあまり、東西約60cmの範囲に縄文土器の深鉢の土器片を埋設坑内に配した可能性がある状態で出土した。平面で埋設坑の掘り込みを確認した。平面形は楕円形で規模は長軸45cm、短軸38cm、深さは最深で15cmを測る。検出面の標高は15.44mである。埋土は遺構面の土層と非常に見分けづらかったが、オリブ褐色砂質土層と判断した。なお、調査では出土状況に注意を払い、土器片を取り上げるにあたり、取り上げ番号を付しながら取り上げ、上層と下層の土器の実測図の作成を行った。

土坑の上層の土器は、主に胴部から口縁部付近の土器片が出土しているが外面を上に向け、横、斜め方向の状態で出土している。埋設坑全体を被覆するような様相を示していた。

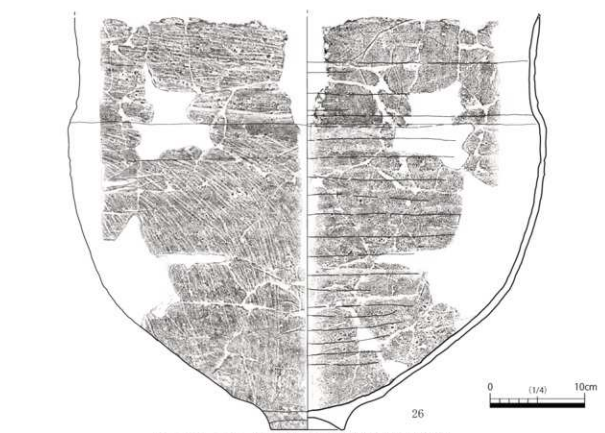
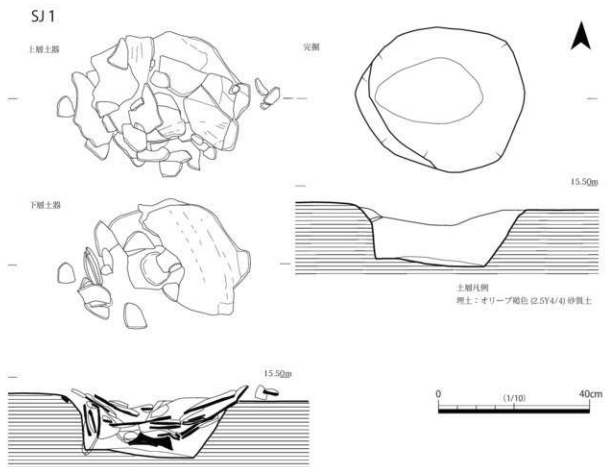
下層の土器は主に胴部から底部の土器片を埋設坑の壁に沿って縦方向、斜め方向に埋置しており、土器底部を上に向けた状態で出土した。この底部の下位には土器片が出土し、人骨等の内容物等は確認できなかったが、底部を上に向けた状態であったこと、埋設坑底面より上位の位置にあることを踏まえると、土坑の底に人骨等の内容物があつた可能性も否定できない。

土器取り上げ後、土器の洗浄、復元作業を行った結果、この埋設土器は深鉢の1個体を単独で埋設していたことがわかった。土器片はすべて揃わず、完形の状態に復元できなかった。一部の土器片は後世の削平で流出、もしくは埋設しなかったことが要因として挙げられる。

以上の出土状況等から本遺構の埋設行為を復元すると、人骨等の内容物を埋設坑内に埋納し、意図的もしくは偶発的に破碎した深鉢の土器片を下層に底部から胴部までの土器片を配し、その後、上層に被覆するように肩部から口縁部付近の土器片を配した可能性があると考えられる。

県内においては近隣の岩田遺跡(平生町)では5基の土器埋設遺構が検出されている。これらは深鉢の口縁部を埋設時に南東に向け、斜めに据え置いた状態で検出された。神田遺跡(下関市)では土器が逆位の状態で出土しており、内部には人骨が伴っていたとされる。一方、中四国地域出土の土器埋設遺構の出土例をみると、近県では鳥根県の斐伊川流域に土器埋設遺構が確認された遺跡が集中しており、原田遺跡から検出された晩期中葉の遺構は正位で埋設されている例、広島県の大宮遺跡では、晩期前半の遺構で底部を欠損した土器が正位の状態で埋設されている例がある。

他方で鳥根県原田遺跡2区のSX01本遺構は浅い土坑状の落ち込みを粗製深鉢の底部片で被覆さ



第13図 2面 SJ1 出土状況及び出土遺物実測図

れた状態で出土している。

以上の県内及び近県での類似遺構をみると、深鉢の完形もしくは底部が欠損している深鉢を正位、斜位、逆位に埋設しており、本遺構はこれらとは異なる様相を示す。土器埋設遺構は東北地方、近畿地方、九州地方で多く確認されている。中国地方の多くの土器埋設遺構は墓である可能性が高いという²¹⁾。本遺跡の深鉢は近畿地方の篠原式土器という点からもこれらの地域の文化の影響を受けた可能性がある。本遺構は破碎したと思われる土器片を埋設坑内に人為的に配して埋設するという出土状況である。ここでは土器埋設遺構として報告したが、県内および近県の類似遺構とは異なる性格であるため、本遺構を土器埋設遺構として適切かどうかを含め、今後の資料の増加を待ち、さらなる検討が必要である。

26は縄文土器の深鉢である。口縁部の端部近くは欠損している。器高は残存で43.6cmである。外面は口縁部に二枚貝条痕、ナデ、内面はミガキ、ナデ調整を施す。胴部は張り、肩部に屈折し、ほぼ直立気味に伸びる。肩部に最大径をもつ。土器形式は調整手法や形態から近畿地方の晩期中葉の土器である篠原式と考える。また、口頸部に二枚貝条痕を多用する篠原式古段階の特徴をもちながらも中段階の特徴でもある口縁部が直立するという特徴をもっている。もう一つの古段階の特徴である口唇部の刻目の有無については欠損しており、判断がつかない。これらの特徴を踏まえると、篠原式古段階から中段階の範疇に収まる資料で時期は縄文晩期中葉と考える。

註1 山田康弘 2001「中国地方の土器埋設遺構」『島根考古学会誌第18集 特集：山陰縄文時代研究の現状と課題』島根県考古学会

SK8 (第14図 図版15)

調査区南半部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長軸1.43m、短軸0.86mである。検出面の標高は15.51m～15.58mである。深さは最深で5cmを測る。遺構内からは縄文土器小片、石器の剥片が出土した。時期は土器埋設遺構が検出された縄文時代包含層下の灰オリブ粘質土層より検出された点を踏まえると、縄文時代晩期中葉頃と考える。

SX1 (第14図 図版15)

調査区南壁手前に位置する。調査区内での規模は長軸2.25m、短軸0.49mで最深25cmを測る。本遺構は落ち込んだくぼみに縄文時代包含層の下層の暗灰色粘質土が堆積しており、自然木が横たわった状態で出土した。人為的な掘り込みかは確認できず、また、断定できないが、出土した木材を貯蔵していた可能性がある。本遺構からは土器などの出土はなかった。本遺構は土層の堆積状況から縄文時代に比定すると考える。なお、本遺構から出土した樹種は388はクスノキの可能性があり、389はコナラ亜属クスギ節であった。

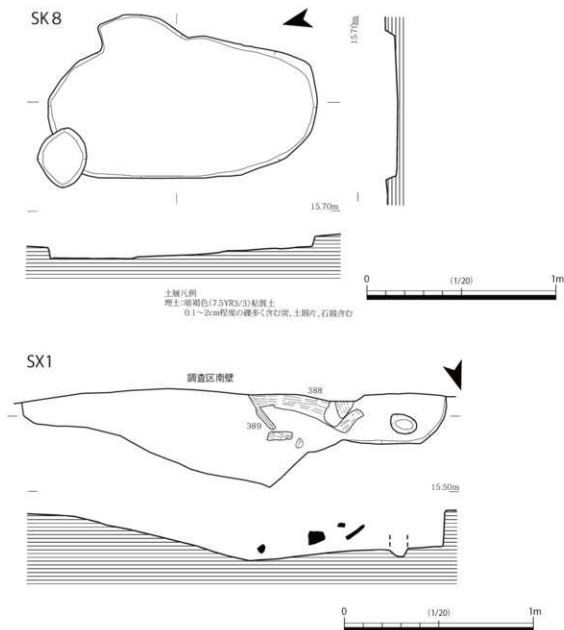
縄文時代包含層下灰褐色粘質土層出土遺物 (第15図 図版16)

27～28は浅鉢である。27は口縁部立ち上がりが低平化する。外面はミガキ口唇部はナデ、内面はミガキ、口唇部はナデ調整を施す。28は27同様、口縁部の立ち上がりが低平化する。口縁部片内外面ともにミガキ調整を施す。

26・27ともに岩鼻岩陰遺跡(大分県)出土土器と近似し、縄文時代晩期前葉と考える。

縄文時代包含層出土遺物 (第16～21図 図版15～22)

29～49は深鉢である。29は口縁部が外反しながら開く。端部は面がみられる。外面は条痕か、

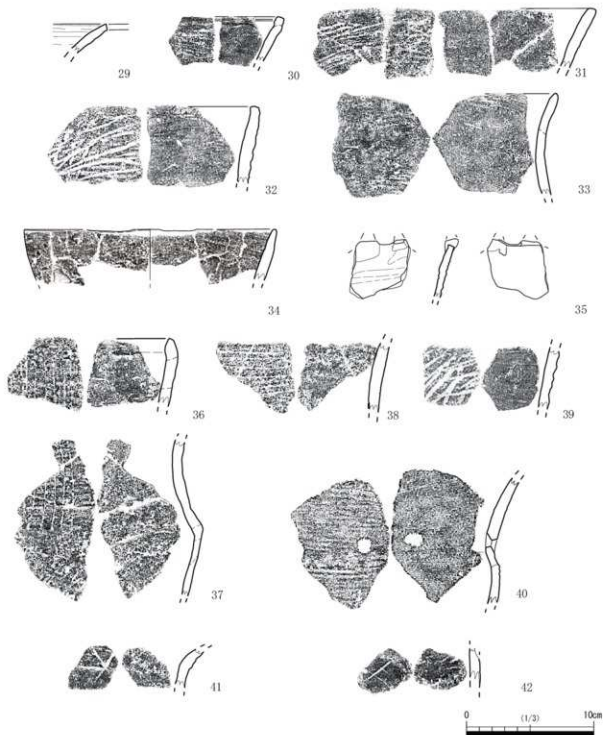


第14図 2面 SK8・SX1実測図

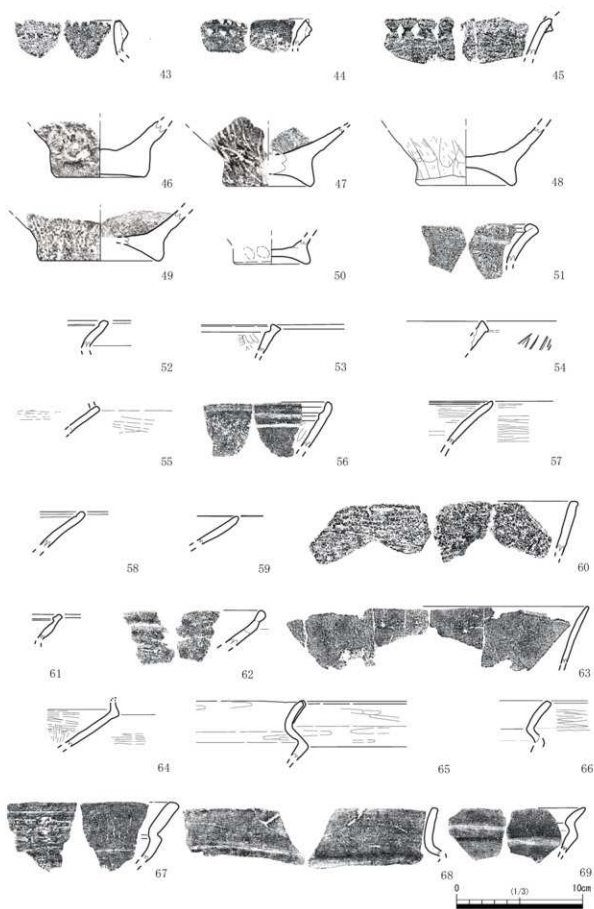
内面はミガキ調整を施す。30は口縁部が外反し、口唇部内面に1条の沈線を施し、段を作る。端部は面がみられる。外面は条痕、内面はミガキ後ヨコナデ調整を施す。31は口縁部が外反しながら開く。端部は丸く収まる。外面は条痕、内面はヨコナデである。32は口縁部がまっすぐ立ち上がる。端部はやや丸く治まる。外面は二枚貝条痕、内面はミガキである。33は口縁部が外反し開く。端部は丸く治まる。外面は条痕後ナデ、内面はミガキである。34は口縁部が外反しながら開く。外面はナデ、内面はミガキである。35は口縁部が外反しながら開く。半環状の突起がつく。外面は条痕、内面はナデ、ミガキ、ヨコナデ調整を施す。36は口縁部がやや外反しながら立ち上がる。口唇部は肥厚し面がみられ、段がみられる。外面は外内面ともにナデ調整を施す。外面には縦方向の平行沈線を施文する。このような施文方法は岩鼻岩陰遺跡の出土遺物と近似する。37は胴部は逆「く」の字状に屈折し、外反しながら開く。外面上部に強いナデがみられる。内外面ともにナデ調整を施す。36同様



第15图 2面 縄文土器包含層下灰褐色粘質土層出土遺物実測図



第16图 2面 縄文時代包含層出土遺物実測図(1)

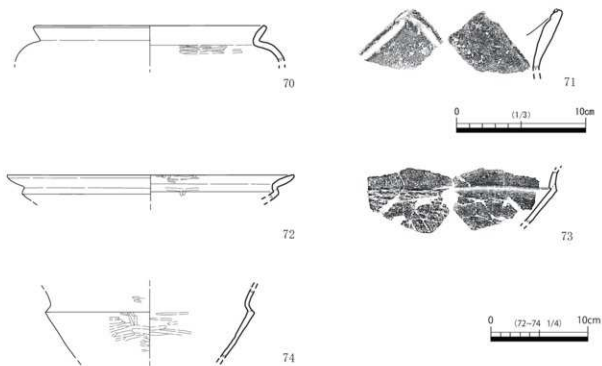


第 17 图 2 面 縄文時代包含層出土遺物実測図 (2)

に外面には縦方向の平行沈線を施文する。36 と同一個体の可能性がある。38 は外面はナデ、内面は摩滅のため調整不明である。外面は 36、37 とは異なり横方向の平行沈線を施文する。この施文方法も岩鼻岩陰遺跡、坂口遺跡（大分県）の出土土器と近似する。39 は外面は粗い二枚貝条痕、内面はミガキ調整を施す。40 は胴部以下が内湾気味に開き肩部で外反しながら立ち上がる。外面は二枚貝条痕、内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下ナデ調整を施す。口縁部の頸部の付近に 1ヶ所穿孔を開けている。41 は外面はナデ、内面は摩滅のため調整不明である。外面に斜格子状の沈線がみられる。このような施文方法は県内では中込田遺跡（山口市）、県外では大洲遺跡（愛媛県）出土遺物と類似する。42 は外面はナデ、内面はミガキと思われる調整を施す。外面には 41 同様、斜格子状の沈線がみられる。このような施文方法は県内では中込田遺跡、県外では大洲遺跡出土遺物と近似する。43 は外面はナデ、内面はミガキである。口唇部下に刻目突帯文を巡らす。晩期後葉の刻目突帯文土器としているが、後期にみられる刻目隆帯文土器の可能性もある。44 は内外面ともにナデ調整を施す。口唇部に二枚貝による刻目を施し、口縁部下にはヘラ状工具による刻目を施す。刻目突帯文土器と報告しているが、後期の刻目隆帯文土器の可能性もある。45 は頸部は外反気味に開く。内外面ともにヨコナデ調整を施す。外面にはヘラ状工具による深い刻目突帯を施す。外面は煤が付着する。晩期後葉に比定する。46 は底部である。外面は指による強いナデ、内面は条痕、粗いナデ調整を施す。底部には圧痕がみられる。全体的に作りは雑である。やや上げ底気味である。47～50 は上げ底の底部である。47 は外面は二枚貝条痕、内面はナデ調整を施す。全体的に調整が粗い印象を受ける。48 は底部で、外面は二枚貝条痕、内面は摩滅のため調整不明である。49 は外面は条痕、底面には板状工具小口による周縁に沿う同心円状のナデ、内面はナデ調整を施す。

50 は鉢の底部である。外面は側面に指オサエ、外底面はナデ、内面は摩滅のため調整不明である。

51～74 は浅鉢である。51 は口縁部が外反し開く。口縁部内面は玉縁状に肥厚する。外面はナデ後ミガキ、内面は摩滅のため、調整不明である。52 は口縁部が外反しながら開く。口縁部内面は肥大し内面に段がつく、端部は面がみられる。内外面ともにミガキである。53 は口縁部内面には沈線がある。端部には面がみられる。外面はナデ、内面はミガキ調整を施す。54 は内外面ともにヨコナデである。口縁部外面にはヘラによる斜線を施す。55 は口縁部の肩部にあたり、粘土接合部で口縁部が欠落している。内外面ともにミガキ後ヨコナデ調整を施す。56 は口縁部が外反しながら開く。外面はナデ、内面はミガキ調整を施す。内面は沈線を施す。端部は丸く治まる。津島岡大遺跡（岡山県）出土土器と近似する。57 は口縁部が外反気味に開く。内外面ともにミガキ調整を施す。内面には沈線を施す。58 は口縁部が外反気味に開く。内外面ともにミガキ調整を施す。内面は沈線を施す。端部は丸く治まる。59 は口縁部が外反し開く。外面はミガキ、内面はミガキと思われる調整と思われる。端部は丸く治まる。60 は口縁部が外反し開く。外面は条痕、内面はヨコナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。端部は面を持ち、外面には段がみられる。61 は口縁部が内湾しながら立ち上がる。内外面ともにミガキ調整を施す。端部は肥厚し、内側に段がみられる。62 は口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面は口縁部はナデ、それ以外は条痕、内面はナデ調整と思われる。端部は丸く治まる。63 は口縁部が外反しながら開く。内外面ともにミガキ後ヨコナデ調整を施す。端部は丸く収める。64 は胴部が真っすぐ立ち上がり、肩部で屈曲する。内外面ともにミガキ調整を施す。65 は肩部で屈

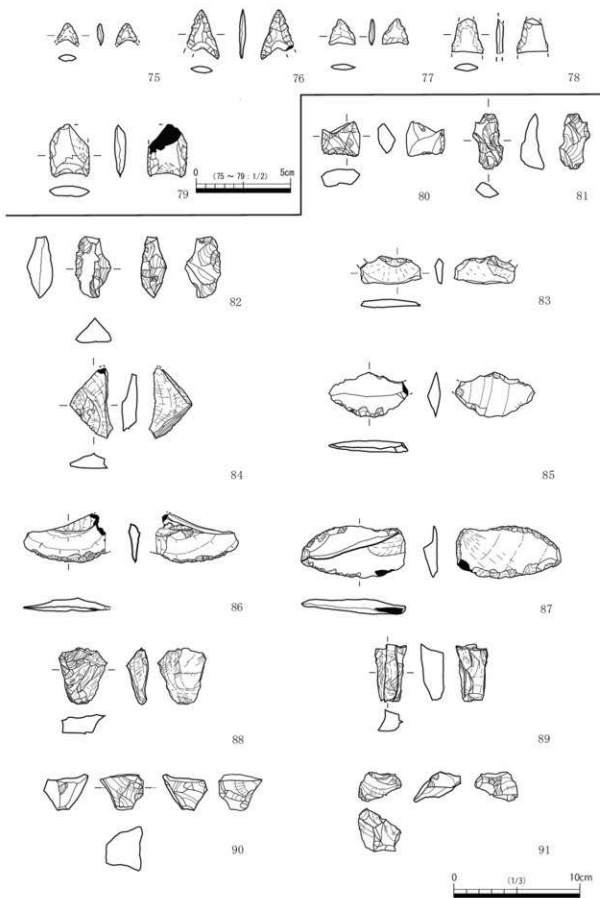


第18図 2面 縄文時代包含層出土遺物実測図(3)

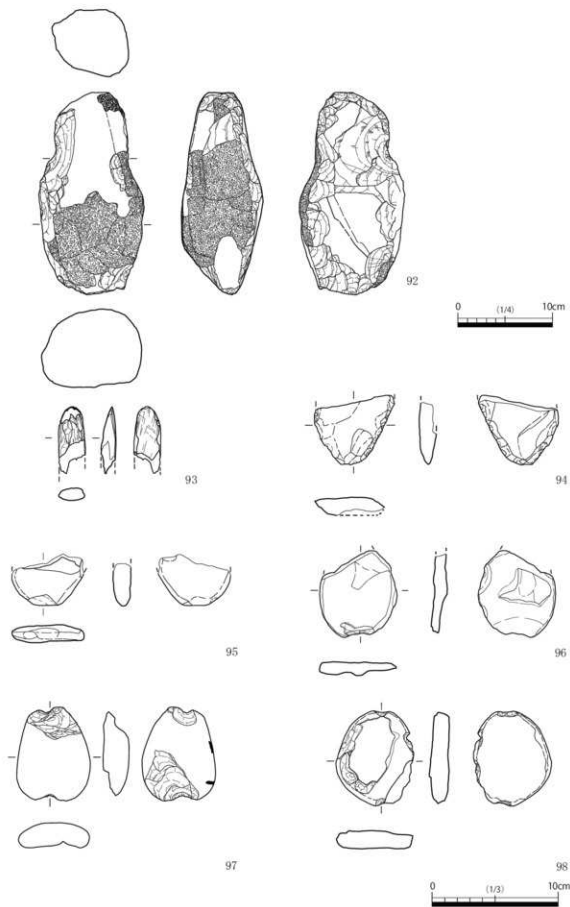
曲し「く」の字状に口縁部が延びる。内外面ともにミガキ調整を施す。端部は面がみられる。六連島遺跡(下関市)出土土器と近似する。66は肩部で屈曲し「く」の字状に口縁部が延びる。外面はミガキ、内面は不明である。端部に面がみられる。67は口縁部が胴部でわずかに屈曲し、外反する。外面ミガキ後ヨコナデ、内面はミガキ、ナデ調整を施す。68は口縁部が肩部でわずかに屈曲し外反し開く。外面は二枚貝条痕後ナデ、内面はナデ後ミガキ調整を施す。69は口縁部が肩部で屈曲し短く外反し開く。外面は摩滅のため調整不明であるがミガキか、内面はミガキ調整を施す。端部は丸く収まる。立石遺跡(美祢市)出土遺物と類似する。70は口頸部が「く」の字状に短く屈曲し外反する。端部は面がみられる。外面は摩滅のため不明であるがミガキか、内面はミガキ調整を施す。胴部の張りが明瞭である。久米高畑遺跡(愛媛県)出土土器と近似する。71は外面は摩滅して調整は不明であるがミガキか内面はナデ調整を施す。口縁部内面は沈線を施す。口縁部端部は面がみられる。72は口縁部が68同様、肩部で屈曲し短く開く。外面はナデ、内面はミガキ調整を施す。端部は丸く収まる。用作遺跡(大分県)出土土器と近似。73は胴部が直線的に立ち上がり、肩部で屈曲し、わずかに外反しながら伸びる。外面はミガキ後ヨコナデ、胴部は条痕、内面は口縁部ミガキ後、ヨコナデ、胴部はミガキ後ナデ調整を施す。肩部内面は粘土貼り付けて段を作る。74は胴部が真っすぐ立ち上がり、肩部で屈曲し、口縁部が「く」の字状に外反しながら伸びる。内外面ともにミガキ調整を施す。

石器・石製品(第19～21図、図版20～22)

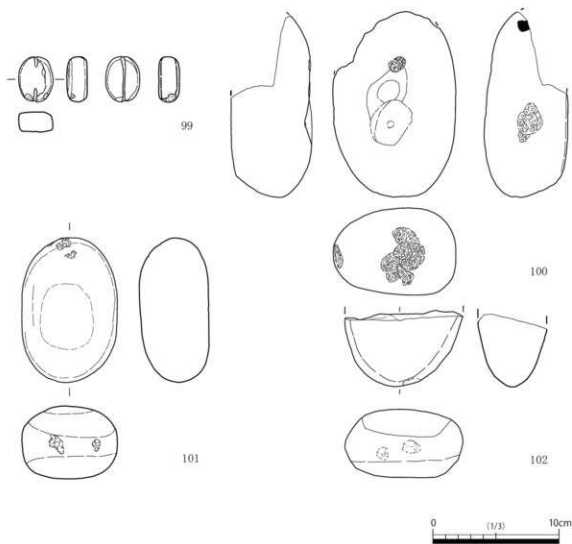
75～79は石鏃である。75は凹基無茎式で、縁辺は両面細かい調整を施している。直径は1.1cmと小型である。両逆刺は欠損。安山岩製。76は凹基無茎式である。縁辺を両面細かい調整を施している。抉りは深い。片方の逆刺は欠損。安山岩製。77は平基に近い凹基無茎式である。縁辺は粗い調整剝離を施している。砂質片岩製。78は先端と下部を欠損する。縁辺は両面細かい調整を施す。安山岩製。



第19圖 2面 縄文時代包含層出土遺物実測図(4)



第20图 2面 縄文時代包含層出土遺物実測図(5)



第21図 2面 縄文時代包含層出土遺物実測図(6)

先端部、下半部は欠損。79は平基に近い凹基無茎式である。縁辺を両面粗雑な調整剥離を施している。先端部は欠損。未製品の可能性がある。安山岩製。

80～83は二次加工のある剥片である。80は厚手の剥片を素材とし、縁辺の一部を細かい調整を施し刃部としている。姫島産黒曜石製。81は全体的に粗雑な敲打による調整加工を施す。一部自然面を残す。姫島産黒曜石製。82は厚い剥片を素材とし、縁辺に細かい調整剥離を施している。剥片をはぎ取った際の大剥離も残る。姫島産黒曜石製。83は横長の剥片を素材とし、上端に若干の加工を施す。安山岩製である。

84は横長剥片である。石材は安山岩。

85～87は削器である。85は縦長剥片を素材とし、側縁に細かい調整剥離を施す。姫島産黒曜石製。86は横長剥片を素材とし下縁部に緩角度の連続する細かい調整剥離を施す。安山岩製。87は横長剥片を素材とし、両側縁を細かく調整剥離を施す。一部自然面を残す。安山岩製。

88～91は石核である。88は残核で、剥片を不規則に剥ぎ取った痕跡が一部見られる。下端部分に原礫面が若干残る。石材は姫島産黒曜石。89は石核である。剥片を剥ぎ取った痕跡がみられる。自然面が残る。安山岩製。90は残核と思われる、打面を固定せず、側面からの剥片剥離作業を行う。作

出された剥片は小形の横長剥片が主体である。石材は姫島産黒曜石。91は残核と思われる、剥片剥離作業面は上面と正面の2面にわたり行われる。一部原礫が残る。石材は気泡が多く隠岐もしくは腰岳産黒曜石か。

92は石斧未製品である。大きさは長さが21.4cm、幅が11.2cm、厚さが8.6cmを測り、重さが2570gと大型である。長角礫の縁辺を粗い剥離成形をしている。素材面が多く残る。上端から約1/3下位に挟りを作る。磨製石斧の未製品の可能性がある。石材は安山岩か。93は局部磨製石斧の可能性がある。先端は若干欠損し、剥離面が残る。側縁は敲打による刃潰しを行っている。未製品の可能性もある。蛇紋岩製。

94は石斧である。上半部は欠損している。両側縁を敲打による加工を施している。石材は安山岩製か。

95～99は石錘である。95は上半部が欠損している。扁平な円礫を素材とし、端部を片面のみ打ち欠いている。石材は安山岩製。96は上半部が欠損している。扁平な円礫を素材とし、端部を敲打により打ち欠いている。石材は砂質片岩製か。97は扁平な円礫両端部を敲打により打ち欠いている。両面とも強い敲打により、階段状に剥離している。石材は石英斑岩。98は扁平な円礫を素材とし、長軸両端部を打ち欠いている。正面右側側縁上部にも剥離痕がみられる。砂質片岩製。99は直径が3.6cmの小型の有溝石錘である。小型の小円礫を素材とし、長軸方向に幅狭で浅い溝を有する。砂質片岩製。

100は凹石兼敲石である。長円礫を素材とし、正面中央付近には凹部、両側面と下面に敲打痕を残す。石材は花崗閃緑岩。

101は磨石兼敲石である。長円礫を素材とし、長軸方向対向する両端を敲打面とする。正面は中央部を磨面としている。石材は花崗岩。

102は敲石兼磨石である。上半部は欠損し、下端面に敲打痕が残る。石材は花崗岩。

(4) 2面弥生時代の遺構・遺物

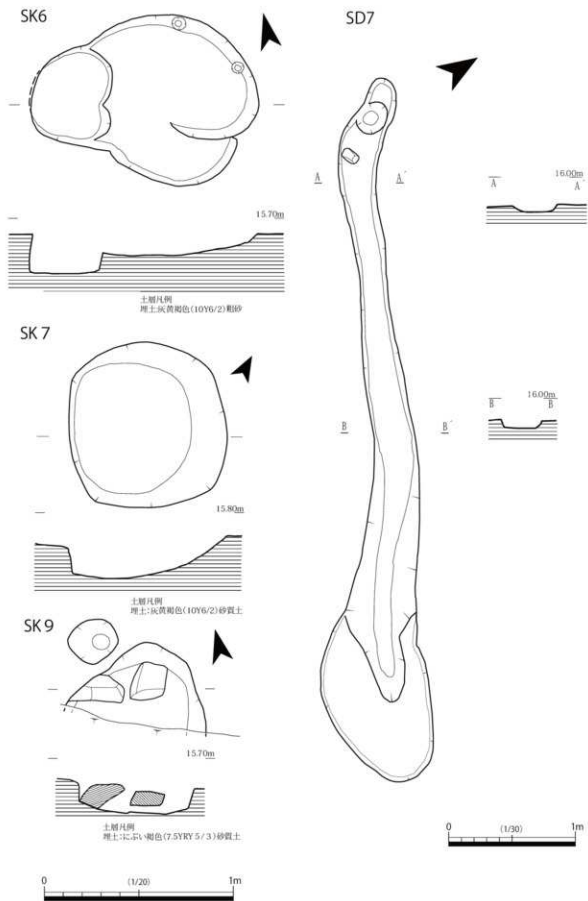
SK6 (第22図 図版23)

調査区南側SK7とSD7の間に位置し、平面プランは不整楕円形である。検出面での標高は15.62mで、規模は長軸1.2m、短軸90cm、深さは最深で21cmを測る。埋土は灰黄褐色粗砂単層である。断面は皿状を呈し、西側は一段落ち込む。壁は西面側が直線的に立ち上がるのに対し、東側は緩やかに立ち上がる。遺構内からは弥生土器片・石器の剥片が出土しており、その多くは小片である。詳細な時期は不明。

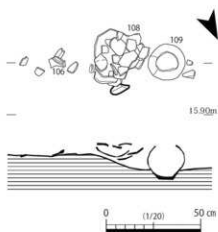
SK7 (第22図 図版23)

調査区南側SK6に近接する土坑で、平面プランは隅丸方形である。検出面での標高は15.63m～15.68mである。規模は長軸88cm、短軸84cm、深さは最深で16cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。断面は皿状を呈し、底面は平坦に近い。遺構内からは弥生土器片(103)が出土しているが、多くは小片である。図化できたのは壺(103)1点である。この遺構の出土遺物の時期は弥生時代中期と考えられるため、本遺構の時期も同時期と考える。

103は弥生土器の壺である。口縁部は肩部から緩やかに外反しながら開く。外面はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ調整、頸部はナデ後、指オサエを施す。口唇部内面にハケ原体2条単位の鋸歯



第22図 2面 弥生時代SK 6・7・9、SD 7実測図



第23図 2面 土器出土状況図

文を施している。弥生時代中期に比定する。

SK9 (第22図)

調査区南壁手前に位置する。検出面の標高は 15.55 m ~ 15.60 m である。現存規模は長軸で 45 cm、短軸 75 cm、深さは最深で 15 cm である。遺構の南半部は流失している。断面は逆台形状である。遺構内からは弥生土器片 (105) 出土している。図化できたのは 105 のみで、弥生時代後期に比定されるため、本遺構の時期も同時期と考えたい。

SD7 (第22図 図版23・24)

調査区南半部東側に位置する。全体は N60° W に延伸する溝で、規模は全長 5.6 m、幅は 24 cm ~ 86 cm で、深さは 8 cm を測る。南東側はテラスを設ける。南東から西へ延びるが、西側は北西側へ N42° W 方向へ屈折する。検出面の標高は 15.80 m ~ 15.84 m である。溝底の標高は北西側は 15.73 m、南東側は 15.70 m で高低差はほぼない。用途は排水であった可能性は低い。遺構内からは弥生土器片が出土しており、その多くは小片のため、図化できたのは 104 のみである。

104 は壺である。口縁部が外側へ大きく開く。外面はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、頸部ナデ調整を施す。弥生時代中期に比定するため、本遺構の時期も同時期に比定すると考える。

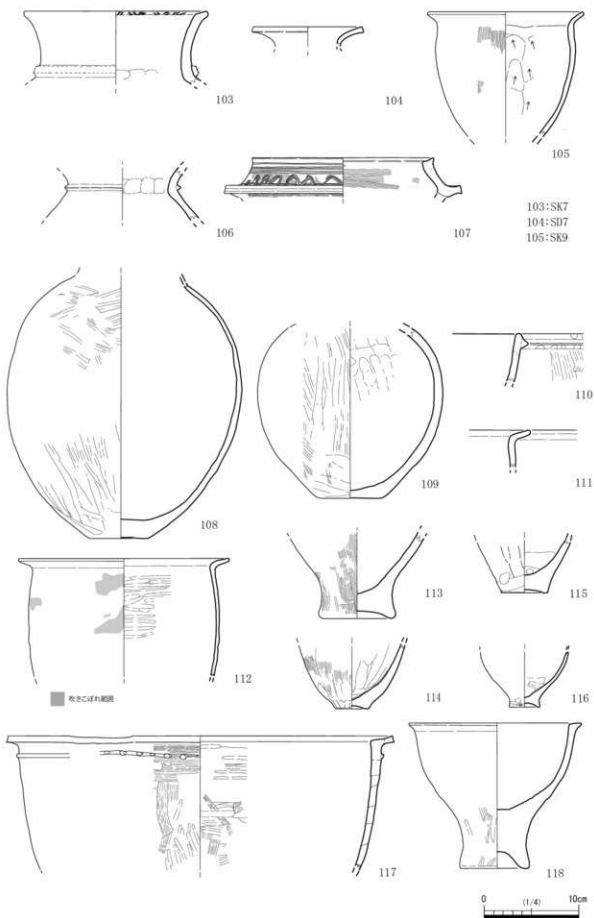
弥生時代粗砂層内出土土器 (第23図 図版23)

調査区南半部中央南壁手前の河川堆積である粗砂層内において弥生土器がまとまって出土した。遺構の掘り込みは平面、土層から確認できず、土坑などの遺構に伴うものではない。出土状況は壺が 2 個体と土器片が出土しており、109 は据え置かれたような状態で出土している。その内 108 は 109 が据え置かれた面より浮いた状態で出土しており、また、土圧で潰れており、流れ込みの可能性がある。109 は口縁から頸部を除き、完形である。いずれも口縁部は失われていた。

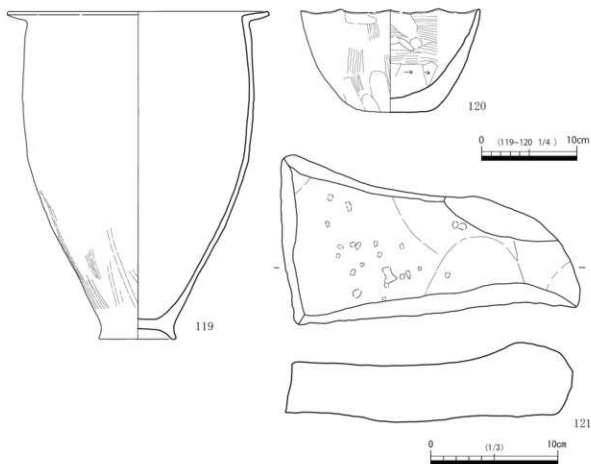
出土遺物は 106 は弥生土器の壺の頸部片である。外面は頸部ヨコナデ、胴部はタテ方向のナデ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部はヨコハケである。頸部に三角突帯を巡らす。外面には丹塗りを施している。弥生時代中期に比定する。108 は弥生土器の壺である。口縁部は失われている。卵状の器形を呈している。外面は胴部上半はハケ調整、下半部から底部にかけてはナデ調整である。内面はナデ調整を施す。弥生時代中期後半に比定する。109 は弥生土器の壺である。口縁部は失われている。球形に近い胴部を持ち、外面は胴部から底部にかけてナデ調整。外底面はナデ調整か。内面は胴部上半部は指ナデ、指オサエ。胴部下半から底部にかけてナデ調整を施す。弥生時代中期に比定する。

弥生時代遺構面及び包含層出土遺物 (第24・25図 図版24・25)

107 は複合口縁壺の口縁部である。外面口唇部直下にヘラ描きの沈線、その下位に 3 条単位の櫛歯状の工具による波状文とヘラ描き 4 条の沈線文を施している。弥生時代後期に比定する。



第24図 2面 弥生土器遺構及び包含層出土遺物実測図(1)



第25図 2面 弥生時代遺構及び包含層出土物実測図(2)

110は甕の口縁部である。内外面は摩滅のため不明、外面はハケ、ミガキ調整を施す。口縁部直下に三角突帯を貼り付ける。東九州地域の下城式と考える。弥生時代中期に比定する。

111は甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状に外へ強く屈曲する。内外面は摩滅のため、調整不明。中期に比定する。

112は甕の口縁部である。口縁部は111同様逆「く」の字状に外へ延びる。外面は被熱による表面剥離を受けており、調整は明瞭ではない。胴部上半に吹きこぼれが付着している。外面は被熱による器面剥離である。内面はミガキ調整。器壁が非常に薄い。弥生時代中期後半に比定する。

113は甕の底部である。外面はハケ調整を施し、内面はナデ調整である。底部は上げ底である。弥生時代中期に比定する。

114は甕の底部である。外面はナデ調整、内面は指ナデである。外面の一部に黒斑が付着がみられる。弥生時代中期後半に比定する。

115は甕の底部である。外面は底面はナデ調整、側面はケズリ調整、内面はナデ調整である。底部は上げ底である。弥生時代中期に比定する。

116はミニチュアの甕である。外面は指オサエ、外底面はナデ、内面はナデ調整を施す。弥生時代後期から古墳時代初頭に比定する。

117は甕である。口縁部はシャープに作られ、逆「L」字状に外へ延びる。口縁部くびれ部には連鎖状突帯を貼り付ける。外面はハケ後ミガキ調整、内面はハケ後、ミガキ調整である。弥生時代中期

後半から後期初頭に比定する。

118は台付鉢である。外面の胴部の上半部は摩滅のため調整不明。底部側面はミガキ、ハケ内面はナデ調整を施す。底部側面は種子圧痕か。弥生時代中期中頃に比定する。

119は裏である。口縁部は逆「L」字状に強く屈曲する。内外面ともにナデ調整を中心とした調整を施す。中期後半に比定する。

120は鉢である。外面はハケ後ナデ、底部側面は指オサエ、内面は口縁部から胴部上半はハケ、ナデ調整。指オサエを施す。外底面に靱圧痕が残存する。弥生時代後期に比定する。

121は石皿である。使用面は1面で敲打痕が残る。安山岩製か。

(5) 1面 中世の遺構と遺物

SB1 (第26図 図版26)

主軸方位N77°Eの2間×3間の竪柱建物である。検出面での標高は15.38m～15.55mである。桁行は南側で6.35m、北側で6.55m、梁行は西側で4.3m、東側で4.35mの規模を持つ。床面積は28.49㎡となる。構成柱穴の直径は0.25m～0.37m、深さは後世の削平により、柱穴上部は流出しているため、0.07m～0.3mと浅い柱穴もある。構成柱穴から土師器の小片が出土している。

本建物の時期は時期を否定できる遺物が乏しいため時期比定は厳しいが、近接するSP138から出土した木材の放射性炭素年代測定の結果では1405～1441CalADの年代値を示しており、15世紀代と比定されることから、本建物も同時期の可能性がある。

SB2 (第26図 図版27)

主軸方位N13°Wの1間×2間の建物であり、検出面での標高は15.45m～15.56mである。桁行は西側で4.1m、東側で4.2m、梁行は北側で3.1m、南側で3mの規模を持つ。床面積13.02㎡となる。構成柱穴の直径は0.21m～0.45m、深さは後世の削平により柱穴上部が流失しており0.1m～0.32mと浅い。構成柱穴からはSP140から鉄釘(144)が出土し、その他は土師器の小片が出土している。144は鉄釘である。頭部を折り曲げる角釘であり、先端は欠損している。

本建物の時期は時期を否定できる遺物が乏しいため時期比定は厳しいが、近接するSP138から出土した木材の放射性炭素年代測定の結果では1405～1441CalADの年代値を示しており、15世紀代と比定されることから、本建物も同時期の可能性がある。

SB3 (第27図 図版27)

主軸方位N79°Eで、現状で1間×2間の建物である。検出面での標高は15.53m～15.58mである。桁行は南側で4.2m、梁行は西側現状で2.1m、東側現状で2.1mの規模を持つ。構成柱穴の直径は0.2m～0.44m、深さは後世の削平により柱穴上部が流失しており0.1m～0.27mと浅い。建物北側は調査区外である。構成柱穴からはSP139より土師器の皿(127)出土し、その他は土師器の小片が出土している。

127は土師器の皿である。口径は7.8cm、器高1.4cmである。にぶい黄橙色を呈す。口縁部は短く外反する。外面はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、底面はナデ調整を施す。12世紀に比定する。

本建物は時期を断定できる遺物が乏しいために時期決定は難しいが、構成柱穴SP139出土土師器が12世紀に比定できることから、本遺構の時期は12世紀以降と考える。

SA1 (第28図)

調査区南側に位置する3個からなる柱列である。主軸方位はN45°E、検出面の標高は南南西側から15.86m、北東側は15.88mである。全長3.1mの遺構で、柱間距離は西から1.6m、1.5mで、構成柱穴の直径は0.22m～0.29mで、深さは10cm～18cmを測る。構成柱穴からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SA2 (第28図)

調査区南側に位置するほぼ南北に並ぶ3個の柱穴からなる柱列である。検出面の標高は南側が15.82m、北側が15.88mである。全長2.84mの遺構で、柱間距離は南から1.48m、1.36mである。構成柱穴の直径は0.14m～0.32mで、深さは8cm～52cmを測る。構成柱穴SP118からは弥生土器片が出土しているが、時期は不明である。

SA3 (第28図)

調査区中央に位置するほぼ南北に並ぶ3個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N2°E、検出面での標高は北側は15.90m、南側は15.98mである。全長4mの遺構で、柱間距離は南から2.18m、1.82mで、構成柱穴の直径は0.14m～0.24mで、深さは8cm～24cmを測る。構成柱穴からは遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

SA4 (第28図)

調査区南側に位置し、SD5の北に隣接する。3個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N79°E、検出面での標高は東側は16.08m、西側は16.00mである。全長4mの遺構で、柱間距離は東から1.7m、2.3mである。構成柱穴の直径は0.4m～0.6mで、深さは20cm～50cmを測る。構成柱穴からは遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

SA5 (第29図)

調査区南側に位置するほぼ南北に並ぶ3個の柱穴からなる柱列である。検出面での標高は南側は15.82m、北側は15.90mである。全長2.9mで、柱間距離は南から1.5m、1.4mである。構成柱穴の直径は0.14m～0.26mである。深さは16cm～30cmを測る。構成柱穴SP116の上層より弥生土器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

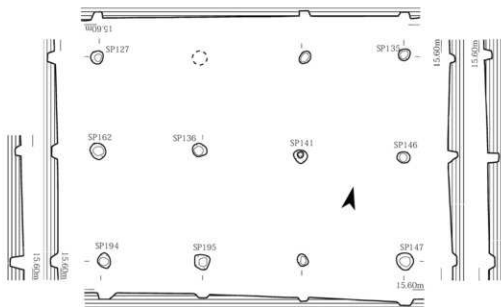
SA6 (第29図)

調査区中央SD1とSD5の間に位置し、3個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N75°E、検出面での標高は西から16m、東側は15.90mである。全長3.7mの遺構で、柱間距離は西から1.9m、1.8mである。構成柱穴の直径は0.16m～0.24mである。深さは0.22m～0.26mを測る。構成柱穴からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

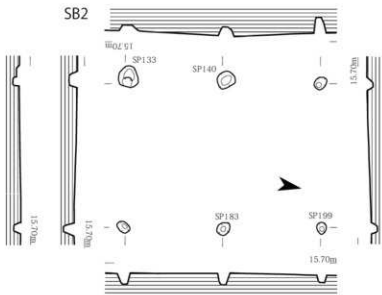
SA7 (第29図)

調査区中央西側に位置する4個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N8°W、検出面での標高は南側は15.58m北側は15.56mである。全長5.98mの遺構で、柱間距離は南から1.98m、2.0m、2.0mである。構成柱穴の直径は0.2m～0.3mで、深さは0.08m～0.12cmを測る。構成柱穴SP160からは土師器が出土しているが、小片のため時期は不明である。

SB1



SB2



第26图 1面 SB1・2実測図

SA8 (第29図)

調査区中央北西側に位置する3個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N74°E、検出面での標高は西側15.56m、東側15.50mである。全長4.2mの遺構で、柱間距離は西から2.0m、2.2mである。構成柱穴の直径は0.14m～0.3mで、深さは0.06m～0.2mを測る。構成柱穴のうちSP144からは土師器小片、SP161からは砥石(141)が出土している。時期は詳細な時期比定できる資料がないため不明である。

141は砥石である。研砥面は4面確認できる。泥岩製。

SA9 (第29図)

調査区北側に位置する3個の柱穴からなる柱列である。主軸方位N76°E、検出面での標高は西南側15.48m、南東側15.38mである。全長4.3mの遺構で、柱間距離は南西側から2.0m、2.1mである。構成柱穴の直径は0.14m～0.22mで、深さは0.05m～0.18mを測る。構成柱穴SP196からは土師器片が出土している。時期は詳細な時期比定できる資料がないため不明である。

SD1 (第30図 図版28)

調査区中央に位置する東西方向に走行する溝である。東側は後世の削平を受け消失しており、複数の柱穴の破壊を受ける。規模は長さが12m、幅が0.55m～1.3m、深さが0.1～0.15mを測る。床面の標高は東側が低い。用途は排水であった可能性がある。出土遺物は、青磁の椀(133)、白磁の椀(134)、土師器の鍋(138)が出土しているが、その多くは土師器などの小片が出土している。出土遺物から12～14世紀と時期幅があり、これらの時期にかけて溝が埋没していったと考える。

出土遺物は133は青磁の椀で、内外面ヨコナデ調整を施し、外面に施軸する。12世紀に比定する。

134は白磁の椀である。内外面ともにヨコナデ調整を施し、内外面に施軸がかかる。口縁は玉緑口縁である。12世紀に比定する。

138は土師器の鍋でいわゆる東周防型鍋である。内外面ともにヨコナデを主とした調整を施す。口縁部は直線的に外傾しながら開く。14世紀に比定する。いわゆる東周防型鍋である。

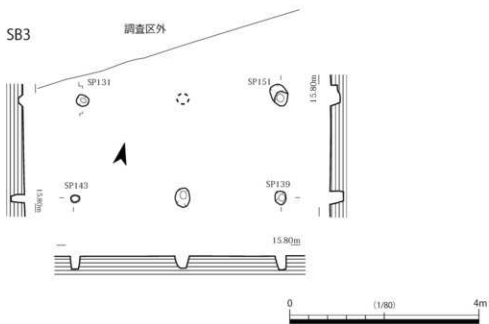
SD2 (第30図 図版28)

調査区中央に位置する。主軸方位はN80°E東西方向の溝でSD1と平行する。東側は後世の削平で失われており、また後世の柱穴に破壊を受ける。規模は長さが6.6mで、幅が0.2m～0.5m、深さが0.05mを測る。床面の標高は15.76m～15.85mで西側が側が低いため、排水用の溝であった可能性がある。

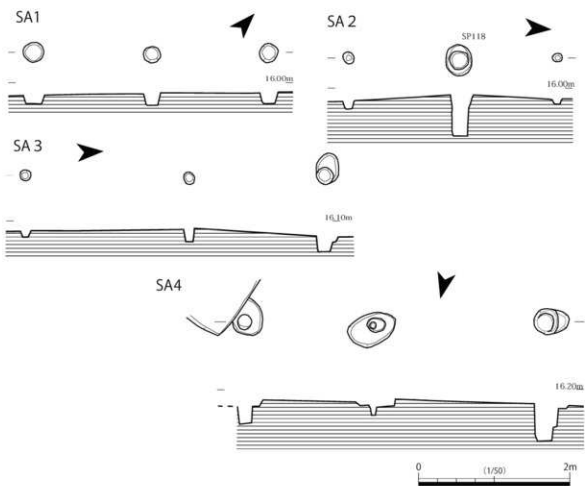
出土遺物は、土師器小片が多く、今回図化できる資料はなかった。時期を比定できる資料もなく、時期決定は厳しい。

SD3 (第32図 図版28)

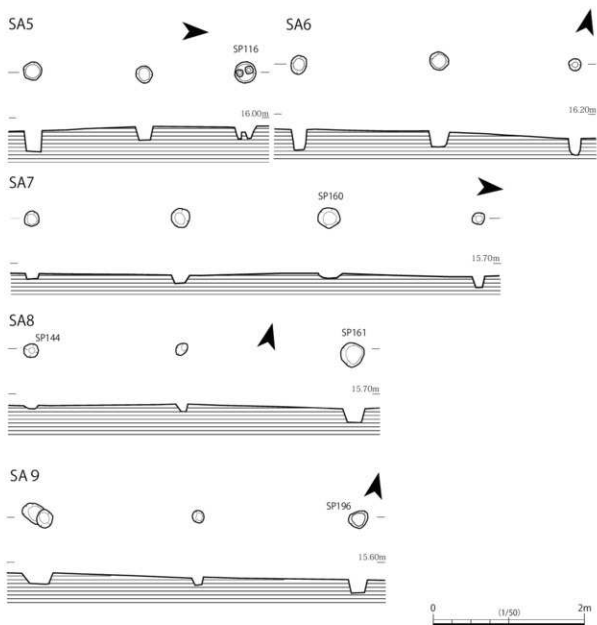
調査区南側に位置し、主軸方位はN65°Eである。南西部は後世の柱穴により破壊を受けている。規模は長さが1.86m、幅が0.14m～0.40m、深さが0.04mを測る。床面の標高は15.98m～16.01mで東側が低い。用途は排水の可能性はある。出土遺物は、流れ込みと思われる弥生土器片がある。時期は詳細な時期比定できる資料がないため、不明である。



第27图 1面 SB3実測図



第28图 1面 SA1~4実測図



第29図 1面 SA 5～9実測図

SD4 (第32図)

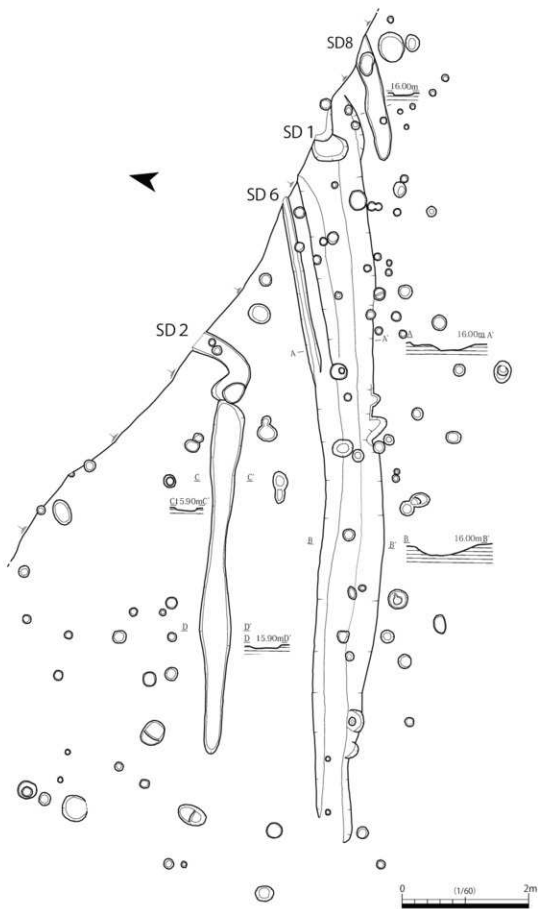
調査区南側に位置し、主軸方位はN64°Eである。規模は長さが1.82mで、幅が0.1～0.2m、深さが4cmと浅い。床面の標高は15.88mと東西の高低差はなく、排水の用途とは考えにくい。

出土遺物は土師器の小片が多く、時期が比定できる資料がないため、不明である。

SD5 (第31図 図版28)

調査区南側に位置する。東西方向に延びる溝で、遺構内は複数の柱穴の破壊を受ける。主軸方位はN87°Eである。規模は長さが10.54mである。幅が0.14m～0.70m、深さが0.1m～0.22mを測る。床面の標高は15.80m～15.90mで西側が低いため、用途は排水であった可能性がある。埋土は単層で、暗褐色粘質土である。

また、東側の溝底面には直径10cm弱の杭列が溝の走行する方向に添って等間隔に確認できる。西側においても同規模の杭列が確認できる。



第30图 1面 SD 1·2·6·8实测图

出土遺物は、遺構からは時期不明の土師器片の小片が多く出土しており、今回、図化できたのは土師器の杯(124)のみである。

124は土師器杯の底部である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部は糸切り痕を残す。12世紀に比定する。本遺構の時期は比定できる資料が乏しいため、時期比定は難しいが、12世紀以降と考える。

SD6 (第30図 図版28)

調査区中央に位置し、SD1に並走する。東側は一部後世の柱穴の破壊を受けている。主軸方位はN65°E東西方向に延びる溝である。規模は長さが2.85m、幅が1.5m、深さが5cmを測る。床面の標高は15.88mで、底面両端での標高差はほとんどないため、機能としては排水路とは考えにくい。遺構内から出土遺物がないため、時期は不明である。

SD8 (第30図)

調査区中央に位置し、SD1に並走する。東側と西側は一部、後世の柱穴の破壊を受けている。主軸方位はN60°E東西方向に延びる溝である。規模は長さが1.8m、幅が0.2～0.3m、深さが0.05mを測る。床面の標高は東側で15.83m、西で15.87mと東側が低いので排水路とは考える。遺構内から出土遺物はないため、時期は不明である。

SK1 (第32図 図版29)

調査区南半部西側に位置する。平面は楕円形で、断面が台形状を呈する。検出時での遺構面上面の標高は15.99mで、北半分は削平を受け流失し、後世に柱穴の掘り込みを受けている。規模は長軸0.7m、短軸0.5m。最深で5cmを測る。遺構からは土師器片の小片が多く、砥石(142)が出土した。142は砂質片岩製の砥石である。研砥面は2面で、破損品である。本遺構の時期は比定できる資料が乏しいため不明である。

SK2 (第33図 図版29)

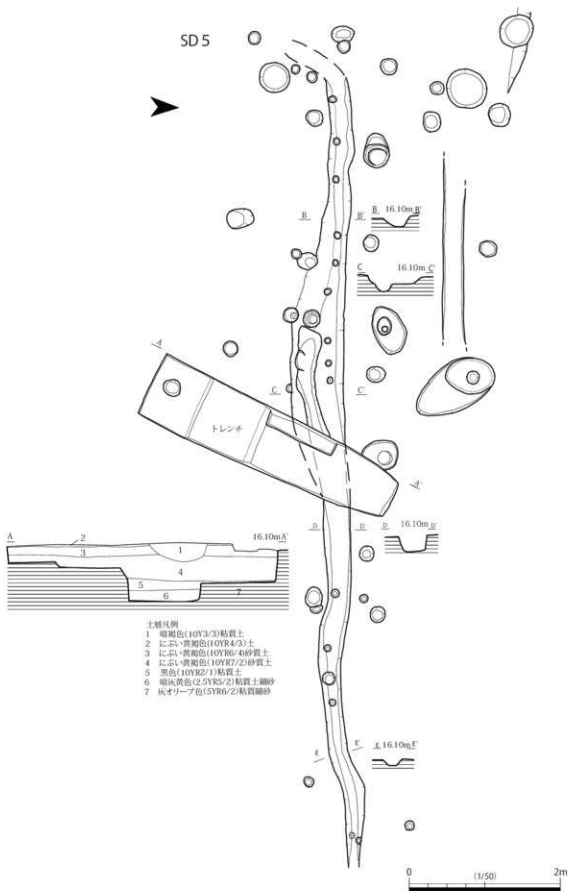
調査区南半部西側に位置する。平面形は不整形楕円形を呈する。検出面での標高は15.90mである。規模は長軸2.4m、短軸1.84m、深さは6cmと浅い。埋土は1層が褐灰色粘質土、2層は明褐色粘質土からなる。遺構からは土師器の杯(122)、土師器の皿(129)、土師器の椀(131)が出土している。

122は土師器の杯である。色調はにぶい黄橙色を呈す。体部は外傾しながら開く。内外面ともにヨコナデを施す。14世紀に比定する。129は土師器皿である。口径は6.4cm、器高0.95cmである。橙色を呈す。体部は短く外傾する。内外面ともに回転ナデ調整を施す、底部は糸切り痕を残す。14世紀後半から末に比定する。131は土師器の椀である。内外面ともにナデ調整を施す。外面高台脇はヨコナデ調整を施す。底部は低い貼り付け高台で、外底面に糸切り痕を残す。12世紀に比定する。

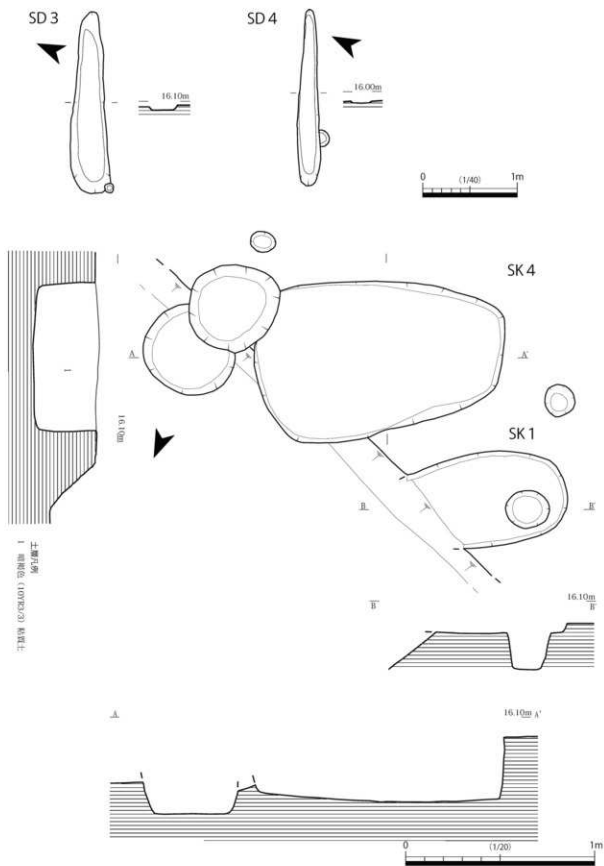
本遺構の時期は、出土遺物に時期幅みられるが、本遺構の時期は122の土師器杯と、129の土師器の皿が14世紀代であることから、本遺構の時期も同時期と考える。

SK3 (第32図 図版29)

調査区南半部東側に位置する。平面形は楕円形で検出面での標高は15.75m～15.82mである。規模は長軸87cm、短軸70cm、深さは最深で47cmを測る。埋土は3層からなり、上層から1



第 31 図 1 面 SD 5 実測図



第32图 1面SD3・4、SK1・4実測图

層は灰褐色粘質土、2層は褐灰色粘質土、3層は褐灰色砂質土である。遺構からは土師器片が多く出土したが全て細片のため、詳細な時期は不明である。

SK4 (第32図 図版29)

調査区南半部西側に位置する。平面が隅丸長方形である。検出面での標高は16.00mである。規模は長軸1.35m、短軸0.83m、深さは最深で33cmを測る。東半部は削平により欠損し、また、後世の柱穴の掘り込みによる一部破壊も受けている。断面は箱形状を呈し、底面は平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。遺構からは時期不明の土師器の小片や土師器の鍋(135)、鉄釘(143)が出土している。本遺構の時期は14世紀に比定する。

135は土師器の鍋で内外面ともにヨコナデ調整を施す。14世紀に比定する。東周防型鍋である。

143は鉄釘である。頭部をわずかに折り曲げる。

SK5 (第33図 図版29)

調査区南半部西側に位置する。平面形は楕円形、検出面での標高は15.52m～15.54mである。規模は長軸1.7m、短軸1.66m、深さは最深で46cmを測る。埋土は1層は褐色粘質土、2層は褐灰色砂質土からなる。断面は皿状を呈す。底面は丸い。遺構からは土師器片の小片が出土しているが時期は不明である。

SP110 (第33図 図版29)

調査区中央に位置する。規模は長軸25cm、短軸21cmで深さは最深で28cmを測る。検出面での標高は15.86mである。遺構からは土師器の搦鉢(140)と土師器片が出土した。

140は搦鉢である。口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面は口縁部以下は指オサエ後ナデ、内面は摩滅のため不明。14世紀前半と考える。

SP155 (第34図 図版29)

調査区中央に位置する。検出面での標高は15.55mである。規模は長軸34cm、短軸33cmである。深さは最深で24cmを測る。遺構からは土師器の皿(126)が出土した。時期は出土遺物から14世紀以降に比定する。

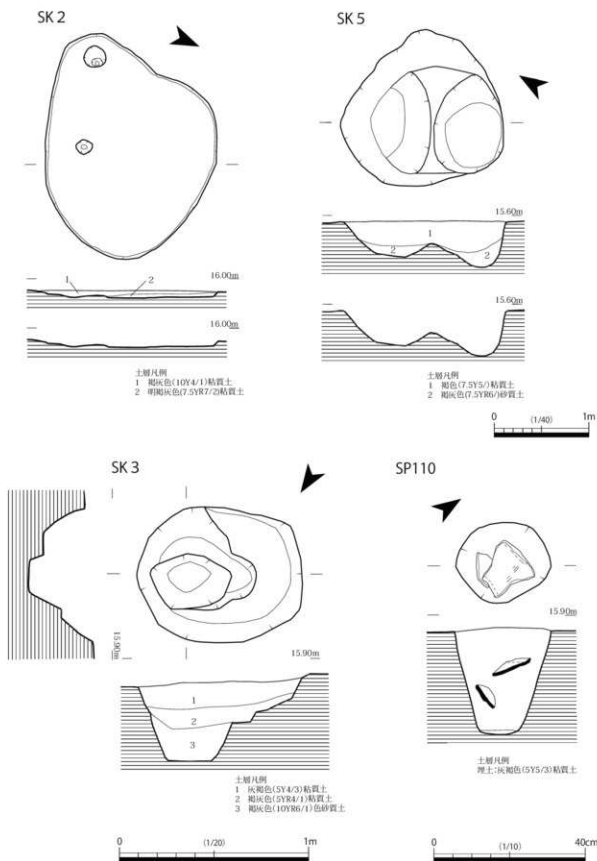
126は土師器の皿である。口径は8cm、器高2.5cmである。色調はにぶい黄橙色を呈しており、器形は歪んでいる。体部は内湾気味に開く。底部は糸切りで板目圧痕がみられる。口唇部に一部黒斑があるため、灯明皿として使用していた可能性がある。本遺構の時期は14世紀以降に比定する。

SP183 (第34図 図版29)

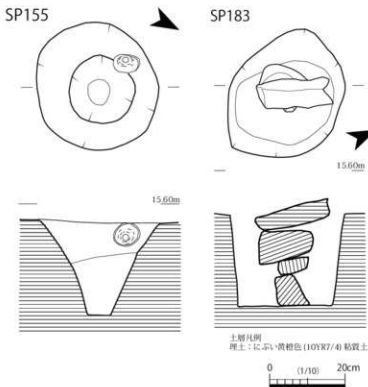
調査区中央に位置する。検出面での標高は15.49mである。規模は長軸34cm、短軸31cm。深さは最深で24cmを測る。埋土はにぶい黄橙色粘質土である。遺構からは遺物の出土はなく、詰石と思われる8～20cm程度の石が出土した。SB2の構成柱穴である。遺構の時期は出土遺物がないため、不明である。

I面中世遺構出土遺物 (第35・36図 図版30・31)

123～125は土師器の杯である。123は口径は復元値で12.4cm、器高残存値で3.1cmである。にぶい褐色を呈す。内外面ともに回転ナデ調整を施す。体部は外反気味に開く。SP172出土。125は土師器杯である。内外面ともにヨコナデで調整を施す。底部は糸切り痕を残す。SP7出土。12世



第 33 图 1 面 SK 2 · 3 · 5、SP 110 实测图



第34図 1面 SP155・183実測図

調整を施す。12世紀から13世紀前半に比定する。SP128出土。

136～139は土師器の鍋でいわゆる東周防型鍋である。136は内外面ともにヨコナデ調整を施す。口縁部は丸みを帯びる。外面には炭化物、煤が付着する。14世紀に比定する。SP184出土。137は内外面ともにヨコナデ調整を施す。SP120出土。139は、口縁部が「て」の字状に外反する。内外面ともにミガキ調整を施す。中央土層第2層出土。

145は用途不明鉄器である。体部は孤状に湾曲する。刃部の作造はない。鍛造品である。SP1出土。

146・147は釜滓である。146はSP4出土。147は錆膨れを伴う板状片の可能性ある。147はSP186出土。

(6) 遺構外出土遺物(第37・38図 図版32・33・34)

148は土製勾玉で、三日月状を呈す。頭部には紐通しの穿孔を施しているが半損している。長さ2.9cm、幅は1.9cmである。内外面ともにナデ調整を施す。包含層出土。

149は分銅形土製品である。頭部の部位であり、刺突文で頭髪を表現している。内外面ともにナデ調整を施す。表面採集。

150～153は弥生土器壺である。150は壺の胴部片である。ヘラによる縦2本横1本の沈線による文様区画内に、二枚貝による有軸木葉文を施文している。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。前期末から中期初頭に比定する。遺構検出時出土。

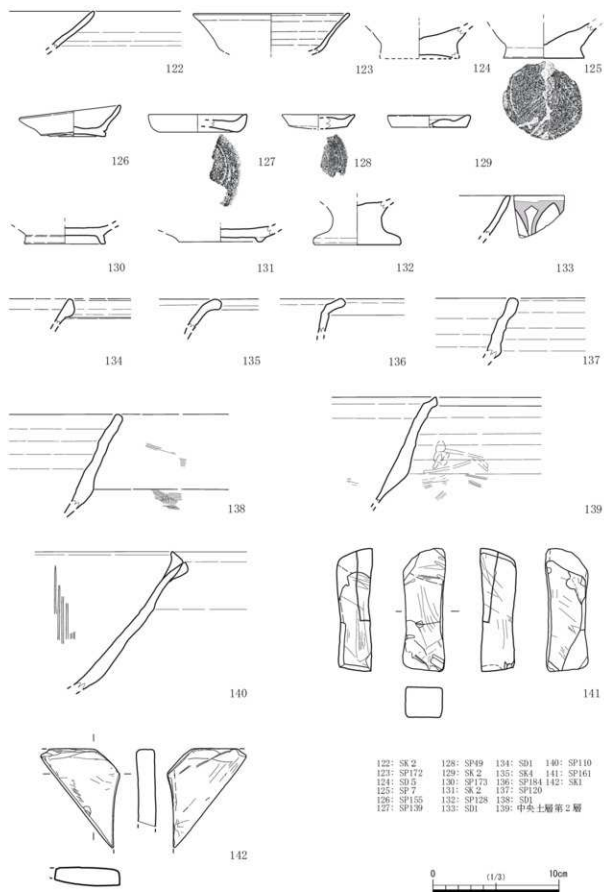
151は口縁部が頸部から大きく外反する。蓋受け用の穿孔を2カ所設ける。頸部外面には二枚貝腹線による3条の沈線を施す。外面はヘラミガキ後、ヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、頸部はナデ調整を施す。前期末～中期初頭に比定する。遺構検出時出土。

紀に比定する。

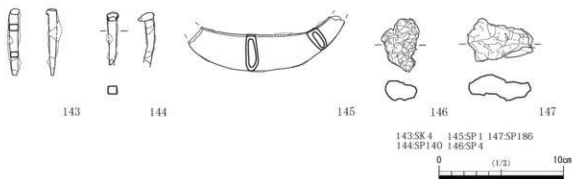
128は土師器の皿である。口径5.8cm、器高1.1cmである。にぶい褐色を呈す。外面はヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、底部はナデ調整を施す。底部は糸切り痕を残す。SP49出土。13世紀から14世紀に比定する。

130は土師器の椀の底部である。130は外面はヨコナデ、外底部は摩滅のため不明。内面はナデ。底部は糸切り痕を残す。SP173出土。12世紀に比定する。

132は柱状高台の皿である。外面はヨコナデ、内面はナデ調整



第 35 図 1 面 中世遺構及び遺構而出土遺物実測図



第36図 1面 中世遺構出土遺物実測図

152は上げ底気味の底部である。外面はハケ、内面はケズリ調整を施す。外面には帯状の黒斑が付着。後期に比定する。表面採集。

153は胴部が張り、頸部で緩やかに外反する。頸部に3条の沈線を施し、その下に「ノ」の字状の刺突文を施す。外面はハケ、ナデ、内面はハケである。弥生時代後期前半に比定する。南壁第4層出土。

154は弥生土器表である。外面は不定方向のナデ、内面はハケ調整を施す。外底面には板目状圧痕が残る。弥生時代中期後半に比定する。トレンチ出土。

155は弥生土器台付鉢である。体部は内湾し、口縁部は「く」の字状に外へ延びる。外面上部は器面剝離のため調整は不明である。下半部はヘラミガキか。脚部はヘラケズリ、外底面はナデ調整を施す。内面はヘラミガキ、脚台ナデ調整を施す。弥生時代中期中頃に比定する。南西壁出土。

156は須恵器杯蓋である。内外面ともに回転ナデ。8世紀に比定する。表土除去時出土。

157は須恵器杯身である。内外面ともに回転ナデ。内底面ナデ。7世紀に比定する。表面採集。

158は平瓦である。凸面は縄目タタキ、凹面はナデ調整を施す。黒色土除去時出土。

159・160は柱状高台杯である。159はにぶい黄橙色を呈す。外面は回転ナデか、内面は回転ナデ摩滅が顕著で内面の調整は不明瞭。底部は糸切り痕を残す。12世紀から13世紀に比定する。表面採集。

160はにぶい橙色を呈す。内外面は摩滅で調整は不明である。中央の穿孔は貫通している。板目圧痕が残る。12～13世紀に比定する。表面採集。

161は白磁碗である。内面には1条の沈線がみられ、薄い釉がかかる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。13世紀に比定する。表土除去時出土。

162は青白磁合子蓋で、側面は菊座形である。外面には施釉がみられる。12世紀に比定する。表土除去時出土。

163は灰軸陶器瓶である。内面、外底面は無施釉であるが、内底面に自然釉がみられる。内外面ともに回転ヨコナデ。遺構検出時出土。

164・165は土師器皿である。164は口縁部が短く外傾する。口径残存値6.2cm、器高1.2cmである。にぶい黄橙色を呈す。内外面ともに口縁部はヨコナデ、底面も内外面ともにナデ。底面は糸切り。13～14世紀の所産。南壁出土。

165は口径は6.7 cm、器高は0.8 cm 残存である。にぶい橙色を呈す。内外面ともに回転ナデ。口縁部の立ち上がりはほとんどみられない。底部は糸切り後、外側に回転へら切りを行う。12～13世紀に比定する。表面採集。

166・167は土師器の鍋で、東周防型鍋である。166は口縁部から胴部片である。口縁部は「て」の字状を呈す。外面はヨコナデ、指オサエを施し、内面はナデ調整を施す。14世紀に比定する。表土除去時出土。167は口縁部片である。「て」の字状を呈す。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。14世紀に比定する。遺構検出時出土。

168は瓦質土器の鍋である。口縁部は短く屈曲する。内外面ともにヨコナデ調整を主として施す。14世紀に比定する。遺構検出時出土。

169は土師器の足鍋の脚部である。全体は指圧整形。外面には煤が付着する。13世紀に比定する。遺構検出時出土。

170は管状土鍾で、孔径0.3 cmである。遺構検出時出土。

171は陶器の播鉢である。内外面ともに回転ナデ調整を主として施す。内面には8条の櫛歯おろし目を有す。15世紀～16世紀に比定する。表土除去時出土。

172は陶器の鉢である。内外面ともにナデ調整を施す。東播系須恵器である。表土除去時出土。

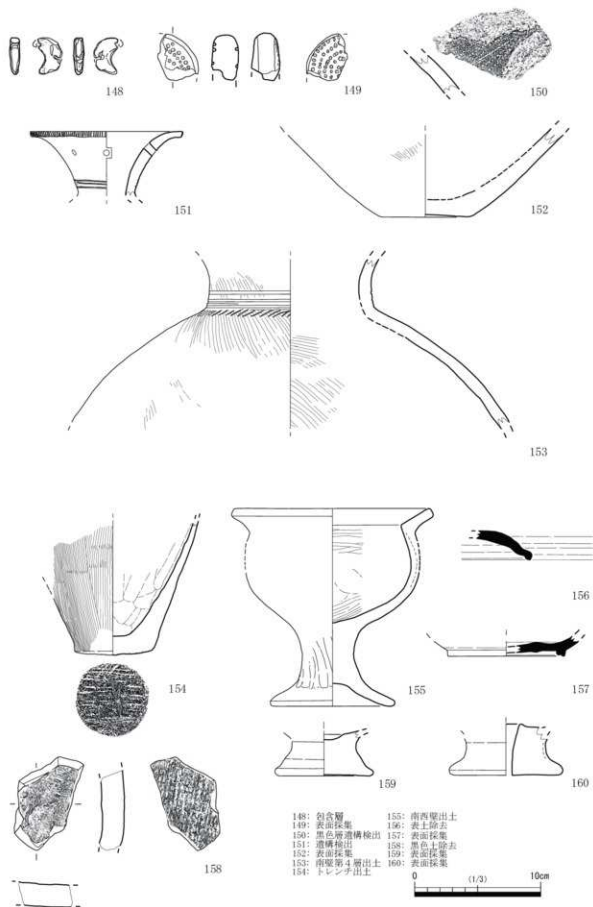
173は丸瓦である。凸面はナデ、凹面は調整不明。近世瓦である。表面採集。

174～177は打製石鎌である。174は凹基無茎式で、形状が不整形で比較的大きな剥離調整が残る。そのため、本資料は未製品の可能性がある。安山岩製。遺構検出時出土。175は凹基無茎式である。縁辺は細かい調整剥離を施す。安山岩製。遺構検出時出土。176は凹基無茎式である。大きさは現存で1.3 cmと小型である。押圧剥離による細かい調整が施される。先端部は欠損している。姫島産黒曜石製。遺構検出時出土。177は平基無茎式である。押圧剥離による調整が施される。安山岩製。表面採集。

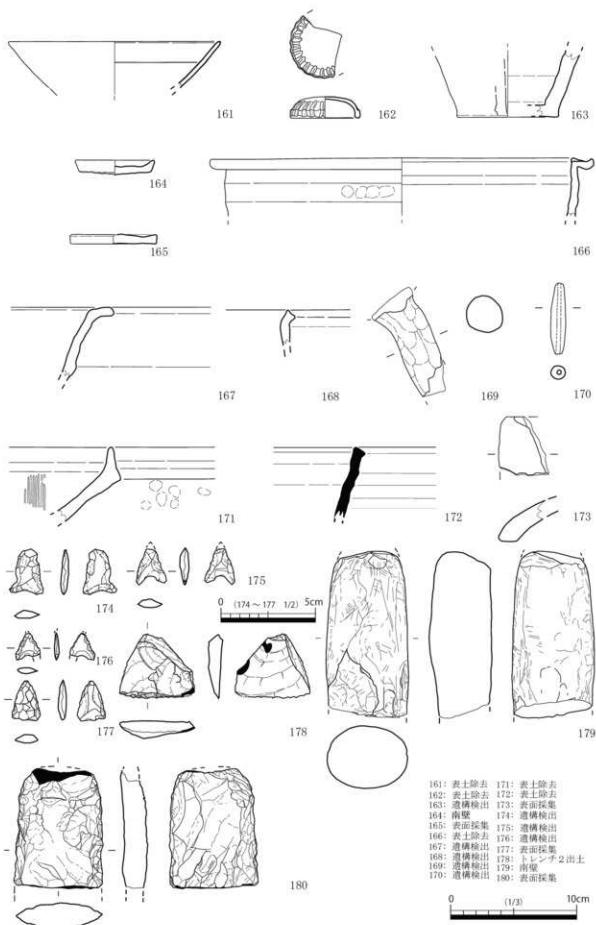
178は削器である。横長剥片を素材とし、裏面側から丁寧な調整加工を施す。安山岩製。トレンチ2出土。

179は太型蛤刃石斧である。全面に敲打痕、擦痕が多く残る。石材は安山岩製。南壁出土。

180は打製石斧である。短冊形を呈す。敲打による調整が施されている。折損しており、上半部のみ残る。石材は安山岩製。表面採集。



第 37 図 遺構外遺物実測図 (1)



第38図 遺構外遺物実測図(2)

第1表 1地区出土土器観察一覧表(1)

No.	種別	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (9)	(9)	(9)	備考
						口径 (mm)	器高 [残存]	底径 (mm)				主な調整	主な調整	
1	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	14.4	5	-	やや粗	良	暗灰色 N3/ にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ 二枚貝条痕	
2	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	19.0	-	-	やや粗	良	暗灰色 7.5YR5/1 暗灰色 7.5YR4/1	ナデ	二次焼成
3	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	6.7	-	-	やや粗	やや良	黒色 2.5Y2/1 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキ後ナデ 条痕	
4	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	110.8	-	-	粗	良	褐色 7.5YR6/1 にぶい褐色 7.5YR7/3	ミガキ、ナデ 条痕	
5	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	32.3	9.1	-	-	粗	やや良	灰色 5Y5/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	大平厚城、口縁部 直下付近一部ナデ 磨滅のため不明	
6	10	7	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	39.0	7.1	-	-	やや粗	やや良	黄灰色 2.5Y5/1 灰黄褐色 10YR6/2	磨滅のため不明 磨滅のため不明	
7	11	8	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	43.7	23.3	-	-	やや粗	やや良	黄灰色 2.5Y5/1 灰黄褐色 2.5Y6/2	ミガキ(口縁・底) ナデ コナデ	口縁下に工具による 凹陥状の横状線を 施文
8	11	8	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	15.4	5.3	-	やや密	良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ 条痕か	
9	11	8	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	15.7	5.45	-	やや粗	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ 二枚貝条痕、外底 面ナデ	
10	11	8	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	3.3	7.0	-	やや粗	良	灰褐色 10YR5/2 褐色 5YR6/6	条痕後一部ミガキ 褐色 5YR6/6、外底 面ナデか	
11	11	8	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	3.8	5.7	-	粗	不良	にぶい黄褐色 10YR5/3 明赤褐色 2.5YR5/6	ナデ ヨコナデ、外底面 ナデ	
12	11	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	6.6	6.6	-	粗	やや良	褐色 7.5YR5/1 にぶい褐色 7.5YR7/4	磨滅のため不明 二枚貝条痕、側面 面ナデ、外底面 ナデ	
13	11	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	深鉢	-	15.8	7.4	-	やや粗	やや良	褐色 7.5YR4/1 にぶい黄褐色 10YR6/3	磨滅のため不明 粗い二枚貝条痕、 外底面ミガキ	
14	11	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	-	14.0	-	-	密	良	黒褐色 2.5Y3/1 にぶい黄色 2.5Y6/3	ミガキ 磨滅のため不明	
15	11	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	-	3.1	-	-	密	良	黄灰色 2.5Y4/1 黒褐色 7.5Y3/1	ミガキ 磨滅、ミガキ	
16	11	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	31.8	8.4	-	-	やや粗	良	褐色 5YR6/1 にぶい褐色 10YR7/3	ミガキ、ナデ ナデ、条痕	
17	12	9	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	37.0	9.0	-	-	密	良	黒色 N2/ 黒褐色 2.5Y3/1	ミガキ ミガキ	半円形状の突起
18	12	10	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	-	111.8	-	-	密	良	黒褐色 10YR3/1 にぶい黄褐色 10YR7/3	ミガキ ミガキ、条痕、ケズリ	
19	12	10	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	20.1	11.2	-	-	密	良	黒色 10YR2/1 黒褐色 10YR3/2	ナデ後ミガキ ナデ後ミガキ	
20	12	10	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	-	112.5	-	-	やや粗	良	黒色 7.5Y2/1 にぶい黄褐色 10YR4/3	ミガキ後ヨコナデ 口縁部条痕のちヨ コナデ、胴部条痕 後ナデ	
21	12	11	縄文土器出土集中地点	縄文土器	浅鉢	27.0	17.2	-	-	密	良	褐色 7.5YR4/1 灰赤色 2.5YR4/2	ミガキ 磨滅のため調整不 明、ミガキか	
26	13	14	上段西側 S1	縄文土器	深鉢	-	43.6	7.8	-	やや粗	良	黒褐色 10YR3/1 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキ、ナデ 二枚貝条痕、ナデ	輪郭式か
27	15	16	灰褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	-	2.6	-	-	密	良	灰白色 2.5YR2/2 黄褐色 2.5Y7/3	ミガキ、口縁部ナ デ ミガキ、口縁部ナ デ	
28	15	16	灰褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	-	2.0	-	-	密	良	黄褐色 2.5Y7/3 黄褐色 2.5Y7/3	ミガキ ミガキ	
29	16	16	縄文時代包含層	縄文土器	深鉢	-	2.3	-	-	やや粗	良	黒色 2.5Y2/1 青黒色 5PB2/1	ミガキ 条痕か	外面僅付着
30	16	16	縄文時代包含層	縄文土器	深鉢	-	3.5	-	-	やや粗	良	黒色 5YR2/1 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキ後ヨコナデ 条痕	口縁部内面 1 条状 線

第2表 1地区出土土器観察一覧表(2)

No.	採回	図版	出土場所	種別	器種	量量 (mm)			胎土	焼成	色調	(内) (98)	主な調整	(内) (98)	備考
						口径 (底元)	器高 [残存]	底径 (底元)							
31	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.7	-	やや密	良	黒色 5Y2/1 にふい・黄褐色 10YR6/4	ココナデ 染痕		外面灰化物付着	
32	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	16.1	-	粗	やや良	褐色 7.5YR4/1 明黄褐色 10YR6/6	ミガキ 二枚目染痕			
33	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	18.0	-	やや粗	良	褐色 7.5YR5/1 にふい・褐色 7.5YR6/3	ミガキ 染痕後ナデ、部正 痕			
34	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	(20.0)	14.0	-	やや粗	良	黒褐色 2.5Y3/1 にふい・褐色 10YR5/4	ミガキ ナデ		口縁が歪む	
35	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.2	-	密	良	褐色 2.5Y6/1 黄褐色 2.5Y6/1	ナデ、ミガ キ、ココナデ 染痕		口縁端部に平環状 の突起	
36	16	16	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	15.4	-	粗	やや良	褐色 5YR4/1 明赤褐色 5Y5/6	ナデ		縦方向の平行沈線	
37	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	112.3	-	粗	不良	にふい・黄褐色 10YR7/2 黒褐色 10YR3/2	ナデ 強いナデ(上部)、 ナデ(下部)		外面上部に沈線	
38	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	15.55	-	粗	やや良	褐色 7.5YR5/1 褐色 7.5YR6/6	磨滅のため不明 ナデ		外面に沈線(7条)	
39	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.9	-	粗	良	オリブ黒 色 5Y3/1 にふい・褐色 7.5YR5/4	ミガキ 二枚目染痕			
40	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	19.95	-	やや密	良	褐色 N3/ 灰黄褐色 10YR4/2	口縁部ココナデ、 胴部以下ナデ 二枚目染痕		口縁部胴部付近に 1箇所前面穿孔	
41	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	13.3	-	やや密	良	褐色 5YR6/6 黒褐色 2.5Y3/1	磨滅のため不明 ナデ		外面に沈線	
42	16	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	12.2	-	やや粗	良	灰色 N4/ 褐色 5YR6/8	ミガキか ナデ		外面に沈線	
43	17	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	12.8	-	粗	やや良	灰色 7.5Y4/1 にふい・黄褐色 10YR7/4	ミガキ ナデ		口唇部外面二枚目 による斜行突帯文	
44	17	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	12.1	-	やや密	良	褐色 7.5YR5/1 褐色 7.5YR4/1	ナデ ナデ		口唇部上端二枚目 による斜目、外 面突帯へラ工具 による斜目目	
45	17	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	12.9	-	やや密	良	黒色 10Y2/1 黒色 7.5Y2/1	ココナデ ココナデ		外面突帯へラ工具 による深い斜目 目、外面灰付着	
46	17	17	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.45	7.0	粗	不良	褐色 10YR5/1 明黄褐色 10YR7/6	染痕、粗いナデ 指による強いナ デ、ナデ		作りが薄、底部裏 に灰痕	
47	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.7	6.7	粗	やや良	褐色 10YR5/1 褐色 7.5YR7/6	ナデ 二枚目染痕		調整が粗い	
48	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.65	7.3	やや粗	良	灰色 N4/ 褐色 5YR7/6	磨滅のため不明 二枚目染痕、外底 面ナデ			
49	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	深鉢	-	14.0	(9.5)	やや粗	良	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 2.5Y5/2	ナデ 染痕、底面灰状工 具小目による増幅 に迫る同心円状の ナデ			
50	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	鉢	-	12.0	5.6	粗	良	灰黄色 2.5Y7/2 にふい・褐色 7.5YR7/4	磨滅のため不明 側面指オサエ、外 底面ナデ			
51	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	浅鉢	-	13.0	-	密	良	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR5/2	磨滅のため不明 ナデ後ミガキ		口縁部内面玉縁状 に肥厚	
52	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	浅鉢	-	12.2	-	密	良	褐色 N3/ 褐色 N3/	ミガキ ミガキ			
53	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	浅鉢	-	12.2	-	密	良	黒褐色 10YR3/1 褐色 10YR4/1	ミガキ ナデ			
54	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	浅鉢	-	12.3	-	密	良	にふい・黄褐色 10YR6/3 にふい・黄褐色 10YR5/3	ココナデ ココナデ		外面へらによる斜 線文	
55	17	18	縄文時代包舎層	縄文土器	浅鉢	-	12.2	-	密	良	黒色 10Y2/1 黒色 10Y2/1	ミガキ後ココナデ ミガキ後ココナデ			

第3表 1地区出土土器観察一覧表(3)

No.	種別	年代	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	構成	色調	(内) (外)	主な調整	(内) (外)	備考
						口径 (復元)	器高 残存	底径 (復元)							
56	17	18	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[3.6]	-	粗	やや 良	灰黄褐色 10YR5/2 黒灰色 10YR3/1	ミガキ ナデ			
57	17	18	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[3.4]	-	密	良	黒色 5Y2/1 褐色色 7.5YR4/1	ミガキ ミガキ			
58	17	18	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[2.8]	-	密	良	黒褐色 2.5Y3/1 黄灰色 2.5Y4/1	ミガキ ミガキ			
59	17	18	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[2.2]	-	密	良	にぶい黄褐色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキか ミガキ			
60	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	深鉢	-	[4.25]	-	やや 粗	不良	褐色色 7.5YR5/1 にぶい褐色 7.5YR5/4	ヨコナデ 染灰	外面炭化物付着		
61	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[2.0]	-	やや 密	良	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	ミガキ ミガキ			
62	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[2.8]	-	やや 密	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデか 良艶染灰、口縁ナ デ			
63	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[4.5]	-	密	良	黒色 5Y2/1 黒色 5Y2/1	ミガキ後ヨコナデ ミガキ後ヨコナデ			
64	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[3.5]	-	やや 密	良	黒色 10Y2/1 暗灰色 N3/	ミガキ ミガキ			
65	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[4.7]	-	密	良	褐色色 10YR4/1 褐色色 10YR5/1	ミガキ ミガキ			
66	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[3.3]	-	密	良	黒色 2.5Y2/1 灰黄色 2.5Y7/2	不明 ミガキ			
67	17	9	縄文土器出土集中 地点	縄文土器	浅鉢	-	[3.85]	-	密	良	褐色色 10YR4/1 褐色色 10YR4/1	ミガキ、ナデ ミガキ後ヨコナデ			
68	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[4.8]	-	やや 密	良	黒色 10YR2/1 にぶい褐色 10YR5/2	ナデ後ミガキ 二枚肌染灰後ナ デ			
69	17	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[3.5]	-	密	良	黒褐色 5YR3/1 灰褐色 5YR5/2	ミガキ 磨滅、ミガキ			
70	18	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢 (23.5)	[3.6]	-	-	密	良	黒褐色 10YR3/2 暗灰黄褐色 2.5Y4/2	ミガキ ミガキか (磨滅)			
71	18	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[4.7]	-	やや 密	良	褐色色 7.5YR4/1 黒褐色 10YR3/1	ナデ ミガキか (磨滅)	波状口縁、内面口 縁底部1条洗擦		
72	18	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢 (29.6)	[2.15]	-	-	密	良	黒色 7.5YR2/1 にぶい黄褐色 2.5Y6/4	ミガキ ナデ			
73	18	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[5.55]	-	密	良	黒色 2.5Y2/1 黒色 2.5Y2/1	口縁部ミガキ後 ヨコナデ、胴 部ミガキ後ナ デ 口縁部ミガキ後ヨ コナデ、胴部染 灰			
74	18	19	縄文時代包含層	縄文土器	浅鉢	-	[7.1]	-	密	良	黒褐色 2.5Y3/1 黒褐色 2.5Y3/1	ミガキ ミガキ			
103	24	24	SK 7	弥生土器	甕	(19.2)	[7.7]	-	やや 粗	やや 良	にぶい褐色 7.5YR5/3 明赤褐色 2.5YR5/6	口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ後磨ササ エ、ヨコナデ	口縁部内面にハケ 部部ナデ後磨ササ エ、ヨコナデ 胴部内面表面 磨擦		
104	24	24	SD 7	弥生土器	甕	(11.6)	[2.1]	-	粗	不良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ ヨコナデ	内外面ほぼ全面に マンガン付着		
105	24	24	SK 9	弥生土器	甕	(16.4)	[13.3]	-	粗	良	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい赤褐色 2.5YR5/4	口縁部ヨコナデ、 胴部以下(ウケズ) 口縁部ヨコナデ、 胴部以下位に黒 炭	口縁部内面、胴部 外面一部に炭付着、 胴部内面下位に黒 炭		
106	24	24	南壁 弥生時代包含層 粗砂層	弥生土器	甕	-	[5.6]	-	密	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/3	胴部磨ササエ、口 縁部ヨコナデ、 胴部ヨコハケ 胴部ヨコナデ、胴 部タテ方向のナ デ	内外面丹塗り、胴 部に三角突帯		
107	24	24	南壁 弥生時代包含層 トレンチ内 砂礫層	弥生土器	甕	(19.3)	[4.2]	-	やや 粗	良	明赤褐色 2.5YR5/6 にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁部ヨコナデ、 胴部以下ヨ コナメハケ 口縁部ヨコナデ、 胴部以下ヨコ・ ナメハケ、ヨコ ナデ	外面口縁部直下へ 少盛り4条洗擦、 下位3条単位の磨 擦状工具による磨 擦状文とヘラ盛り4 ナメハケ、ヨコ ナデ		
108	24	24	南壁 弥生時代包含層 粗砂層	弥生土器	甕	-	[28.2]	5.9	やや 密	良	褐色 2.5YR6/8 褐色 2.5YR6/8	ナデ 胴部上半ハケ、胴 部下半〜底部ナ デ	外面胴部下半〜底 部及び内面胴部上 部下半〜底部ナ デの一部に黒炭		

第4表 1地区出土土器観察一覧表(4)

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	(内) (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (復元)	器高 [残存]	底径 (復元)						
109	24	24	南壁 赤生時代包 含層 粗砂層	赤生土器	壺	-	[18.2]	6.8	粗	良	浅黄褐色 7.5YR8/6 浅黄褐色 7.5YR8/6	胴部上半部ナデ・ 指オサエ、胴部 下半～底部ナデ 胴部～底部ナデ、 外底面ナデか		
110	24	25	南壁 赤生時代包 含層 青灰色砂質 土	赤生土器	甕	-	[5.1]	-	やや 密	やや 良	黄褐色 10YR8/6 にふい黄褐色 10YR7/4	磨滅のため不明 ハケ、ミガキ	下城式	
111	24	25	赤生時代包 含層 砂層	赤生土器	甕	-	[3.9]	-	粗	やや 良	褐色色 5YR5/1 にふい赤褐色 5Y5/4	不明 不明		
112	24	25	赤生時代包 含層 黒色土層 抽出 黒色 土層の上層シル ト層	赤生土器	甕	(22.4)	[12.6]	-	やや 粗	やや 良	にふい黄褐色 10YR7/3 暗赤褐色 5YR3/2	ミガキ ハケか	胴部外面被熱による 器面剥離。胴部 上半に吹きこぼれ あり	
113	24	25	赤生時代包 含層 黒色土層 除去時 黄褐色土層	赤生土器	甕	-	[9.2]	7.2	粗	良	にふい褐色 5YR7/4 灰褐色 7.5YR6/2	ナデ ハケ目、底部ナデ		
114	24	25	赤生時代包 含層 黒色土の上層	赤生土器	甕	-	[6.9]	3.3	やや 粗	やや 良	褐色 5YR6/6 灰褐色 7.5YR5/2	指ナデ ナデ	外面の一部に黒斑	
115	24	25	赤生時代包 含層 褐色色砂質土	赤生土器	甕	-	[5.6]	(4.9)	粗	不良	にふい褐色 10YR7/3 にふい褐色 7.5YR7/4	ナデ 外底面ナデ、側面 ケスリ	凹底	
116	24	25	赤生時代包 含層 南壁土層 褐色色 砂質土 南壁トレン チ	赤生土器 ミニ チュ ア 甕	-	[5.85]	3.4	やや 粗	やや 良	明赤褐色 5YR5/6 褐色 5YR7/6	ナデ 指オサエ、外底面 ナデ	摩滅顯著		
117	24	25	赤生時代包 含層 黒色土層 除去時	赤生土器	甕	41.2	[14.3]	-	やや 粗	良	にふい褐色 7.5YR 7/4 褐色 7.5YR7/6	ハケ後ミガキ ハケ、ミガキ		
118	24	25	赤生時代包 含層 2 面 遺構抽出	赤生土器	付存 鉢	(18.9)	15.4	7	密	良	黒色 5Y2/1 浅黄褐色 10YR8/4	ナデ 胴部上半部被熱の ため不明、底部側面 ミガキ・ハケ、外 底面ナデ	底部側面に種子圧 痕か	
119	25	25	赤生時代包 含層 砂層相当層	赤生土器	甕	(27.4)	34.7	7.8	やや 密	やや 良	灰黄色 2.5Y6/2 にふい褐色 7.5YR6/3	口縁部ヨコナデ、 胴部～底部ナデ 口縁部ヨコナデ、 胴部上半ナデ、胴 部下半ナデ、外 底部ヨコナデ、外 底面ナデ	口縁部逆「L」字状 に強く屈曲	
120	25	25	赤生時代包 含層 南壁土層第9層	赤生土器	鉢	19.0	10.7	7.1	やや 粗	やや 良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	口縁部～胴部上半 ハケ、ナデ、指オ サエ、底部ケスリ ハケ後ナデ、底部 側面指オサエ	外底面に粘土質残 存	
122	35	30	SK 2	土師器	坏	-	[3.0]	-	密	良	にふい黄褐色 10YR6/3 にふい黄褐色 10YR6/3	ヨコナデ ヨコナデ		
123	35	30	SP172	土師器	杯	(12.4)	[3.1]	-	密	良	にふい褐 色 7.5YR6/3 にふい褐色 7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ		
124	35	30	SD 5	土師器	杯	-	[2.4]	-	密	良	褐色 7.5YR7/6 にふい褐色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	糸切り、内外面に マンガン付着	
125	35	30	SP 7	土師器	坏	-	[2.8]	6.4	密	良	褐色 7.5YR6/6 にふい褐色 7.5YR7/4	ヨコナデ ヨコナデ	外底面板目圧痕、 糸切り、凹盤状の 底部	
126	35	30	SP155	土師器	皿	8	2.5	5.1	密	良	灰黄色 2.5Y6/2 にふい黄褐色 10YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	器形の歪み、糸切 り、外底面板目圧 痕、内底面から口 縁部の一部に黒斑 (灯明皿の可能性あり)	
127	35	30	SP139	土師器	皿	7.8	1.4	6.2	密	良	にふい黄褐色 10YR6/4 にふい黄褐色 7.5YR6/4	口縁部ヨコナデ、 底部ナデ ヨコナデ、外底部 糸切り後ナデ	上唇底の厚手の個 体	

第5表 1地区出土土器観察一覧表(5)

No.	種別	年代	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	構成	(内) 色調 (外)	(内) 主な調整 (外)	備考
						口径 (復元)	器高 [残存]	底径 (復元)					
128	35	30	SP49	土師器	皿	5.8	1.1	4.7	密	良	にぶい・褐色 7.5YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR6/4	口縁部ヨコナデ、 底部ナデ ヨコナデ、	外底面糸切り
129	35	30	SK 2	土師器	皿	6.4	0.95	6.0	やや 密	良	褐色7.5YR6/6 褐色7.5YR6/6	体部=転ナデ、底 部=転ナデ後ナデ 体部~回転ナデ、	外底面糸切り
130	35	30	SP173	土師器	碗	-	[1.5]	6.4	密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・黄褐色 10YR7/2	ナデ ヨコナデ、外底面 一部磨滅により不明	外底面糸切り
131	35	30	SK 2	土師器	碗	-	[1.2]	(6.6)	密	やや 良	灰白色 10YR8/2 褐色 10YR6/1	ナデ 黄台縁辺ヨコナ デ、外底面ナデ	外底面糸切り
132	35	30	SP128	土師器	皿(柱 状高 台)	-	[3.4]	6.8	密	良	にぶい・褐色 7.5YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR6/4	ナデ ヨコナデ	
133	35	30	SD 1	青磁	碗	-	[3.2]	-	密	良	灰白色 N8/ 灰白色 N8/ 軸色:オリーブ 灰色 5GY6/1	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、 口縁部ヨコナデか	外面磨有間に朝蓋 状の隈文、内外面 磨滅
134	35	30	SD 1	白磁	碗	-	[2.05]	-	密	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1 軸色:灰オリー ブ色 5Y6/2	ヨコナデ ヨコナデ	内外面磨滅。 口縁玉縁
135	35	30	SK 4	土師器	鍋	-	[2.5]	-	やや 密	やや 良	にぶい・褐色 7.5YR7/4 褐色 5Y6/4 褐色 5Y6/4	ヨコナデ ヨコナデ	外面磨付着
136	35	30	SP184	土師器	鍋	-	[2.65]	-	やや 密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/3 黒褐色 2.5Y3/1	ヨコナデ ヨコナデ	外面炭化物、煤付 着
137	35	31	SP120	土師器	鍋	-	[4.8]	-	やや 密	良	にぶい・褐色 5YR6/4 にぶい・褐色 5YR6/4	ヨコナデ ヨコナデ	外面炭化物、煤付 着
138	35	31	SD 1	土師器	鍋	-	[7.65]	-	やや 良	良	にぶい・褐色 7.5YR6/4 褐色 7.5YR4/1	強いヨコナデ 口縁部ハケ後ヨコ ナデ、腹部ハケ	口縁部外面磨付着
139	35	31	中央土層第2層	土師器	鍋	-	[7.0]	-	密	良	褐色 7.5YR7/6 にぶい・褐色 7.5YR5/4	口縁部ミガキ、 口縁部以下回 転ナデ・ハケ 口縁部ミガキ、口 縁部~頸部ミガキ 頸部ハケ	
140	35	31	SP110	土師器	摺鉢	-	[11.0]	-	やや 良	良	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄色 2.5Y6/2	口縁部ヨコナ デ、口縁部以下 磨滅のため不明 口縁部ヨコナデ、 口縁部以下指オサ エ後ナデ	6条の縞溝
148	37	32	包内層	土製品	勾玉	長さ 2.9	幅 0.85	厚さ 0.85	密	良	褐色 2.5Y6/6 褐色 2.5Y6/6	ナデ ナデ	重 さ 3.8 g 頭部一部欠損、尊 孔部平削
149	37	32	表面採集	土製品	分銅 形土 製品	長さ [3.8]	幅 [3.3]	厚さ 2.3	やや 密	良	褐色 2.5Y6/8 褐色 2.5Y6/8	ナデ ナデ	表裏共に刺突文 彫文
150	37	32	遺構検出	赤生砂 層	赤生土器 壺	-	-	-	やや 良	やや 良	褐色 5YR6/6 灰褐色 7.5YR4/2	ナデ ヘラミガキ	ヘラによる履2本、 横1本の化粧、二 枚目による有軸本 蓋文
151	37	32	遺構検出	赤生土器 壺	(12.2)	[5.2]	-	-	やや 良	良	灰黄褐色 10YR8/2 灰黄褐色 10YR6/2	口縁部ヨコナ デ、頸部ナデ ヘラミガキ後ヨコ ナデ	蓋受け用 2か所穿孔 口縁部外面粗刻な ヘラ削目、頸部外 面二枚口腹縁による 3条沈線
152	37	32	表面採集	赤生土器 壺	-	[6.1]	[7.0]	-	やや 良	良	灰白色 10YR8/2 にぶい・黄褐色 10YR7/4	ケズリ ハケ	外面に帯状の黒斑 彫文
153	37	32	南壁第4層	赤生土器 壺	-	[13.0]	-	-	やや 密	良	にぶい・褐色 7.5YR7/4 褐色 5YR6/6	ハケ ハケ、ナデ	頸部に「ノ」字状 の刺突文、頸部外 面に黒斑
154	37	32	トレンチ	赤生土器 壺	-	[10.7]	6.2	-	やや 密	良	にぶい・黄褐色 10YR5/3 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハケ 不定方向のナデ	外底面板目直痕

第6表 1地区出土土器観察一覧表(6)

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考	
						口径 (復元)	器高 [残存]	底径 (復元)						
155	37	32	南西壁	赤生土器	台付鉢	15.6	15.8	9.1	粗	粗	暗灰色 N3/ 灰白色 2.5Y8/1	口縁部磨滅のため不明、胴部以下ヘラミガキ、脚台ナデ、胴部下平ヘラミガキか、脚部ヘラナズリ、外底面ナデ	内面黒煤	
156	37	32	表土除去	須恵器	杯蓋	-	[2.3]	-	密	良	青灰色 10BG6/1 青灰色 5BG6/1	回転ナデ 回転ナデ	口クロ回転：右回り	
157	37	32	表面採集	須恵器	杯身	-	[1.6]	(9.3)	密	良	灰白色 N7/1 灰白色 N7/1	内底面ナデ、体部立上り部回転ナデ 回転ナデ	口クロ回転：右回り	
158	37	32	黒色土除去	瓦	平瓦	長さ [7.5]	幅 [4.6]	厚さ 2.0	密	良	灰白色 10Y7/1 青灰色 5BG/1	ナデ 縹白タタキ		
159	37	32	表面採集	土師器	柱状高台杯	-	[3.6]	7.15	密	良	にふい黄褐色 10YR7/4 にふい黄褐色 10YR7/4	回転ナデか 回転ナデ	糸切り、摩滅顯著	
160	37	33	表面採集	土師器	柱状高台杯	-	[4.1]	8.4	密	良	にふい黄褐色 7.5YR7/4 にふい褐色 7.5YR7/4	磨滅のため不明 磨滅のため不明	中央部穿孔貫通、糸切りか、板目圧痕	
161	38	33	表土除去	白磁	椀	(16.8)	[3.7]	-	密	良	灰白色 10Y8/1 灰白色 10Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内面1条状磨、内外面無施釉	
162	38	33	表土除去	青白磁	介子蓋	(5.4)	1.7	-	密	良	灰白色 10YR8/1 灰白色 7.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデか	断面扇座形、外面施釉、口料部輪縁き取りにより露胎、内面無施釉	
163	38	33	遺構検出	灰輪陶器	瓶	-	[5.35]	(7.9)	密	良	灰黄色 2.5Y7/2 灰白色 2.5Y7/1 黄色：灰オリーブ色 5Y6/2	回転ココナデ 回転ココナデ、 外底面磨止ナデ	内面：無施釉、内底面自然磨、外面：幅1cm程度の縦方向の輪の縁き取り、外底面：無施釉	
164	38	33	南壁	土師器	皿	(6.2)	1.2	(5.7)	密	良	にふい黄褐色 10YR6/3 にふい黄褐色 10YR6/3	口縁部ココナデ、 内底面ナデ 口縁部ココナデ、 内底面ナデ	糸切り	
165	38	33	表面採集	土師器	皿	6.7	0.8	6.6	密	良	にふい黄褐色 7.5YR7/4 にふい褐色 7.5YR7/4	回転ナデか 回転ナデか、底部糸切り後外側を回転ヘラ切り		
166	38	33	表土除去	土師器	鍋	(27.2)	[4.65]	-	密	良	淡黄褐色 10YR8/4 褐色 5YR7/6	ナデ 口料部ココナデ、 口縁部強いナデ後指オサエ		
167	38	33	遺構検出	土師器	鍋	-	[5.85]	-	密	良	灰褐色 7.5YR4/2 にふい赤褐色 5YR5/3	丁寧なココナデ 丁寧なココナデ	外面煤付着、東周防型跡	
168	38	33	遺構検出	瓦質土器	鍋	-	[2.9]	-	や 粗	や 粗	青黒色 5BG2/1 青黒色 5BG2/1	口料部ココナデ、 口料部以下ナデ 口料部ココナデ、 口料部以下磨滅のため不明	口縁部顕く屈曲	
169	38	33	遺構検出	土師器	足鍋	-	[8.75]	-	や 密	や 密	-	-	指圧整形	外面煤付着
170	38	33	遺構検出	土製品	土錐	長さ 5.8	最大径 1.2	孔径 0.3	密	良	にふい黄褐色 7.5YR6/4 にふい褐色 7.5YR6/4	手製り後子捏ね	重さ 5.5g 穴状土錐、一部欠損	
171	38	33	表土除去	陶器	鉢	-	[5.9]	-	密	良	青灰色 5PB6/1 青灰色 5PB7/1	回転ナデ 口料部回転ナデ、 口縁部回転ナデ後指オサエ	内面8条の縦溝おろし目	
172	38	34	表土除去	陶器	鉢	-	[5.6]	-	密	良	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/1	ナデ ナデ	片口鉢、13C前～後半	
173	38	34	表面採集	瓦	丸瓦	長さ [4.7]	幅 [4.0]	厚さ 1.5	密	良	灰色 N6/1 灰白色 N7/1	ナデ	近世瓦	

第7表 1地区出土石器・石製品観察一覧表(1)

No.	種別	採取	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
					長さ [残存]	幅 [残存]	厚さ [残存]			
22	12	11	縄文土器出土集中地点	敲石	[10.7]	11.0	8.5	959	花崗岩	使用面は二面、下端に敲打痕が残る
23	12	11	縄文土器出土集中地点	敲石(磨石)	[11.7]	[9.8]	6.1	737	石英珪岩	正面磨削良好で、磨面がなめらかで平坦を呈する。各部分に敲打痕、磨削痕が残る
24	12	11	縄文土器出土集中地点	石錘	8.4	7.5	1.05	121.2	泥質片岩	打欠石錘、扁平な円錐の対向する両端を敲打により割削、裏面は自然割削面
25	12	11	縄文土器出土集中地点	石錘	8.45	8.6	1.35	90.5	石英珪岩	打欠石錘、上・下端に打ち欠けによる狭りを有する。磨面あり
75	19	20	縄文時代包含層	石錘	1.1	1.1	0.3	0.2	安山岩	凹基無茎式、縁辺に押圧割削による調整、磨面磨滅
76	19	20	縄文時代包含層	石錘	2.6	[1.7]	0.4	0.8	安山岩	凹基無茎式
77	19	20	縄文時代包含層	石錘	1.3	1.4	0.3	0.4	砂質片岩	平基に近い凹基無茎式、縁辺に押圧による調整割削あり
78	19	20	縄文時代包含層	石錘	[1.9]	1.7	0.4	1.1	安山岩	縁辺に押圧割削による調整あり
79	19	20	縄文時代包含層	石錘	[2.8]	2.1	0.5	3.2	安山岩	平基に近い凹基無茎式、未製品の可能性もある。金山産石材か
80	19	20	縄文時代包含層	二次加工のある割片	2.8	3.1	1.4	9.7	姫島産黒曜石	側縁の一部を加工
81	19	20	縄文時代包含層	二次加工のある割片	4.4	2.4	1.6	9.5	姫島産黒曜石	全体的に大雑把な敲打による調整、用途不明
82	19	20	縄文時代包含層	二次加工のある割片	4.9	2.85	2	18.6	姫島産黒曜石	縁辺に調整割削を施すが、大割面も残る
83	19	20	縄文時代包含層	二次加工のある割片	2.3	4.9	0.7	7.3	安山岩	横長割片、上端部若干加工
84	19	20	縄文時代包含層	割片	5.6	3.4	1.2	18.4	安山岩	一部、自然面残る。金山産石材か
85	19	20	縄文時代包含層	削器	6.3	3.6	1.0	17.1	姫島産黒曜石	横長割片に加工されている
86	19	20	縄文時代包含層	削器	[6.55]	[3.8]	8.5	17.9	安山岩	横長割片を素材とし、下端部に傾角度の連続する調整加工を施す
87	19	20	縄文時代包含層	削器	8.4	4.1	1.2	34.5	安山岩	横長割片を素材とする。両側縁を丁寧に加工。一面目に自然面を残す。金山産石材か
88	19	21	縄文時代包含層	石核	4.5	4.0	1.7	21.0	姫島産黒曜石	下端付近に自然面若干残る
89	19	21	縄文時代包含層	割片石核	4.6	2.5	1.8	21.5	安山岩	自然面残る。金山産石材か
90	19	21	縄文時代包含層	石核	2.9	3.6	3.65	26.8	姫島産黒曜石	
91	19	21	縄文時代包含層	石核	2.3	3.4	3.7	16.0	黒曜石	残骸か、割片の測り取り跡あり
92	20	21	縄文時代包含層	石 芥 未 製 品	21.4	11.2	8.6	2570	安山岩か	長角錐の縁辺を割削、敲打により成形する。素材面が多く残る。上端から約1/3に狭りを造出する
93	20	22	縄文時代包含層	石 芥 片	[5.3]	2.1	2.2	14.1	蛇紋岩	局部磨削。先端若干欠損。割削面あり、側縁は敲打による刃痕を施す。未成品の可能性も有り
94	20	22	縄文時代包含層	石 芥 片	[5.5]	6.4	1.5	45.7	安山岩か	敲打による両側縁加工
95	20	22	縄文時代包含層	石錘	[4.2]	5.8	1.5	35.4	安山岩	片面のみ打ち欠き
96	20	22	縄文時代包含層	石錘	[6.75]	6.25	1.1	41.6	砂質片岩か	打欠石錘、表面一部割削
97	20	22	縄文時代包含層	石錘	7.6	5.9	1.85	99.2	石英珪岩	扁平な円錐の長軸内端部を敲打による打欠石錘、両面とも狭い割打により扇状に割削する
98	20	22	縄文時代包含層	石錘	12.55	6.25	1.4	99.9	砂質片岩	扁平な円錐の長軸内端部を敲打による打欠石錘、正面右側縁上部にも割削痕が残る
99	21	22	縄文時代包含層	石錘	3.6	2.75	1.6	24.2	砂質片岩	小型の有溝石錘、扁平な小円錐を素材とする。長軸方向に扇状で浅い溝を有する
100	21	22	縄文時代包含層	凹石(敲石)	[14.9]	9.8	6.5	1213	花崗閃緑岩	長円錐を素材とし、正面中央付近に凹部、両側面、下面に敲打痕を残す
101	21	22	縄文時代包含層	磨石(敲石)	11.6	7.6	5.55	761	花崗岩	長円錐の長軸方向対向する両端を敲打面とする。正面中央部を磨面とする磨石を兼備
102	21	22	縄文時代包含層	敲石(磨石)	[6.2]	9.5	5.5	397	花崗岩	下端面に敲打痕が残る
121	25	35	弥生時代包含層	石皿	18	31.9	8.4	4500	安山岩か	使用面は1面、敲打痕あり。弥生時代か
141	35	31	SP161	砥石	9.9	3.9	2.5	151.1	泥岩	研砥面は4面
142	35	31	SK 1	砥石	[7.9]	[6.3]	1.65	81.7	砂質片岩	研砥面は2面
174	38	34	遺構検出	石錘	2.4	1.75	0.4	1.4	安山岩	凹基無茎式、未製品か
175	38	34	遺構検出	石錘	[1.9]	1.6	0.5	0.7	安山岩	凹基無茎式、押圧割削による調整あり。金山産石材か
176	38	34	遺構検出	石錘	[1.3]	0.4	0.3	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式、押圧割削による細かな調整あり
177	38	34	表面採集	石錘	2.1	1.5	0.5	1.0	安山岩	平基無茎式、定形、押圧割削による調整

第8表 1地区出土石器・石製品観察一覧(2)

No.	排回	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
					長さ [残存]	幅 [残存]	厚さ [残存]			
178	38	34	トレンチ2	削器	5.15	6.05	1.1	39.3	安山岩	横長割片素材の下縁部正面に裏面側から丁寧な調整加工を施す
179	38	34	南壁	石斧	[11.3]	6.6	5.0	742	安山岩	大型船刃。未製品か、器面に敲打痕、擦痕が多数残る。磨滅有り
180	38	34	表面採集	打製石斧	[9.6]	7.1	2.05	210	安山岩	扁平な短冊形。上半部のみ

第9表 1地区出土鉄製品観察一覧表

No.	排回	図版	出土場所	類別	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考
						長さ [残存]	幅 [残存]	厚さ [残存]		
143	36	31	SK 4	鉄器	鉄釘	5.4	0.7	0.65	7.7	角釘、頭部をわずかに折り曲げる。錆化。
144	36	31	SP140	鉄器	鉄釘	[4.2]	0.7	0.6	[3.7]	角釘、頭部を折り曲げる。先端は欠損。錆化。
145	36	31	SP 1	鉄器	不明品	[12.7]	2.9	1.0	[58.0]	体部弧状に湾曲。刃部の造出はない。鍛造品。錆化
146	36	31	SP 4	銅滓	鉄滓	4.35	3.1	2.5	27.1	全体に錆化
147	36	31	SP186	銅滓	鉄滓か	3.5	5.3	2.1	26.7	錆化。錆剥れを伴う板状片の可能性もある。

2 2地区

(1) 概要

2地区は640mを対象とし、調査を実施した(第39図)。範囲は高低差のある2枚の農地で、低位の田が調査の中心である。丘陵側の高位の畑地は、全面掘削でなくトレンチ調査としたので、この部分は「2地区上段トレンチ」と呼称する。なお遺物の出土位置を記載する場合、2つのトレンチ(北トレンチ、南トレンチ)及びその土層観察用土手の位置を基に、調査区を3つの範囲に分けることとする。北トレンチ土手以北(以下「北トレ以北」)、南トレンチ土手以南(以下「南トレ以南」)、両者の間の範囲を北トレンチ土手～南トレンチ土手間(以下「北トレ～南トレ間」と表記した。

調査では、縄文時代晩期とみられるドングリ類貯蔵用の土坑(SK1～9)、弥生時代の杭列や矢板列による畦状遺構、溝状遺構(SD1、2)、加工板材を集積したとみられる遺構(SX1)および弥生土器を大量に含む遺物包含層が確認された。

出土遺物は、SK内および縄文時代遺構面及び包含層から、晩期とみられる縄文土器が出土した。最も出土量が多いのが弥生時代遺物である。畦状遺構周辺からは弥生時代後期を主体とする土器群が良好な状態で出土した。また杭列、矢板列が検出され、これを構成する木製品やその他の木器について残存状況の良い84点を本報告に掲載する。人頭大程の大礫や中礫を多く含む砂礫層(集石層と呼称)からは、弥生時代中期から古墳時代初頭までの土器が多く出土した。

(2) 基本層序

2地区の堆積層序は、調査区南壁、南北方向の調査区西壁、東西方向の北壁、北トレンチ土手、南トレンチ土手及びサブトレンチ、2地区上段トレンチの土層観察(第40～42図)により判断した。

2地区は丘陵東側の谷部に位置することから、丘陵及び谷からの土砂堆積による砂礫層、砂質土、シルト層が幾層にわたって確認され、丘陵由来の地山は検出されなかった。今回の調査で最も下位の遺構面は、にぶい黄色中砂～灰色砂質土層で縄文時代のSK群の基盤層にあたる。これより以下は、北トレ～南トレ土手間のサブトレンチで検出された砂礫層と湿地堆積と示すシルト質層が互層をなし、木質を含む。SK遺構面下の25層中から検出された自然木382(南トレ以南)は、年代測定によって3569～3466calBPの結果が得られた。

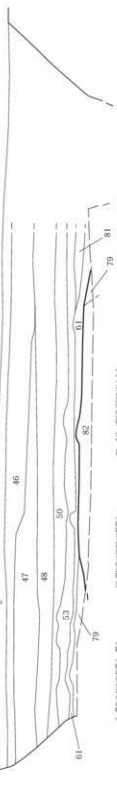
弥生時代の遺構が検出された面は、E⁺-E土層において縄文時代遺構面と上層にあたる111層相当であり、SD1が掘りこまれている。しかしながらこの層は薄いため、北側では縄文時代SKと同一面での検出となった。南端部ではこれに相当する遺構面が杭列やSX1が確認されている。弥生期遺構面は基本的に谷や丘陵部からの流出物による堆積で、安定した砂礫層である。これらは北側(才賀川側)へと傾斜するが、調査区北側では才賀川による河川堆積による砂礫層が互層に堆積する。この傾斜面に湿地堆積とみられる粘質シルト層が堆積している。この湿地層との境に杭列、矢板列による畦状遺構が検出され、これに伴う部分的な整地や粘土、シルト層が不規則に堆積する。

弥生期遺構群の上には遺物包含層が堆積し、大きく2つに分層できる。このうち人頭大の大型の礫をはじめとする大小様々な角礫、亜角礫、円礫を含んだ包含層(「集石層」と呼称)が、北トレ土手より南側で堆積する。堆積層のうち最も遺物を含んでおり、2地区の層序を把握するための、鍵層となるものである。この層の一部は2地区上段トレンチからも地表下1.3mで確認されており、層が堆積



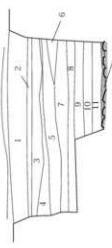
第39図 2地区遺構配置図

16.20m
C



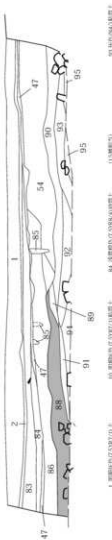
- 2 黄土层(2.3341)层上
- 46 黄土层(2.3341)层上
- 47 黄土层(2.3341)层上
- 48 黄土层(2.3341)层上
- 50 黄土层(2.3341)层上
- 53 黄土层(2.3341)层上
- 54 黄土层(2.3341)层上
- 61 黄土层(2.3341)层上
- 79 黄土层(2.3341)层上
- 81 黄土层(2.3341)层上

18.00m
G



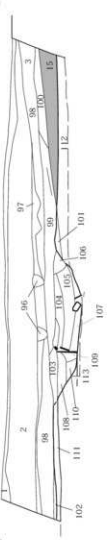
- 1 黄土层(2.3341)层上
- 2 黄土层(2.3341)层上
- 3 黄土层(2.3341)层上
- 4 黄土层(2.3341)层上
- 5 黄土层(2.3341)层上
- 6 黄土层(2.3341)层上
- 7 黄土层(2.3341)层上
- 10 黄土层(2.3341)层上
- 12 黄土层(2.3341)层上

16.20m
D



- 47 黄土层(2.3341)层上
- 83 黄土层(2.3341)层上
- 84 黄土层(2.3341)层上
- 85 黄土层(2.3341)层上
- 88 黄土层(2.3341)层上
- 89 黄土层(2.3341)层上
- 91 黄土层(2.3341)层上
- 92 黄土层(2.3341)层上
- 93 黄土层(2.3341)层上
- 94 黄土层(2.3341)层上
- 95 黄土层(2.3341)层上

16.20m
E



- 96 黄土层(2.3341)层上
- 97 黄土层(2.3341)层上
- 98 黄土层(2.3341)层上
- 99 黄土层(2.3341)层上
- 100 黄土层(2.3341)层上
- 101 黄土层(2.3341)层上
- 102 黄土层(2.3341)层上
- 103 黄土层(2.3341)层上
- 104 黄土层(2.3341)层上
- 105 黄土层(2.3341)层上
- 106 黄土层(2.3341)层上
- 107 黄土层(2.3341)层上
- 108 黄土层(2.3341)层上
- 109 黄土层(2.3341)层上
- 110 黄土层(2.3341)层上
- 111 黄土层(2.3341)层上
- 112 黄土层(2.3341)层上
- 113 黄土层(2.3341)层上
- 114 黄土层(2.3341)层上
- 115 黄土层(2.3341)层上

15.40m
F



- 112 黄土层(2.3341)层上
- 113 黄土层(2.3341)层上
- 114 黄土层(2.3341)层上



第42图 2地区土层图(3)

する範囲からして、西側丘陵からの流入によるものと考えられる。これによりその堆積範囲は弥生時代のみならず縄文時代の遺構も攪乱を受けた可能性がある。

これらの弥生時代包含層の上には、整地層があり、集石層より新しい古代、中世の遺物を包含している。その後は上位には何度かの整地と農地化を繰り返して、現地形になったとみられる。

以上、基本層序をまとめると、1 耕土、2 盤土、3 旧ほ場の耕土、盤土、整地土、4 古代中世包含層（整地層）、5 集石層をはじめとする砂礫からなる弥生時代遺物包含層、6 弥生時代遺構面、7 縄文時代遺構面を含む堆積層となる。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

SK 1～9 (第43～45図 図版35～39)

北トレ～南トレ間の東側に土坑9基が確認された。縄文時代晩期の土器小片が出土したことから、この時期に属するものとみられる。9基は重複することなく位置する。谷部堆積層を掘り込んで内部は湿潤であることから、自然遺物の遺存状況が良く、量の差があるもののいずれの土坑からもドングリ類が出土したことから、貯蔵用土坑と考えられる。このうちSK1、SK2、SK5、SK8は、出土したドングリ類の同定分析を行い、イチイガシが主体であることが明らかとなった(第IV章参照)。他のSKからも少量のドングリが出土するが、同じ傾向とみてよい。

SK1は、土坑群の最も南側に位置する。南西～北東に流れる弥生時代の溝状遺構SD1と重複している。規模は長径170cm、短径137cmの長円形で、深さは35cmである。イチイガシのほかツブラジイ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシが少量混じる。北東側にはイチジク属の木373があり、周囲に樹根があることから、ここに樹立していたものがSK1側に倒壊した可能性がある。なおこのイチジク属木は



第43図 2地区SK位置図

放射性年代測定で3163～2969calBPという結果を得ている。

SK2は、長径180cm、短径143cmの隅丸長方形で、深さ30cmである。SK5とともに弥生時代のSD2が重複している。SKのうちドングリ類が最も多く出土し、そのほとんどがイチイガシを占め、ツブラジイ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、スダジイが少量混じる。ドングリ類とともに礫や木片がまとまって出土し、このうち木(372)はアカガシで、先端部が炭化し(図版62)、杭の可能性がある。木(374)はエノキ属である。深鉢口縁部(181)が出土した。

SK3は長径137cm、短径119cmの長円形で、東側で深さ38cmである。上面には弥生土器を多く含む砂礫層(集石層)が流入しており、これにより削平されたとみられ、残存する深さは17cmである。ドングリ類は底面上に堆積した5層から木、葉とともに出土した。内部からは板状の木杭208他1本が出土した。掘方検出時にすでにその存在が確認され、SD1の方向と一致すること、形状も2地区弥生時代出土の杭に類似することから、弥生時代遺構面から打ち込まれたものと判断される。

SK4は、長径101cm、短径88cmの長円形で、深さ34cmを測る。南西側には長さ12cmの張り出し部があり、深さ11cmである。ドングリ類は葉などの有機物とともに3層を中心として出土した。

SK5は、調査区東端で1/2を検出し、規模は長径168cm、残存する短径は119cmの隅丸長方形とみられる。深さ45cmである。ドングリ類は4、5層から木、葉などの有機物とともに出土した。イチイガシが主体で、ツブラジイのほか、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ少量混じる。内部からは、先端部に伐採痕が認められる、サクラ属の木(187)が出土した。状況から坑内に先端部を東にして倒れこんだものと考えられる。

SK6は、東西径90cm、南北径95cmを測る円形の土坑で、深さは45cmである。北側に21cm、深さ8cmの張り出し部を設けている。4層からは円礫や自然木とともにドングリ類が出土した。木(375)はクスノキの可能性ある。1、2層は灰色粘土が堆積していることから、粘土で土坑を最終的に覆った可能性がある。深鉢胴部(182)が出土した。

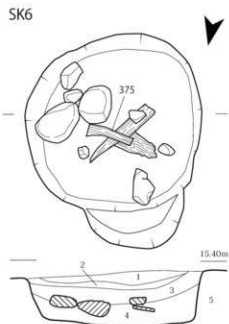
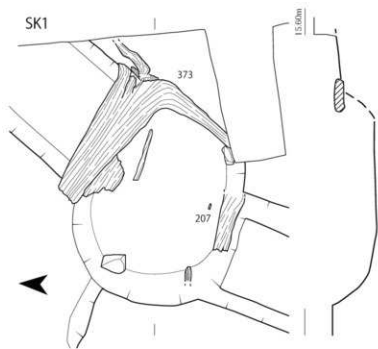
SK7は、長径156cm、短径140cmの長円形で、深さ33cmである。ドングリ類は5、6層の葉や枝を含む腐葉土状の堆積層から出土した。底面からは出土した自然木(376)はアカガシ属である。土層観察では上位に粘土が堆積しており、粘土で最終的に覆った可能性がある。深鉢胴部(183)が出土した。

SK8は、調査区東端で土坑の1/2を検出した。長径189cm、残存する短径は107cmの長円形で、深さは55cmである。ドングリ類とともに木片及び葉、枝類が腐葉土状の4、5層に認められる。自然木(377)はアカガシ属で約110cmを測る。ドングリ類はイチイガシが主体で、アカガシ、コナラ属が少量混じる。土層観察では、土坑上面にはオリーブ灰色粘土8cmの厚さで堆積しており、土坑全体を最終的に粘土で意図的に覆った可能性がある。深鉢胴部片(184)、(185)が出土した。

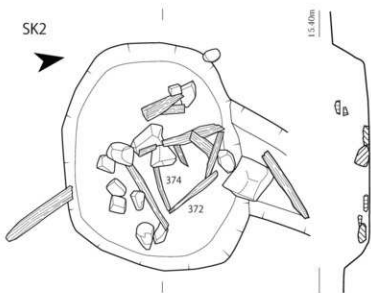
SK9は、土坑群の最も北側に位置する。長径176cm、短径142cmの長円形で、深さ26cmである。北側に26cmの張り出し部があり、この深さは9cmである。土坑内に南側から倒れこむように約140cmの自然木(378 アカガシ亜属)が検出された。ドングリ類は葉や枝を含む3層を主体に出土した。埋土から深鉢胴部片(186)が出土した。

SK出土遺物(第46・47図 図版51)

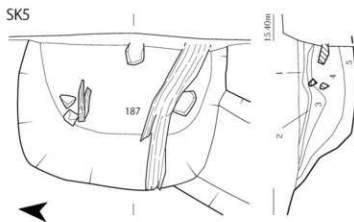
SK出土の土器は181～186の6点である。181は粗製深鉢の口縁部である。端部は平坦で外面二



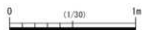
- SK6
- 1 灰色 (7.5Y6/1) 粘土
 - 2 灰色 (N5) 粘土
 - 3 オリーブ灰色 (5GY6/1) 中砂
～ 灰色 (N5/1) 粗砂
 - 4 灰色 (10YR5/1) 粗砂 フングリ含
 - 5 オリーブ灰色 (2.5GY) 砂礫



- SK4
- 1 灰色粗砂 N6/
 - 2 黒褐色粘質粗砂 2.5Y3/1
 - 3 オリーブ黒色粘質粗砂 (有機質含) 5Y3/1
 - 4 褐色粘質土 10YR4/1
 - 5 灰色粗砂 7.5Y6/1

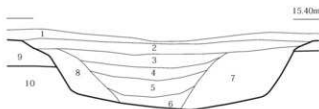
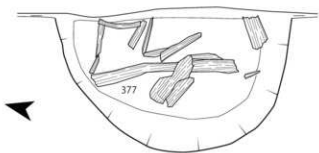


- SK5
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 中砂粘質
 - 2 土灰・黄褐色 (10YR5/3) 粗砂
 - 3 褐色 (10YR1/4) 粘質土 木片含
 - 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト 木片・炭・フングリ含
 - 5 黒色 (10YR2/1) 粗砂 木片・炭・フングリ含



第44図 2地区SK実測図(1)

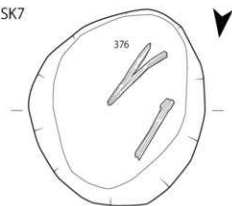
SK8



SK8

- 1 赤生粗砂層
- 2 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘土
- 3 灰色 (N5/1) 粘質土
- 4 灰色 (N6/1) シルト 腐葉土・フングリ含
- 5 灰色 (10Y4/1) シルト質粗砂 腐葉土・フングリ含
- 6 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 7 灰色 (5Y6/1) 細砂～中砂
- 8 灰色 (5Y6/1) 中砂
- 9 オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂礫土
- 10 灰色 (5Y6/1)～緑灰色 (10G6/1) 粗砂

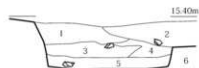
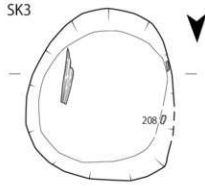
SK7



SK7

- 1 灰色 (N6 1/6) 砂質土 細砂含
- 2 灰色 (N6 1/4) 砂質土 礫含
- 3 暗灰色 (N 1/3) 粘質土
- 4 黒褐色 (10YR1/3) 細砂
- 5 黒色 (10YR2/1) 粘質土 有機質・フングリ含
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂

SK3

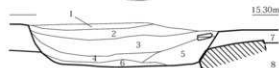
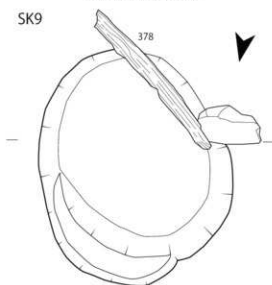


SK3

- 1 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 砂礫 赤生砂礫層
- 2 灰色 (N6/1) 細砂 木質あり
- 3 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質細砂
- 4 灰色 (N6/1) 粘質 粗砂含
- 5 暗灰色 (10YR4/1) 粘質砂 木・葉・フングリ含
- 6 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂礫層



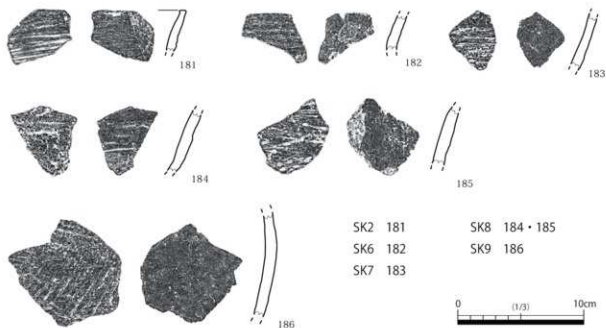
SK9



SK9

- 1 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 3 オリーブ黒 (5Y3/1) 砂質土 腐葉土 フングリ
- 4 灰色 (5Y5/1) 細砂
- 5 灰白色 (5Y7/2) 細砂
- 6 灰オリーブ (5Y6/2) 細砂
- 7 オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂礫土
- 8 灰色 (5Y6/1) 砂礫土～緑灰色 (5G6/1) 粗砂

第45図 2地区SK実測図(2)



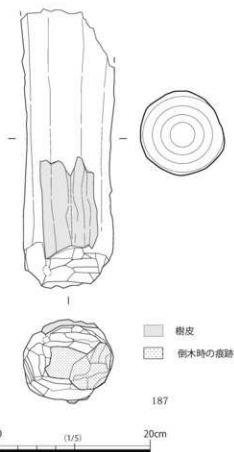
第46図 2地区出土遺物実測図(1)

枚貝条痕、内面巻貝によるナデ調整か。182～186は粗製深鉢の胴部片である。182はくびれ部で、186は丸みがあることから、胴部最大径にあたる部位とみられる。調整は外面が貝殻による条痕で、内面は183がミガキ調整、他はナデ調整である。条痕は186は斜め方向に施し、他は横方向である。184の内面には粘土帯の接合痕が残る。

187はSK5から出土した、伐採痕のあるサクラ属木である。出土した時点では約120cmの長さがあったが、今回はその基部のみを図化して掲載した。径12cmで周囲には樹皮が残存していた。伐採痕からみて基本的に三方向から芯部に近いところまで打ち込みがなされている。それ以外は明確な打割の痕跡ではないので、打ち込み後の倒木した際の痕跡とみられる。

遺構に伴わない遺物(第48図 図版51・52)

縄文時代の遺構は前述の土坑のみであるが、それ以外に遺構に伴わない縄文土器がある。2地区全体に分布するものの、北トレ～南トレ間、南トレ以南の範囲、つまりSK周辺部から南側での出土数が多い。出土層位は、北トレ～南トレ間においては弥生時代集石層の下、つまりSK群の遺構而上にあたる。また南トレ以



第47図 2地区出土遺物実測図(2)

南でもこれに相当する層から出土したとみてよい。

北トレ～南トレ間からは188～194が出土した。188・189は大きく開く精製浅鉢で、188は口縁部、189は屈曲部である。内外面丁寧なミガキ調整を施す。190・191は短く外反する浅鉢で、190は摩滅し、191は内外面ナデ調整である。192～193は粗製深鉢である。192は外傾して端部を丸くおさめる口縁部で、外面に2条の沈線文がみられる。調整は外面に条痕が残り、内面は丁寧なナデである。193は胴部の屈曲部にあたり、外面は条痕で、内面はナデ調整である。194は直立気味の口縁部で端部を欠損する。外面は条痕で、内面はミガキ調整か。

北トレ以北は195・196が出土した。195は精製浅鉢の口縁部で、内外面ミガキ調整を施す。196は粗製深鉢で、外反して開き端部は丸くおさめる。外面条痕、内面ナデ調整である。

南トレ以南は197～205が出土した。197は粗製深鉢の口縁部から胴部にかけてである。胴部の屈曲部から緩やかに外反して立ち上がる口縁部で、端部は欠損する。調整は外面が貝殻による条痕調整である。内面はミガキ又は丁寧なナデ調整を行う。198～202は粗製深鉢の外傾する口縁部である。198・199は端部を丸くおさめ、200～202は面を持つ。外面貝殻条痕で、内面はミガキ又はナデ調整である。201の外面には、条痕後に複数条の沈線文を施す。203は粗製深鉢の屈曲部で、内面に炭化物が付着する。204・205は精製浅鉢で、204は屈曲部から短く開いて立ち上がり、205は大きく開く薄い口縁部である。204はナデ調整、205はミガキ調整である。

(4) 弥生時代の遺構と遺物

SD1・2 (第49図 図版35)

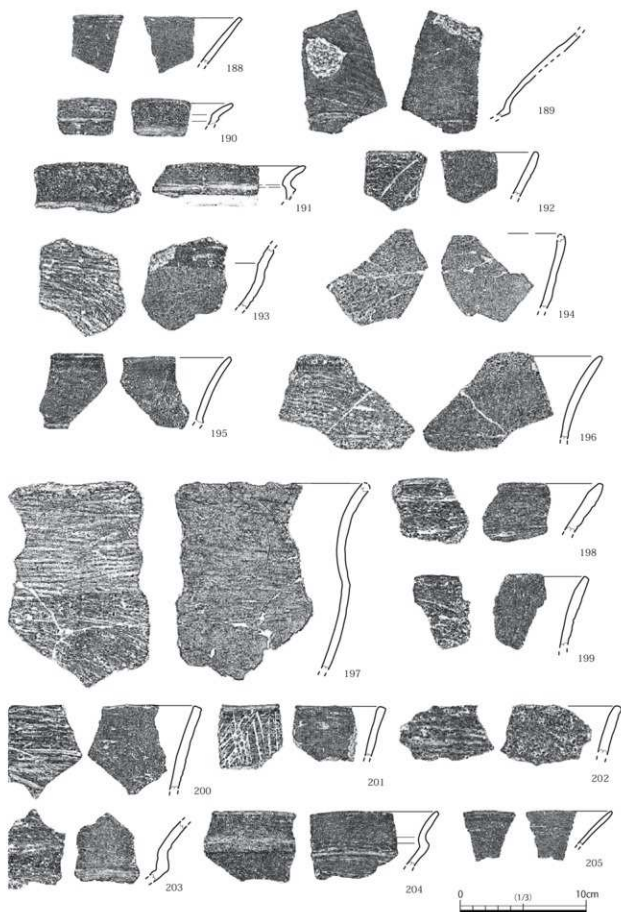
溝状遺構は、北トレ～南トレ間において検出された。層序では集石層等の包含層の下面が遺構面となり、SK群の遺構面はそれより下となる。なお南トレ土手で確認された弥生、縄文遺構面の間層は薄く、SK群あたりでは同一遺構面となってしまう。当初はSKとSDは同時期の遺構とみていたが、SD埋土から弥生土器片および分銅形土製品(206)が出土したことから弥生時代の遺構と判断した。SDは2条検出され東側がSD1、西側がSD2である。いずれも北トレ～南トレ間のみで検出され、これより南側では確認されていない。流路の方向は南から北東の低位に向かっており、弥生時代集石層の東側に沿うように位置する。南トレ以南ではSDの延長線上にいくつかの杭が存在し、さらに南端部には後述する加工板材を有する遺構があることから、ここまで続いていたことも考慮される。

SD1は長さ約9.5m、幅2.1m、深さ33cmである。弥生土器小片および分銅形土製品(206)、および南トレ土手付近でいくつかの木片とともに板材(207)が出土した。SD2はSD1の西側に平行して位置する。残存する長さは約1.7mで、本来はSD1同様南西に伸びていた可能性がある。幅は90cm、深さ12cmである。出土遺物は確認できなかった。なおSKの頁で述べた通り、流路方向、出土状態からSK内で出土した杭(207、208)はSDに伴うものと判断し、この頁で記載する。

SD出土遺物

土製品(第50図 図版53)

206は分銅形土製品である。線刻による顔表現があることから、上半部と判断した。上半部の左側面と下半部を欠損している。上半部の形状は、剣込部の幅より上端面のほうが短くなる隅丸台形である。上面部には線刻による文様があり、細線で判断しにくい。線にそって櫛描きによる2重線で輪郭とし、



北トレ～南トレ間 188～194

北トレ以北 195・196

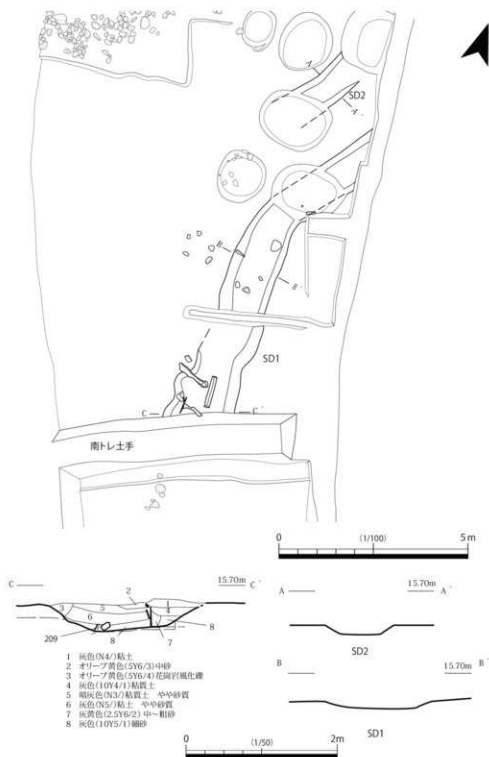
南トレ以南 197～205

第48図 2地区出土遺物実測図(3)

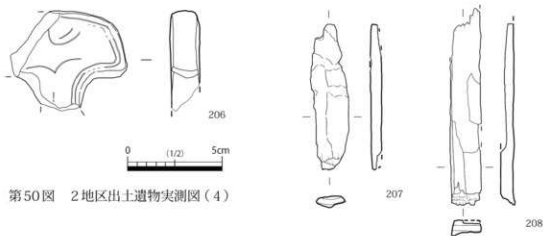
その中に弧線を進めて目の表現をしている。その上方にも弧線を重ねているが、何の表現であるかは判断しかねる。なお上半部に懸垂用の穿孔は認められない。

木製品（第209図 図版68）

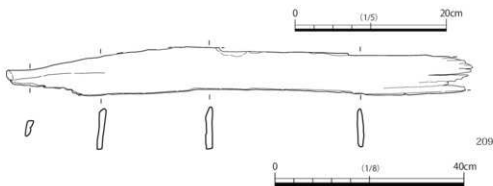
207はSK1、208はSK3内から出土した杭であるが、前述のとおりそれぞれSD1、SD2に属するものとして掲載する。209はSD1南トレス層断面から出土した。207は長さ19.2cm、幅4.7cm、厚さ1.5cm、208は長さ26cm、幅3.9cm、厚さ2.0cmで、いずれも板状の柵目材を使用している。杭とし



第49図 2地区SD実測図



第50図 2地区出土遺物実測図(4)



第51図 2地区出土遺物実測図(5)

て先端部を尖頭化させる加工は行っていない。209は南トレ土手のSD1埋土内から出土した。長さ98.8cm、幅8.8cm、厚さ1.5cmの板材である。

杭列・矢板列・畦状遺構(第52～54図 図版40～46)

2地区の北側では、基盤となるオリブ灰色粗砂層が才賀川へと傾斜し、土質も谷由来の大礫、中礫を含む砂礫層から、河川の氾濫に伴う粗砂層や、シルト層を主体とする湿地堆積へと変化していく。この境に東西約6mにわたり段差があり、杭列、土器群等が確認された。当初は完形に近い壺などの土器群とともに木片が掘り出され、その後周辺に杭が分布することがわかり、杭列に注視して遺構検出を進めた結果、東西の杭列、矢板列を確認するに至った(図版46)。これらの木製品は、腐食等により遺物自体の残存状況が悪く痕跡のみのものもあったが、これらの位置も可能な限り記録したのが第52図で、本報告に掲載した土器及び木製品の出土位置と遺物番号を記載したのが、第53、54図である。またこの範囲の土層断面を記載し、堆積層を土質等で区分したものを第52図に示した。

杭列は大別して4つのグループからなる。東西方向に3列、やや弧を描くように配置されている杭列を、南から第1杭列、第2杭列、第3杭列と呼称する。これに対し南北杭列は、第1杭列の北側に南北方向に配置される。これらの杭列群は、土層観察用の土手より東側では残存状況が悪く、明確な列を把握できなかった。

第1杭列は、最も南で基盤層が北へ傾斜する変換点に、長さ2.5m、30～40cmの間隔で杭を設置する。杭列には長さ1.4mの自然木(380 クスノキか)を横に掛けるような状態で出土した。

第2杭列は、西側に向かってわずかに外反した方向で、調査区外まで続くと思われる。検出された

長さが3.1mで、30～35cmの間隔で設置している。なお310と311との間は約90cmの距離があり空間となっている。西壁には310に続くと思われる杭が確認された。

第3杭列は、第2杭列の北側に、40～70cmの距離を置いて並列する。杭間は30～40cmで西側土手まで続いている。西半は等間隔であるが、東半は重複するように不規則に設置する傾向がある。

南北杭列は第1～3杭列とは方向、距離が異なる杭列である。第1杭列の西側で直交するような位置に約1.2mの長さがあり、15～25cmの距離をおいて設置される。杭列のうち、321、322はそれぞれ土器269、254に打ち込んだ状態で出土した(図版44)ことから、構築時期を示す資料である。他の杭列が北側の湿地に対して等高線に沿った形で配置されているのに対し、長さや方向に違いがあり、異なる役割があったとみられる。

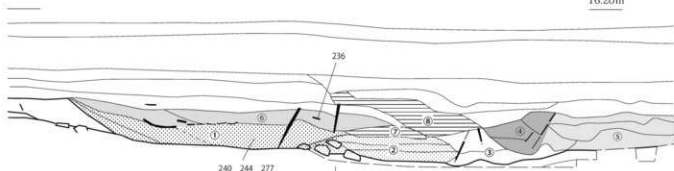
南矢板列は第3杭列の北に50～90cmの距離をおいて同じ弧を描いて設置されている。上面の検出時における矢板の幅は20～35cmで、隣接する側辺同士を少し重ねるように打ち込んでいる。矢板の表面観察から30cmは地表面に露出していたことがうかがえる。矢板列の北側には場所によって杭もあることから、裏側を部分的に補強したとみられる。

北矢板列は南矢板列と60～70cmの距離をおいて設置される。矢板の規模や設置状況は南矢板列と同様であり、ほぼ同時期の構築とみてよい。背後の補強のための杭は、南矢板列よりも本数が多く、10～20cmの間隔で配置されている。東端は杭のみしか検出されなかったが、杭の配置から腐食等により残存しなかったとみられ、本来は南矢板列と同じ範囲まで存在したと考える。また列の中には矢板と背後の杭に接して2.5mにわたって横木(379 サカキカ)が置かれていた。

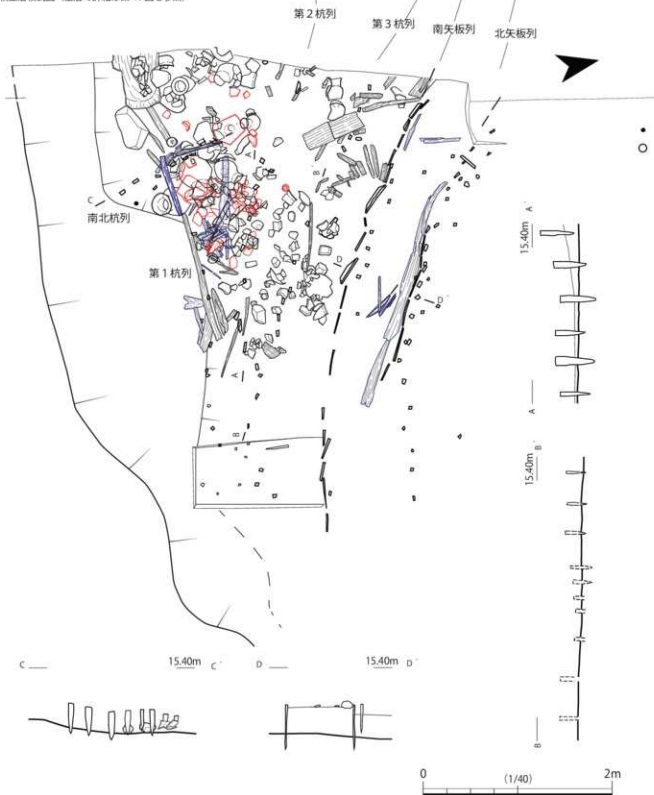
この二つの矢板列について、本来矢板は土留めの目的で構築されることから、この矢板列に挟まれた間が畦状遺構であるとみられる。第52図土層断面からもこの間に灰オリブ色系の粘土を充填している(④層)ことから判断できる。なおこの埋土は、東半では徐々に砂質へと変わっていく。畦状遺構の残存状況に伴い、表層が流出し下層の砂質土が露出したためとみられる。この畦状遺構内部からは弥生土器253・263が出土した。

杭列に伴う土器群は、南側の傾斜面から畦状遺構にかけて出土し、湿地層ではほとんど出土しない。特に集中する南北杭列～第2杭列周辺の範囲には完形品もあり、重なり合うように出土した。位置的に傾斜面上端から廃棄されたことを示している。これらの土器群の多くは①の砂礫層内に含まれるもので230、239、220等は集積された土器の上位にあり、検出状況から、上半が露出した状態で上層の③層が堆積したことが窺える。この①層と⑥層の間には木片が多くあり、割りこみのある大型木製品381が222・252・261などの上に検出された。出土した土器群は、中期後半の垂下口縁壺から後期の複合口縁壺まであり、時期に幅がある。出土状況から底面には中期土器が、上位には後期土器が位置する傾向があるが、両者を明確に分層し、抽出することはできなかった。

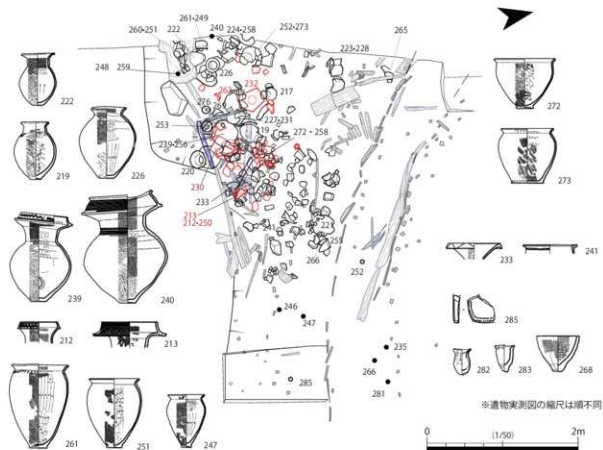
遺構の構築について土層観察から判断すると、傾斜面に土器を含む①の下位及び②層が順次堆積し、その後③層を基盤として南・北矢板列が設置され、その列間に④層を充填して畦状遺構が構築された。これにより北側の湿地層を畦状遺構で区画している。杭列も方向等が同じであることから、相前後して打ち込まれたと考えられる。杭列の設置に伴い①層の上位に多くの土器が傾斜面から廃棄されるが、部分的に⑦層で整地を行っている。⑦層は弥生土器小片を多く含む固くしまった黄褐色土であること



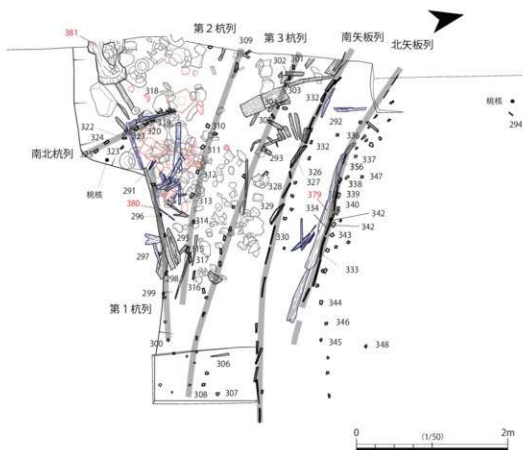
堆積土層模式図（土層の詳細は第41図を参照）



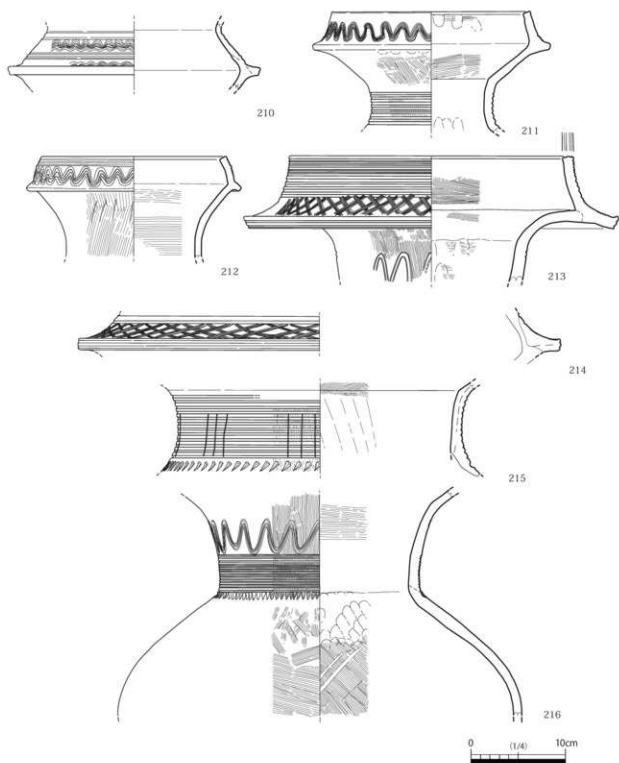
第52図 2地区杭列・畦状遺構及び遺物出土状況実測図



第53図 土器出土位置図



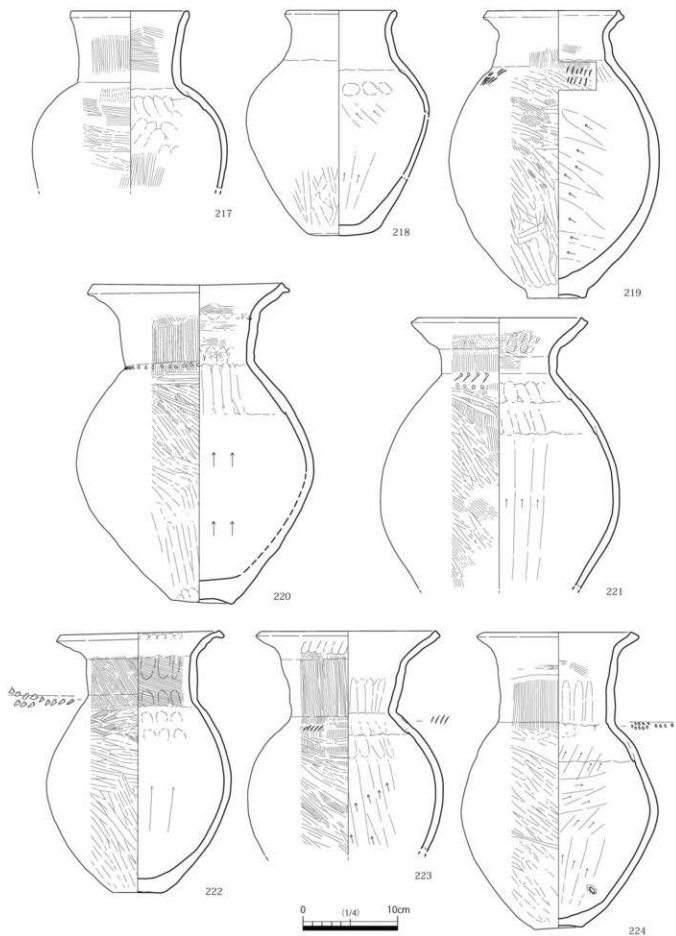
第54図 木器・木製品出土位置図



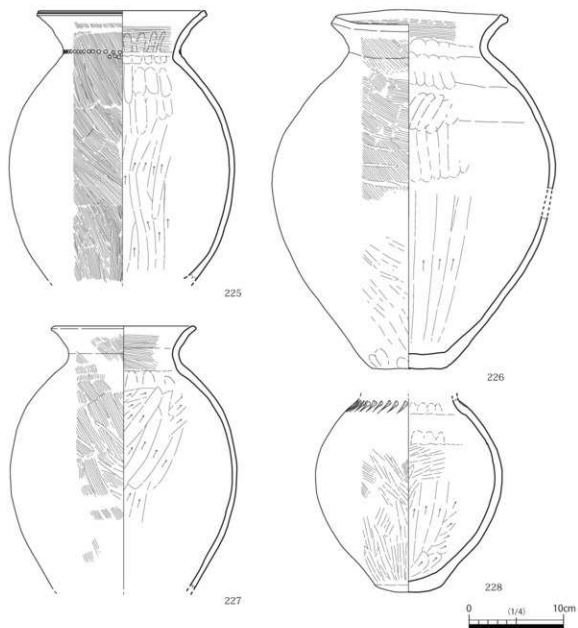
第55図 2地区出土遺物実測図(6)

から、遺物包含層土を用いている。その後畦状遺構の南側も⑥層の堆積から、湿地状態になったとみられる。なお第2杭跡と第3杭跡の間は⑦、⑧層の整地土があることから、畦状遺構として捉えることもできるが、限られた範囲での整地であることから、検討を要する。

出土物には、ミニチュア土器(281～284)や分銅形土製品、穿孔土器(224、239)など祭祀性の強いものや完形品もみられることから、湿地との境に杭列、畦状遺構の構築とあいまって、なんらかの祭祀や、土器廃棄が行われたとみられる。時期幅があり、重なり合う出土状態から、繰り返し行為が行われたとみられる。



第56图 2地区出土遗物实测图(7)



第57図 2地区出土遺物実測図(8)

なお畦状遺構より北側の湿地堆積に水田の可能性を考慮したが、明確な畦畔遺構は確認されず、土壌分析(第IV章参照)でも水田を積極的に裏付ける資料は得られなかった。

出土遺物(第55～76 図版53～67)

杭列、矢板列、畦状遺構に関連する出土遺物は、中期から後期の弥生土器、石器(石鏃、磨石、敲石)、木器・木製品(用途不明木器、杭、矢板)である。また自然遺物として、木片、種子(モモ)が出土した。

土器・土製品(第55～68図 図版53～61)

210～216は複合口縁壺の口縁部である。210は複合口縁の箍状部から立ち上がり部は内傾した後、端部は外方に短く屈曲する。文様帯には、3条の凹線、4条櫛描き波状文の組み合わせを2回繰り返す。調整はナデを行う。211は7条の沈線を有する頸部から大きく開いて口縁部に至る。立ち上がり部は内傾し、4条単位の櫛描き波状文を施す。調整は、外面はハケ目が残り、内面はハケ目、ナデを

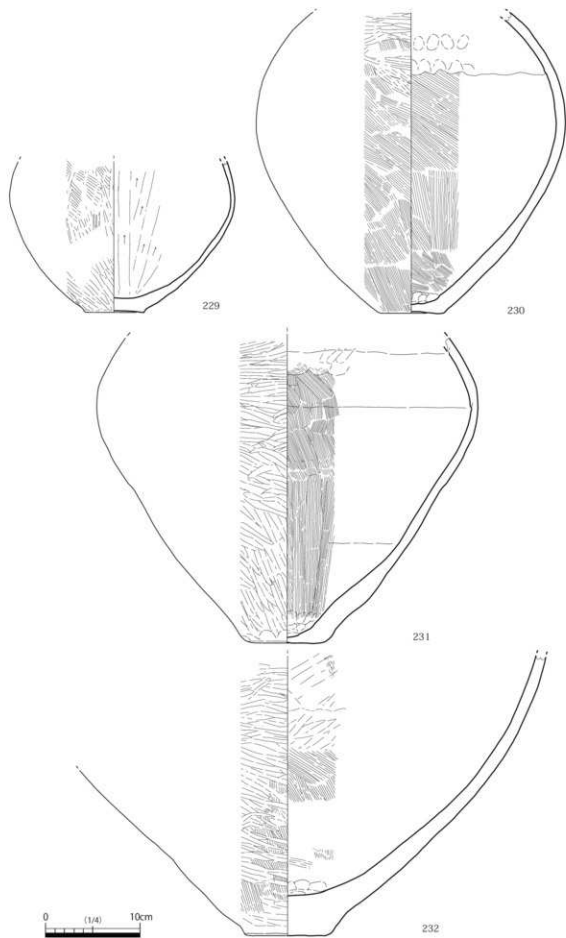
行う。212は縮状部は下方に短く伸び、立ち上がり部は内湾気味で袋状を呈す。端面は平坦で内傾している。文様帯には4条単位の櫛描きによる沈線と波状文を施す。調整は外面には2種類の工具でタテのハケ目を、内面はヨコのハケ目を行う。213は大型の複合口縁壺である。大きく開く頸部から縮状部はやや下方に下がり気味となり、そこから立ち上がり部は外反し、端部は水平となる。端部には2条の凹線を有し、立ち上がり部には上位に10条の沈線を、下位には4条単位の櫛描き斜格子文を施し、頸部には2条の波状文を描いている。調整は外面がタテハケ目、ナデ、内面がヨコハケ目、ナデである。214は口縁部の復元径が51.4cmの大型品である。突帯面には曖昧な2条凹線があり、拡張部の文様帯には3条単位の櫛描き斜格子文を、それより上には少なくとも2条以上の凹線を施したとみられる。

215は大型の複合口縁壺の頸部である。外面にはハケ目調整の後12条の沈線を施し、縦への3本単位の沈線を等間隔にある。頸部から胴部にかけてはノの字状の刺突文を巡らす。内面は口縁部側はハケ目が残り、頸部にはナデ調整痕が残る。216は大型壺の頸部から胴部上半部にかけてである。215と同様に多条沈線と刺突文を組み合わせた文様構成である。沈線は14条あり、その下の刺突文はハケ状工具を押し当てた痕跡がみとれる。沈線より上の頸部には3条単位の櫛描き波状文を施す。調整は、頸部の外面はタテ、内面はヨコハケ目で、胴部は外面が細かいタテハケ目から斜めのハケ目、内面は指ナデ・指オサエの後斜めのハケ目で一部にミガキがある。

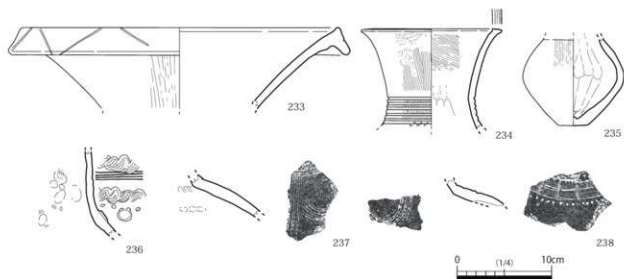
217～225は卵形の胴部で平底、長頸が特徴の壺である。217は球形に近い胴部から立ち上がる長い頸部があり、口縁部はそのまま開き端部は丸く収まる。外面調整は、頸部がタテハケ目、胴部はヨコハケ目のちミガキを施す。内面は頸部がヨコハケ目、頸部と胴部にかけては指ナデ痕が明瞭に残り、胴部下半はタテハケ目が認められる。218はやや丸みのある平底で、胴部最大径が中位より上にあり、ゆるやかに内湾して立ち上がった口縁部はやや外反する。調整は胴部で外面がミガキ、内面はケズリである。219はやや上げ底で卵形の胴部から内傾して短く頸部が立ち上がり、口縁部は短く外反する。端部はつまみ上げる。頸部から胴部への屈曲部には上段に6条、下段に5条の刺突文をひとまとまりとして、2か所に施文する。このように全周に巡らすのではなく、部分的な施文は、222～224にも認められる。調整は外面がハケ目の後ミガキ、胴部内面はケズリを主体とする。

220は219と比較し胴部は丸みのある算盤玉状で、口縁部は頸部、口縁部ともより外傾する。胴部との境には逆「D」字状の刺突文を巡らす。調整は頸部がハケ目、胴部はハケ目のちミガキを施す。内面は頸部がヨコハケ目、胴部はケズリである。221は短く直立する頸部からやや内湾気味に開く口縁部で、端部はつまみ上げる。胴部との境には、ノの字状と円形の刺突文を部分的に施文する。調整は外面がハケ目の後ミガキ、内面は口頸部がハケ目、胴部はケズリである。

222～224は、220と形態が似るが、胴部は丸味を持ち細長くなる。222は胴部との境に部分的に不規則な刺突文を施す。調整は外面ハケ目のちミガキ。内面は頸部ハケ目、胴部はケズリである。223は外傾する長い頸部からさらに開く口縁部で、端部はつまみ上げる。胴部との境には4条、5条の刺突文を2か所に施す。調整は外面で頸部がハケ目、胴部がハケ目のちミガキである。内面は胴部が指ナデとケズリである。224は他の長頸壺に比べて、縦に長い形状である。そのため頸部がより長い、外反する口縁部は短い。胴部との境に222と同様不規則な刺突文を部分的に施す。胴部下半には径1cmの孔を焼成後に穿っている。調整は頸部がハケ目、胴部がミガキ。内面は胴部中央が斜め、



第58图 2地区出土遗物实测图(9)



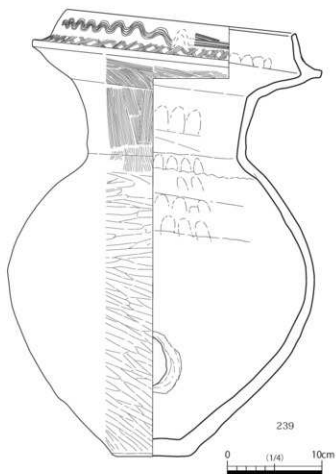
第59図 出土遺物実測図(10)

下半がタテへのケズリを行う。

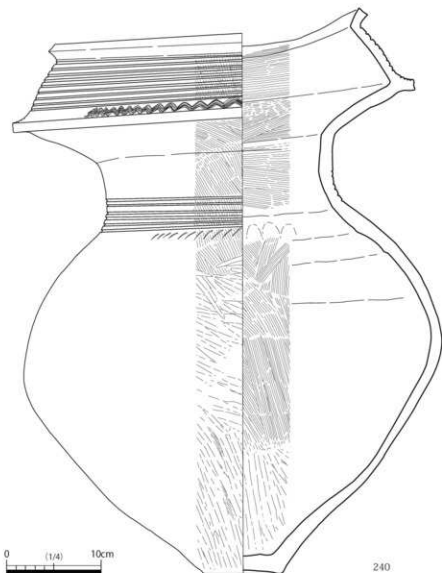
225～228は、丸みのある平底で、胴部は中位に最大径がある卵形を呈し、くびれた頸部から口縁部は短く外反気味に立ち上がる壺である。225は頸部に円形の刺突文を施し、口縁端部には2条の沈線を持つ。調整は外面ハケ目、内面は口縁部でヨコハケ目、胴部上半は指ナデが残り、下半はケズリである。226は口縁部が短く、端部はわずかにつまみあげる。調整は外面上半はハケ目、下半はミガキである。内面は口縁部がヨコハケ目、胴部上半は指ナデが残り、下半はケズリである。227は外面ハケ目を主体とし、部分的にミガキがある。内面は口縁部がハケ目、胴部はミガキである。228は頸部を欠損する。丸底に近い平底から、胴部は中位よりやや上に最大径がくる。頸部との境にハケ目



第60図 壺内粘土塊検出状況



第61図 2地区出土遺物実測図(11)



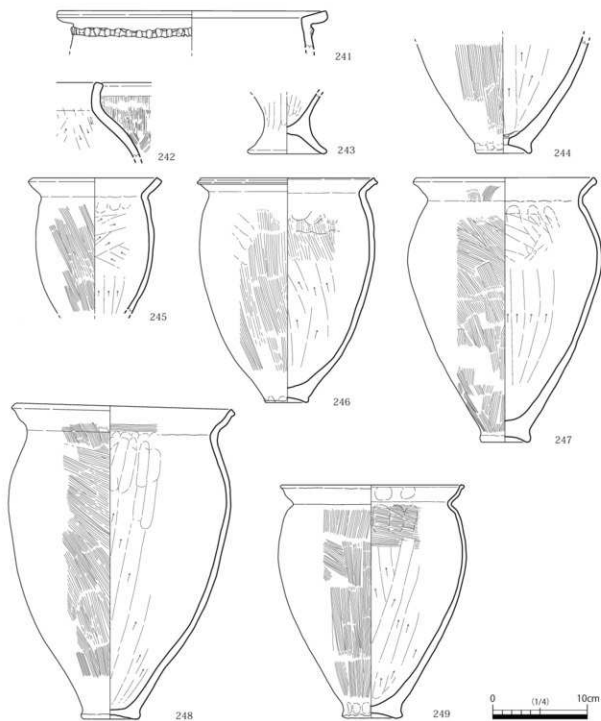
第62図 2地区出土遺物実測図(12)

状工具でシャープなノの字状刺突文を施す。調整は外面がハケ目のちミガキで、内面はミガキとケズリを行う。

229～232は口頸部を欠損する壺の胴底部である。229はわずかに上げ底で球形の胴部である。調整は外面がハケ目の後ミガキ、内面がケズリである。230はやや上位に最大径がくる胴部である。調整は外面が全面ハケ目をし、肩部はその上にミガキを行う。内面はハケ目をし、底部は指オサエ痕が明瞭に残る。底面にもハケ目を施す。231は中位より上に最大径がある胴部で、小型で丸みのある薄い底部を持つ。調整は外面を全面ミガキをし、内面はハケ目である。底部内面には明瞭に指オサエ痕が残る。232は大型の壺胴底部で、厚手の平底底部を持つ。調整はハケ目のちミガキを行う。内容はハケ目をし、上半部は加えてミガキを行う。

233は垂下口縁壺の口縁部である。朝顔形に開く口縁部は端部を斜め下方に垂下させ丸く収める。端面にはヘラ描き山形文を施す。調整は外面ミガキをする。

234は壺口縁部である。頸部に5条沈線と刺突文を施し、外反する口縁部の端面は平坦である。こ



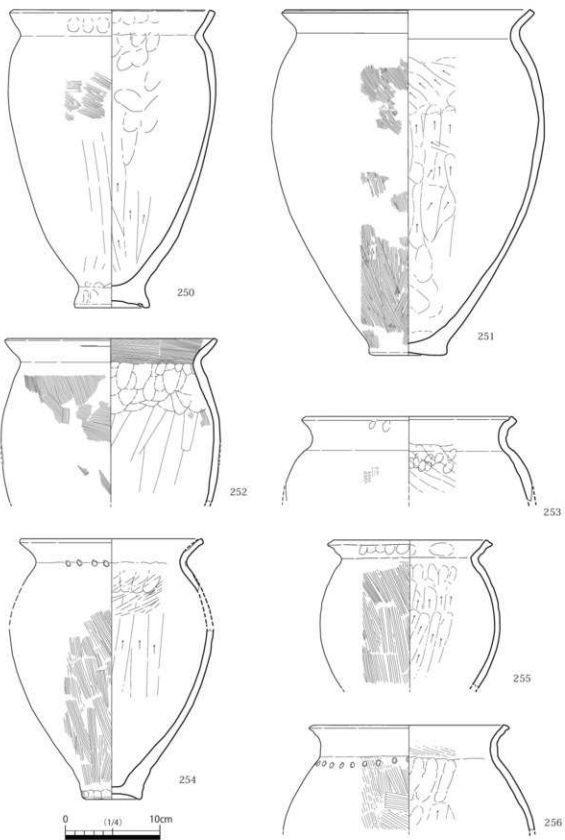
第63図 2地区出土遺物実測図(13)

こには2条のあいまいな凹線を有する。調整は内外面ともハケ目である。

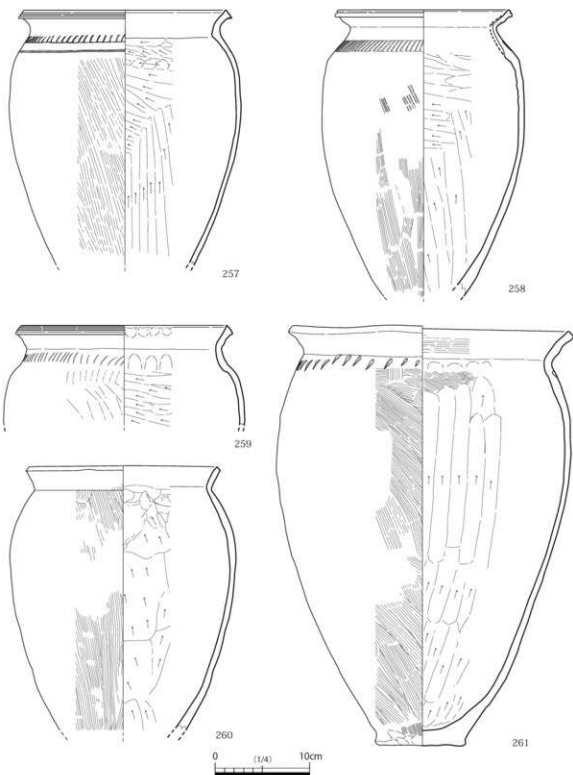
235は小型の壺で、口縁部を欠損する。胴部は算盤玉状を呈する。調整は外面ハケ目、内面には指ナデ痕が残る。

236は文様を有する筒状の長頸壺頸部片である。胴部との境に円形浮文と刺突文を配する。頸部下半には3条沈線で区画しその上下に5条の櫛描き波状文を描く。

237、238は壺の文様体を持つ肩部である。237は3条の横沈線と6条の縦沈線で区画した中に6条単位の重弧文を施す。238は2列の刺突文の間に10条沈線を描き、その上に縦に5条沈線を等間



第64图 2地区出土文物实测图(14)



第65図 2地区出土遺物実測図(15)

隔に配する。

239は高さ44.7cmをはかる大型の複合口縁壺である。平底の底部に卵形の球形胴部が載り、頸部は外傾して短く立ち上がる。そこから大きく開き複合口縁部となる。立ち上がり部はやや内傾し端部は面を持つ。複合口縁部の文様は、4条単位の櫛描きによる斜格子文と波状文を有する。波状文は部分的な施文で、途中から2段の沈線へと変更しているのが特徴である。外面の調整は、頸部がハケ目、

胴部がミガキであり、内面は指オサエや指ナデの痕跡が残るものの摩滅により不明である。また胴部下半に縦6cm、横3.5cmの孔が焼成後に内面から外に向けて穿たれている。壺内部には第60図のように未焼成粘土塊が入れてあり、胴部内面に付着痕が認められる。粘土塊の大きさは径26cm、厚さ5cm、重量2.5kgである。

240は高さ59.8cmの大型複合口縁壺である。小型の平底に幅広の偏球形の胴部がのり、頸部は外反気味に短く立ち上がる。口縁部は広く開き、籬状部から立ち上がり部は内傾し、短く屈曲した端部を有し、端面は平坦である。器形は全体的に歪み、傾倒している。複合口縁部の文様は、4条単位の櫛描き波状文に9条の沈線を施す。頸部には6条沈線及びその下にノ字状の刺突文を巡らす。調整は、内外面とも全体的にハケ目にし、胴部下半がミガキを加える。なお外面の一部に赤色顔料が認められる。

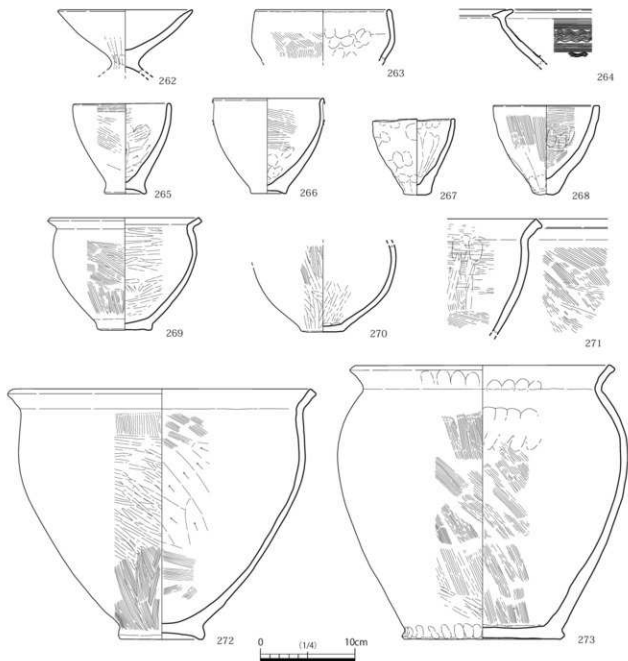
241は、逆L字状に肥厚させた口縁部を有する甕である。口縁下には押圧による連鎖状突帯を貼り付ける。242は口縁部が短く外傾気味に直立する甕である。調整は外面にハケ目、内面にケズリを行う。外面に煤が付着する。243は甕底部である。ハの字に広がる上げ底の底部からくびれて胴部へと立ち上がる。調整は、内外縮ミガキ、底面はナデである。底部内部には鉄分が付着する。244は甕の胴底部である。上げ底で、焼成後に内部から径約1cmの孔を穿っている。調整は、外面がハケ目、内面がケズリである。

245～249は、口縁部がくの字に屈曲し端面は平坦となる上げ底の甕で、調整は外面がハケ目、内面がハケ目、指ナデ、ケズリを行う。内外面に煤や炭化物の付着が認められる。245は底部を欠損する小型の甕で、胴径は口径を上回らない器形である。246は口縁端部をつまみ上げ、胴径は口径を上回らない。内面はケズリに加えてハケ目を行う。247は、厚手の上げ底で、胴部上半に最大径があり、口径とほぼ同じ大きさとなる器形である。外面は胴部上半と下半ではハケ目状工具の幅を変えて調整している。内面上半は指ナデとハケ目原体による粗いミガキがある。248は薄手の上げ底で、胴径は口径を上回らない器形で、口縁端部はつまみ上げる。249は胴径が口径とほぼ同じで、口縁部への屈曲も丸みを持ち、内湾して立ち上がる口縁部は端部でわずかに丸く肥厚させる。

250は厚手の上げ底となる底部で、胴径と口径が同じであり長胴の器形である。口縁部はわずかに内湾し、端面は平坦である。調整は外面上半がハケ目、下半が板状のものによるナデ調整である。251・252は胴径が口径を超える器形で、ゆるやかに口縁部に屈曲する。251の調整は外面が細かいハケ目、内面はケズリである。内外面に煤付着が付着する。252は外面ハケ目、内面はハケ目、指押オサエに板状のナデを施す。

253～256は胴径が口径を上回り、口縁部は緩やかに屈曲する甕である。調整は外面はハケ目、内面は指ナデ、ケズリ調整を行う。外面には煤が付着する。253は口縁端部をつまみあげる。254は外面の屈曲部にそって刺突文を施す。底部は上げ底である。256は屈曲部があいまいで、外面に刺突文を施す。

257～259は、胴径が口径を上回り、肩のように張る胴部を有する甕である。屈曲した口縁部の端面には凹線を有する。肩部には刺突文を巡らし、調整は外面ハケ目、内面は上半がヨコ、下半がタテケズリを基本とする。いずれも内外面に煤や炭化物が付着する。257は上下につまみ出した端面に2条の凹線を有する。屈曲部の刺突文はへら状工具を連続して斜めに押し当てたもので、その下に3条



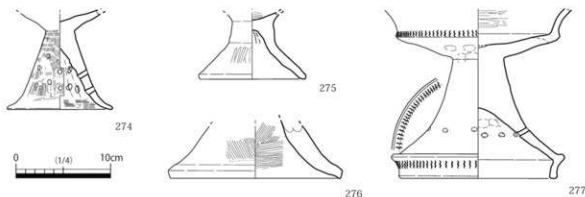
第66図 2地区出土遺物実測図(16)

の櫛描き沈線を施す。内面はケズリによって明瞭な屈曲部の稜線を作り出す。258は口縁端面の凹線は1条である。肩部の刺突文は工具を連続して時計回りに押し当てて施文する。外面上半には不明確ながらタタキ状の痕跡がある。259は端面に3状の凹線を有する。屈曲部に刺突文を巡らす。それより下にも刺突文の痕跡が認められる。当初の施文をナデで消し、改めて上位に施文し直したものとみられる。

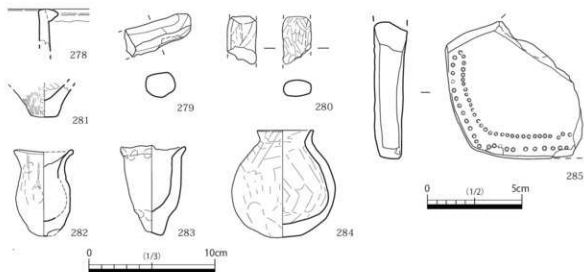
260は長胴で胴径が口径を上回り、短く口縁部が屈曲する。外面ハケ目、内面ケズリ調整を行う。外面に煤が付着する。

261は大型の甕である。平底で、胴径は口径を下回る長胴形である。屈曲部にノの字状の刺突文を施す。調整は外面がハケ目、内面がハケ目、ケズリを行う。内外綿に煤、炭化物が付着する。

262・263、265～273は鉢である。262はハの字に開いた小型の底部に、体部は直線的に外傾し、



第67図 2地区出土遺物実測図(17)



第68図 2地区出土遺物実測図(18)

口縁部は尖り気味に終わる。調整は内外面ナデである。263は椀状の鉢で口縁端部は丸くおさめる。外面ハケ目調整、内面指オサエ、ナデ調整で、赤色顔料の痕跡がある。

265～268は、やや内湾した立ち上がる体部で、口縁部への屈曲部がないタイプの鉢である。265・266は口縁部を丸くおさめ、底部はやや上げ底となる。265は外面ハケ目で、下半はミガキ調整か。内面上半が指オサエ、ハケ目があり、下半はケズリ調整である。266は口縁部端部をわずかに外傾させ丸くおさめる。内面上半はハケ目、下半は指オサエ、ナデ調整である。267・268は底部が小型ですばまるタイプで、口縁端部は平坦である。267は全体的に指オサエ、指ナデによる成形で、外面の一部に煤が付着する。268は絞り込むような小型の底部である。外面はタテ、内面はヨコのハケ目調整を行う。

264は複合口縁壺の立ち上り部で、端部は内外に拡張しT字状をなす。文様帯には5条単位とみられる櫛描き工で、沈線、波状文を2回ずつ交互に施文する。ミガキ調整である。

269は平底で、球形の胴部から屈曲して短い口縁部となり、端面は平坦である。外部はハケ目、内部はミガキ調整を行う。底面には一部に布目状の痕跡がある。270は口縁部を欠損する。胴部外面はハケ目のちミガキ、内面はミガキである。底面もミガキ調整を行う。

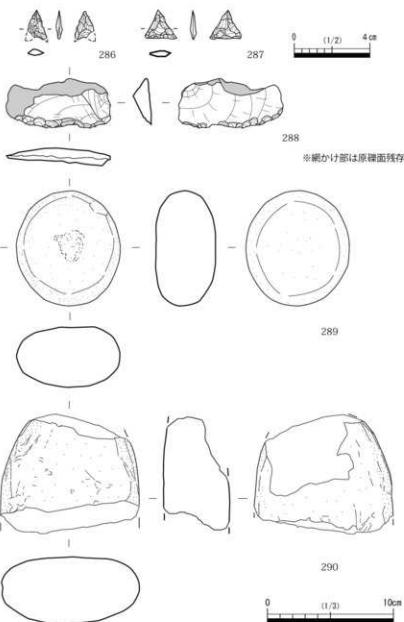
271・272は鉢で、内湾して立ち上がる胴部から、くの字に曲がる短い口縁部で、端面は平坦である。271はハケ目を施し、内面の一部にミガキを行う。272は上げ底の小型の底部で、調整は外面がハケ目のちミガキ、内面はハケ目とケズリを行う。

273は径17.2cmの円盤状の底部で、胴部は最大径が胴部上位にあり、そこから屈曲して口縁部に至る。調整は外面は上半が細かいハケ目、下半が粗いハケ目に一部ミガキを行う。内面はハケ目である。

274は高環の脚部である。ハの字に短く外反する裾部から、すぼまりながら立ち上がる。脚柱部は削りこみが深く、透かし穴が外面からの穿孔により不規則に並ぶ。調整は外面がハケ目、内面は絞り痕が認められる。274は高環の脚部である。開いた裾部から短い柱状部となる。調整は裾部および環部内面がミガキである。276は高環又は台付き鉢の脚部で、大きく広がる厚手の裾部で、内外面ハケ目調整である。

277は高環で、環部口縁部を欠損する。裾端部は内傾して上下に拡張し端面は丸くおさめる。ハの字に広がる裾部から柱状部となり、開いた環部は屈曲部に段を有し、外反して口縁部に至るとみられる。裾部には推定10か所に透かし孔を外面から穿孔している。環部と裾部2か所に刺突文を巡らす。この施文には波形の痕跡から貝殻状施文工具を押圧して施したと考えられる。全体的に摩擦剥離しているため、調整不明な部分が多いが、環部内面はミガキを施す。形態や礫を多く含む胎土から、搬入品とみられる。

278は擬無文土器の裏口縁部である。特徴的な三角貼り付け突帯を有し、調整はナデである。279・280は土器の把手で、形状から279は棒状、280は環状の把手の一部とみられる。全体的にナデ調整を行う。断面形はいずれも楕円形で、279が断面は幅2.3cm、厚み2cm、280は幅2.2cm、厚み1.3cmを測る。



第69図 2地区出土遺物実測図(19)

282～284はミニチュア土器で、282・283は壘形で、細長い胴部に短く外反する口縁部を形作っている。284は壺形で、丸底に球形の胴部、口縁部は短い形状である。いずれも指オサエ痕が残り、ナデ調整を施す。

285は、分銅形土製品である。顔の表現がなく、懸垂用の穿孔もないことから下半部と判断した。上半部及び右側側面を欠損している。形状は最大幅より下側面幅が短い隅丸台形であったとみられる。輪郭にそって小さい竹管状の施文具を押し当た刺突文を2列施している。

石器 (第69図 図版61)

286・287は安山岩製の小型の石鏃である。286は凹基無茎式で両方のかえり部を欠損している。287は平基無茎式の完形で、重量は0.3gを測る。

288は安山岩の剥片石器で、削器である。一部に原礫面が残り、金山産石材か。刃部は両面からの押圧剥離でつくりだしている。

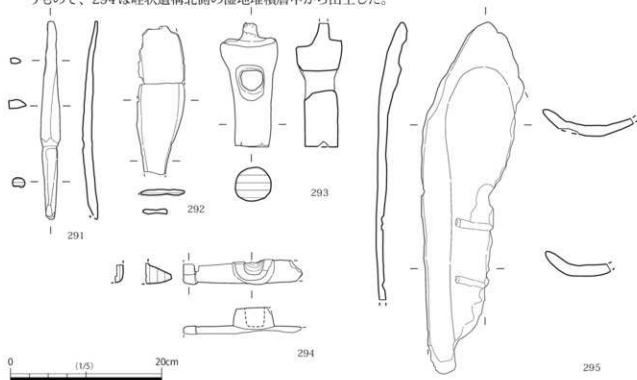
89は石英斑岩の磨石または敲石である。正面上に敲打痕によるわずかな凹みが認められる。それ以外は研磨による使用が認められる。

290は石英斑岩の磨石である。両端部を欠損している。全体的に摩擦しているが、上下面および側面は研磨による使用が認められ、側面にはザラザラした面もみられる。

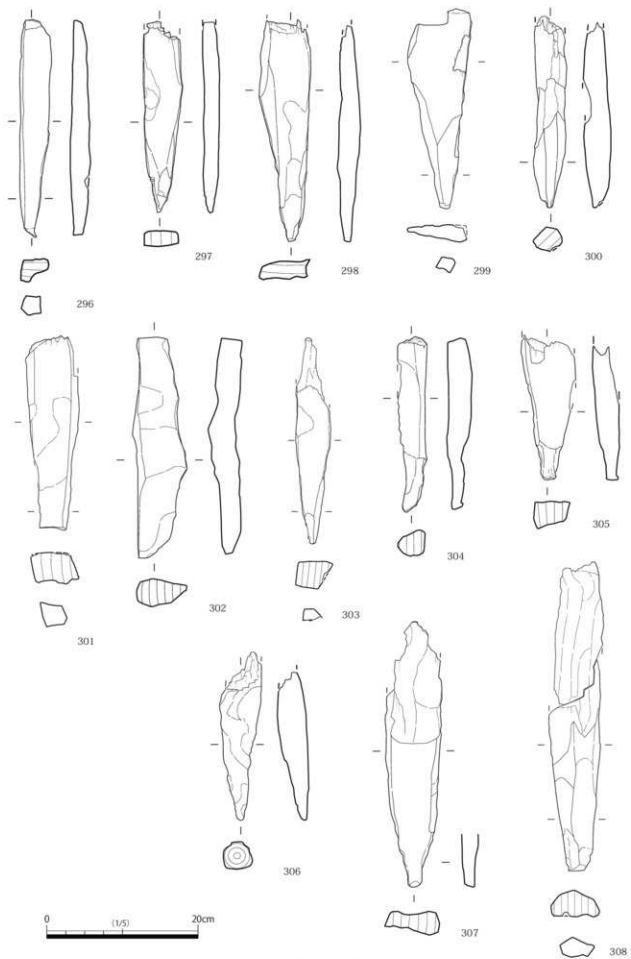
木器・木製品 (第70～76図 図版62～67)

出土した木器・木製品のうち、残存状況が良好な58点について掲載する。なお実測図の断面には、年輪の方向が判断できるものについて、それを模式的に表現している。

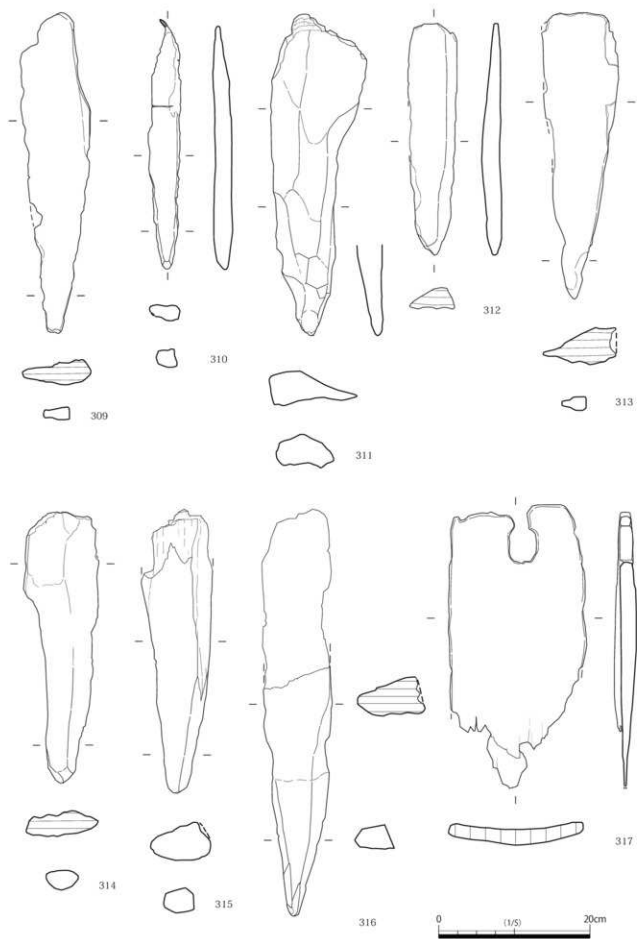
291～295は用途等が明らかでない木器から、用途不明木器とした。294以外は杭列、矢板列に伴うもので、294は畦状遺構北側の湿地堆積層中から出土した。



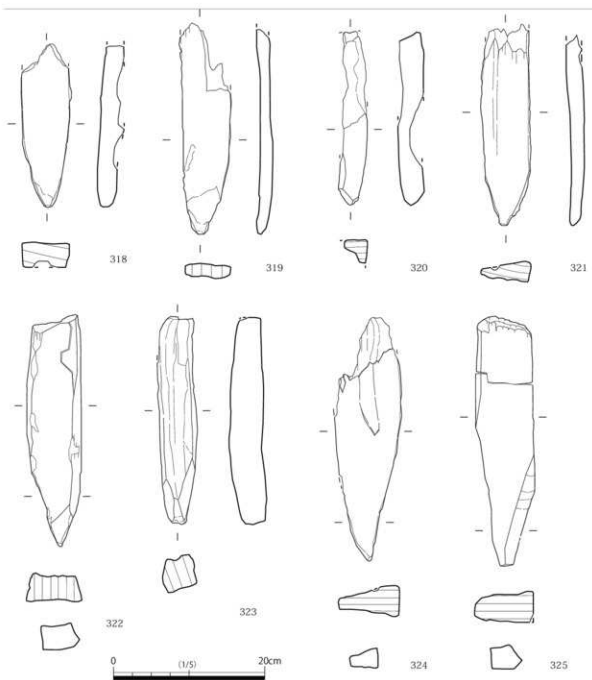
第70図 2地区出土遺物実測図(20)



第71图 2地区出土遗物实测图(21)

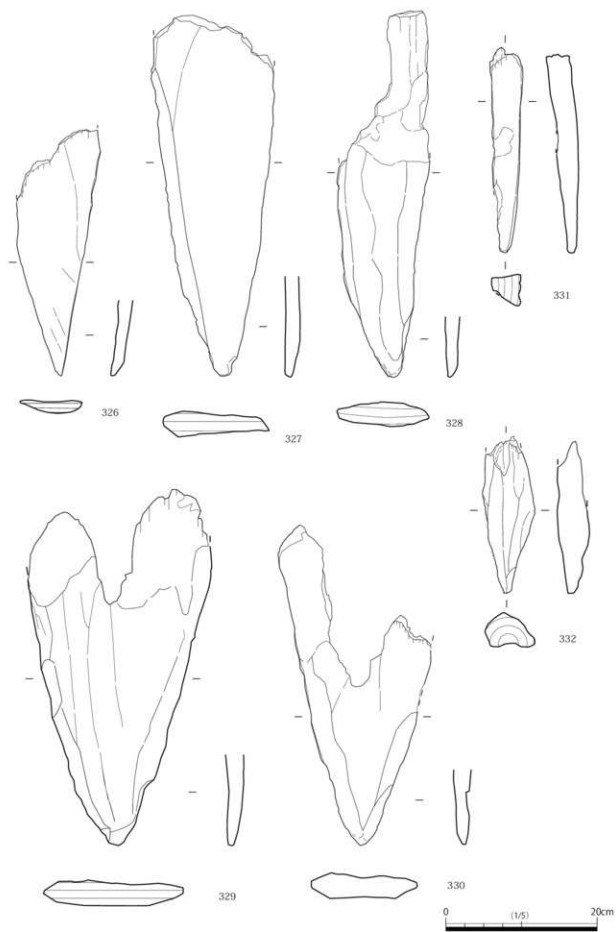


第72图 2地区出土遗物尖测图(22)

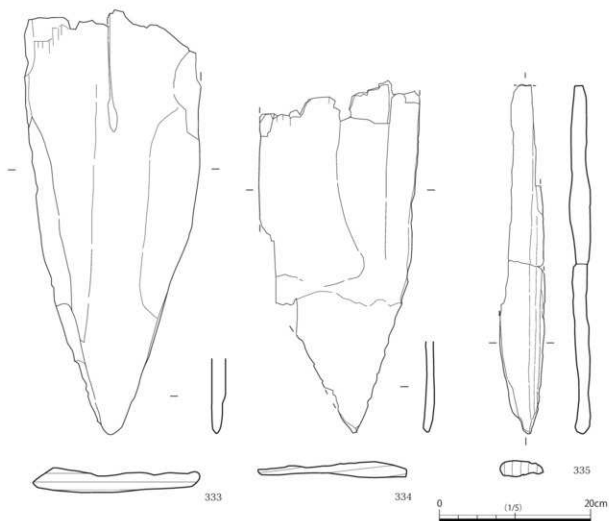


第73図 2地区出土遺物実測図(23)

291は細長い刀子状で、中央より下に段を設け柄状としている。身部はやや反り、刃部などのつくりはみられない。292は厚さ0.8cmの薄い材で、両側辺は両面から加工し、刃部状に作り出している。293はモミ属の板目材で残存長16.5cmである。円柱状の身部はやや先端に向かって幅が広がっている。端部は突起状に削り出している。身部の中央には径2.7～4cmの孔が穿たれている。294はコナラ属アカガン亜属の柁目材である。製品の下半は欠損剝離している。棒状の形態に端部は段をつくり肥厚させている。おそらく反対の端部もこのような形状をしていた可能性がある。中央には円柱状の突起を作り出し、径2.6cm、深さ2.5cmの穴を削りこんでいる。これらの加工は丁寧に施している。295は先端が尖る舟形の平面形を呈する。内部を楕円形に削りこみ、底の厚さは1.5cmである。クスノキ科の



第74图 2地区出土遗物实测图(24)



第75図 2地区出土遺物実測図(25)

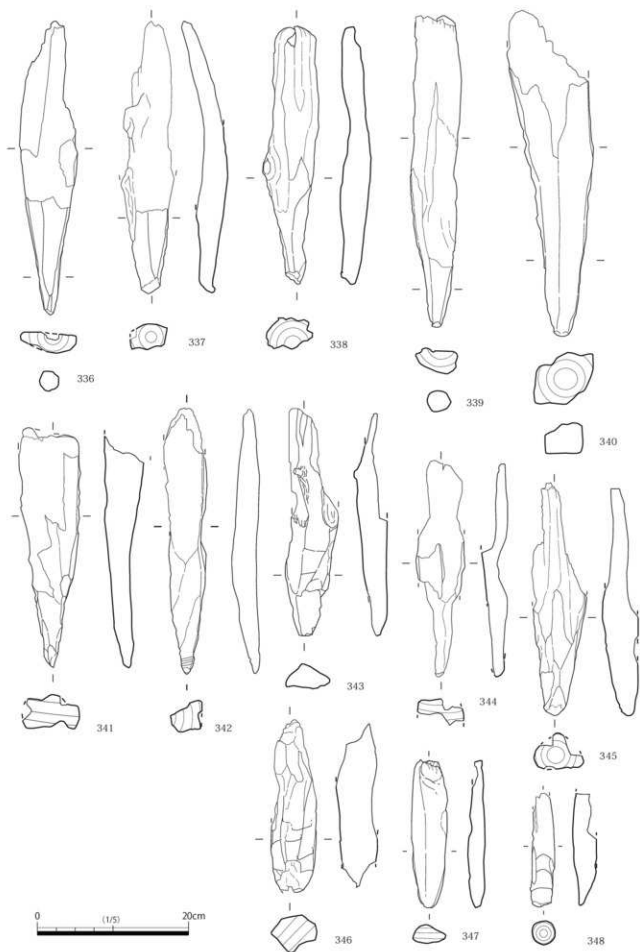
材を使用する。

296～300は第1杭列に使用された杭である。長さは28～30cm、幅は4～9cm、厚さは2.2～3.5cmである。296は角材、297～299は板材、300は棒状の材を切り出し、297～299は明瞭に先端部を加工して尖らせている。使用した樹種は、298がコナラ属コナラ節の材である。

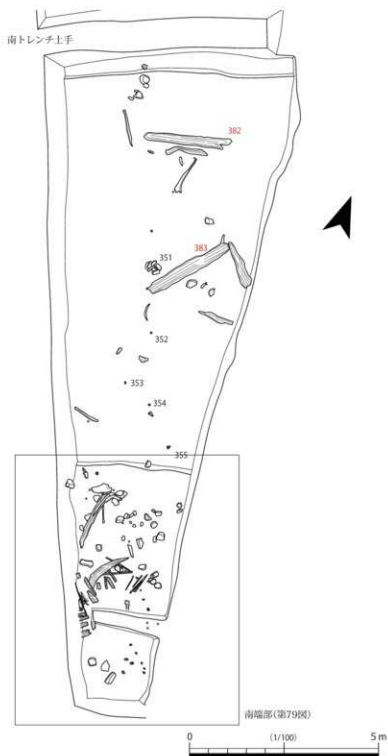
301～308は第3杭列に使用された杭である。長さは最長で残存長45.6cmから、短いものは残存長17.7cmであるが、23～35cmが中心である。幅は4～8cm、厚さは3.1～5cmである。断面方形、長方形を基本とし、306は芯持材をそのまま杭に使用している。これらは杭の先端を加工により尖らせているが、301は角材をそのまま打ち込んでいた。また302も明瞭な加工は施していない。

309～317は第2杭列に使用された杭などである。長さは30.5～53.7cm、幅4.2～10cm、厚さ2.1～5.1cmであり、他の杭列と比較して大型の杭を使用している。317は矢板状の木製品で、杭にまじって打ち込まれていた。やや内湾する断面で、上端に長さ8cm、幅4cmの溝状の穴を削り抜いている。この穴がどのように機能していたか不明であるが、矢板としての断面の比較、樹種がクスノキ科であり、他の杭がコナラ属であることも考慮すると、他の木器を転用、または再利用して杭列の一部とした可能性も考えられる。

杭は310を除いて上端が広く、先端部が尖る形状であり、最初の粗割をそのまま使用しているもの



第76图 2地区出土遺物実測図(26)



第77図 2地区南トレンチ以南 木製品出土状況図

が多いが、311はさらに先端に加工を加え削り出している。316は先端部から19cmの範囲が他と表面の摩滅状況が異なる。下位の方が木質の残存状況が良いことから、この範囲が地中に打ち込まれた範囲とみられ、地上には少なくとも35cm程度出ていることになる。樹種は309、316がコナラ属コナラ節である。

318～325は南北杭列に使用された杭である。長さは22.8～33.0cm、幅は3.3～8.5cm、厚さは1.8～5.0cmである。断面は長方形(318、319、322、325)、三角形(321、324)のものがある。

断面の違いはみかん割り材や半裁材などから木取りした際の材の形によるものであろう。323は角材を先端部のみ加工し、杭としている。

326～332は南矢板列に伴う矢板、杭である。331、332は矢板の背後に補強のために打ち込まれた杭で、長さは20.8～26.2cm、幅3.9～6.5cm、厚さ4.1～4.5cmである。332は芯持材を利用している。

326～330は矢板である。長さは42.3～48.4cm、幅16～24cm、厚さ3.3～3.4cmである。上端部の残存状況が明瞭ではなく、腐食しているが、全長は50cm程度とみられる。先端部は杭のように複数の打割によって成形するのではなく、3～4cmの厚さの材を側辺を両面から削平することで作られている。幅は326～328のように長さに対して幅の狭いものと、329・330は幅広のものがある。なお329、330は上端部が腐食、剥離によって部分的に消失し、現状はハート形を呈する。これは本来例りこみ部があってそこから腐食したのか、また亀裂などから進化したのかは定かでない。329では先端から約20cmを境として表面の腐食・摩滅の状況に差があることから、約20cmほど地中に打ち込まれていたとみられる。また矢板には使用時の表裏で摩滅に差があることも指摘される。樹種は329ではコナラ属アカガシ亜属である。

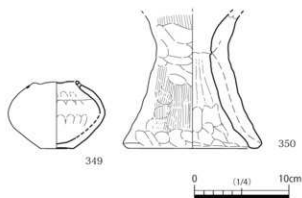
333～335は北矢板列に伴う矢板、杭である。333、334は矢板で、333は長さ56cm、幅19.6～22cm、厚さ2～3.4cmである。南矢板列の矢板と比較して、側片は先端からV字形にたちあがり、途中屈曲し両側片は平行となる。334は先端の摩滅状況から、約19cm地中に打ち込まれていたことがうかがえる。335は長さ46.2cm、幅5.8cm、厚さ2.8cmを測る。形状は大型の杭であるが、出土地は北矢板列を構成する一つであることから、ここでは矢板として取り扱う。使用された樹種は333がコナラ属アカガシ亜属である。

336～348は北矢板列の北側に位置し、矢板列を補強する杭群である。長さは15～43.1cm、幅3～8.8cm、厚さ2.8～6.8cmで大きさや形状がさまざまに一律でない。また木取りも他の杭列と比較して芯材、芯持材を利用する割合が多い。自然木を最小限の加工で杭にしており、杭列と矢板補強のための杭に差があることが認められる。

南トレ土手以南の遺構群

北半は、弥生集石層が堆積しており、SD1の延長部分は検出できなかった。南トレ土手の土層で確認されたSD1の遺構面は、明確に検出できなかったことから、集石層の堆積等で削平されたみられる。下位の縄文時代遺構面に相当する面に遺構は確認されなかった。一方で自然木や樹根が分布しており、382の樹種はモクレン属、383はアカガシ亜属である。

これらの自然木とともにいくつかの杭が検出されている。351～355の杭は、明確な列をなしていないが、おおむね南北方向にそって打ち込まれているとみられる。この方向は前述したSD1との関連性をうかがわせるものである。これらの杭と集石層の関係は判然としませんが、集石層を除去していく中で検出された例があるこ



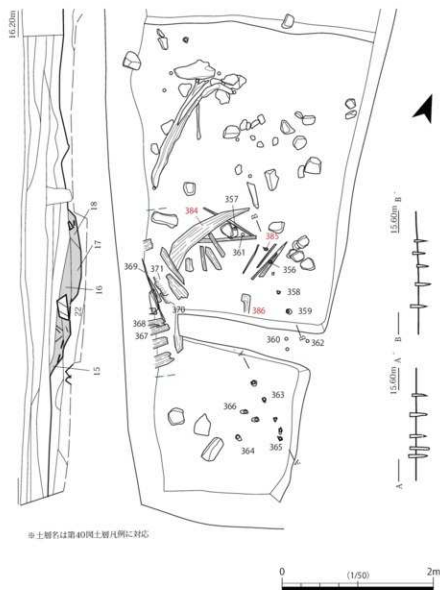
第78図 2地区出土遺物実測図(27)

とから、少なくとも集石層堆積前に設置されたとみられ、杭の形態から弥生時代のものとする。

南半（南端部）は、杭列および自然木や加工された部材がまとまって出土した範囲である。これらが検出された遺構面は、集石層の下で、北半の縄文相当面よりは10cmほど高い位置にある。南端部は北側まで広がっていた集石層が及んでおらず、集石層による弥生遺構面の攪乱を受けなかった範囲といえるだろう。この面からは杭、自然木とともに弥生時代の無頸壺（349）、支脚（350）が出土し、弥生時代遺構面とみてよい。

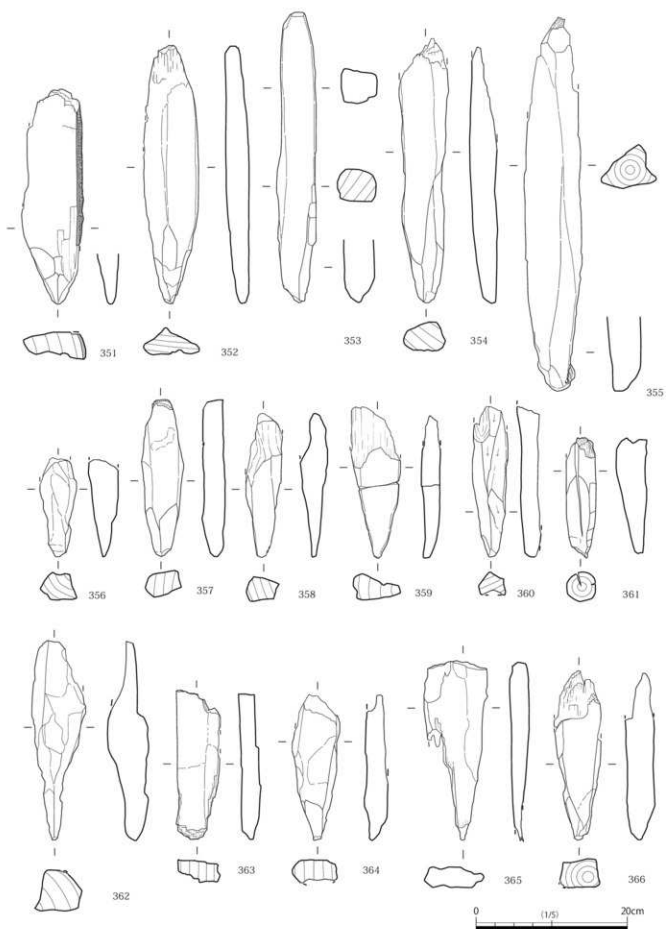
検出された遺構は、356～362および363～366の2つの杭群がある。これらはそれぞれ北西—南東方向に、20～30cmの間隔で平行する位置にある。またこれ以外の杭もあり第79図に位置を示す。

また調査区西壁の土層観察では、長さ210cm、深さ5～20cmの落ち込み（SX1）を確認した。この落ち込みが土坑または溝状遺構となるかは、面的に遺構の掘方を確認できなかったため不明である。内部には加工痕のある板材が出土した。このうち4点の板材は東西方向に横になって重なり、長尺な367・368の半分以上は壁面の中から出土した。369、370、371の板材は、長辺を下に立った状態

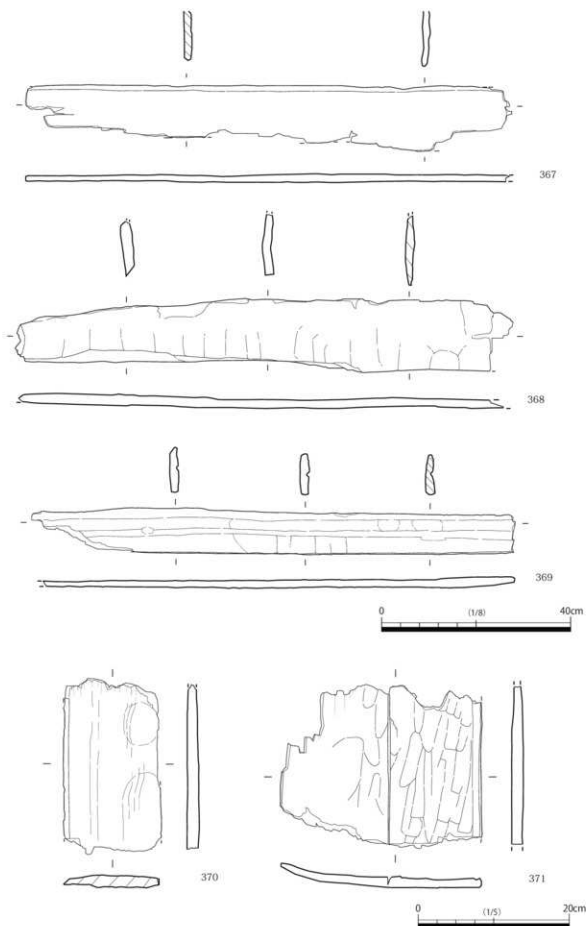


※土層名は第40図土層凡例に対応

第79図 2地区南端部 木製品出土状況図



第80图 2地区出土遗物实测图(28)



第81图 2地区出土遺物実測図(29)

で出土した。このほか自然木や板材片が杭群に隣接するように分布している。このうち384はエノキ属、386はクスノキ科である。

SX 1の性格として、加工された板材がまとまって出土していることから、これらを保管するための遺構と判断される。その範囲は明確でないが、他の木片、自然木が分布するまでと考えた場合、2つの杭群もこれに関連性があるとみられる。

土器(第78図 図版67)

349は無頸壺である。平底で、胴部は丸みのある算盤玉形を呈する。口縁部には蓋受けの紐通しの孔が2個一組で両側にある。外面は摩滅するかいはけ目の後ミガキ調整を施す。内面には指ナデが残る。350支脚である。受け部は欠損するが、縮れた胴部から裾部は八の字に広がる。内外面には成形時の指圧痕、指ナデの痕跡が明瞭に残る。外面はハケ目調整を行い、煤が付着する。

木器・木製品(第80・81図 図版67～68)

351～355は北半に出土した杭である。351は長方形の板材で、樹皮が側面に残存していることから、粗削した材を先端部だけ加工して杭としたとみられる。樹種はツブラジイである。352～355は、長さ34.1～49.4cm、幅5.2～8cm、厚さ3.5～5.7cmであり、南トシ土手以南の杭群としては大型の杭になる。355は芯持材で、打ち込みによって先端が折れ曲がっている。

356～362は南端部で北西～南東方向の杭列に使用された杭である。長さ15.8～26.3cm、幅3.8～6.2cm、厚さ2～3.9cmで、小型の杭が主体である。360は加工痕が明瞭で、表面観察から上から下へのケズリを行っている。361は芯持材でケズリによるシャープな加工面がある。

363～366は356～362と同じ方向に並ぶ杭列に使用された杭である。長さ19.7～23.7cm、幅5.5～8.2cm、厚さ2.5～3.9cmで、断面長方形の材を使用し、先端を作り出すもの(364、366)と粗削の材をそのまま使用するもの(363)がある。366は芯持材である。

367～371は南端部のSX 1から出土した加工された板材である。367～369は、長さ85cm、幅8～12.5cm、厚み1.5～2.5cmである。これらはほぼ同じ規格であり、流れ柁目材を使用している。表面を平滑にするために工具による加工痕が認められる。このうち368の樹種はモミ属である。370、371は367～369と比べて小型の板材である。残存長21.3～23.2、幅12.9～26.4、厚さ1.5cmである。370は流れ柁目材、371は板目材で樹種はモミ属である。表面を平滑にした加工痕があり、特に371はそれが明瞭に残る。

(5) 遺構外遺物

遺物に伴わない遺物として弥生集石層やそれ以外の砂礫層、さらにこれらより上位にある整地層から多くの遺物が出土した。

集石層などの砂礫層からは、弥生時代中期から古墳時代初めにかけての遺物がまとまって出土した。土器は、当該期の壺、甕、高環、鉢、ミニチュア土器で、特徴的なものとして貝殻施文の壺、矢羽根透かしを有する高環、擬柳彫無文土器片などがある。また石器は、石鏃、剥片石器、紡垂車、石斧、磨石、敲石、凹石、石皿などである。

また整地層からは古代須恵器片や中世土師器が出土した。

これらの資料については、本報告では取り上げず、別稿に掲載予定である。

第10表 2地区出土土器・土製品観察一覧表(1)

No	探洞	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内)		備考
						口径 (径元線)	器高 (径元線)	底径 (径元線)			色調 (内)	主な調整 (内)	
181	46	51	SK2	縄文土器	深鉢	-	13.2	-	中々密	良	褐色色 5YR4/1 褐色色 5YR4/1	巻目ナデか 目取表面	
182	46	51	SK6	縄文土器	深鉢	-	13.4	-	中々粗	良	赤褐色 10R2/1 灰黄褐色 10YR5/2	ココナデ 目取表面	
183	46	51	SK7	縄文土器	深鉢	-	14.5	-	中々密	良	黒色 7.5YR2/1 灰黄褐色 10YR4/2	ミガキ 目取表面	
184	46	51	SK8	縄文土器	深鉢	-	14.8	-	中々粗	良	黒褐色 N2/ 灰色 7.5Y4/1	ココナデ 目取表面	内面に私土器組合 あり
185	46	51	SK8	縄文土器	深鉢	-	15.3	-	中々粗	良	褐色色 N3/ 褐色色 N3/ 灰褐色 7.5YR5/3	ココナデ 目取表面 ナデ	
186	46	51	SK9	縄文土器	深鉢	-	18.4	-	中々密	良	にぶい褐色 7.5YR6/3	目取表面	
188	48	51	北トレ以南トトレ間 集石群検出時	縄文土器	浅鉢	-	13.7	-	密	良	黒褐色 5YR2/1 褐色色 5YR4/1	ミガキ ミガキ	
189	48	51	北トレ以南トトレ間 SK検出時	縄文土器	浅鉢	-	15.5	-	密	良	黒褐色 5YR3/3 褐色色 N3/	ミガキ、ナデ ミガキ、ナデ	黒色磨研
190	48	51	北トレ以南トトレ間 SK検出時	縄文土器	浅鉢	-	11.5	-	密	不良	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい赤褐色 5YR5/3	摩滅により不明 摩滅により不明	
191	48	51	北トレ以南トトレ間 SK検出時	縄文土器	浅鉢	-	12.6	-	中々密	中々良	黄褐色 2.5Y4/1 黄褐色 2.5Y5/1	ていびいなナデ ナデ	
192	48	51	北トレ以南トトレ間 SK検出時	縄文土器	深鉢	-	12.3	-	中々粗	良	黄褐色 2.5Y4/1 灰黄褐色 10YR5/2	ミガキ 目取表面	外面に比喩文
193	48	51	北トレ以南トトレ間 SK検出時	縄文土器	深鉢	-	15.4	-	粗	良	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	目取表面	
194	48	51	北トレ以南トトレ間 集石群検出時	縄文土器	深鉢	-	15.5	-	中々粗	良	褐色色 10YR6/1 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキ 目取表面	
195	48	51	北トレ以北 オリーブ黄色粗砂 群	縄文土器	浅鉢	-	15.2	-	密	良	黒褐色 10YR3/2 黒褐色 10YR3/2	ナデ、ミガキ ナデ、ミガキ	
196	48	52	北トレ以北 黄褐色粗砂群	縄文土器	深鉢	-	16.6	-	中々粗	良	黒褐色 2.5Y3/1 灰褐色 10YR5/2	ナデ 目取表面	
197	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	深鉢	-	14.8	-	粗	良	黒色 7.5Y2/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ、ミガキ 目取表面	
198	48	52	南トレ以南 集石群の東 粗砂 群	縄文土器	深鉢	-	12.8	-	粗	良	黒色 2.5Y2/1 にぶい黄褐色 10YR6/4	ミガキ 目取表面	
199	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	深鉢	-	15.6	-	中々粗	中々良	黒褐色 10YR3/1 黒褐色 10YR3/1	ナデ 目取表面	
200	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	深鉢	-	16.9	-	中々粗	良	灰黄色 2.5Y7/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ、ミガキ 目取表面	
201	48	52	南トレ以南 南端 部	縄文土器	深鉢	-	13.6	-	中々粗	良	青黒色 5P81.7/1 青黒色 5P81.7/1	ミガキ 表面	外面に比喩文、保付 着
202	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	深鉢	-	13.1	-	粗	良	褐色色 7.5YR5/1 にぶい黄褐色 10YR7/3	摩滅により不明 目取表面	
203	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	深鉢	-	14.7	-	粗	中々良	黒色 10YR1.7/1 黒褐色 10YR3/1	ココナデ 目取表面	内面低部に灰比付物 着
204	48	52	南トレ以南 集石群の下	縄文土器	浅鉢	-	14.6	-	密	良	褐色色 N3/ 灰黄褐色 10YR5/2	ナデ	
205	48	52	南トレ以南	縄文土器	浅鉢	-	12.7	-	密	良	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2	ミガキ ミガキ	
206	50	53	SD 1	土製品	分刻砂 土製品	長さ	幅	厚さ	中々密	中々良	(正油) 灰黄褐色 10YR6/2 (裏面) 黄褐色 2.5Y4/1	(正油) ナデ (裏面) ナデ	正油面を刷毛で表 現、二重輪刻線は磨 削きか
210	55	53	第2坑列周辺 土器集積検出時	弥生土器	甕	-	17.1	-	密	中々良	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい褐色 7.5YR7/3	ナデ ナデ	外面に3条凹線・4 条細直線状の文 様単位を上下2段に 施文

第11表 2地区出土土器・土製品観察一覧表(2)

編	図版	図号	出土場所	種類	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	(内)		備考
						口径 (最大径)	高さ (残存部)	底径 (最大径)			色調 (95)	土質調整 (96)	
211	55	53	土手内 船状蓋様より出	赤生土器	壺	(21.0)	[12.4]	-	中中密	良	にぶい・黄褐色 5YR5/4 明赤褐色 5YR5/6	ハタ目、ヨコナデ ハタ目、ヨコナデ	白磁器に4条線帯直状文、黒帯に7条波線
212	55	53	第1航列～第2航列間	赤生土器	壺	(19.4)	[10.5]	-	中中密	良	明褐色 5YR5/6 にぶい・黄褐色 5YR5/4	ハタ目、ヨコナデ ハタ目	白磁器に4条帯の横帯直状文・直状文
213	55	53	第1航列～第2航列間	赤生土器	壺	(29.6)	[12.8]	-	中中密	良	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハタ目、ヨコナデ ハタ目	白磁器に2条内帯、白磁器に3条内帯・4条帯帯斜格文、黒帯に2条波線文
214	55	53	第2航列～第3航列間	赤生土器	壺	-	[3.8]	-	中中密	中中良	-	黒帯より不明	白磁器に3条内帯・3条線帯斜格文・黒い・赤い2条内帯
215	55	53	船状蓋様より東	赤生土器	壺	-	[9.9]	-	密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハタ目、ナデ ハタ目	12条波線に3条帯位ナデ波線、「ノ」字状刺状文
216	55	53	第2航列周辺 土器集積発出時	赤生土器	壺	-	[23.8]	-	中中密	良	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい・黄褐色 10YR5/3 ～褐色 10YR6/1	黄赤土、ナデ、ハタ目 ハタ目	黒帯内帯に3条線帯直状文・14条波線・刺状文、外帯に波線
217	56	54	南北航列～第2航列間	赤生土器	壺	12.5	[18.7]	-	中中密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハタ目、ナデ ハタ目、ミギギ	
218	56	54	第1航列～第2航列間	赤生土器	壺	(12.2)	23.8	6.7	中中密	中中良	にぶい・黄褐色 10YR6/1 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ナデリ ミギギ	外帯に黒帯
219	56	54	南北航列の東	赤生土器	壺	(13.8)	30.4	6.2	中中密	良	明褐色 7.5YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR7/3	ハタ目、ナデ線ナデリ ハタ目横ミギギ	黒帯内帯2ヶ所に上下2段の赤い・5条の「ノ」字状刺状文、内帯に横格文
220	56	54	南北航列の東	赤生土器	壺	21.3	33.9	6.8	中中密	良	褐色 7.5YR4/1 にぶい・褐色 7.5YR6/4	赤ナデ、ハタ目、ナデリ ハタ目横ミギギ	黒帯に黒「D」字状刺状文
221	56	54	第3航列～南沢航列間	赤生土器	壺	(18.6)	[28.6]	-	中中密	良	褐色 7.5YR5/1 褐色 7.5YR7/3	ナデ、ハタ目、ナデリ ハタ目、ミギギ	黒帯に部分的に「ノ」字状・内帯に2/2段の刺状文
222	56	54	南北航列の西 木381の下	赤生土器	壺	17.6	[26.7]	5.2	中中密	良	にぶい・黄褐色 10YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハタ目、ナデリ ハタ目、ミギギ	黒帯の一部分に刺状文
223	56	54	第3航列の南	赤生土器	壺	19.3	[23.3]	-	中中密	良	灰白色 2.5Y7/2 にぶい・黄褐色 10YR7/2	ナデリ、ナデリ ハタ目横ミギギ	黒帯内帯2ヶ所に赤い・5条の「ノ」字状刺状文
224	56	54	南北航列の西	赤生土器	壺	(17.0)	31.4	5.0	中中密	良	にぶい・褐色 10YR6/4 にぶい・褐色 10YR7/4	ナデリ ハタ目横ミギギ	黒帯に部分的に刺状文、黒帯下帯に内帯からの穿孔
225	57	54	第2航列の南	赤生土器	壺	(17.4)	[27.7]	-	中中密	良	明赤褐色 5YR3/4 明赤褐色 5YR3/6	ハタ目、ナデリ、ナデリ ハタ目	白磁器に3条線帯直状文、黒帯に2段刺状文、外帯に黒帯
226	57	55	南北航列の西	赤生土器	壺	18.7	38.0	7.3	中中密	良	褐色 5YR7/1～黒色 10YR2/1	ナデリ、ナデリ	
227	57	54	南北航列の東	赤生土器	壺	(15.2)	[27.8]	-	中中密	中中良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR7/4	ハタ目、ナデリ ハタ目	
228	57	55	第3航列の南	赤生土器	壺	-	[20.5]	7.2	中中密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・黄褐色 10YR7/4	ナデリ、ミギギ ハタ目横ミギギ	黒帯内帯に「ノ」字状刺状文(ハタ目横帯)
229	58	55	船状蓋様より東	赤生土器	壺	-	[15.9]	6.2	中中密	良	褐色 7.5YR7/4 褐色 5YR6/6	ナデリ、ミギギ ハタ目	外帯に黒帯
230	58	55	第1航列～第2航列間	赤生土器	壺	-	[31.8]	6.8	中中密	良	赤褐色 5YR4/6 明赤褐色 5YR3/6	ハタ目 ミギギ、ハタ目(縦帯直状)	外帯に黒帯
231	58	55	南北航列の東	赤生土器	壺	-	[32.3]	8.3	中中密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 明赤褐色 2.5YR5/6	ハタ目 ハタ目	外帯に黒帯
232	58	55	南北航列の南	赤生土器	壺	-	[29.5]	9.1	中中密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR5/3	ハタ目、ナデ ハタ目横ミギギ	外帯に黒帯
233	59	56	南北航列の東	赤生土器	壺	(33.2)	[8.5]	-	中中密	良	にぶい・黄褐色 7.5YR7/4 灰褐色 7.5YR6/2	黒帯より不明 ミギギ	白磁器内帯に刺状文
234	59	56	第2航列～第3航列間	赤生土器	壺	(14.8)	[10.2]	-	中中密	良	明赤褐色 5YR3/6 明赤褐色 2.5YR5/6	ハタ目 ハタ目	黒帯2条内帯、黒帯5条の波線・刺状文
235	59	56	土手の北 湿地層との境	赤生土器	壺	-	[9.2]	3.0	中中密	中中良	にぶい・黄褐色 10YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR6/3	ナデリ 黒帯上下ハタ目、下半部黒帯より不明	
236	59	56	西郷土層出土	赤生土器	壺	-	[8.8]	-	中中密	中中良	灰褐色 2.5Y7/2 にぶい・褐色 7.5YR7/3	黄赤土、ナデ、ハタ目 黄赤土、ナデ、ハタ目、ミギギ	5条帯位の線帯直状文、3条波線、5条帯位の線帯直状文、円形穿孔
237	59	56	第2航列周辺 土器集積発出時	赤生土器	壺	-	[4.4]	-	中中密	中中良	灰褐色 5YR5/2 にぶい・褐色 7.5YR5/4	ナデ ミギギ	黒帯3条波線、同帯6条ナデ波線・6条帯直状文

第12表 2地区出土土器・土製品観察一覧表(3)

No.	種別	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	構成	(内)		備考
						口径 (径元値)	器高 (径元値)	底径 (径元値)			色調 (95)	主な調整 (95)	
238	59	56	群杖遺蹟より南	赤生土器	壺	-	12.3	-	中々密	良	紅白・褐色 10YR7/3 灰黒褐色 10YR6/2	赤オサエ、ハナ目、ナデ 赤オサエ、ナデ、ミ オサエ	群杖遺蹟上層による多量 沈殿。4条の群杖遺蹟 上層による黒色沈殿層分 布。群杖遺蹟上層による新 発見。
239	61	56	南北統列の東	赤生土器	壺	24.3	144.7	7.7	中々密	良	黄灰色 2.5Y7/1 褐色 7.5YR7/6	群杖遺蹟、赤オサエ 層ハナ目、ミオサエ	4条遺蹟を底状とし、沈 降・崩壊など、群杖下 層に内面からの存在。 内面から黒褐色粘土 層。
240	62	56	第1統列～第2統 列間	赤生土器	壺	32.0	59.8	8.6	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR7/4 紅白・褐色 7.5YR6/4	ハナ目、ミオサエ ハナ目、ミオサエ	9条遺蹟・4条遺蹟を 底状とし、群杖遺蹟 上層による黒色沈殿 層。字状焼変文。外 面に赤色顔料の塗布
241	63	57	第2統列	赤生土器	甕	(24.2)	[4.0]	-	中々密	良	黄灰色 10YR5/1 紅白・褐色 10YR7/3	丁寧なナデ 丁寧なナデ	群杖遺蹟上層に沈殿層正 上、内面にも塗布
242	63	57	群杖以北 灰黒色砂礫層	赤生土器	甕	-	[7.9]	-	密	良	黄褐色 7.5YR7/2 黄褐色 7.5YR7/2	赤オサエ、ナデ、ハ ナ目式 赤オサエ、ナデ、ハ ナ目	群杖遺蹟に隣接
243	63	57	第1統列～第2統 列間	赤生土器	甕	-	[6.3]	8.4	密	良	紅白・褐色 7.5YR7/3 紅白・褐色 7.5YR7/3	ミオサエ ミオサエ、ヨコナデ	内表面に黒分付痕が
244	63	57	西壁土層出土	赤生土器	甕	-	[11.6]	6.0	中々密	良	褐色 5YR6/6 紅白・褐色 10YR7/2	ナズリ ハナ目	底面に内面からの存在
245	63	57	第2統列周辺 土層黒粘土層	赤生土器	甕	(13.8)	[14.3]	-	中々密	良	褐色 5YR7/6 ~ 灰黒 色 7.5YR6/2	ナズリ ハナ目	外表面に塗布
246	63	57	第3統列～南矢板 間	赤生土器	甕	(19.0)	23.7	4.6	中々密	良	灰黒褐色 10YR6/2 紅白・褐色 10YR7/3	ハナ目、ナズリ ハナ目	外表面に・灰化物質、 底面に付着物
247	63	57	南北統列の西	赤生土器	甕	(19.4)	27.9	(5.4)	中々密	良	黄褐色 7.5YR7/2 ハナ目	ミオサエ(群杖工用ナ ズリ)、ナズリ	底面に内面付着物 付着。外表面に・灰化 物質
248	63	57	南北統列の西 #381の下	赤生土器	甕	(23.6)	33.4	6.2	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR7/4 紅白・褐色 10YR6/4	ナズリ、ナズリ ナズリ	内表面に・灰化物質 付着
249	63	57	第3統列	赤生土器	甕	(19.4)	24.7	6.3	中々密	良	黄褐色 2.5YR6/6 褐色 5YR6/6	ハナ目、ナズリ ハナ目	口縁黒色塗布
250	64	58	第1統列～第2統 列間	赤生土器	甕	(21.6)	31.4	8.0	中々密	良	褐色 5YR6/6 紅白・褐色 7.5YR6/4 ～黄褐色 2.5YR5/6	赤オサエ、ナデ、ナ ズリ ハナ目、群杖工用 によるナデ	内表面に・灰化物質 付着
251	64	58	南北統列の西 #381の下	赤生土器	甕	26.0	36.6	7.8	中々密	良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	ナズリ ハナ目	内表面に・灰化物質 付着
252	64	58	南北統列の西	赤生土器	甕	(21.8)	[17.4]	-	密	良	紅白・褐色 7.5YR6/4 紅白・褐色 7.5YR6/3	ヨコナデ、赤オサエ、 ハナ目(群杖工用ナ ズリ)	内表面に灰化物質付
253	64	58	群杖遺蹟内	赤生土器	甕	(11.4)	[8.9]	-	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR6/4 紅白・褐色 7.5YR6/3	ヨコナデ、ハナ目 ヨコナデ、ハナ目	群杖遺蹟上層に塗布
254	64	58	南北統列下	赤生土器	甕	(19.6)	27.5	6.4	中々密	良	黄褐色 2.5Y7/2 紅白・褐色 10YR6/3	ナズリ、ミオサエ ハナ目	群杖遺蹟文、黒・灰化 物質
255	64	58	第3統列～南矢板 間	赤生土器	甕	(17.4)	[15.6]	-	中々密	良	紅白・褐色 2.5Y6/3 ハナ目、ナズリ	ナズリ、ナズリ ハナ目	外表面に塗布
256	64	58	南北統列の東	赤生土器	甕	(21.2)	[11.1]	-	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR7/4 紅白・褐色 7.5YR6/3	ハナ目、ナズリ ハナ目	底面に付着物発見
257	65	59	南北統列の西	赤生土器	甕	(22.4)	[27.0]	-	中々密	良	黄褐色 7.5YR7/2 褐色 7.5YR6/6	ナズリ ハナ目	口縁と裏面、群杖上層 沈殿層を底状とし、内 表面に・灰化物質付
258	65	59	第1統列～第2統 列間	赤生土器	甕	(18.6)	[30.3]	-	中々密	良	赤 赤 褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6	ナズリ、ナデ ハナ目、ナデ	口縁と裏面、群杖上層 沈殿層を底状とし、内 表面に・灰化物質付
259	65	59	南北統列の西 #381の下	赤生土器	甕	(23.0)	[10.5]	-	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR6/4 紅白・褐色 5YR5/4	ナズリ ハナ目	群杖遺蹟上層によるナ ズリ、後(赤褐色文)、 外表面に塗布
260	65	59	南北統列の西 #381の下	赤生土器	甕	(20.0)	[28.0]	-	中々密	良	紅白・褐色 10YR7/2 紅白・褐色 10YR7/2	ヨコナデ、ハナ目 ヨコナデ	外表面に・灰化物質付
261	65	59	南北統列の西	赤生土器	甕	30.0	44.5	9.5	中々密	良	紅白・褐色 7.5YR7/3 黄褐色 7.5YR5/1	ヨコナデ、ハナ目 ハナ目	底面に剥落文、内表面 に・灰化物質付
262	66	60	南北統列の西	赤生土器	鉢	14.2	[6.8]	-	中々密	良	褐色 5YR6/6 紅白・褐色 7.5YR7/3	ナデ ナデ	口縁と裏面、群杖上層 沈殿層を底状とし、内 表面に・灰化物質付

第13表 2地区出土土器・土製品観察一覧表(4)

No	群別	回別	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	(内) 土質調整 (%)	備考	
						口径 (取元線)	器高 (埋存値)	底径 (取元線)						
263	66	60	畦状遺構内	赤生土器	鉢か	14.2	15.4	-	中々密	中々良	赤い-黄褐色 10YR7/3 明赤褐色 2.5YR5/6	赤オサエ後ヨコナデ、ナデ ハヤ日後ヨコナデ	内面に赤色顔料残存か	
264	66	60	第2机列-第3机列間	赤生土器	甕	-	16.0	-	中々密	良	赤い-褐色 7.5YR7/3 褐色 5YR6/6	赤オサエ後ヨコナデ、ナデ、ミヤナデ	磨製石工具による沈着・流注文	
265	66	60	東北机列の南	赤生土器	鉢	10.4	9.5	4.4	中々密	良	褐色 7.5YR6/6 褐色 10YR6/6	ミヤナ、ケズクハヤ日、ミヤナカ	内面下下ら赤色化粧土塗布か	
266	66	60	第3机列-南瓦板間	赤生土器	鉢	11.8	10.0	3.8	中々密	中々良	赤い-黄褐色 10YR6/3 灰黄褐色 10YR5/2	ハヤ日、ナデ、赤オサエ後ナデ	磨製等により不明	
267	66	60	土手の北 深堀堀との境	赤生土器	鉢	8.7	8.0	2.9	中々	良	赤褐色 5YR 4 赤 赤い-赤褐色 5YR4/4	赤オサエ、ナデ 赤オサエ後ナデ	内面一部に磨粒着	
268	66	60	第1机列-第2机列間	赤生土器	鉢	11.2	9.4	2.9	中々密	良	赤い-褐色 7.5YR6/3 灰黄褐色 10YR6/2	ハヤ日 ナデによる磨粒着、ハヤ日		
269	66	60	第2机列の南	赤生土器	鉢	10.2	11.8	5.8	中々密	良	灰黄褐色 10YR6/2 赤い-赤褐色 5YR5/4	ミヤナ ハヤ日	表面に布目着か	
270	66	60	畦状遺構	赤生土器	鉢	-	19.1	4.5	中々密	良	灰褐色 2.5Y5/1 褐色 5YR6/3	ミヤナ ハヤ日後ミヤナ		
271	66	60	第2机列周辺土器集積地出土時	赤生土器	鉢	-	12.2	-	中々密	良	褐色 7.5YR7/3 赤い-赤褐色 5YR5/4	ハヤ日、一部ミヤナ ハヤ日		
272	66	60	第1机列-第2机列間	赤生土器	鉢	32.6	26.3	9.0	中々密	良	黄褐色 2.5Y7/2 褐色 7.5YR7/6	ハヤ日、ナデ、ケズクハヤ日、ミヤナ		
273	66	60	東北机列の西土器集積地内	赤生土器	鉢	28.0	29.0	17.2	中々密	良	灰褐色 7.5YR6/2 褐色 7.5YR7/6	ハヤ日、赤オサエ、ナデ ハヤ日	4条単位で磨製石工具による沈着・流注文	
274	67	60	畦畔土手内 畦畔以南	赤生土器	高杯	-	7.9	-	裾部 12.2	中々密	中々良	赤い-黄褐色 10YR7/4 赤い-褐色 7.5YR7/4	ナデ	
275	67	60	東北机列の内	赤生土器	高杯	-	16.7	-	裾部 11.2	中々密	中々良	赤褐色 2.5YR2/1 明赤褐色 5YR5/6	ミヤナ、新部・摩塚により不明 ミヤナ、ヨコナデ	
276	67	60	第2机列周辺土器集積地出土時	赤生土器	高杯 又は鉢	-	16.1	-	裾部 18.8	中々密	良	赤い-褐色 7.5YR 7.4 赤い-褐色 7.5YR7/3	ハヤ日、ヨコナデ ハヤ日、ヨコナデ	
277	67	61	西壁土層出土	赤生土器	高杯	-	17.8	-	裾部 16.6	中々粗	中々良	(新部) 褐色 10YR4/1 赤い-褐色 7.5YR6/4	ミヤナ 新部により不明	新発見(旧発見工具か)、測定10×10cmの単位
278	68	61	畦畔出土時	赤生土器	腹無文土器	-	3.3	-	中々密	中々良	赤い-褐色 7.5YR5/3	ナデ	白磁器類外面に新部三陶製民家の付着	
279	68	61	第2机列-第3机列間	赤生土器	把手	長さ 5.5	-	厚さ 2.3	密	良	赤い-黄褐色 7.5YR5/3 赤い-黄褐色 10YR7/3 赤い-黄褐色 10YR7/3	赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ナデ		
280	68	61	第2机列周辺土器集積地出土時	赤生土器	把手	-	3.9	厚さ 1.4	中々密	良	赤い-黄褐色 10YR6/3 赤い-黄褐色 10YR6/3	赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ナデ		
281	68	61	畦状遺構横切出時	赤生土器	ミニチュア土器(鉢形)	-	12.6	2.1	中々密	良	黄褐色 2.5Y5/1 赤い-黄褐色 10YR6/3	赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ハヤ、ナデ	内装面に赤色顔料残存か	
282	68	61	土手の北 深堀堀との境	赤生土器	ミニチュア土器(甕形)	4.7	6.8	(1.1)	中々密	中々良	赤い-黄褐色 10YR7/2 灰黄褐色 10YR5/2	赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ナデ		
283	68	61	第2机列-第3机列間	赤生土器	ミニチュア土器(甕形)	5.2	7.1	1.35	密	良	明褐色 7.5YR5/6 赤い-黄褐色 10YR7/3	ナデ 赤オサエ、ナデ	成形中や粗製	
284	68	61	第2机列周辺土器集積地出土時	赤生土器	ミニチュア土器(甕形)	(4.5)	6.6	-	中々密	良	赤い-黄褐色 10YR6/3 赤い-黄褐色 10YR7/3	赤オサエ、ナデ 赤オサエ、ナデ	片取	
285	68	61	畦畔土手内 畦畔より南側	土製品	分割形土製品	長さ 17.2	幅 17.2	厚さ 1.7	中々密	良	(正面) 浅黄色 2.5Y7/3 (裏面) 灰色 2.5Y2/1	(正面) ナデ (裏面) ナデ	正面竹質工具による2列の連続刺突文	
349	78	61	南トシ以南 南端部	赤生土器	煎餅甕	4.7	7.1	3.6	密	良	赤い-黄褐色 10YR7/2 赤い-褐色 7.5YR7/4 赤い-褐色 7.5YR6/4	ナデ ハヤ日後ミヤナ 赤オサエ、ナデ、絞リ麻	蓋受け用の2個一対の穿孔孔状、外面に黒質	
350	78	61	南トシ以南 南端部	赤生土器	支脚	-	13.9	(4.6)	中々密	良	明赤褐色 5YR5/6	赤オサエ、ハヤ日	内面に磨粒着	

第14表 2地区出土石器・石製品観察一覧表

No.	種別	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重量 (g) [現存値]	石材	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]			
286	69	61	靴状遺構より北	石鏝	1.5	1.05	0.3	石2	安山岩	四基無溝式
287	69	61	靴状遺構内	石鏝	1.5	1.6	0.25	0.3	安山岩	平基無溝式
288	69	61	土手内 靴状遺構より南	刮器	3.9	8.25	1.4	34.8	安山岩	正面上部・左端部に原産面残存。金山(現出所)産石材か
289	69	61	杭州岡古西	磨石・磨石	9.1	8.2	4.8	522	石英斑岩	ほぼ全面に磨痕。正面中央部に浅い縦打痕
290	69	61	土手内 靴状遺構より南	磨石	19.3	11.0	5.3	[743]	石英斑岩	

第15表 2地区出土木器・木製品観察一覧表(1)

No.	種別	図版	出土場所	種類	法量 (cm)			特徴	備考
					長さ [現存値]	幅 [現存値]	厚さ [現存値]		
187	47	62	SK 5	伐採木	37.0	12.0	11.2	崩壊残る 3方向からの打ち込みによる 伐採痕が残る 芯材材	サクラ属
207	51	62	SK 1	杭	19.2	4.7	1.5	板状	
208	51	62	SK 3	杭	26.0	3.9	2.0	断面長方形 板目材	
209	51	68	S D 1	板材	98.5	8.8	1.5		
291	70	62	第1坑内確認	杭	26.2	2.6	1.2	板目材か	
292	70	62	埋灯下	木部	[19.7]	6.1	0.8	用途不明 へう状 板目材	
293	70	62	第3坑列~南欠板列	杭	16.5	7.5~4.7	6.0~4.3	板目材 穿孔あり	モミ属
294	70	62	北欠板列の北 埋地帯内	木部	[15.6]	[2.9]	[1.2~ 3.3]	孔径 2.6 cm、深 2.5 cm	コナラ属アカガシ亜属
295	70	62	第1坑列~第2坑列 間	木部	[46.4]	[13.6]	3.5	舟形のくり抜き 材不明	クスノ科類
296	71	63	第1坑列	杭	28.0	4.0	2.8	先端部五角形 板目材か	
297	71	63	第1坑列	杭	[25.2]	5.2	2.2	断面長方形 板目材	
298	71	63	第1坑列	杭	28.6	6.7	2.8	断面長方形 板目材	コナラ属コナラ類
299	71	63	第1坑列	杭	29.9	8.9	2.6		
300	71	63	第1坑列	杭	[24.5]	4.1	3.5		
301	71	63	第3坑列	杭	30.4	8.0	5.0	断面方形 板目材	
302	71	63	第3坑列	杭	29.2	6.5	3.7	断面長方形 板目材	
303	71	63	第3坑列	杭	33.2	5.8	4.4	断面方形 板目材	
304	71	63	第3坑列	杭	23.2	4.0	3.3	板目材	
305	71	63	第3坑列	杭	[17.7]	7.2	3.5	長方形 板目材	
306	71	63	靴状遺構 土手内	杭	24.3	5.5	3.5	芯材材	
307	71	63	第3坑列	杭	35.1	7.2	3.1	長方形 板目材	
308	71	63	第3坑列	杭	[45.6]	7.2	3.8	大型 板目材	
309	72	64	第2坑列	杭	42.3	9.0	3.2	長方形 板目材	コナラ属コナラ類
310	72	64	第2坑列	杭	33.0	4.2	2.1	板目材	
311	72	64	第2坑列	矢板	42.5	[2]	4.5	板目材	
312	72	64	第2坑列	杭	30.5	6.8	2.8	板目のまま。先端部加工なし。 断面三角形	
313	72	64	第2坑列	杭	37.8	9.5	5.0	板目材	
314	72	64	第2坑列	杭	35.8	10.0	3.4	板目材	
315	72	64	第2坑列	杭	37.5	7.8	5.0		
316	72	64	第2坑列	杭	53.7	9.0	5.1	大型 先端四面をカット 板目材	コナラ属コナラ類
317	72	64	第2坑列	矢板	[37.5]	17.8	2.1~0.4	先端部に斜りこみあり 断面品を転用か 板目材	クスノ科類
318	73	65	南北坑列	杭	[21.5]	6.5	3.3	断面長方形 板目材	
319	73	65	南北坑列	杭	27.9	6.4	1.8	断面長方形 板目材	
320	73	65	南北坑列	杭	22.8	3.3	3.2	板目材	

第16表 2地区出土土器・木製品観察一覧表(2)

No	測回	図版	出土場所1	種類	法量 (cm)			特徴	備考
					長さ [残存]	幅 [残存]	厚 [残存]		
321	73	65	南北杭列	杭	[26.5]	6.2	2.6	断面長方形	
322	73	65	南北杭列	杭	30.6	7.4	3.7	先端四角形に加工 榫目材	
323	73	65	南北杭列	杭	27.3	5.0	5.0	両材	
324	73	65	南北杭列	杭	32.1	8.5	4.1	先端四角形 榫目材	
325	73	65	南北杭列	杭	33.0	7.8	4.1	先端部五角形に加工 榫目材	
326	74	65	南次板列	次板	[32.5]	9.2	1.8	榫目材	
327	74	65	南次板列	次板	[47.3]	16.2	3.3	榫目材	
328	74	65	南次板列	次板	48.4	11.9	3.3	榫目材	
329	74	65	南次板列	次板	47.0	[24]	3.3	榫目材	コナラ属アカガシ亜属
330	74	65	南次板列	次板	42.3	[18.0] 測定 22.0	3.4		
331	74	63	南次板列	杭	26.2	3.9	4.1	榫目材	
332	74	63	榎野内 南次板列の北	杭	20.8	6.5	4.5	芯材を利用	
333	75	66	北次板列	次板	[56.0]	22.0	3.4	榫目材	コナラ属アカガシ亜属
334	75	66	北次板列	次板	46.5	19.6	2.0	榫目材	
335	75	66	北次板列の北 杭列	杭	46.2	5.8	2.8	榫目材か	
336	76	66	北次板列の北 杭列	杭	38.8	7.3	2.8	先端部五角形 芯材	
337	76	66	北次板列の北 杭列	杭	[36.0]	7.1	3.3	芯材	
338	76	66	北次板列の北 杭列	杭	34.0	6.7	4.1	芯材	
339	76	66	北次板列の北 杭列	杭	41.2	5.5	3.4	先端部 芯材を利用	
340	76	66	北次板列の北 杭列	杭	43.1	8.8	6.8	芯材	
341	76	66	北次板列の北 杭列	杭	31.7	8.1	4.5	榫目材か	
342	76	66	北次板列	杭	[34.9]	5.5	4.2	芯材または榫目材か	
343	76	66	北次板列の北 杭列	杭	29.4	5.8	3.6	芯材を利用 断面三角形	
344	76	66	北次板列	杭	[28.6]	6.1	3.5 残存品	榫目材	
345	76	66	北次板列の北 杭列	杭	[30.8]	6.9	4.7	芯材を利用	
346	76	67	北次板列の北 杭列	杭	[22.8]	6.0	5.0		
347	76	67	北次板列の北 杭列	杭	19.6	4.7	2.4	断面長方形 榫目材 芯材	
348	76	67	北次板列の北 榎野野内	杭	15.0	3.0	3.0		
351	80	67	南トシ以南	杭	[28.4]	8.0	3.6	樹皮残存 長方形 榫目材	ツブラジイ
352	80	67	南トシ以南	杭	34.1	7.2	3.5	断面三角形 榫目材	
353	80	67	南トシ以南	杭	38.4	5.2	4.3		
354	80	67	南トシ以南	杭	34.9	5.5	3.6		
355	80	67	南トシ以南	杭	49.4	7.3	5.7	先端部折れあり 芯材	
356	80	67	南トシ以南 南端部	杭	[13.1]	4.8	3.9	榫目材	
357	80	67	南トシ以南	杭	20.7	5.5	3.5	断面長方形 榫目材	
358	80	67	南トシ以南	杭	[19.1]	4.7	3.5	断面長方形	
359	80	67	南トシ以南	杭	[15]	6.2	3.5	断面長方形 榫目材	
360	80	67	南トシ以南 南端部	杭	[19.9]	4.5	2.0	加工痕明顯	
361	80	68	南トシ以南	杭	15.8	3.8	3.8	枝材をそのままカットし杭とする 亀裂あり 芯材	
362	80	68	南トシ以南 南端部	杭	26.3	7.1	5.4	芯材	
363	80	68	南トシ以南 南端部	杭	19.7	5.5	2.5	断面長方形 榫目材	
364	80	68	南トシ以南 南端部	杭	[19.2]	6.0	3.1	断面長方形 榫目材	
365	80	68	南トシ以南 南端部	杭	23.7	8.2	2.7	榫目材か	
366	80	68	南トシ以南 南端部	杭	[22.4]	6.0	3.9	断面長方形 芯材	
367	81	68	南トシ以南 南端部 調査区西壁	板材	85.8	11.3	1.5	流れ榫目材か	
368	81	68	南トシ以南 南端部 調査区西壁	板材	85.5	12.5	2.5	表面面に加工痕 流れ榫目材か	モミ属
369	81	68	南トシ以南 南端部	板材	85.5	8.0	1.7	片面に加工痕残る 流れ榫目材	
370	81	68	南トシ以南 南端部	板材	[23.2]	12.8	1.5	流れ榫目材	
371	81	68	南トシ以南 南端部	板材	21.3	26.4	1.5	表面加工痕明顯 榫目材	モミ属
372		62	SK 2	杭か	49	4	4	先端部炭化	アカガシ

IV 自然科学分析

1 はじめに

今回の調査成果をまとめるにあたって、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、遺跡の性格、年代の参考資料を得ることを目的として自然科学分析を行なった。実施した分析は、土壌分析、樹種種実同定分析、年代測定である。土壌分析は、1地区縄文時代包含層、2地区弥生時代の杭列、畦状遺構周辺の堆積層の土壌分析(花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析)を行うことで、遺跡をとりまく古環境の状況を把握するために実施した。また調査では、縄文時代貯蔵用土坑から出土したドングリをはじめとする様々な種実および木片が出土したことから、樹種種実同定をし、さらに土坑埋土の洗い出しによる種実分析も行った。またその中の一部について年代測定を実施した。

分析結果については、複数の成果報告書として提出されているが、一部内容に重複するところがあることから、これらの成果を分析ごとに整理し、内容を再構築して以下に掲載する。なお文章中の遺物番号は、本報告で記述する遺物番号と同じである。

2 土壌分析

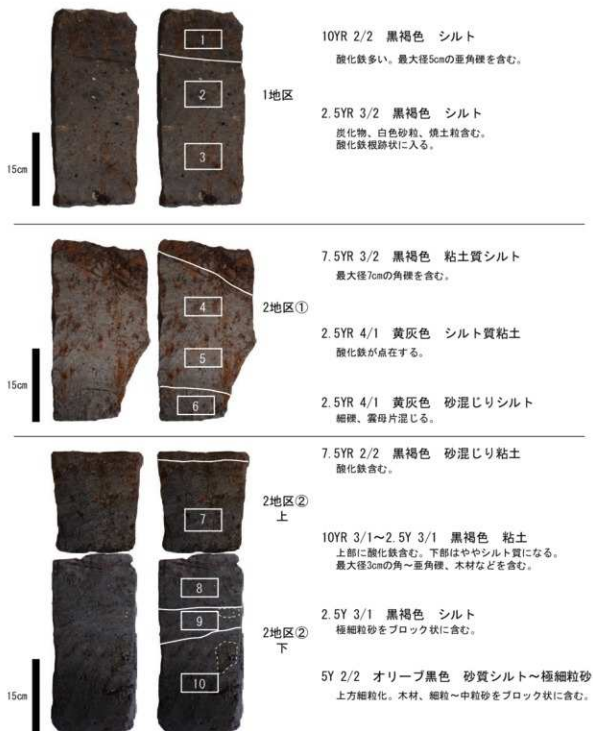
1. 試料

本分析調査では、古環境や水田利用などに関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。試料分析に用いるブロック試料は、1地区、2地区①、2地区②より採取されている。1地区のブロック試料は、縄文時代の土器が出土した黒色層およびその下層の灰オリーブ色層より採取されている。試料を観察した結果、層厚 40cmの試料で2層に分層され、上層は黒褐色のシルトからなり、酸化鉄が多く、最大径 5cmの亜角礫を含む。下層は黒褐色のシルトからなり、炭化物、白色砂粒、焼土粒含み、酸化鉄が根跡状に入る。

2地区①は、調査区北側の湿地堆積とみられる堆積物の境にみられた杭列、畦状遺構より南側で、弥生期のこれより新しい可能性のある堆積層より採取されている。試料を観察した結果、層厚 37cmの試料で3層に分層され、上層は黒褐色の粘土質シルトからなり、最大径 7cmの角礫を含む。中層は黄灰色のシルト質粘土からなり、酸化鉄が点在する。下層は黄灰色の砂混じりシルトからなり、細礫、雲母片が混じる。

2地区②は、弥生時代後期の畦状遺構より北側の湿地堆積層より採取されている。試料は上下2点のブロックからなり、②上が層厚 20cm、②下が層厚 36cmの合計 56cmで、4層に分層される。最上層は黒褐色の砂混じり粘土からなり、酸化鉄含む。その下位層は黒褐色の粘土からなり、上部は酸化鉄含み、下部はややシルト質になる。最大径 3cmの角～亜角礫や木材などを含む。その下層は黒褐色のシルトからなり、極細粒砂をブロック状に含む。最下層はオリーブ黒色の砂質シルト～極細粒砂からなり、上方にむかって細粒化する傾向が認められる。木材や細粒～中粒砂がブロック状に含まれる。

これらのブロック試料から、10点の土壌を採取し、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。試料の観察結果および試料採取位置を第82図に示す。



第82図 ブロック試料観察結果、試料採取位置

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満ちし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4~5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入

剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

顕鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する(化石の少ない場合は、この限りではない)。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)、Lange-Bertalot(2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかにいったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pH に対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定性は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、藤木・

小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ボリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを製作する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を第17表に示す。2地区①の試料番号4、6、2地区②の試料番号7、8、10からは珪藻化石が産出したが、その他は無化石であった。また、産出をみた試料も産出数は全体的に少なかった。保存状態は、全体的に壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。

1地区の試料番号1～3は、無化石であった。

2地区①の試料番号4からは、1個体のみ産出した。産出した分類群は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp. である。

試料番号5は、無化石であった。

試料番号6からは、26個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみである。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia viridis*、止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Stauroneis phoenicenteron* var. *signata*、流水不明種の *Pinnularia* spp. 等である。

2地区②の試料番号7からは3個体のみ産出した。産出した分類群は、淡水生種で流水不明種の *Caloneis* spp.、*Neidium* spp.、*Stauroneis* spp. 等である。

試料番号8からは26個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみである。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Fragilaria ulna*、*Rhopalodia gibba*、流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Stauroneis* spp. 等である。

試料番号9は、無化石であった。

表17表 珪藻分析結果

種 類	生態性		環境 指標種	1地区			2地区①			2地区②				
	場分	pH		1	2	3	4	5	6	上	下	7	8	9
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Anomooneis gomphonemacea</i> (Grun.) H Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	7	-	2	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-	3	-	3	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	3	-	1	-	2	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	8	1	1	-	5	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	1	-	5	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	3	-	3	-	7	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					0	0	0	1	0	26	3	26	0	21
珪藻化石総数					0	0	0	1	0	26	3	26	0	21

凡例

場分:場分温度に対する適応性

Euh:海水生種

Euh-Meh:海水生種-汽水生種

Meh:汽水生種

Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種

Ogh-hil:貧塩好塩性種

Ogh-ind:貧塩不定性種

Ogh-hob:貧塩好塩性種

Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性

al-bi:真アルカリ性種

al-il:好アルカリ性種

ind: pH不定性種

ac-il:好酸性種

ac-bi:真酸性種

unk: pH不明種

流水:流水に対する適応性

l-bi:真止水性種

l-ph:好止水性種

ind:流水不定性種

r-ph:好流水性種

r-bi:真流水性種

unk:流水不明種

試料番号 10 からは 21 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみである。産出した種は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp., *Pinnularia* spp., *Stauroneis* spp. 等である。

(2) 花粉分析

結果を第 18 表、第 83 図に示す。花粉化石の産出状況は、試料により大きく異なる。

1 地区の試料番号 1～3 からは、花粉化石の産出状況が悪く、わずかに検出される花粉化石の保存状態も悪い。木本花粉ではモミ属、トウヒ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属、カラスザンショウ属、草本花粉ではナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科が、わずかに認められる程度である。

2 地区①の試料番号 4～6 も、花粉化石の産出状況・保存状態が悪い。検出された種類は、木本花粉のモミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科である。

2 地区②の試料番号 7～10 からは、保存状態はやや悪い～悪いものの、花粉化石が多産する。花粉化石群集はいずれの試料も類似しており、マツ属、アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、クリ属、シイ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。多産するイネ科には、栽培種のイネ属に形態が類似する個体(以下、イネ属型とする)も含まれていたが、イネ科全体に占めるイネ属型の割合は 14～20%程度である。また、水湿地生植物は、ミズアオイ属をはじめ、オモダカ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、デンジソウ属、

アカウキクサ属などが確認された。

(3) 植物珪酸体分析

結果を第19表、第84図に示す。試料10点からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態が概ね悪い。

1地区は、植物珪酸体含量が下位から上位にかけて増加する。メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などの同様な分類群が検出され、タケ亜科の産出が目立つ。なお、試料番号1ではイネ属の機動細胞珪酸体が僅かに産出する。イネ科起源の他に樹木起源としてクスノキ科の葉部珪酸体もみられ、試料番号2で多い。

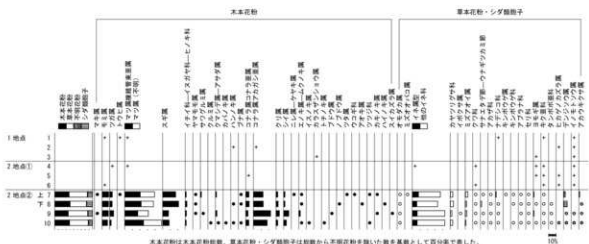
2地区①の試料番号4～6では、植物珪酸体含量が試料番号6から試料番号5にかけて減少するが、試料番号4で再び増加する。各試料からイネ属が僅かながらも産出し、特に試料番号4では短細胞珪酸体も産出し、珪化組織片として糊殻に形成される珪酸体も検出される。また1地区と同様な分類群が検出され、タケ亜科の産出が目立つ傾向が見られる。樹木起源は、クスノキ科の葉部珪酸体がみられる。

2地区②の試料番号7(②上)および試料番号8～10(②下)でも、2地区①と同様な分類群が見られ、タケ亜科の産出が目立つ。各試料からは僅かながらイネ属が産出する。また珪化組織片として、試料番号10を除いて珪酸体も検出され、試料番号7や9では短細胞列もみられる。樹木起源は、クスノキ科の葉部珪酸体が試料番号9を除いてみられる。

なお、試料10点からはイネ科起源(棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源)も認められるが、分類群の特定には至らない。

第18表 花粉分析結果

種 類	1地区			2地区①			2地区②		
	1	2	3	4	5	6	上	下	10
木本花粉									
マキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
モミ属	1	-	-	-	-	1	19	19	17
ツグ属	-	-	-	1	-	-	8	8	11
トウヒ属	1	-	-	-	-	-	1	-	-
マツ属(雄雄黄東亞属)	1	-	-	-	-	-	44	47	34
マツ属(不明)	-	-	-	-	-	-	42	37	29
スギ属	-	-	-	-	-	-	30	47	18
イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	3	5	3
ヤマモミ属	-	-	-	-	-	-	2	1	2
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	3	-	1
ウルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クマシラギ属—アサギ属	-	-	-	-	-	-	3	-	4
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属	-	-	-	-	-	-	2	2	1
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	1	-	-	9	10	6
コナラ属アカシガ属	-	-	-	-	-	-	28	29	46
クワ属	-	-	-	-	-	-	5	6	9
シイ属	-	-	-	-	-	-	4	4	14
コナラ属—ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	1	2	4
イスノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ノボリ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ツタ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アオキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	1	-	1
カキノキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-
スイズク属	-	-	-	-	-	-	-	1	1
草本花粉									
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	1	1	3
ミズオハコ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イネ属型	-	-	-	-	-	-	45	31	36
他のイネ科	-	-	-	2	-	-	170	154	210
カヤツリダサ科	-	-	-	-	-	-	21	25	13
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	21	10	13
クワ科	-	-	1	-	-	3	1	1	2
サナエダ草—ウナギツカ草類	-	-	-	-	-	-	4	9	1
アカザ科	-	-	-	-	-	-	1	1	2
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-	7	2	2
キンポウゲ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	2	3	1
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	1	1	2
セリ科	-	-	-	-	-	-	3	1	2
ヨモギ属	-	-	1	2	1	-	6	2	6
キク科	1	-	-	10	1	7	2	1	3
タンポポ草科	-	-	-	-	-	-	-	1	2
不明花粉	-	-	-	1	-	1	6	2	5
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	-	2	-	-	1	1	-	-	-
デンシソウ属	-	-	-	-	-	-	12	26	2
イノトウモロコシ属	1	1	4	1	1	3	-	-	1
アカウキクサ属	-	-	-	-	-	-	7	4	3
他のシダ類胞子	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	18	13	29	20	45	53	54	58	64
木本花粉	3	2	1	2	1	1	218	221	201
草本花粉	2	0	1	15	2	10	287	243	298
不明花粉	0	0	0	1	0	1	6	2	5
シダ類胞子	16	16	94	91	47	47	74	89	76



第83図 花粉化石群集

第19表 植物珪酸体含量

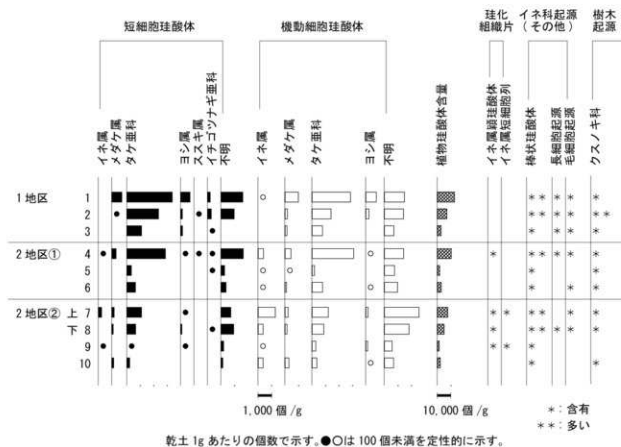
分類群	1地区			2地区①			2地区②			
	1	2	3	4	5	6	上 7	下 8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ属	-	-	-	<100	-	-	200	-	<100	-
メダケ属	800	<100	-	300	-	-	200	100	-	200
タケ亜科	3,400	2,400	1,100	2,900	400	700	1,100	700	<100	200
ヨシ属	700	100	200	<100	-	-	<100	100	<100	-
ススキ属	-	<100	-	<100	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	200	300	<100	<100	<100	-	-	<100	-	-
不明	1,600	1,000	-	1,700	300	400	700	1,000	200	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ属	<100	-	-	400	<100	<100	1,300	400	<100	400
メダケ属	1,000	200	200	500	<100	100	200	200	-	300
タケ亜科	2,900	1,400	800	3,100	200	800	1,200	900	300	400
ヨシ属	800	200	-	<100	-	<100	200	-	100	<100
不明	1,500	1,400	700	1,400	800	1,000	2,600	1,900	600	700
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	6,700	4,000	1,400	5,200	700	1,100	2,300	1,900	400	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,300	3,200	1,700	5,500	1,100	2,100	5,500	3,400	1,100	1,800
植物珪酸体含量	13,000	7,200	3,100	10,700	1,800	3,200	7,800	5,300	1,500	2,400
珪化組織片										
イネ属珪酸体	-	-	-	*	-	-	*	*	*	-
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	*	-	*	-
イネ科起源(その他)										
棒状珪酸体	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
長細胞起源	*	*	*	*	*	*	-	*	-	-
毛細胞起源	*	*	*	*	*	*	*	*	-	-
樹木起源珪酸体										
クスノキ科	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3)<100:100個/g未満。

4)-:未検出、*:含有、** :多い。



第 84 図 植物珪酸体含量

4. 考察

(1) 各地点の堆積環境

1地区の試料番号 3～1 は無化石であったため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気にさらされると、短期間に分解消失することがわかっている。本 3 試料の場合も、堆積した珪藻化石が好気的な環境下等によって、分解・消失した可能性が高い。

2地区①の試料番号 6 から産出した分類群は、淡水生種のみである。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia viridis*、止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Stauroneis phoenicenteron* var. *signata*、流水不明種の *Pinnularia* spp. などである。産出した種の生態性について述べると、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia viridis* は、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に特徴的に認められる。止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky (1968) は最適 pH を 6.8 に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。流水不定性種とした *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* は、塩分、pH および流水のいずれに対しても不定であるが、承名変種の *Stauroneis phoenicenteron* に伴って生育していることが多いため、概ね湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種と考えられる。流水不明種の *Pinnularia* spp. は、数種類で構成されるが、これら本属は湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

本試料は珪藻化石の産出数が少なかったため、産出した種の生態性や群集の特徴で堆積環境を推定

することは危険であるが、若干の考察をすると、湿地性種が複数種産出したことから、もともとは湿地環境であった可能性が高い。ただし、堆積後に好気的な環境下にさらされるなどにより、ほとんどの珪藻化石は分解・消失した可能性が考えられる。

試料番号 5 は無化石であり、試料番号 4 も産出数が非常に少ない。本 2 試料の場合も、堆積した珪藻化石が、好気的な環境下等によって、分解・消失した可能性が高い。

2 地区②の試料番号 10 から産出した種は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp.、*Stauroneis* spp. などである。産出した種の生態性(前述していない種)をみると、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Stauroneis* spp. は、数種類で構成されるが、これら本属は湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

本試料は珪藻化石の産出数が少なかったが、若干の考察をする。本試料から湿地性種が複数種産出したことから、もともとは湿地環境であった可能性が高いが、堆積後に好気的な環境下にさらされるなどにより、珪藻化石が分解・消失したと考えられる。

試料番号 9 は無化石のため、堆積環境は不明である。

試料番号 8 から産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Fragilaria ulna*、*Rhopalodia gibba*、流水不明種の *Stauroneis* spp. などである。産出した種の生態性をみると、淡水生種で流水不定性種の *Fragilaria ulna* は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一つで広範のさまざまな水域から見出される。流水不定性種の *Rhopalodia gibba* は、貧塩不定、好アルカリ性、流水不定種であり、沼沢地から湿地等に比較的広範に認められる種である。

本試料について若干の考察をすると、本試料からは湿地性種が複数種産出したことから、もともとは湿地環境であった可能性が高い。本試料も、堆積後に好気的な環境下などで、珪藻化石が分解・消失した可能性が考えられる。

試料番号 7 は産出数が非常に少なく、淡水生種で流水不明種の *Caloneis* spp.、*Neidium* spp.、*Stauroneis* spp. などが認められた。いずれも数種類で構成され、*Neidium* spp.、*Stauroneis* spp. は湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。よって、試料も湿地環境であった可能性がある。

以上のことをまとめると、珪藻化石の産出が認められた 2 地区①、2 地区②は、珪藻化石の多くが消失した状態であるため参考程度ではあるが、いずれの層も湿地環境であった可能性が示唆される。

(2) 古植生

花粉分析の結果をみると、1 地区と 2 地区①では花粉化石がほとんど検出されず、古植生推定を行うことができなかった。わずかに検出された花粉化石は、花粉外膜が破損・溶解しているなど、保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998 など)。珪藻分析の結果からも、これらの層で好気的環境下にさらされたか可能性が指摘される。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。一方、植物珪酸体分析の結果では、各地点の試料から豊富に検出される。これらを踏まえた上で、古植生を検討する。

縄文時代包含層がみられる 1 地区では、植物珪酸体含量が下位から上位にかけて増加する傾向が見られた。よって、土層生成の際に安定してイネ科の生育が進み、植物珪酸体が蓄積された可能性が考えられる。花粉分析の結果も踏まえると、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本類が生育していたと推定される。また、モミ属、トウヒ属、マツ属、などの針葉樹、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属、カラスザンショウ属、クスノキ科などの広葉樹が、周辺の森林植生などを構成していたと可能性がある。

弥生時代後期の畦畔施設に伴う堆積層である 2 地区②では、各試料から花粉化石が多産する。いずれの層準も群集組成が類似しており、マツ属、アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、シイ属などを伴う。このうちアカガシ亜属はシイ属などとともに、暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、スギ属などは温帯針葉樹林の構成要素である。マツ属複雑管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は、崩落地や海岸沿いなど、他の広葉樹の生育しにくい場所にも生育できるほか、伐採地に最初に侵入する二次林要素でもある。コナラ亜属は二次林などにみられる他、河川沿いなどに生育する種も含む。よって、当時の丘陵上などにアカガシ亜属、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布しており、部分的にモミ属、スギ属などの針葉樹も生育していたと思われる。低地部や才賀川沿いなどには、コナラ亜属やクリ属なども生育していたと推測される。

草本類では、メダケ属を含むタケ亜科やイチゴツナギ亜科などのイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科など、開けた明るい場所を好む種を含む分群が確認されたことから、調査地点や周辺森林の林縁などに由来すると思われる。また、オモダカ属、ヨシ属、ミズアオイ属、ミズオオバコ属、イボクサ属などの水湿地生草本、デンジソウ属、アカウキクサ属などの水生シダ類が確認されたことから、調査区周辺にこれらが生育する水湿地が存在したことがうかがえる。

弥生時代後期の畦畔遺構より新しい時期の堆積層の可能性のある 2 地区①では、植物珪酸体含量に増減が見られ、堆積速度の違いなどにより植物珪酸体の蓄積に違いが生じたと考えられる。得られた群集から、メダケ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本類、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属、クスノキ科などの木本類が生育していたと考えられる。

(3) 水田利用について

栽培種のイネ属についてみると、1 地区の試料番号 1 からイネ属珪酸体が産出するが、後代の上位層からの落ち込みである可能性が否定できない。今後さらに発掘調査所見を含めて検討する必要がある。2 地区②でもイネ属に由来する植物珪酸体、穎珪酸体、短細胞列が産出した。他の地点と比較するとイネ属の含量が多いが、一般的な水田耕作土と比較すると含量が少ない。花粉分析で多産したイネ科には、イネ属型花粉が含まれていたが、イネ科全体に占めるイネ属型の割合は多くても 20%程度であった。これらの産状を見る限り、当時の周辺で稲作が行われていたことは指摘できるが、調査地点での稲作を積極的に支持することは難しい。ただし、稲作が行われていたとすれば、今回の産状はコメの収穫後に植物体が外部へ持ち出されたことや耕作期間が短かったことを反映する可能性が有る。また、オモダカ属、ヨシ属、ミズアオイ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、デンジソウ属、アカウキクサ属な

どは、水田雑草としてもみられる種類であることから、湿潤な環境を利用した水田耕作を行っていた可能性も否定できない。

2地区①では植物珪酸体含量に増減が見られ、堆積速度の違いなどにより植物珪酸体の蓄積に違いが生じたと考えられる。下位から上位にかけての3点からは僅かながらもイネ属が産出した。また、湿潤な場所に生育するヨシ属も認められたことから、土層が形成された頃の周辺に湿地が存在し、そこを利用した水田利用の可能性が考えられる。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,35-47.
- Cholnoky, B. J.,1968,Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewässern. Lehre(Cramer), 699p.
- Desikachary, T. V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras- 600044. 1-13, Plates; 401-621.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アークコアラル企画,155p.
- Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1,920p.
- Hustedt, F.,1937-1938,Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I~III. Arch. Hydrobiol. Suppl.,15,131-809,1-155,274-349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2,845p.
- Hustedt, F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3,816p.
- 伊藤良永・堀内誠示,1989,古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分—,日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,17.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 近藤鎌三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20. Krammer, K.

- and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p. Lange-Bertalot, H., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs*. Witkowski, A.,
- Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: *Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1*. 219 plts. 4504 figs. 925p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. *植生史研究*, 6, 15-30. 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12, 13 集, 91p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第 5 集, 60p.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

3 樹種同定

1. 試料

試料は、①自然木や木製品など 15 点、②横木 1 点、杭 1 点、柱根 1 点、自然木 2 点の計 5 点である。

2. 分析方法

木材試料から数ミリ角のブロックを採取する。ブロックから木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成する。切片の中から状態の良い切片を選び出しガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. ①の結果

①の結果を第 20 表に示す。針葉樹 1 分類群(カヤ)、広葉樹 5 分類群(アカガシ亜属、コナラ亜属、クスノギ節、エノキ属、クスノキ?)に同定される。以下、各分類群の特徴を述べる。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪幅全体も狭い。仮道管内壁に対をなしたらせん肥厚がみられる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列で、細胞高が低い(4~5 細胞高)ものが多い。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔

第20表 樹種同定結果(1)

No.	遺物番号	地区	種類	出土場所1	樹種
1	380	2	木	第1杭列南側の横木	クスノキ?
2	295	2	木器	第1杭列～第2杭列間	クスノキ科
3	379	2	横木	畦状遺構 北矢板列の南側	サカキ?
4	386	2	木	南トレ以南 南端部	クスノキ科
5	384	2	木	南トレ以南 南端部	エノキ属
6	383	2	木	南トレ以南	アカガシ垂属
7	387	2	杭か	SK1	カヤ
8	372	2	杭か	SK2	アカガシ垂属
9	374	2	木	SK2	エノキ属
10	375	2	木	SK6	クスノキ?
11	376	2	木	SK7	アカガシ垂属
12	377	2	木	SK8	アカガシ垂属
13	378	2	木	SK9	アカガシ垂属
14	388	1	木材(自然木)	SX1	クスノキ?
15	389	1	木材(自然木)	SX1	コナラ垂属クスギ節

を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のもの、複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ垂属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外では径を漸減させながら塊状に複合し、接線・斜方向に配列する。単穿孔で、壁孔は交互状。小道管内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・クスノキ? (*Cinnamomum camphora*? (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、2～4細胞幅、10～15細胞高が多い。柔組織は周囲状～翼状。保存状態が悪い個体はクスノキ科とした。

・サカキ? (*Cleyera japonica*? Thunb.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。保存状態が不良であるため、サカキ?とした。

4. ①の考察

樹種同定の結果、針葉樹1分類群(カヤ)、広葉樹5分類群(アカガシ垂属、コナラ垂属クスギ節、エノキ属、クスノキ?、サカキ?)が確認された。カヤは暖地に多い針葉樹で、緻密で強度があるが、成長が遅く大きな木材を得にくい、彫刻や器具材として使われる。アカガシ垂属は暖地に生育する常緑広葉樹である。非常に重硬な木材で、加工が難しい。このため用途は限られるが、硬さを生か

した農具などに使われることが多い。コナラ亜属クヌギ節は河川沿いや人里近くの二次林によくみられる落葉広葉樹で、多湿なところを好む傾向にある。比較的硬質な木材で、成長が早く、大きな木材が得やすい。このことから、建築材、器具材など様々な用途に使われる。また火持ちが良く、火力もあるので薪炭材としても適している。エノキ属も河川や人里によくみられる落葉広葉樹である。木質はやや硬いが、強度は比較的小さい。入手しやすい木材であるため、建築材、器具材、薪炭材などに用いられる。クスノキは暖地に生育する常緑広葉樹で、大木になる。木材は軟らかくて加工しやすく、家具材等として利用される。サカキは暖地に生育する常緑広葉樹である。材質は、緻密で強靱であり、器具材などとして用いられる。

出土木材の傾向として、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の代表的な構成要素であるアカガシ亜属、とクスノキが多く、サカキも含んでいる。これらは現在の遺跡周辺においても自然度の高く、かつ安定した場所に生育する。当時はこれらの常緑広葉樹林が周辺植生の大半を占めており、比較的得やすい木材であったと思われる。エノキ属やクヌギ節は河川沿いに多い木材であり、遺跡の立地条件から考えて周辺で得やすい木材であったと思われる。出土木製品用材データベース(伊東・山田編,2012)をみても、これらの木材は西日本でよく見られる種類である。

5. ②の結果

②の結果を第21表に示す。試料は種類不明の樹皮と、広葉樹4種類(クリ、モクレン属、イチジク属、ナシ亜科)に同定された。以下に検出された種類の形態的特徴を述べる。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・イチジク属 (*Ficus*) クワ科

散孔材で管壁は厚く、道管は大きく、単独および2~4個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性で3~8細胞幅、5~20細胞高。柔組織は帯状でめだつ。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で単独および2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔~階段状、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

・ナシ亜科 (*Rosaceae* subfam. *Maloideae*) バラ科

散孔材で、道管は単独または2~5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔で、壁孔は交互状。内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~20細胞高。

第21表 樹種同定結果(2)

番号	地区	種類	出土場所1	樹種
379	2	横木	畦状遺構 北矢板列の南側	樹皮
385	2	杭	南トレ以南 南端部	クリ
382	2	自然木	南トレ以南 南端部	モクレン属
373	2	自然木	SK1	イチジク属
390	1	柱根	SPI38	ナシ亜科

5. ②の考察

柄はクリ、柱根はナシ亜科、自然木はイチジク属、モクレン属に同定されたほか、横木は樹皮であった。クリは、重硬で水湿に強い木材である。割裂性が良いため加工しやすく、その性質から建築材に向く。また、火力が強く火持ちが良いため、燃料材としても多用される。ナシ亜科も比較的重硬な木材で、構造物としてではなく、装飾材や器具材などに用いられることが多い。

クリは本州全域に分布するが、ナラ類などとともに人里に近くに生育し、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の取替などが行われることにより維持管理される森林で、コナラやクリなど萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。また、イチジク属、モクレン属、ナシ亜科も林縁部などの明るい場所を好み、里山にも分布する。特にイチジク属は暖地に多い種類で、遺跡の立地から考えて調和的である。おそらく、検出された木材はいずれも遺跡周辺に分布しており、木製品は周辺から得た木材を利用していたと考えられる。

4 種実等分析

1. 試料

試料は、2地区の土坑や集石内、土器内から取り上げられた種実同定試料 14 点と、土坑埋土 3 点である。種実同定試料は、保存状態が良好な種実遺体全点を対象として、種実同定を実施する。土坑埋土は、保存状態が良好な葉遺体の分離抽出を試みる他、試料 500g を水洗して種実遺体の抽出同定を実施する。その他、保存状態が良好な昆虫遺体 4 点を対象として、昆虫同定を実施する。試料の詳細は、結果と共に第22～26表に示す。

2. 分析方法

土坑埋土は、堆積物から葉遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、ピンセットや面相筆を用いて、主に完形葉や基部・頂部、特徴的な葉縁部が残存する葉遺体を適宜拾い上げ、エスカルフィルム(三菱ガス化学株式会社製)に挟む。この他、試料 500g を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

種実同定試料および埋土水洗後の試料を、双眼実体顕微鏡(ZEISS 社製; Stemi2000-C)で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体の他、昆虫遺体や土器片などの遺物を抽出する。No.15、16 はカラムシ属果実が多数確認されるため、抽出上限を 100 個とする。

大型植物遺体の同定は、現生標本や藤下(1984)、佐藤(1988)、吉山・石川(1992)、馬場(1999)、伊藤(2001)、徳永(2004)、濱野(2005)、濱野・石井(2007)、田中(2008)、中山ほか(2010)、宮國(2014)、林(2017)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施する。昆虫遺体の同定は、双眼実体顕微鏡下で、付着した土壌を除去しながら、その形態的特徴から種類を同定する。

同定結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数分類群間は、ハイフォンで結んで表示する。また、各分類群の写真を添付し、栽培植物等一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果等を一覧表に併記して同定根拠とする。

分析後は、大型植物遺体や昆虫を分類群別に容器に入れ、約 70%のエタノール溶液で液浸保存する。

第22表 種実等分析結果(1)

番号	産地	品種	出土層	分析種	単位	状態	個数	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	2	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	2	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	12	-	-	-	1)種改良
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	1)種改良
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	6	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	4	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	2	15.46	10.29	-	花柱長2.73mm
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	30	-	-	-	種改良 新由田宮村産
1	391	246区	SK1	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	67	1	19.19	13.87	1)種近代測定片産 花柱長3.82mm
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	12	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	4	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	520	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	36	-	-	-	2)種改良(種改良)
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	11	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	82	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	80	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	25	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	17.28	11.32	-	花柱長3.95mm イマイカシアカシ以外
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	4	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
2	392	246区	SK2	イマイカシ	果実	実部	1	14.64	8.77	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	27	1	19.49	13.19	1)種近代測定片産 花柱長2.07mm
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	46	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	18	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	10	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	15	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	123	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	2	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	14	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	3	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	4	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	1	-	-	-	
3	393	246区	SK3	イマイカシ	果実	実部	2	-	-	-	

第23表 種実等分析結果(2)

番号	産地	品種	出土場所	部位	形状	個数	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	
3	293	290区	SK5	果実	完形	3	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形未満	3	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	花柱欠損	3	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	花柱欠損	2	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形未満	2	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	種子	2	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	1	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	46	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形未満	33	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	40	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	1	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	2	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	1	-	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	1	6.53	-	-		
3	293	290区	SK5	果実	完形	1	44.14	33.89	-	つかれている	
3	293	290区	SK5	果実	完形	3	-	-	9.75	重皮質	
4	394	290区	SK8	果実	完形	6	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	4	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	9	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	2	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	30	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	13	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	99	-	-	-		
4	394	290区	SK8	果実	完形	2	-	-	-		
5	400	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	24.26	19.05	15.02	褐色下部腐蝕	
5	400	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	4	1	23.63	17.68	13.94	表面腐蝕しているが形状類似
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	2	26.50	18.67	12.50	表面腐蝕しているが形状類似	
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	半分	1	-	-	-		
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	2	-	-	-	外層腐蝕	
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	5	-	-	-		
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	7.61	3.44	0.79	-	
6	401	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
7	402	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
7	402	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
7	402	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	4.31	3.34	2.24	-	
7	402	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
7	402	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	73.12	26.89	-	2次物本葉網(13.15mm)	
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	4.19	3.07	1.73	頂部欠損	
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	3	5.09	2.99	1.47		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	2	5.83	2.96	1.01		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	3	4	6.89	3.11	1.35	
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	5	6.67	2.87	1.30		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	6	6.43	2.90	1.12		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	3	7.60	3.09	0.71		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	3	7.18	3.28	0.81		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	-	-	-		
10	404	290区	北一帯トゲ柿生菓石内	種子	完形	1	8.73	4.14	1.11		

第25表 種差等分析結果(4)

番号	遺物番号	地区	出土場所	分類群	部位	状態	個数	柱巻	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
15	207	2405	SK77埋土	フユイココ類	底部	完好	2	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	フユイココ類	底	欠損	6	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	キヤクコ類	底	欠損	31	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	キヤクコ類	底	欠損	3	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	キヤクコ類	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ワカカシ	種子	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ムラサキシキブ属	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ニワトコ	底	欠損	7	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ニワトコ	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	低果樹科/ナ	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イナバネシ(カ)	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イナバネシ(カ)	底	欠損	6	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イナバネシ(カ)	底	欠損	13	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	アサギヤク類	底	欠損	7	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	スナ属	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	スナ属	底	欠損	6	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	スナ属	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	サシムシクワ属	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	カラムシ属	底	欠損	>100	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ギンギン属	底	欠損	2	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ギンギン属	底	欠損	2	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ギンギン属	底	欠損	20	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ギンギン属	底	欠損	6	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ホントウキ草科類	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ホントウキ草科類	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ホントウキ草科類	底	欠損	3	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ナシシコ科(ウシハコ)近縁類	種子	欠損	10	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ナシシコ科(ウシハコ)近縁類	種子	欠損	18	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イヌコズキ属	底	欠損	4	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イヌコズキ属	底	欠損	10	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	シラネイヌコズキ属	底	欠損	11	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ハシバネ属	底	欠損	11	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ナス属	種子	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	ナス科(ハウカチオズキ等?)	種子	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	マメ科(豆)	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	マメ科(豆)	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	マメ科(アサヒ豆?)	底	欠損	6	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	マメ科(アサヒ豆?)	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	マメ科?	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	豆科類?	底	欠損	1	-	-	-	-	
15	207	2405	SK77埋土	イデアシシ近縁類	底	欠損	1	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	アカカシ属(イデアシシ)	底	欠損	2	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	アカカシ属(イデアシシ)	底	欠損	3	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	アカカシ属(イデアシシ)	底	欠損	10	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	シラカシ	底	欠損	2	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	シラカシ	底	欠損	6	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	ウツラライ	底	欠損	16	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	ウツラライ	底	欠損	6	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	ウツラライ	底	欠損	7	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	マメ科(アサヒ豆?)	底	欠損	1	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	マメ科(アサヒ豆?)	底	欠損	4	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	ヒサカキ属	種子	欠損	1	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	フユイココ類	種子	欠損	1	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	フユイココ類	底	欠損	2	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	フユイココ類	底	欠損	1	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	キヤクコ類	底	欠損	20	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	キヤクコ類	底	欠損	6	-	-	-	-	
16	208	2405	SK55埋土	ムラサキシキブ属	底	欠損	1	-	-	-	-	

第27表 精実等出土状況(1)

分類群・部位・状態 基本	品目 遺物 番号	出土 場所	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	合計					
			SK1	SK2	SK3	SK4 墓石内	土器 220	土器 247	墓石内 土器	土器 222	土器 239	土器	SK6 礎土	SK4 礎土	SK7 礎土	SK5 礎土	SK7 礎土	SK6 礎土						
モヒ属	実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	3						
カヤ	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2						
ヤマモモ	核	-	-	-	-	2	1	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	11						
ナツメグシ	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2						
イチイガシ	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	4						
	果実 殻斗	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
	果実	4	82	27	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	119						
イチイガシ近似種	果実 殻斗	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4						
	果実	14	860	230	153	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1361						
アラカン	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	10	-	14						
	果実	10	2	13	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	3	-	30						
アラカン・シラカン	幼葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1						
シラカン	果実	2	3	21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	26						
シラカン?	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	2	9						
	果実	-	-	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	15						
ウラボシガシ	果実	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2						
ウラボシガシ近似種	果実	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
アカガシ・オバネガシ	果実	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4						
アカガシ萼属	幼葉	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2						
	殻斗	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
コナラ属	果実	34	7	7	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2	7	3	1	65						
	果実	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2						
スダジイ	果実	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
ツブラジイ	果実 殻斗	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2						
	果実	-	-	120	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30	140						
クワ	実	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	-	-	-	6						
クワ属	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	10	11						
コウゾ節	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
オオイトビ節	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1						
クヌハト	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
マタタビ近似種	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	1	6						
マタタビ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4	1	9						
ヒサカキ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	5						
ギモ	核	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5						
サクラ節	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	2						
ノイバラ節	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1						
フユイチゴ節	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	3	1	12						
キイチゴ属	核	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	24	26	23	84						
アカメガシワ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2						
サシユウ	種子	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
ハゼノキ・ヤマハゼ	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	13					
トチノキ	果実 種子	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4					
ブドウ属	種子	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	4	4					
ウルクスラ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1					
ブドウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	5	5					
タノキ	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1					
ムラサキシキブ属	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	2	2					
ニゴトコ	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	10	10					
広葉樹(アカガシ萼属?)	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	7	-	17	17					
広葉樹(アオキ?)	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	10	10					
広葉樹	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	5	5					
落葉広葉樹	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1				
イネ	炭化米	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	4	4				
エノコグサ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1					
スズメノヒメ属	果実	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1				
イネ科(シバ類?)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	1	-	7	7	7				
イネ科	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	5	-	18	18	18				
アゼス属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	18	2	27	27			
スズ属	実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	1			
カラムシラ	核	-	-	-	-	8	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	15	26	26		
ヒシ属	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	7	-	23	23	23			
ヤシヨウソウ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1		
カラムシ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	>100	>100	28	228	228	228			
ギシギシ属	果実 花被	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	4	-	-	28	28	28			
ミゾソバ	果実	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	6	-	-	39	48	48	48			
イチイガシ近似種	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2			
ボントクタテ近似種	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	4	4	4	4			
タテ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3	3		
ザクロソウ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	2		
ナリシコ科(ウシバコ近似種)	種子	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	26	-	-	26	26	26	26		
イユコクサ属	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	23	1	-	28	28	28	28		
ムラサキキマムシ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	2		
キジムシ科属	核	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	6	7	7	7	7		
スズメウリ	種子	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4	4	4		
ヒヨクシ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3		
落葉(アロン)型	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3		
マカワ・シロウリ型	種子	-	-	-	-	1	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	8	8	
メロン節	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	
シノ属(エコマ近似種)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	2	2	
シノ属(エコウジ属)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	31	15	-	46	46	46	46		
シロネ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	
メハジキ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	
ナス属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	
ナス科(ハダカホオズキ類?)	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	
メギロギ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	2	
キク科(アザミ属?)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	7	7	7	
キク科(オニタビラコ?)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4	4	4	
キク科	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	
キク科?	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	5	5

第28表 種実等出土状況(2)

番号	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
遺物番号	391	392	393	394	400	401	402	403	404	405	406	395	396	397	398	399	
出土場所	SK1	SK2	SK5	SK8	集石内	土器 220	土器 247	集石内 土器	土器 222	土器 239	土器 SK6	SK4 埋土	SK7 埋土	SK5 埋土	SK8 埋土		合計
分類群・部位・状態																	
昆虫遺体																	
コガネムシ													1				1
オオクロコガネ	1																1
オオクロカメムシ								1									1
マエカドコエンマコガネ									1								1
昆虫類														1			2
その他																	
木材											1						1
炭化材										2							2
二枚貝類(インガイ科?)										20							20
二枚貝類(インガイ目?)										3							3
土器																	1
土塊?																	1
合計																	25g
本種実・葉	72	1062	446	164	5	3	2	1	1	11	0	21	8	104	90	76	2066
草本種実	1	0	0	0	0	11	1	0	13	9	0	1	2	254	184	106	587
大型植物遺体合計	73	1062	451	164	5	14	3	1	14	20	0	22	10	358	274	182	2653
昆虫遺体	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	3	13
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	4	0	0	0	0	1	27

3. 結果

同定結果を 第22～26表、種実等出土状況を第27・28表に示す。また、主な分類群の写真を第92・93図、計測値等を表22～26表に示して同定根拠とする。

17 試料を通じて、裸子植物2分類群(針葉樹のモミ属、カヤ)5個の葉、被子植物67分類群(広葉樹のヤマモモ、ナラガシワ、イチイガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ・ツクバネガシ、アカガシ亜属、コナラ属、スダジイ、ツブラジイ、クリ?、クワ属、コウゾ節、オオイタビ節、クスノキ、マタタビ近似種、マタタビ属、ヒサカキ属、モモ、サクラ節、ノイバラ節、フユイチゴ類、キイチゴ属、アカメガシワ、サンショウ、ハゼノキ・ヤマハゼ、トチノキ、ブドウ属、ウドカズラ、ノブドウ、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、広葉樹(アオキ?や落葉樹等含む複数分類群)、草本のイネ、エノコログサ属、スズメノヒエ属、イネ科(シバ類?他、複数分類群)、アゼスゲ類、スゲ属、カナムグラ、ミズ属、サンショウソウ属、カラムシ属、ギシギシ属、ミゾソバ、イヌタデ近似種、ポントクタデ近似種、タデ属、ザクロソウ、ナデシコ科(ウシハコベ近似種)、イノコズチ属、ムラサキケマン型、キジムシロ類、スズメウリ、ヒョウタン類、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、シソ属(エゴマ近似種)、シソ属-イヌコウジュ属、シロネ属、メハジキ属、ナス属、ナス科(ハダカホオズキ類?)、メナモミ属、キク科(アザミ属?)、オニタビラコ?、他複数分類群)2648個の種実や葉、合計2653個の大型植物遺体が同定される。昆虫遺体は、遺物番号396(SK4)がコガネムシの尾節板、391(SK1)がオオクロコガネの左前翅、404(土器202)がオオクロカメムシの前胸甲板、405(土器239)がマエカドコエンマコガネの前胸甲板に同定される。その他、木材(406(第1杭列～第2杭列間出土土器、本報告には未掲載))、炭化材(405(土器239))、淡水性二枚貝類のイシガイ科?の殻皮(405(土器239))、イシガイ目?の殻皮(406(前述))が確認される。

大型植物遺体の出土個数は、遺物番号391(SK1)が73個、392(SK2)が1062個、393(SK5)が451個、394(SK8)が164個、400(集石層内)が5個、401(土器220)が14個、402(土器247)が3個、403(集石内土器)が1個、404(土器222)が14個、405(土器239)が20個、395(SK6)が22個、396(SK4)が10個、397(SK7埋土)が358個、398(SK5埋土)が274個、399(SK8埋土)が182個である。392(SK2)が最も多く、393(SK5)、397(SK7埋土)、398(SK5埋土)と次ぐ。

大型植物遺体の保存状態は比較的良好であり、堅果類(ドングリ類)は完形率が高い。他、ウラジロガシ近似種の果実・子葉、コナラ属の子葉とイネに炭化が認められる。

栽培植物は、果樹のモモの核が4個(400(弥生集石層))、穀類のイネ(炭化米)が4個(404(土器222)、405(土器239))、果菜類のヒョウタン類の種子が3個(401(土器220)、405(土器239))、マクワ・シロウリ型の種子が8個(401(土器220)、404(土器222))、雑草メロン類の種子が3個(404(土器222))、メロン類の種子が1個(405(土器239))の、計25個が確認される。また、イネ(炭化米)の粒大(長さ×幅)・粒形(長さ/幅)(佐藤,1988)は、405(土器239)が極小型(11.11)・短粒(1.79)と小型(12.87)・短粒(1.82)である。

栽培の可能性は、シソ属(エゴマ近似種)の果実が2個(396(SK4))、シソ属-イヌコウジュ属の果実49個(397(SK7)、398(SK5)、399(SK8))が確認される。シソ属には、栽培種で軟実のエゴマと、硬実のシソのほか、硬実の雑草型エゴマがあり、雑草型エゴマの果実の大きさはエゴマとシソの中間型を示す(新田,2001)。また、シソ属と野生種のイヌコウジュ属の果実の大きさの変異も連続的である。笠原(1982)の基準に基づくと、396(SK4)出土果実は長さ1.96mmを測り、エゴマに該当する。一方、SK5、SK7、SK8出土果実は未計測であるため、シソ属-イヌコウジュ属としている。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、木本35分類群2061個、草本26分類群516個から成り、木本主体の組成を示す。木本は、針葉樹で常緑高木のモミ属、カヤ、広葉樹で常緑高木のヤマモモ、イチイガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ-ツクバネガシ、アカガシ亜属、スダジイ、ツブラジイ、クスノキ、落葉高木のナラガシワ、クリ?、アカメガシワ、ハゼノキ-ヤマハゼ、トチノキ、落葉高木~低木のクワ属、サクラ節、常緑高木~低木のヒサカキ属、常緑低木のフユイチゴ類、常緑または落葉低木のキイチゴ属、落葉低木のクソソ節、ノイバラ節、サンショウ、タラノキ、ムラサキシキブ属、ニワトコ、常緑藤本のオオイタビ節、落葉藤本のマタタビ近似種、マタタビ属、ブドウ属、ウドカズラ、ノブドウが確認される。

堅果類(ドングリ)のイチイガシ(近似種含む)が最も多く(1489個)、大型植物遺体群全体の過半数を占める。ツブラジイが次いで多く、SK5では全体の約1/4を占める。他のドングリ類は、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ-ツクバネガシ、スダジイが少数確認される。いずれも成熟した完形果実が圧倒的に多く、幼果や殻斗も極少数混じり、イチイガシ、アラカシ、シラカシは葉も確認される。その他の堅果類は、SK5よりトチノキの果実、SK8よりナラガシワの葉、SK6と弥生集石内土器内よりクリ(?)の葉が確認される。

草本は、主にSK5、SK7、SK8埋土より、湿生植物のアゼスゲ類、ミズ属、サンショウソウ属、ミソソバ、ポントクタデ近似種、ムラサキケマン型、スズメウリ、シロネ属、中生植物のエノコログサ属、スズメノヒエ属、イネ科、スゲ属、カナムグラ、カラムシ属、ギシギシ属、イヌタデ近似種、タデ属、ザクロソウ、ナデシコ科(ウシハコベ近似種)、イノコズチ属、キジムシロ類、メハジキ属、ナス属、ナス科(ハダカホオズキ類?)、メナモミ属、キク科が確認され、山野の陰湿地や林縁などの明るく開けた場所に生育する分類群から成る。SK5、SK7埋土でカラムシ属が極めて多産する。

4. 考察

栽培植物は、弥生集石内より果樹のモモ、土器内より穀類のイネ、果菜類のヒョウタン類、マクワ

・シロウリ型、雑草メロン型、メロン類が確認された。近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。土器 239、土器 222 のイネは炭化していることから、火を受けたとみなされる。土壌分析の頁で述べたように、1 地区と 2 地区よりイネ属花粉や珪酸体が検出され、稲作の可能性が指摘されている。今回のイネが確認された結果とも調和的である。栽培の可能性は、SK4 のシソ属(エゴマ近似種)、SK5、SK7、SK8 のシソ属-イヌコウジュ属が畑作物に由来する場合、周囲で栽培された可能性がある。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、木本は、針葉樹で常緑高木のモミ属、カヤ、広葉樹で常緑高木のヤマモモ、イチイガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ-ツクバネガシ、アカガシ亜属、スダジイ、ツブラジイ、クスノキ、落葉高木のナラガシワ、クリ?、アカメガシワ、ハゼノキ-ヤマハゼ、トチノキ、落葉高木~低木のクワ属、サクラ節、常緑小高木~低木のヒサカキ属、常緑低木のフイチゴ類、常緑または落葉低木のキイチゴ属、落葉低木のコウゾ節、ノイバラ節、サンショウ、タラノキ、ムラサキキブ属、ニワトコ、常緑藤本のオオイタビ節、落葉藤本のマタタビ近似種、マタタビ属、ブドウ属、ウドカズラ、ノブドウが確認された。常緑広葉樹林(照葉樹林)に生育する樹種が多く、いずれも現在の本地域にも分布する。出土木本類は、当時の才賀川集水域の森林植生を反映していると考えられる。また、ウラジロガシ近似種の果実・子葉、コナラ属の子葉は炭化していることから、火を受けたとみなされる。

ドングリを貯蔵したと考えられている各土坑からは、イチイガシ主体のドングリ類が確認され、特に SK2 でイチイガシの多産が顕著である。また、SK5 ではイチイガシに次いでツブラジイが多く、SK1 や SK5 ではアラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ-ツクバネガシ、SK2 ではスダジイが少数混じる組成が確認された。

これらのドングリ類は、果実内部の子葉が食用可能で収量も多く、長期保存が可能で、植物質食糧として有用である(渡辺,1975,岡本,1979 など)。土坑出土果実は殆どが成熟果から成り、食用にならない幼果や殻斗は極少数確認されるのみであることから、当時の遺跡近辺の照葉樹林より成熟果が選択的に採取され、土坑内に持ち込まれた植物質食料と示唆される。さらに、完全な形状をとどめた果実が多いことから、良好な保存状態と判断され、土坑内の嫌気的環境下で食用されることなく埋積したと考えられる。

ところで、イチイガシ、ツブラジイ、スダジイの子葉は生食可能であるのに対して、アラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ-ツクバネガシは水にさらすなどのあく抜きを要する。小畑(2006:2011)は、調理方法が異なる複数種のドングリを混合貯蔵した可能性に否定的な見解を示し、紛れ込みの可能性を指摘している。

山口県内遺跡におけるドングリ類の多量出土事例では、田ノ浦遺跡はイチイガシを主体とし、スダジイ、ツブラジイが多産する遺構や、アラカシやアカガシ亜属 A が混じる遺構が確認されており、本遺跡と同様の傾向が認められる。土坑別にドングリの種類選択が実施されたか、土坑内に複数種のドングリを混合貯蔵したか、紛れ込んだかについては、発掘調査所見や上述の指摘事項と併せて評価することが望まれる。

その他、葉が確認されたカヤ、クリ(?)は、種子や子葉が食用可能である。葉が確認されたナラガシワ、

果実が確認されたトチノキは、あく抜きすることで子葉が食用可能となる。種実が確認されたヤマモモ、クワ属、コウゾ節、オオイタビ節、マタタビ近似種、マタタビ属、サクラ節、フユイチゴ類、キイチゴ属、ブドウ属は果実が食用可能で、サンショウは果実や種子が食用や薬用、香辛料等に利用可能である。これらの出土種実には、人による明瞭な利用痕跡は確認されないが、当時利用された可能性は考えられる。

草本は、湿生植物のアゼスゲ類、ミズ属、サンショウソウ属、ミソソバ、ポントクタデ近似種、ムラサキケマン型、スズメウリ、シロネ属、中生植物のエノコログサ属、スズメノヒエ属、イネ科、スゲ属、カナムグラ、カラムシ属、ギシギシ属、イヌタデ近似種、タデ属、ザクロソウ、ナデシコ科(ウシハコベ近似種)、イノコズチ属、キジムシロ類、メハジキ属、ナス属、ナス科(ハダカホオズキ類?)、メナモミ属、キク科が確認された。調査区近辺の草地や上述の林内や林縁などに生育していたと考えられる。

昆虫類は、SK4 より確認されたコガネムシは日本各地にみられ、河川敷などの開けた場所を好み、ギシギシ・イタドリ類を摂食する。SK1 より確認されたオオクロコガネも普通にみられる種類で、樹木の葉を摂食する。土器 222より確認されたオオクロカメムシは本州以南にみられる種類で、河川敷などヨシやガマなどが群生している水辺を好み、植物の樹液を餌とする。土器 239 より確認されたマエカドコエンマコガネは、いわゆる糞虫の仲間で、日本各地に生育し、山地や放牧地などの獣糞の周りにみられる。今回検出された昆虫遺体は、いずれも人家近くの山野に普通にみられる種類であり、遺跡周辺に生育していたと考えられる。

5 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、①前項 SK2、SK5 より同定されたイチイガシの果実 2 点、②畦状遺構に伴う自然木、南端部杭、南トレ以南の自然木、SK1 出土の木、1 地区 SP 内の柱痕の 5 点である。試料の詳細は、①を第 29 表、②を第 30 表に示す。

2. 分析方法

試料から小片を切り取り、洗浄したものを乾燥重量で 40～50mg 程度に調整し、分析試料とする。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。δ 13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料から

第29表 放射性炭素年代測定結果（1）

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							Code No.			
					年代値								確率 %		
					σ	cal BC 1121 - cal BC 1047	3070 - 2996	calBP 63.8	2σ	cal BC 1028 - cal BC 1021	2977 - 2970			calBP 4.4	
SK2	イチイガシ 果実	AAA (1M)	2900 \pm 20 (2900 \pm 21)	-40.62 \pm 0.22	cal BC 1196 - cal BC 1173	3145 - 3122	calBP 5.8	cal BC 1161 - cal BC 1144	3110 - 3093	calBP 4.6	cal BC 1130 - cal BC 1010	3079 - 2959	calBP 85.1	YU-16509	pal-14214
SK5	イチイガシ 果実	AAA (1M)	2900 \pm 20 (2902 \pm 22)	-33.65 \pm 0.27	cal BC 1123 - cal BC 1047	3072 - 2996	calBP 63.3	cal BC 1029 - cal BC 1020	2978 - 2969	calBP 5.0	cal BC 1199 - cal BC 1171	3148 - 3120	calBP 7.4	YU-16510	pal-14215
					cal BC 1164 - cal BC 1143	3113 - 3092	calBP 6.0	cal BC 1131 - cal BC 1010	3080 - 2959	calBP 82.1					

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

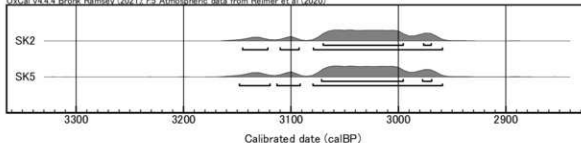
5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用。

6) 校正データセットは、IntCal20を使用。

7) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021), r5 Atmospheric data from Reimer et al. (2020)



第85図 暦年較正結果（1）

のずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に1桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk,2009)、校正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020)である。

3. ①の結果・考察

結果を第29表、第85図に示す。同位体補正を行った値は、SK2、SK5ともに2900 \pm 20BPである。暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(14Cの半減期5730 \pm 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。

較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al.,2020)を用いる。2 σ の値は、SK2が3145～2959calBP、SK5が3148～2959calBPでほぼ同時期を示し、3150～3000年前のある時期に構築されたと言える。

4. ②の結果・考察

結果を第30表、第86図に示す。いずれの木材も保存状態が良く、定法での前処理が可能で、測定に十分なグラフィットが得られている。同位体補正を行った値は、379が1915 \pm 20BP、385が

第30表 放射性炭素年代測定結果(2)

整理 番号	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代				Code No.		
					年代値			確率%			
					σ	cal AD	cal AD				cal BP
379	樹皮	AAA (1M)	1915±20 (1913±21)	-29.89 ±0.24	σ	cal AD 79	cal AD 100	1871 - 1851	calBP 19.9	YU- 17056	pal- 14403
						cal AD 108	cal AD 133	1843 - 1817	calBP 24.0		
						cal AD 139	cal AD 162	1812 - 1788	calBP 16.2		
						cal AD 189	cal AD 201	1762 - 1749	calBP 8.2		
385	木材 (クリ)	AAA (1M)	1935±20 (1935±20)	-27.49 ±0.28	2σ	cal AD 65	cal AD 209	1896 - 1742	calBP 95.4	YU- 17057	pal- 14404
						cal AD 86	cal AD 123	1885 - 1827	calBP 68.3		
						cal AD 22	cal AD 132	1929 - 1818	calBP 90.5		
						cal AD 140	cal AD 160	1811 - 1791	calBP 3.3		
382	木材 (モクレン属)	AAA (1M)	3305±20 (3306±21)	-28.09 ±0.20	σ	cal AD 190	cal AD 201	1761 - 1749	calBP 1.7	YU- 17058	pal- 14405
						cal BC 1611	cal BC 1574	3560 - 3523	calBP 40.5		
						cal BC 1564	cal BC 1535	3513 - 3484	calBP 27.8		
						cal BC 1620	cal BC 1517	3569 - 3466	calBP 95.4		
373	木材 (イチジク属)	AAA (1M)	2925±25 (2924±23)	-28.37 ±0.22	σ	cal BC 1195	cal BC 1174	3144 - 3123	calBP 12.2	YU- 17059	pal- 14406
						cal BC 1161	cal BC 1144	3110 - 3093	calBP 11.4		
						cal BC 1130	cal BC 1055	3079 - 3004	calBP 44.7		
						cal BC 1214	cal BC 1046	3163 - 2995	calBP 93.3		
390	木材 (ナシ亜科)	AAA (1M)	505±20 (507±20)	-29.44 ±0.17	2σ	cal BC 1030	cal BC 1020	2979 - 2969	calBP 2.1	YU- 17060	pal- 14407
						cal AD 1413	cal AD 1433	538 - 518	calBP 68.3		
						cal AD 1405	cal AD 1441	545 - 510	calBP 95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5)暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用

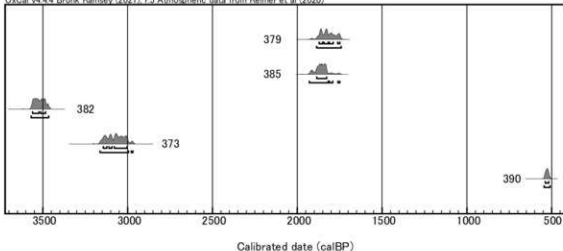
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用

7)較正データセットはIntCal20を使用。

8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021): r5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)



第86図 暦年較正結果(2)

1935±20BP、382が3305±20BP、373が2925±25BP、390が505±20BPである。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20(Reimer et al.,2020)を用いる。 2σ の値は、379がcalAD65～209、385がcalAD22～201、382が3569～3466calBP、373が3163～2969calBP、390がcalAD1405～1441である。

引用文献

- 馬場多久男,1999,葉でわかる樹木,信濃毎日新聞社,396p.
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.
- 藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法,古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.
- 濱野周泰,2005,原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木,柏書房,334p.
- 濱野周泰・石井英美,2007,原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木 2,柏書房,290p.
- 林 将之,2017,くらべてわかる木の葉っぱ,山と溪谷社,159p.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所,伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 笠原安夫,1982,鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について,鳥浜貝塚1980年度発掘調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 2—,福井県教育委員会,65-87.
- 宮國晋一,2014,どんぐりの呼び名事典,株式会社世界文化社,111p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.
- 新田みゆき,2001,シソとエゴマの分化と多様性,栽培植物の自然史—野生植物と人類の共進化—,山口裕文・島本義也編,北海道大学図書刊行会,165-175.
- 小畑弘己,2006,九州縄文時代の堅果類とその利用—東北アジアの古民族植物学的視点より—,九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物,第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集,31-40.
- 小畑弘己,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕,同成社,309p.
- 岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ,大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62,1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡

的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修). 海青社, 70p. [Richter H.G., Gasser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ. 弥生文化の研究 2 生業, 金関 恕・佐原 真編, 雄山閣, 97-111. 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂—. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.

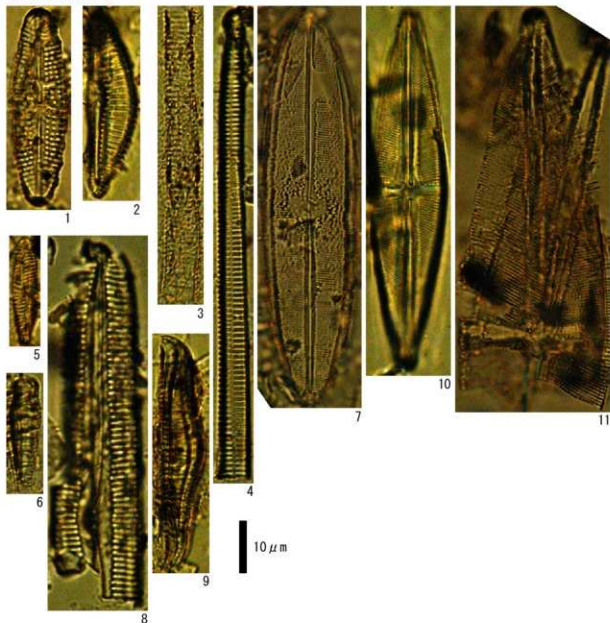
田中啓幾, 2008, 落葉樹の葉. 山溪ハンディ図鑑 12, 山と溪谷社, 447p.

徳永桂子, 2004, 日本どんぐり大図鑑. 借成社, 156p. 渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食. 雄山閣出版, 187p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修). 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

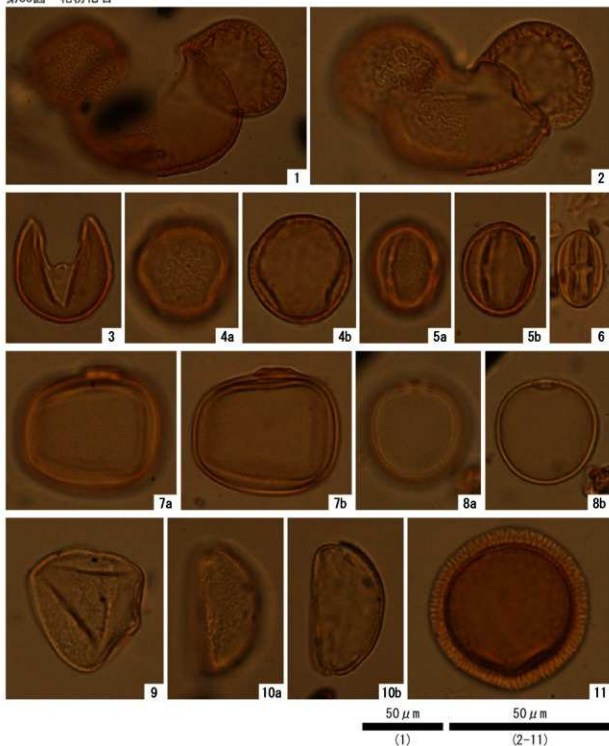
吉山 寛・石川美枝子, 1992, 原寸イラストによる落葉図鑑. 文一総合出版, 372p.

第87图 珪藻化石



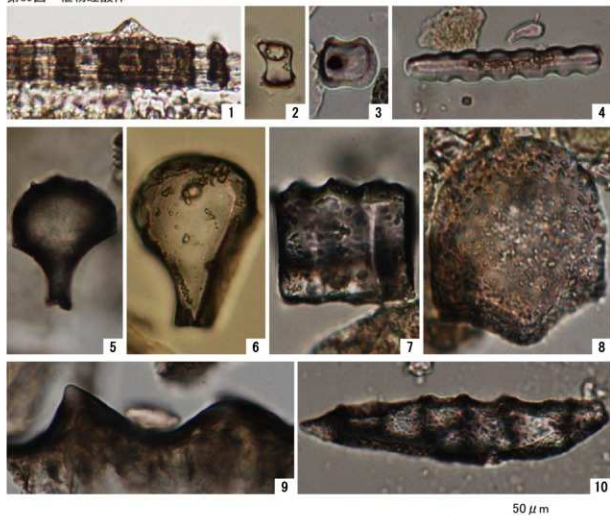
1. *Achnanthes crenulata* Grunow (2地区②下:8)
2. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D. G. Mann (2地区①:6)
3. *Fragilaria* spp. (2地区①:4)
4. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (2地区②下:8)
5. *Gomphonema parvulum* (2地区①:6)
6. *Meridion circulare* var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck (2地区②下:8)
7. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (2地区②下:8)
8. *Pinnularia* spp. (2地区①:6)
9. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller (2地区②下:8)
10. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (2地区①:6)
11. *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister (2地区①:6)

第88図 花粉化石



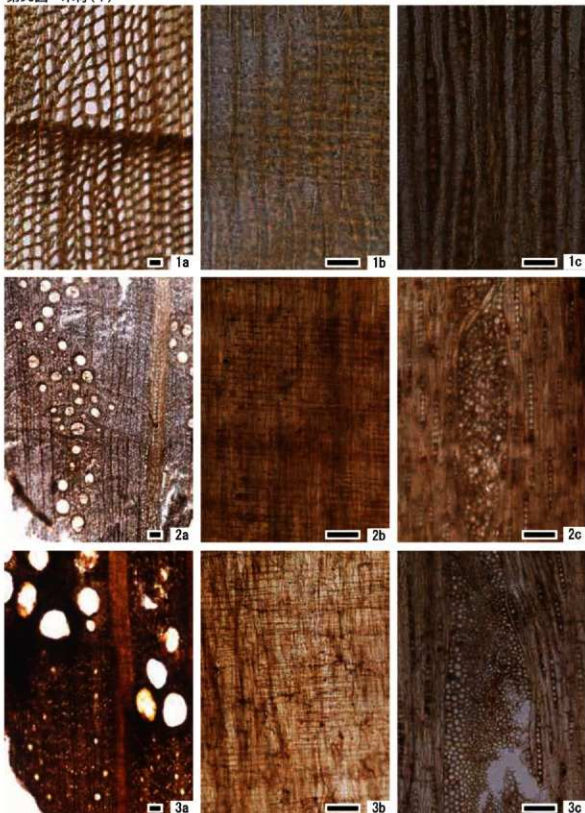
- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. モミ属 (2地区②上:7) | 2. マツ属 (2地区②上:7) |
| 3. スギ属 (2地区②上:7) | 4. コナラ属コナラ亜属 (2地区②上:7) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属 (2地区②上:7) | 6. シイ属 (2地区②下:10) |
| 7. イネ科 (イネ属型) (2地区②上:7) | 8. イネ科 (2地区②上:7) |
| 9. カヤツリグサ科 (2地区②上:7) | 10. ミズアオイ属 (2地区②上:7) |
| 11. デンジソウ属 (2地区②上:7) | |

第89図 植物珪酸体



- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (2地区②下:9) | 2. メダケ属短細胞珪酸体 (1地区:1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (1地区:1) | 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (1地区:1) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体 (2地区①:4) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (2地区②上:7) |
| 7. メダケ属機動細胞珪酸体 (2地区①:4) | 8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (1地区:1) |
| 9. イネ属穎珪酸体 (2地区②上:7) | 10. クスノキ科葉部珪酸体 (1地区:1) |

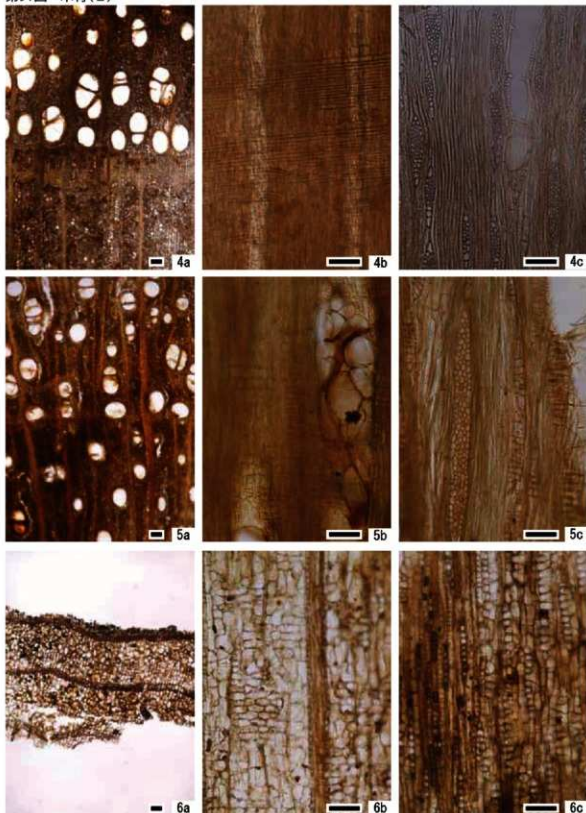
第90図 木材(1)



1. カヤ (No. 7)
2. アカガシ亜属 (No. 8)
3. コナラ亜属クヌギ節 (No. 15)

a: 木口 b: 柁目 c: 板目
スケールは100 μ m

第91図 木材(2)



4. エノキ属 (No. 5)
 5. クスノキ? (No. 14)
 6. サカキ? (No. 3)

a: 木口 b: 椀目 c: 板目
 スケールは100 μ m

第92図 大型植物遺体(1)



- | | | |
|-------------------------|----------------------|-------------------------|
| 1. モミ属 葉(397) | 2. カヤ 葉(頂部)(397) | 3. ヤマモモ 核(402) |
| 4. ナラガシワ 葉(399) | 5. イチイガシ 葉(397) | 6. イチイガシ 葉(397) |
| 7. アラカシ 葉(397) | 8. シラカシ? 葉(397) | 9. クリ? 葉(403) |
| 10. クリ? 葉(395) | 11. クリ? 葉(395) | 12. イチイガシ 果実(年代測定)(392) |
| 13. イチイガシ 果実(年代測定)(393) | 14. イチイガシ 果実・殻斗(392) | 15. アラカシ 果実(396) |
| 16. シラカシ 果実(393) | 17. ウラジロガシ 果実(391) | 18. アカガシ・ツクバネガシ 果実(392) |
| 19. アカガシ亜属 幼果(396) | 20. スダジイ 果実(392) | 21. ツブラジイ 果実(393) |
| 22. ツブラジイ 果実・殻斗(393) | 23. クワ属 核(399) | 24. コウゾ節 核(399) |
| 25. オオイトビ節 果実(397) | 26. クスノキ 種子(399) | 27. マタビ近似種 種子(397) |
| 28. ヒサカキ属 種子(397) | 29. モモ 核(400) | 30. サクラ節 核(395) |

第93図 大型植物遺体(2)・昆虫



31. ノイバラ節 果実(399)
 34. サンショウ 種子(401)
 37. トネノキ 果実・種子(393)
 40. ノブドウ 種子(395)
 43. イネ 玄米(405)
 46. アゼスグ属 果実(397)
 49. ミズ属 果実(398)
 52. ギンギシ属 果実・花被(397)
 55. イヌタデ近似種 果実(399)
 58. ナデシコ科(ウシハコベ近似種) 種子(397)
 61. キジムシロ類 核(399)
 64. マクワ・シロウリ型 種子(404)
 67. シロネ属 果実(399)
 70. ナス科(ハダカホオズキ類?) 種子(397)
 73. キク科 果実(398)
 76. オオウロカメムシ前胸背板(404)

32. フユイチゴ類 核(398)
 35. アカメガシワ 種子(395)
 38. ブドウ属 種子(402)
 41. ムラサキシキブ属 核(398)
 44. エノログサ属 果実(397)
 47. スグ属 果実(397)
 50. サンショウソウ属 果実(397)
 53. ギンギシ属 果実(397)
 56. ボントクタデ近似種 果実(397)
 59. イノコズチ属 果実(397)
 62. スズメウリ 種子(398)
 65. 雑草メロン型 種子(404)
 68. メハジキ属 果実(397)
 71. メナモミ属 果実(399)
 74. コガネムシ尾節板(396)
 77. マエカドコエンマコガネ前胸背板(405)

33. キイチゴ属 核(398)
 36. ハゼノキ・ヤマハゼ 核(399)
 39. ウドカズラ 種子(397)
 42. ニワトコ 核(397)
 45. スズメノヒエ属 果実(393)
 48. カナムグラ 核(405)
 51. カラムシ属 果実(397)
 54. ミソソバ 果実(399)
 57. ザクロソウ 種子(399)
 60. ムラサキケマン型 種子(399)
 63. ヒョウタン類 種子(405)
 66. シソ属(エゴマ近似種) 果実(396)
 69. ナス属 種子(397)
 72. キク科 果実(399)
 75. オオウロコガネ左前翅(391)

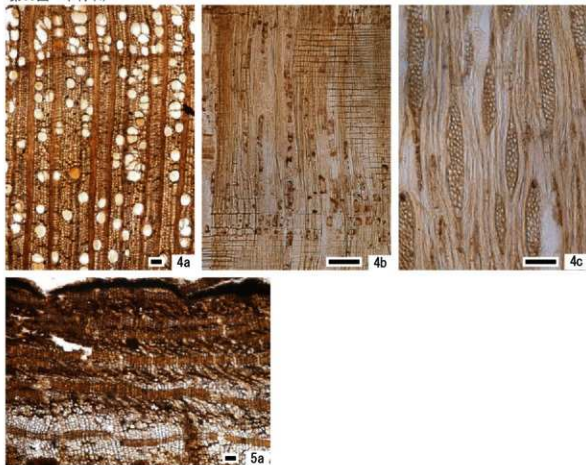
第94図 木材(3)



1. クリ (385)
2. イチジク属 (373)
3. ナシ亜科 (390)

a:木口 b:年輪 c:年輪
スケールは100 μ m

第95図 木材(4)



4. モクレン属 (382)
5. 樹皮 (379)

a:木口 b:杵目 c:板目
スケールは100 μ m

V 総括

1 1地区

1地区では縄文時代晩期、弥生時代中期・後期、中世の遺構・遺物が検出した。遺構面は2面あり、上面は中世、下面は同一面で縄文時代晩期、弥生時代中期・後期である。

以下、1地区の調査成果を時代ごとにまとめる。

縄文時代の様相

調査区西半部に堆積する黒色シルト層(包含層)より縄文晩期中葉を中心とする土器・石器が出土し、縄文土器出土集中地点では同時期の深鉢・浅鉢が石器、自然礫とともにまとまって出土した。この層からの出土資料は、中込田遺跡(山口市)や近隣地域の大洲遺跡、久米高畑遺跡(愛媛県)用作遺跡、岩鼻岩陰遺跡(大分県)出土土器と近似する土器もある。数点、晩期前葉と後葉の土器も散見され、県内及び西部瀬戸内地域では数少ない縄文時代晩期中葉の土器群と考える。また、石器は、安山岩や姫島産黒曜石の石材が多数出土しているなど、当該期の石器組成及び石材流通の一端を明らかにすることができた。なお、土器・石器の詳細については、「3 縄文時代の遺物について」において報告する。

次に黒色シルト層下層の灰オリーブ色粘質土層からは土器埋設遺構、土坑1基が検出された。土器埋設遺構については、縄文時代晩期中葉に比定する。破碎した近畿地方の籾原式土器を深鉢の土器片を意図的に埋設坑内に配した可能性が考えられ、埋設坑底面近くに土器の底部を上にして配置していたことなどを踏まえると、埋設坑内の底面には、人骨等の内容物があつた可能性も否定できない。当遺跡の土器埋設遺構は県内及び近隣の類似遺構とは異なる性格を有する点は留意すべき点であり、本遺構を土器埋設遺構と位置付けることが適切であるかどうか、今後の資料増加を待ち、更なる検討が必要である。今回、竪穴建物はみつかっていない。集落は遺跡周辺に展開するものと考えられる。

弥生時代の様相

弥生時代は土坑4基、溝1条、土器がまとまって出土した地点を検出した。遺構の時期は土坑1基が不明であるが、他は中期及び後期であった。1地区は近接する才賀川や丘陵からの土石流の影響を何度も受けており、洪水による堆積などの包含層から中期から後期にかけての土器が出土した。その中には九州系の土器も出土しており、これらの地域との交流がうかがえる資料も得ることができた。この地域の人々の生活の拠点は近接する丘陵上と考えられ、丘陵と川に挟まれる低地であるこの地は生活には適さなかったためと考える。

中世の様相

中世になると小集落が営まれるようになり、12世紀から15世紀の掘立柱建物3棟、柱列9条、溝7条、土坑5基、柱穴を多数検出した。遺構内から詳細な時期が比定できる資料が少なかったが、出土遺物は概ね12世紀から14世紀が主体であった。出土遺物は搬入土器が少なく、在地系の遺物が多いことが特徴である。

以上、1地区では縄文時代晩期中葉から中世まで人々が断続的にこの地域で生活を営んでいたことが明らかになった。特筆されるのは県内及び西部瀬戸内地域の数少ない縄文時代晩期中葉の資料を得たことであり、この時期の地域的土器編年を考える上で有益な成果である。

2 2地区

2地区では、縄文時代ドングリ貯蔵用土坑、弥生時代杭列や畦状遺構や、それに伴う多くの弥生土器、木製品が出土するなど大きな成果を得ることができた。これらの遺構等について特徴を整理し、若干の検討を加えて、2地区のまとめとしたい。

ドングリ類貯蔵用土坑

今回の調査では縄文時代晩期とみられるドングリ類貯蔵用土坑を9基確認した。縄文時代低湿度型貯蔵穴は西日本において79遺跡1,060穴以上確認され(柳浦 2004)、県東部では平生町岩田遺跡(晩期前半 33基)、上関町田ノ浦遺跡(後期 14基)が代表的な調査例である。

当遺跡の土坑は、規模が径100cm前後、150～200cmの2つに分けられ、深さは26～55cmを測る。平面形は長円形から隅丸方形(長方形)であり、3基に張り出し部が認められた。断面は円筒形もしくは逆台形である。

ドングリ類は底面または底面上の埋土から出土し、ドングリを包む編み物や敷物などの有機物痕跡は認められないが、木片、葉などを含む腐葉土状の層内から検出されることが多い。種実同定を実施した4基の土坑の結果では、イチイガシを主体としており、他の5基も同様とみられる。

SK2・6からは、木片と大型の礫が内部から検出され下からドングリが出土したが、総量的に貯蔵用には少ないことから、礫や木片は廃棄行為によるものとみられる。またSK6・8では土坑上面に粘土が堆積していたが、これも廃棄に伴う最終的な埋め戻しによるものと考えられる。

低湿度型貯蔵穴の特徴として、お互いが重複せずに密集することが指摘され、これは貯蔵穴を新たに掘る際に先に掘った貯蔵穴を避けて配置するためとされる。当遺跡で検出された9基も、切り合いがなく集中しており、同様の状況がみとれる。ところでSK1は樹立するイチジクに隣接し、SK5・9にはそれぞれサクラ属(伐採痕あり)、アカガシ属の大型自然木が内部に倒れ込んだ状態で出土した。これらの特徴は、重複せず貯蔵穴を配置する際に、または氾濫等による埋没後に貯蔵穴の位置を示すものとして、樹木や木を地表の目印とした可能性がある。

今回土坑出土資料について、年代測定資料を実施した。SK2・5のイチイガシが3145～2959calBP、3148～2959calBPで、SK1に隣接するイチジクが3163～2969calBPである。縄文土器がほとんど出土しないため、測定結果が近似値となった今回のデータは、実年代を考えるうえで有用とみられる。また同時に実施したSK内埋土の種実分析についても、多様な種実が認められ、周辺の植生状況を示すものとして興味深い。栽培の可能性のあるシソ属等や、植物繊維として有用であったカラムシ属の果実も多く確認されるなど、今後の縄文時代調査に大いに参考となる資料といえよう。

このように当遺跡の土坑は、西日本における低湿度型貯蔵穴の特徴を良く示しており、県東部調査例の2遺跡が海浜部に立地するのに対し、海岸に近い小河川沿いに位置する資料として、今後の県内縄文時代研究にとって大きな成果といえる。

杭列、畦状遺構について

遺構周辺から出土した土器は、流れ込みとみられる擾無文土器(278)や大分県下城式の壺胴部片(237)などの弥生時代中期初頭の土器や、垂下口緑壺(233)や分銅形土製品(285)など中期後半に属するものもあるが、その大半は後期に比定される。特徴として複合口緑壺は定型化したもので、頸

部が直立し、多条沈線文、波状文、刺突文を施す。一部に立ち上がり部から端部が外方に屈曲するものがあり、文様も波状文を施すことから新しい様相を示す。壺(239、240)は全体の形状がわかる良好な資料である。直口壺も口縁部が外傾するタイプで、頸部も短いものから長いものまでである。またこれらの土器には頸部に刺突文を施すが、施文を一周巡らすのではなく、部分的に施すものが多いのが特徴である。甕は「く」の字状口縁でわずかな上げ底となるものを中心に、胴部最大径は上位にある。鉢は「く」の字状と直口があり、底部はやや上げ底と平底がある。鉢(273)は円盤状で大型の底部が特徴である。高坏(277)は、特徴的な裾端部や貝殻施文、礫を多く含む胎土から、おそらく吉備地域からの搬入品であろう。

これらの後期土器は、複合口縁壺に端部が外方に屈曲するものや、口縁部文様に波状文を施すなど新しい様相を示すものもあるが、おおむね後期中葉を主体とする土器群とみられる。資料には完形のものもあり、当該期の土器の形態を把握し、様相を明らかにする資料として捉えることができる。

杭列と畦状遺構は、打ち込み面が同じであるかは明らかでないものの、杭列の方向や、杭列に留められたような土器の出土状態から、後期土器の廃棄行為がなされるまでに構築されたと判断される。

これらの遺構は湿地堆積との境に位置することから、水田に関わる遺構が想定されるが、畦状遺構は東西方向のみで、水田区画を示す範囲は検出されていない。畦状遺構の北側シルト層にも明確な小畦畔の検出はできなかった。土壌分析から栽培イネ属が産出され、水田(水中)雑草の種子が確認されているものの、この湿地層を積極的に水田土壌とする結果は得られていない。

水田の是非は今後の検討課題であるが、才賀川の流路が丘陵下端まで広がりそれに伴う湿地堆積と捉えれば、杭の配置から湿地との境における護岸を目的としたもので、畦状遺構は湿地との区画の土手の役割を果たした可能性がある。

その場合、分銅形土製品の出土は、SD 1 出土例と考え合わせて中期後半における水辺での小規模な祭祀が行われたことを示しているとみられる。その後後期において遺構が構築される中、穿孔土器(224・239)、ミニチュア土器など祭祀性が強い遺物や完形品が含まれる土器群から、同様な祭祀行為が行われたと考えられる。なお祭祀関連遺物だけでなく、内外面に煤、炭化物が付着した甕なども含まれることから、廃棄の場でもあったことも考慮したい。

また同じ谷部にある加工板材の集積の場と捉えたSX 1とは検出面などからほぼ同じ時期とみられる。これは畦状遺構の木片(379)はcalAD65～209、SX 1 周辺の杭(385)はcalAD22～201という年代測定の結果からも判断できよう。以上谷部の弥生時代遺構は、低地における土地利用の状況を示す良好な資料といえる。

参考文献

柳浦俊一 2004 「西日本縄文時代貯蔵穴の基礎的研究」『鳥根考古学会誌』第20・21集合併号 鳥根考古学会。

水ノ江和同 2007 「低湿地型貯蔵穴」『縄文時代の考古学 5 なりわい—食料生産の技術—』同成社。

田畑直彦 2012 「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初期の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』

3 縄文時代の遺物について

1、2地区で出土した縄文時代の土器と石器について、以下、地区ごとに遺物の特徴を報告する。

1 地区出土石器

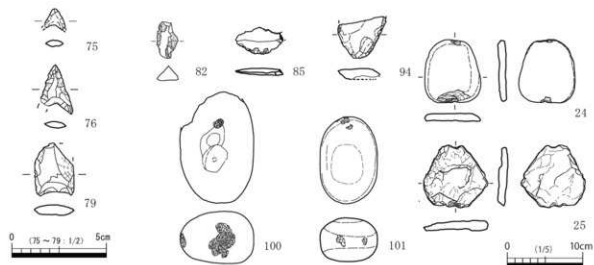
今回の調査で縄文時代の包含層の黒色シルト層より出土した石器類計32点を図化した。内訳は石錘7点、石鏃5点、敲石及び磨石5点、剥片5点（うち、2次加工のあるもの4点）、石斧3点（内、未製品も含む）、削器3点、石核4点である。この黒色シルト層では縄文時代晩期中葉の時期を主とした土器が出土しており、これら出土石器類も同時期の石器組成と考えられる。以下、第96図に示した主要な石器について、石器組成をみると、主に石錘（24・25）、石鏃（75・76・79）、敲石及び磨石（100・101）の比率が高く、本遺跡の人々は狩猟、採集、漁労を中心とした生業形態であったことが窺える。また、石斧（94）の出土が少なく、量的に出土比率が高い石錘の存在は、近傍に海岸線を臨む沿岸部に特徴的な石器組成を物語るといえよう。また、主として堅果類の粉砕加工具である敲石（磨石併用品も含む）の利用は典型縄文集落の生業様相と考えられる。

他方、使用石材は安山岩12点、姫島産黒曜石6点、砂質片岩4点、花崗岩3点、石英斑岩3点、蛇紋岩1点、泥質片岩1点、産地不明黒曜石1点、花崗閃緑岩1点で、もっとも安山岩の使用が目立ち、主に石鏃等に使用している傾向にある。安山岩の中には金山産サヌカイトと思われる石材もみられた。次に姫島産黒曜石は、主に2次加工のある剥片（82）、削器（85）に選択され、黒曜石の鋭利な特徴を利用し、切裁具の石材として使用している。また、敲石及び磨石などは遺跡周辺で容易に採集可能な転石の花崗岩を主として利用している。

当遺跡では狩猟及び漁労に使用する石器を中心とした石器組成を持ち、在地の石材を使用しつつ、姫島産黒曜石など遠隔地からの搬入石材も使用目的の器種に応じて使用していることが特徴といえよう。当遺跡での安山岩や姫島産黒曜石の一定数の剥片の出土は同郡内にある安山岩・サヌカイトの利用率が最も多く、次いで姫島産黒曜石が多い岩田遺跡との類似点が多く、この石材利用の在り方は当該期の東部地域の特徴を示しており、当遺跡も岩田遺跡と近似した消費地である様相を示す。

1・2地区出土の縄文土器について

まず、1地区の縄文時代晩期の包含層である黒色シルト層の縄文土器出土集中地点で出土した土器



第96図 辻花遺跡石器組成（一部）

群について述べる。

調査区中央の縄文土器出土集中地点では縄文晩期中葉の深鉢・浅鉢が多く出土しており、本報告では、21点図化した。浅鉢では、晩期中葉古段階の特徴である「く」の字状に屈折する口縁の浅鉢が5点出土している。内、胴部が張り、肩部で「く」の字に屈曲し、頸部が長く伸び、口唇部には半円状の突起がつくもの(17)、次に胴部がまっすぐ立ち上がり、肩部でシャープに「く」の字に屈折し、頸部は短く伸びるもの(19・21)、胴部はまっすぐ立ち上がり、肩部でゆるく屈曲し、頸部が長く伸びるものがある(20)。以上、3つに分類できる。なお、(17)については類例資料が少ないが胴部が張り、口縁が長く伸びる特徴は北部九州地域の大原D遺跡出土のものに近似する。(19・21)は愛媛県の久米高畑遺跡出土のものに近似する。(20)は晩期中葉古段階の山口市中込田遺跡の資料に近似するものがある。

一方、深鉢は口縁部が外反しながらラッパ状に開く(5)、胴頸部の境が明瞭で、肩部で屈曲し、一旦、内側へ入り頸部は外反しながら開く(7)タイプがあり、(5)は肩部が欠損しているため、詳細は不明である。(7)は形態は晩期中葉の要素であり、口縁部下に工具による凹線状の横沈線を施す点は、大分県岩鼻岩陰遺跡出土の晩期前葉のものに近似し、前葉の要素を持つ。

以上の出土資料から、晩期中葉の土器でありながら、前葉の要素を持つ土器が含まれていること、古段階に位置付けられている中込田遺跡と近似するものが出土していることから、縄文土器集中地点出土の土器群は晩期中葉古段階に位置付けられると考える。

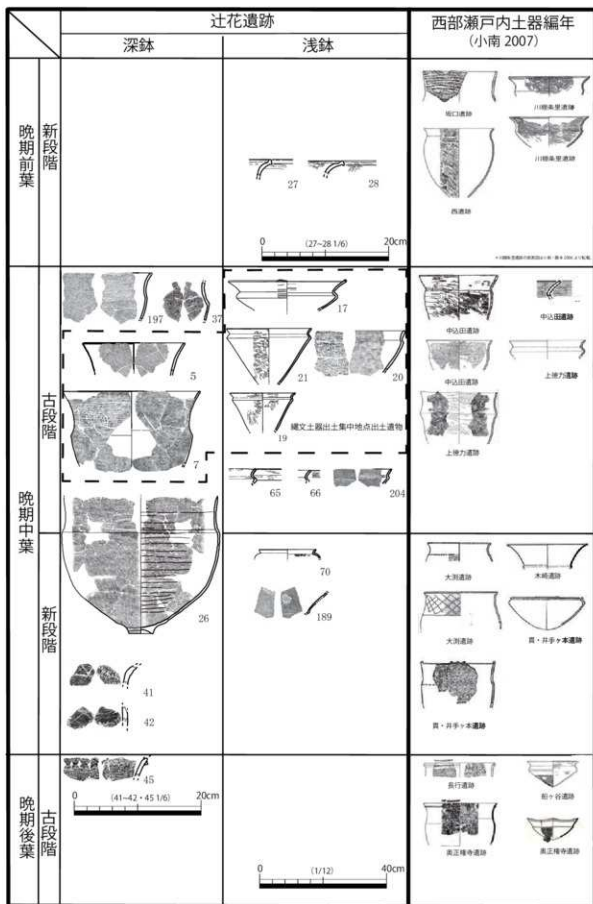
次に同じく黒色シルト層出土土器について述べる。黒色シルト層から出土した土器で、縄文土器出土集中地点の土器群以外の資料に目を向けると、晩期中葉の特徴である胴部で屈曲する深鉢が出土している(37)。また、深鉢の口縁部片の出土が目立ち晩期新段階にみられる口唇部に刻目が見られないのも特徴である。浅鉢に目を向けると、晩期中葉の特徴である「く」の字状の口縁部を持つもの(65・66)や、玉縁状の口縁部をもつもの、口縁部内部に沈線をもつもの、口縁部が外反しながら開いて立ち上がるもの、口縁部内面が肥厚し段があるものがある。当該層から出土した土器の中には、晩期中葉新段階にみられる深鉢胴部に文様を施す、山口市中込田遺跡、愛媛県大洞遺跡出土深鉢に近似する資料(41・42)や晩期後葉の波状口縁を呈する浅鉢、刻目突帯のある深鉢も出土しているなど、時期幅を有するものの、主たる時期は晩期中葉である。

また、灰オリブ色粘質土層遺構面及び灰褐色粘質土層からも土器が出土しており、前者は土器埋設遺構出土深鉢は土器の器形及び口縁部に二枚貝条痕を多用する点などから近畿地方の晩期中葉の篠原式土器と思われる、後者からは晩期前葉と思われる浅鉢(27・28)が出土している。

他方、2地区出土の土器は土坑及び遺構外より縄文土器が出土している。器形で時期がわかる浅鉢に焦点をあてると、2地区は1地区同様、胴部で屈折する深鉢(197)、「く」の字状に屈折する口縁部を持つ浅鉢(204)が出土し、晩期中葉の様相を示す。また、肩部が屈曲し、頸部が長く伸びる浅鉢(189)が出土しているなど、1地区では出土してない器形の土器も散見される。

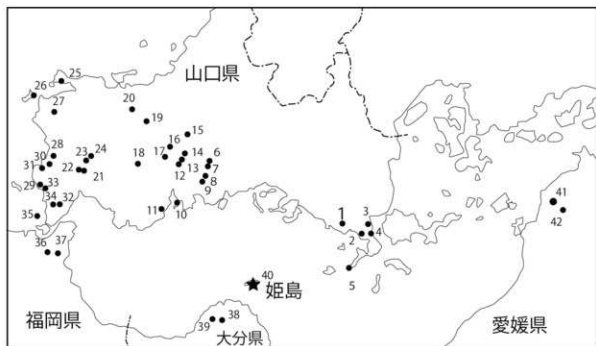
1・2地区の縄文土器の特徴

1地区及び2地区の両地区出土縄文土器を見ていくと、特に浅鉢については「く」の字状に屈折する口縁部を持つタイプが目立つ。他方、深鉢は胴部で屈曲するタイプが出土しており、これらの器



第 97 図 辻花遺跡出土縄文土器変遷

* 西部瀬戸内土器編年表(小南 2007)より引用
 図例中の土器の上下は厚さ(1/6)を示す。
 * 実物は自然色(土色)を参照。



- 1 辻花遺跡 2 新田遺跡 3 黒島浜遺跡 4 前岡内遺跡 5 田ノ浦遺跡 6 小野中学校 7 井ノ山遺跡 8 下右田遺跡 9 真正権寺遺跡・大崎遺跡
 10 美濃ヶ浜遺跡 11 月崎遺跡 12 西遺跡 13 小路遺跡 14 山口大学構内吉田遺跡 15 毛野遺跡 16 中込田遺跡 17 木崎遺跡 18 上原田遺跡 19 立石遺跡
 20 国青遺跡 21 柳瀬遺跡 22 吉田馬場遺跡 23 大判遺跡 24 松ヶ坪遺跡 25 本郷山崎遺跡 26 沖田遺跡 27 宮油神田遺跡 28 川橋桑里遺跡 29 吉留浜遺跡
 30 吉永遺跡 31 法仙庵遺跡 32 秋穂遺跡 33 御空遺跡 34 旅行桑里遺跡 35 六連島遺跡 36 上徳力遺跡 37 貫・井手ヶ本遺跡 38 岩鼻岩陰遺跡 39 坂口遺跡
 40 用作遺跡 41 大洲遺跡・船ヶ谷遺跡 42 久米高塚遺跡

第98図 山口県内及び周辺西部瀬戸内の縄文時代後期末から晩期の遺跡分布図

形から晩期中葉のものとする。また、深鉢の口縁部片が多く出土しており、晩期中葉新段階にみられる深鉢の口唇部や、肩部に刻目を施すものは認められない。頸部に文様を有す(41・42)と刻目突帯文を巡らすもの(45)は前者が晩期中葉新段階、後者は晩期後葉と考える。それ以外は晩期中葉である可能性がある。特に1地区黒色シルト層縄文土器出土集中地点の土器はこの時期の県内において、山口市申込田遺跡出土土器と類似する点から、縄文時代晩期中葉古段階に位置付けられるのではないかと考えている。よって、他地域との併行関係を考えると、当遺跡出土土器は、九州では黒川式中段階、近畿地方では篠原式中段階に併行すると推定する。今回、出土した土器の中には、近畿地方の篠原式土器や愛媛県大洲遺跡、大分県岩鼻岩陰遺跡、用作遺跡、坂口遺跡等の中に近似するなど、他地域の土器文化の影響を受けものもみられることも特徴である。

県内の縄文時代後期末～晩期の遺跡が現在、35カ所みつまっているが(第98図)、当該期の遺跡は県内及び熊本半島地域を見ても少ないため、今回、当遺跡で出土した土器・石器などの遺物類は当該期の熊本地域の様相の一端をうがえる貴重な資料となろう。

参考文献

- 小南裕一・藤本有紀 2006 『川橋桑里遺跡出土の縄文後・晩期土器』『山口考古』第26号山口考古学会
 小南裕一 2007 『西部瀬戸内の縄文晩期土器』『第18回中国四国縄文研究会 縄文後晩期の西部瀬戸内地方』発表・成果資料集 中国四国縄文研究会
 小南裕一 2009 『山口県域における縄文後・晩期の刻目石器』『山口県縄文文化財センター年報 一平成20年度一』奥付 第22号
 財団法人山口県ひとづくり財団山口県縄文文化財センター
 奈良県立縄文考古学研究所 2011 『縄文考古学研究所調査成果 第11冊 重要文化財 篠原遺跡出土品の研究』
 宮地聡一郎 2022 『西日本縄文時代晩期の土器形式圖と遺跡群』 樋山園

4 まとめ

1、2地区の調査成果を基に、各時代をまとめると次のようになる。

縄文時代は、晩期の土器埋設遺構1基、ドングリ貯蔵用土坑9基、遺物包含層から土器・石器が出土し、今回の調査で最も大きな成果が得られた。才賀川流域では、田縫遺跡(土坑)、馬場遺跡(落とし穴か)など調査例も増加しており、当遺跡の調査成果とあわせてみた当地域の縄文時代生活は次のようなものであろう。

当時は現在の田布施町中心部まで古柳井水道が入り込んでいたとみられ、田布施川支流の才賀川流域は、海にほど近い内陸であり、丘陵に集落が点在していた。集落下には丘陵裾まで湿地が広がり、食料残渣とみられる炭化した堅果類の果実・種子片が土器片と共に確認され^(註)、廃棄の場として生活域の一部であったとみられる。周辺の森からは食料となるイチイガシを中心に採集し、今回発見された谷筋の低湿地に貯蔵穴を掘り保存していた。直線距離で約400mのところにある馬場遺跡には落とし穴とみられる土坑があることから、集落から少し離れた森が狩猟の場であり、川沿いを下った先の内海で漁撈を行っていたことが、石錘の出土から判断できる。

弥生時代は丘陵下に部分的に安定した堆積層が形成され、集落の一部が認められたが、洪水堆積や湿地層から依然として才賀川の氾濫原であったとみられる。湿地との境には護岸等を目的とした杭列、畦状遺構、水辺の祭祀が想定される土器の出土があり、谷部には加工板材を集積する2地区SX1など、低地への生活圏の拡大を示している。また土壌分析では、2地区湿地層が水田であることは明らかでないものの、周辺で水田が営まれていたことを指摘しており、弥生時代における低地開発や土地利用の状況を具体的に示すものである。

縄文時代を含めてこの時期の集落本体は、背後の比高約25mの丘陵上にある松尾遺跡(弥生・古墳時代の散布地)とみられる。遺跡の現状は宅地化・農地化されており、詳細は不明であるものの、丘陵上に南西から北東へ下る小さい谷地形があり、この延長上に2地区の集石層が広がることから、集石層は丘陵部から流入したものとみられる。弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が含まれることから、この時期の集落が立地していた可能性が高い。

古墳時代以降は遺物が少なく、低地に遺構は不明であることから、集落の縮小又は移動があったとみるべきであろう。

その後中世では、現河川から約30mの距離に掘立柱建物が検出されるなど遺跡の広がりがあることから、河道の移動に伴う湿地の陸地化により居住域が拡大したとみられる。

このように低地における遺構の変遷からみて、今回の調査は丘陵部集落とその周辺の低地遺跡のあり方や土地利用を検討する上で良好な資料を得ることができた。また中世集落の立地から、当時の河道範囲を含めた旧地形を検討することで、才賀川流域の低地遺跡の在り方を考えることができる。これまでの埋蔵文化財調査では、丘陵部調査が主体で集落構造が把握されてきたが、当遺跡のような低地遺跡の調査成果が増加することによって、地域の歴史に新たな資料が蓄積され、今後の埋蔵文化財保護にも資するものと考えられる。

(註) 種実分析の結果による。なお分析報告は当報告未掲載。

圖 版



1 遺跡遠景(北から)



2 遺跡全景(真上から 上が北)



1 1地区 全 景 (真上から 上が北)



2 2地区 全 景 (真上から 上が西)



1 調査区北側 (A - A') 土層 (南から)



2 調査区北側 (A - A') 土層 (南から)



3 調査区西側 (B - B') 土層 (東から)



1 調査区南側 (C-C') 土層 (北から)



2 調査区南側 (D-D') 土層 (北から)



1 縄文土器出土集中地点出土状況（西から）



2 縄文土器出土集中地点出土状況（南から）



1 縄文土器出土集中地点出土状況（北から）



2 縄文土器出土集中地点出土状況（北から）



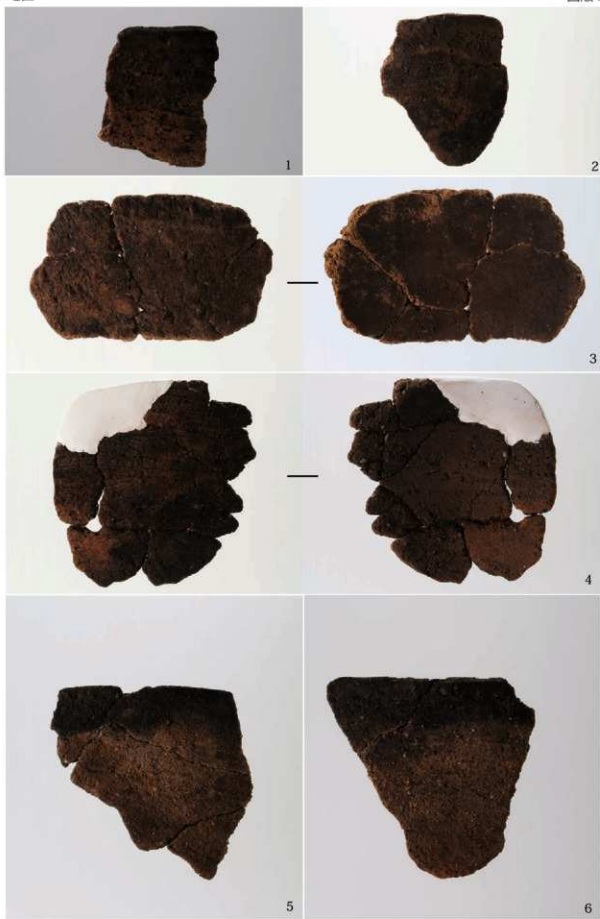
3 縄文土器出土集中地点出土状況（西から）



4 縄文土器出土集中地点出土状況（西から）



5 縄文土器出土集中地点出土状況（西から）



2 面縄文土器出土集地点出土遺物 (1)



7



8



9

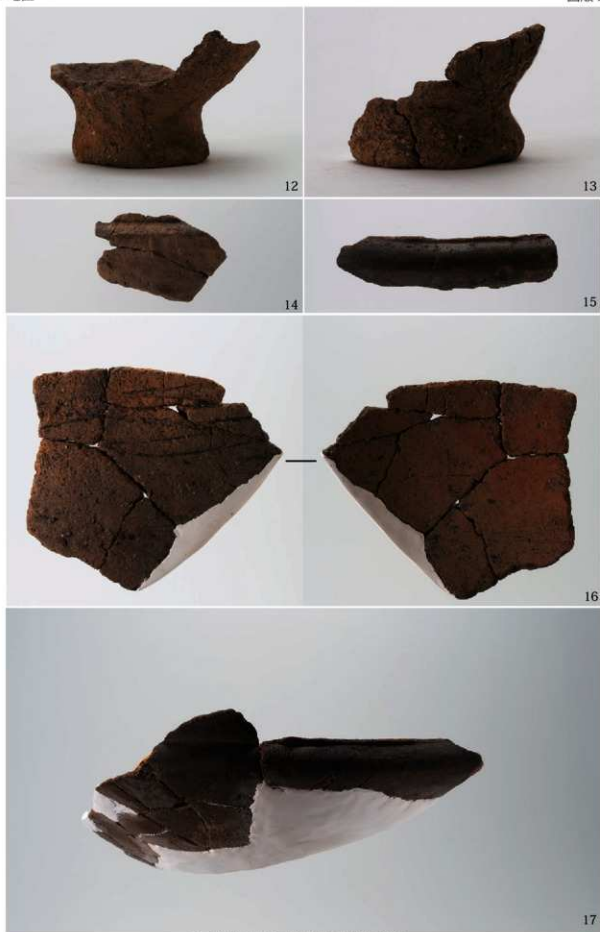


10



11

2面縄文土器出土集中地点遺物(2)



2面縄文土器出土集地点遺物(3)



18



19



20

2面縄文土器出土集中地点遺物(4)



2 面繩文土器出土集中地点遺物 (5)



1 SJ 1上層土器出土状況(南から)



2 SJ 1上層土器出土状況(西から)



1 SJ 1下層土器出土状況（南から）



2 SJ 1下層土器出土状況（西から）



1 SJ 1 完掘状況(南から)



2 SJ 1 出土遺物



1 SK 8 完翻状況 (西から)



2 SX1 自然木出土状況(北から)



3 黒色シルト層遺物出土状況(北から)



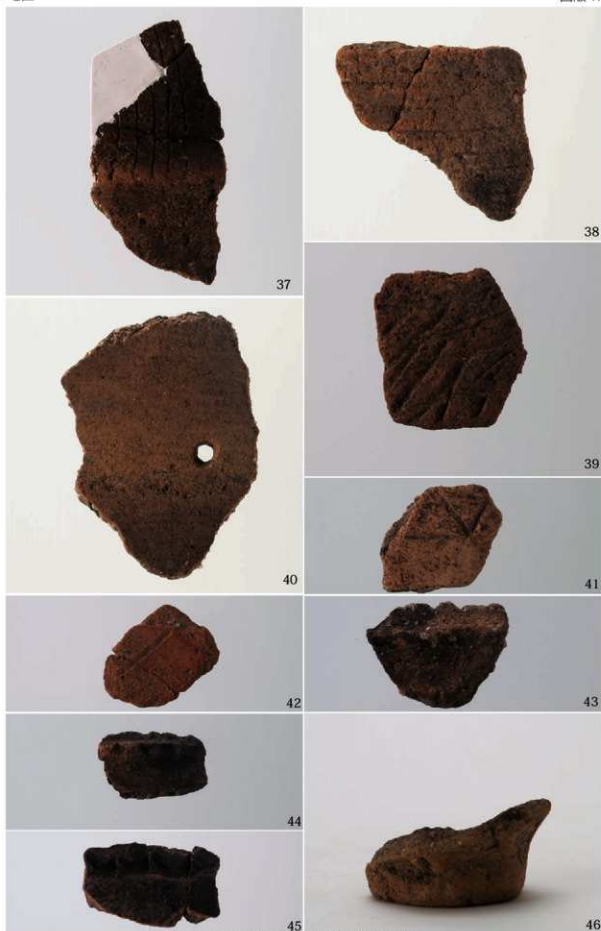
4 黒色シルト層遺物出土状況(北から)



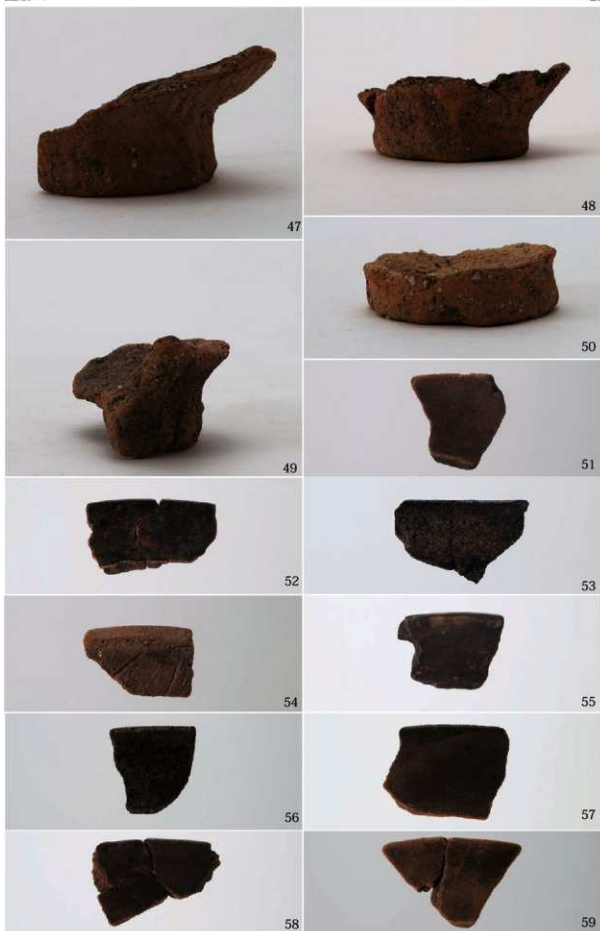
5 黒色シルト層遺物出土状況(北から)



2面縄文時代包含層出土遺物(1)



2 面縄文時代包含層出土遺物 (2)



2 面縄文時代包含層出土遺物 (3)



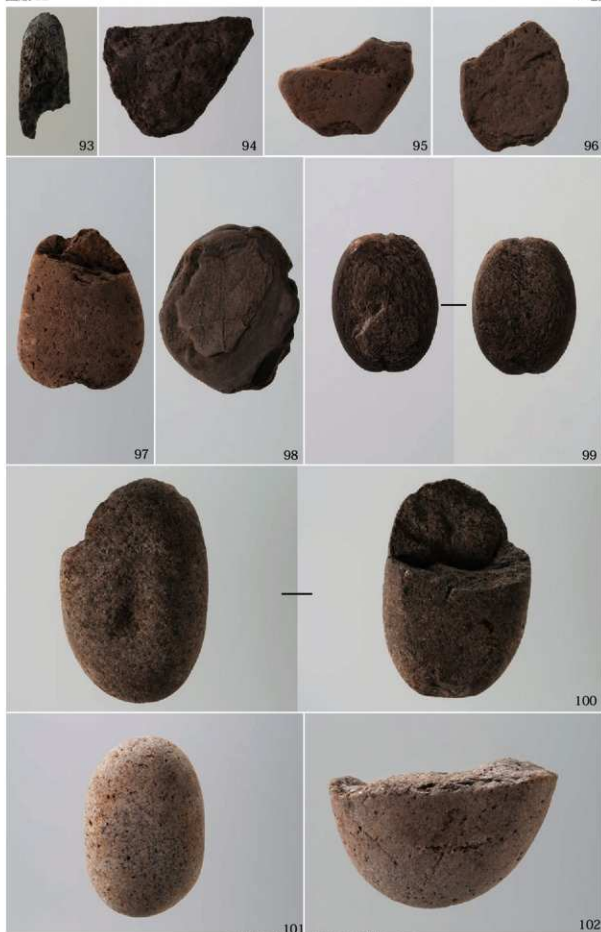
2 面縄文時代包含層出土遺物 (4)



2面縄文時代包含層出土遺物（5）



2 面縄文時代包含層出土遺物 (6)



2 面縄文時代包含層出土遺物 (7)



1 弥生土器出土状況（北から）



2 SK6 完掘（北から）



3 SK 7 完掘状況（西から）



4 SD 7 完掘状況（西から）



2 面弥生時代遺構及び包含層出土遺物 (1)



2 面弥生時代遺構及び包含層出土遺物(2)



1 1地区1面全体（東から）



2 SB 1 全体検出状況（東から）



1 SB2 全体検出状況（東から）



2 SB3 全体検出状況（南から）



1 SD 1・2・5・6 完掘状況 (北から)



2 SD 3 完掘状況 (北から)



3 SD 5 完掘状況 (東から)



1 SK 2 完掘状況(東から)



2 SK3 完掘状況(北から)



3 SK 1・4 完掘状況(北から)



4 SK5 完掘状況(北から)



5 SP110 掘鉢出土状況(東から)



6 SP155 土師器出土状況(北から)



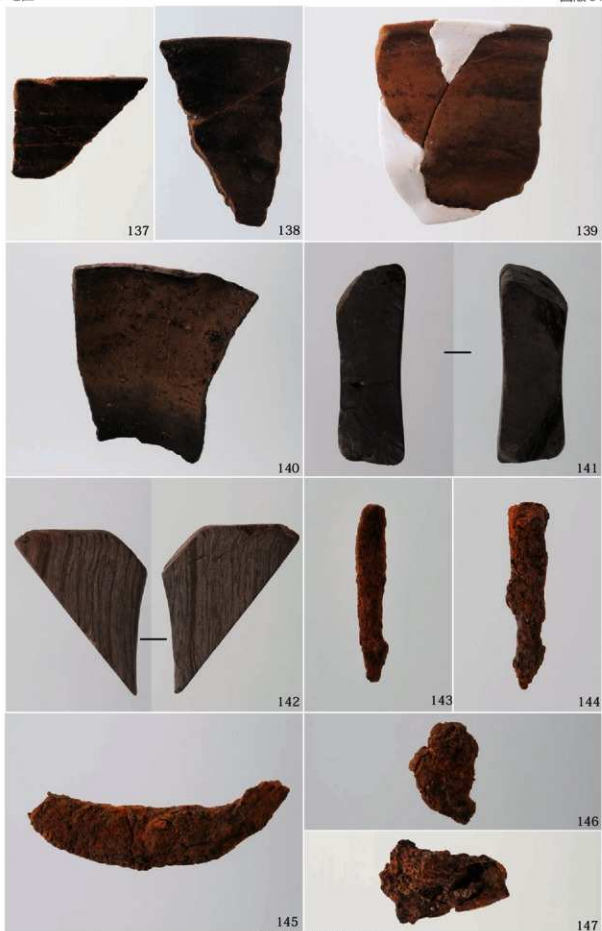
7 SP161 砥石出土状況(東から)



8 SP183 誥石出土状況(東から)



中世遺構出土遺物(1)



中世遺構出土遺物(2)



遺構外遺物 (1)



遺構外遺物 (2)



遺構外遺物(3)



1 北トレ～南トレ間 集石層検出状況（真上から 上が西）



2 集石層除去後のSK 1～9、SD 1・2（真上から 上が西）



1 SK 1~9完掘状況(西から)



2 SK 1~9完掘状況(北から)



1 SK 1・2 (北から)



2 SK 1 検出状況 (西から)



3 SK 1 完掘状況 (北から)



4 SK 2 検出状況 (東から)



5 SK 2 内木 372 検出状況 (東から)



1 SK 2 完掘状況 (北から)



2 SK 2 ドングリ検出状況 (北から)



3 SK 3 検出状況 (北から)



4 SK 3 土層 (北から)



5 SK 4 検出状況 (北から)



6 SK 4 完掘状況 (北から)



7 SK 5 検出状況 (西から)



8 SK 5 完掘状況 (西から)



1 SK 6 検出状況 (北から)



2 SK 6 完掘状況 (北から)



3 SK 7 検出状況 (北から)



4 SK 7 完掘状況 (北から)



5 SK 8 土層 (南西から)



6 SK 8 完掘状況 (南西から)



7 SK 9 土層 (南から)



8 SK 9 完掘状況 (北から)



1 北トレ以北 完掘状況（真上から 上が西）



2 杭列、畦状遺構検出状況（東から）



1 杭列、畦状遺構周辺土器出土状況（東から）



2 杭列、畦状遺構周辺土器出土状況（南から）



1 杭列周辺土器出土状況（西から）



2 杭列周辺土器出土状況（部分 南から）



1 南矢板列検出状況（南から）



2 北矢板列検出状況（北から）



1 杭列周辺土器出土状況（南から）



2 南矢板列周辺土器出土状況（南から）



3 杭列周辺木材出土状況（西から）



4 南北杭列検出状況（南西から）



5 杭列周辺土器出土状況（南東から）



6 木器 293 出土状況（北から）



7 杭列周辺土器出土状況（東半部 東から）



8 杭列周辺土器出土状況（西半部 東から）



1 杭列、畦状遺構周辺 土器取り上げ状況（南から）



2 杭列、畦状遺構除去後完掘状況（東から）



3 杭列除去後完掘状況（北から）



1 杭列～畦状遺構西壁土層（南半 東から）



2 杭列～畦状遺構西壁土層（北半 東から）



3 杭列周辺当初検出状況（東から）



4 木器 294 出土状況（東から）



1 北トレ以南 集石層検出状況（北東から）



2 南トレ以南 集石層検出状況（北西から）



1 南トレ以南 杭列等出土状況（集石層除去後 真上から 上が西）



2 南端部 南端部杭列等検出状況（東から）



1 南トレ以南 集石層検出状況(北東から)



2 南トレ以南 集石層検出状況(東から)



3 集石層除去後状況(東から)



4 南端部杭列・木材出土状況(南から)



5 南端部杭列・木材出土状況(東から)



6 南端部土器・木材等出土状況(東から)



7 SX 1 板材出土状況(東から)



8 南端部杭列出土状況(東から)



1 集石層内土器出土状況（北西から）



2 集石層内土器出土状況（北から）



3 集石層内土器出土状況（東から）



4 集石層内石器出土状況（北から）



5 2地区上段トレンチ掘削状況（北から）



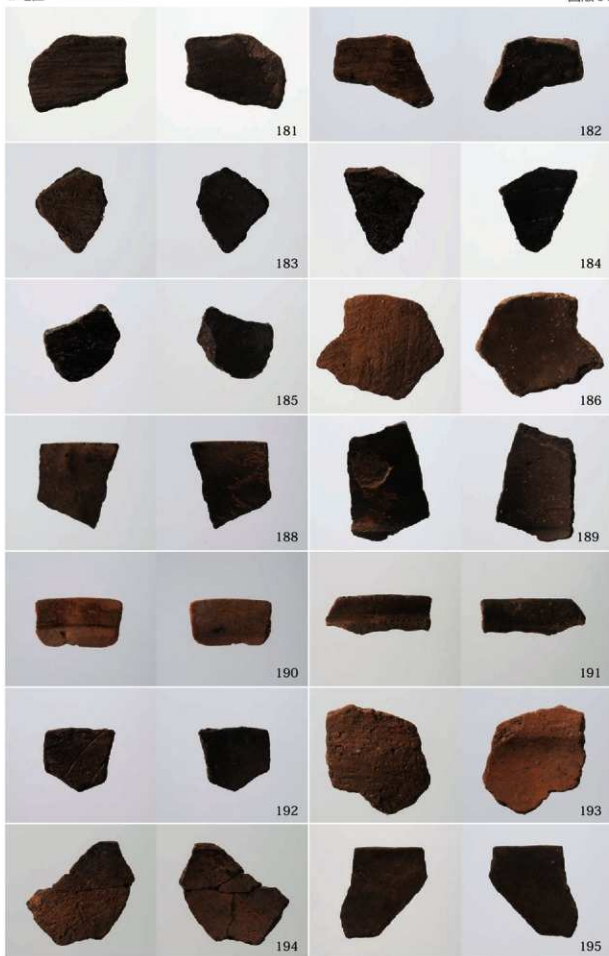
6 2地区上段トレンチ掘削状況（北から）



7 2地区上段トレンチ土層（東から）



8 サブトレンチ完掘状況（南から）



2地区 出土 遺物 (1)



197



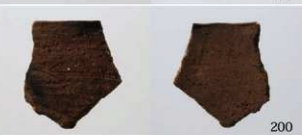
196



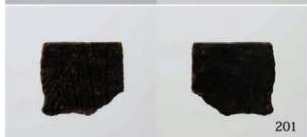
198



199



200



201



202



203



204



205



2地区 出土 遺物 (3)



2地区 出土遗物 (4)







2地区 出土 遗物 (7)



2地区 出土 遺物 (8)



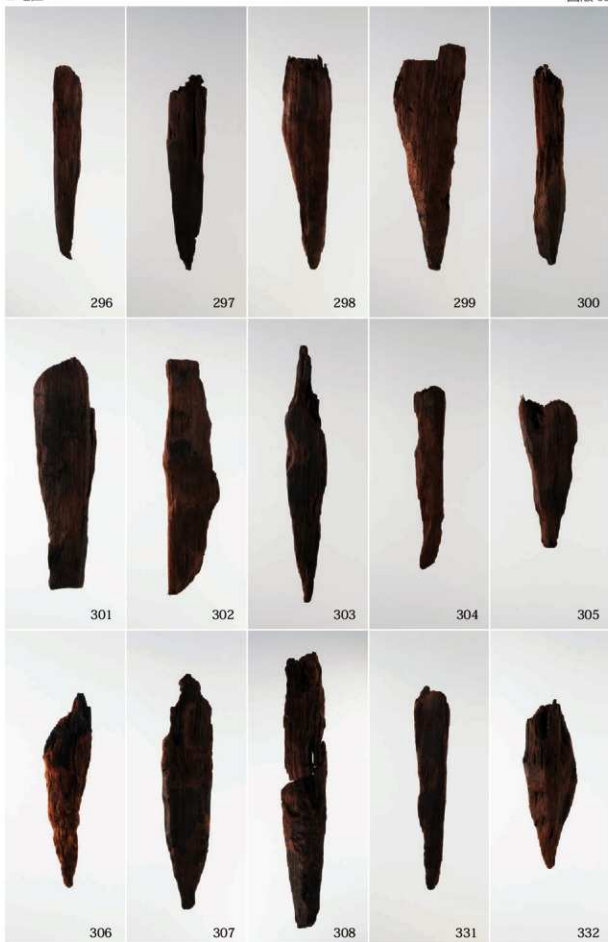


2地区出土遺物(10)



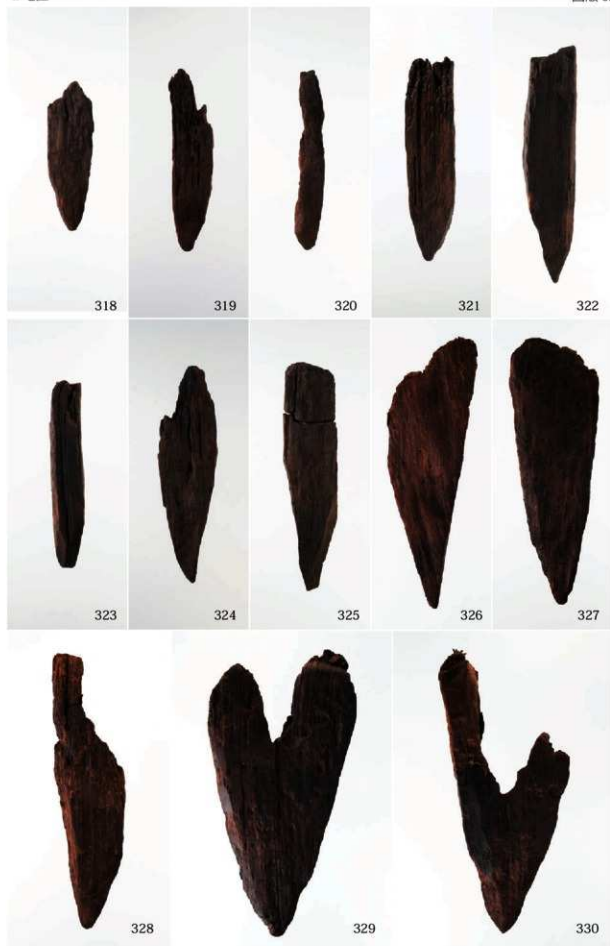
2地区 出土遺物 (11)



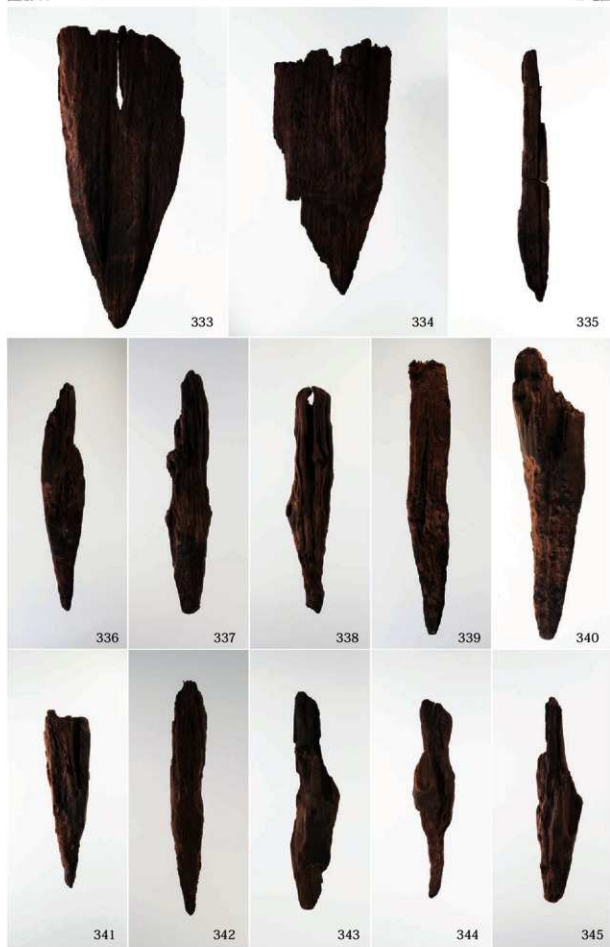


2地区 出土遺物 (13)

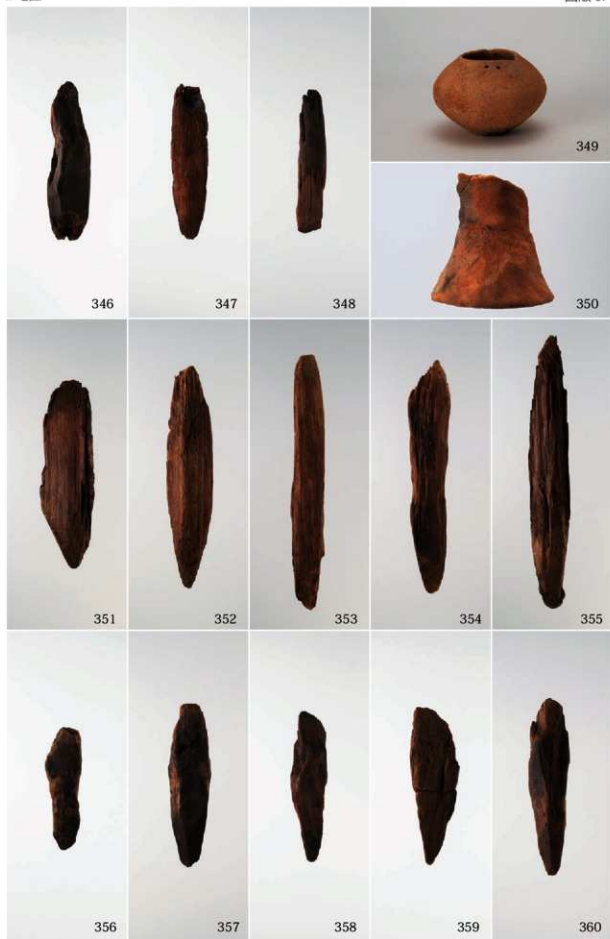




2地区出土遺物(15)



2地区 出土 遗物 (16)



2地区 出土遺物 (17)



報告書抄録

ふりがな	つじはないせき
書名	辻花遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第114集
編集著者名	谷口哲一 塚本史見
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2023年3月24日（令和5年3月24日）

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
辻花遺跡	山口県 田布施町 下田布施	35343		33°56'54"	132°13'37"	20210607 ～ 20220318	2,270	ほ場整備

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辻花遺跡	集落跡 散布地	縄文 弥生 中世	掘立柱建物 3棟 土坑 19基 溝・溝状遺構 10条 柱列 9条 杭列 5条 柱穴 436個 畦状遺構 1条 性格不明遺構 2基 土器埋設遺構 1基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器 土製品、石器・石製品、鉄製品 木器・木製品 木材・種子等	縄文時代晩期のドングリ貯蔵用土坑、土器埋設遺構を出土。また弥生時代杭列、畦状遺構に伴い、土器がまとまって出土した。

要約	<p>辻花遺跡は、丘陵先端部の低地及び東側谷部に立地する、縄文時代から中世にかけての集落跡、散布地である。</p> <p>調査では、縄文時代晩期のドングリ貯蔵用土坑や土器埋設遺構が発見され、包含層からは同時期の土器・石器がまとまって出土した。調査例の少ない県東部における縄文時代資料として貴重となる。</p> <p>弥生時代は土坑、溝状遺構など集落の一部とともに、谷部では湿地との境に杭列、畦状遺構が構築され、まとまって出土した中期から後期土器は、出土状態から祭祀に関連があるとみられる。また包含層からは中期から古墳時代初頭の遺物が多く出土した。出土遺物には分銅形土製品など注目されるものもあり、当該期の土器様相を知るうえで良好な資料である。</p> <p>中世は12～15世紀の掘立柱建物などが出土され、才賀川に近接するまで居住域を拡大したことが確認された。</p> <p>また木片、種実等の自然遺物が多く残存しており、これらに対して同定分析や年代測定等の自然科学分析を実施し、当時の古環境や植生についての資料を得た。</p> <p>今回の調査は、丘陵部と才賀川に挟まれた低地や谷部における縄文時代から中世にかけての遺構状況を把握でき、当地域の低地遺跡の在り方を考えるうえで良好な資料となった。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第114集

辻花遺跡

2023年3月

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0921 山口県下関市長府扇町9番50号